

博 士 論 文

大谷光瑞の研究
—アジア広域における諸活動—

柴 田 幹 夫

博士論文

大谷光瑞の研究ーアジア広域における諸活動ー

目次

第一部 大谷光瑞とアジア

序章	2
第一章 大谷光瑞とロシアーウラジオストク本願寺をめぐるー	6
第一節 本願寺と海外開教	
第二節 ウラジオストク本願寺	
第三節 太田覚眠という人	
第四節 大谷光瑞とウラジオストク	
第二章 大谷光瑞と満州	22
第一節 本願寺関東別院	
第二節 大谷光瑞と大連	
第三節 大谷光瑞と満州	
第三章 大谷光瑞と上海	53
第一節 上海日本人居留民と仏教	
第二節 大谷光瑞と上海	
第三節 孫文との交流	
第四章 大谷光瑞と漢口	69
第一節 漢口の歴史的な位置について	
第二節 租界地としての漢口	
第三節 漢口本願寺出張所	
第四節 大谷光瑞の漢口観	
第五章 大谷光瑞と台湾ー「逍遙園」を中心にしてー	88
第一節 本願寺派の台湾開教	
第二節 大谷光瑞の台湾訪問	
第三節 「逍遙園」について	
第四節 大谷光瑞の夢	

第六章	大谷光瑞とシンガポール	104
第一節	シンガポール本願寺	
第二節	大谷光瑞とシンガポール	
第二部	大谷光瑞の中国認識	
第一章	大谷光瑞と辛亥革命	125
第一節	本願寺教団と国家	
第二節	辛亥革命と本願寺	
第三節	革命党と本願寺	
第四節	本願寺の中国開教	
第二章	大谷光瑞と『支那論』の系譜	167
第一節	明治以降対中国観の変遷	
第二節	『支那論』の系譜	
第三節	中央アジアへの憧憬－大谷光瑞と内藤湖南－	
終章		184
附録	大谷光瑞年譜	189

凡 例

- 1.引用資料の旧字体、言葉使いについては、原則として新字体に改めた。
- 2.地域や名称に関する表記については、現在においては差別性があり、不適切な面も含まれているが、歴史的用語として、当時の表記をそのまま用いるか、若しくは〔蛮人〕や〔本島人〕というように〔 〕をつけて表記している。
- 3.年号は基本的には西暦年で表記し、必要に応じて（ ）内に、日本や清の年号を記した。但し明治5年までは日本の陰暦を用い、（ ）にイタリックで示した。
- 4.引用文献中判読不明な文字は、●とした。
- 5.本文中の（1）（2）……の数字は注釈を表している。注釈は各章末に番号を振り表記した。
- 6.「本願寺」といえば、とくに注記をしていない限り「西本願寺」を指す。
- 7.本願寺管長、本願寺住職などを表す言葉には、法主、門主、宗主などがあるが、基本的に法主に統一した。
- 8.本願寺内で使われている、いわゆる宗門用語については、できるだけ（ ）内に注記を付した。

第一部

大谷光瑞とアジア

序章

19世紀末から20世紀中葉にかけてアジア広域に足跡を残した大谷光瑞（1876～1948）という一人の日本人の行動を、アジアの諸地域とアジア近代史との中にどのように位置づけていくのか、その試みが「大谷光瑞の研究—アジア広域における諸活動—」と題する本論文であり、大谷光瑞がアジア各地を就中中国をどのように認識していたかということをも明らかにするものである。

大谷光瑞は、本願寺・浄土真宗本願寺派第22世法主であり、宗祖・親鸞の法灯と血統を二つながら継承して他に誰も代わりうるものがない希有の存在であった。彼はその宗教的権威を遺憾なく活用し、明治後半期から大正初期の間に巨大真宗教団の頂点に立っただけでなく、並行してアジア諸地域でも広く活動を展開した。1914（大正3）年、彼は、本願寺の膨大な負債を背景とする疑獄事件の責任を取って法主を辞任することになったが、不思議にも彼の社会的ステイタスは失墜することなく、元本願寺法主であったことを背景に、かえって自由にアジア諸地域で活動を展開した。

しばしば強調されるように大谷光瑞を特色付けるのは、仏教伝来の道を探索した大谷探検隊（近年の新説によれば、アジア広域調査活動）であることは間違いのないであろう。しかしその探検事業は、大谷光瑞の長期にわたる活動総体から見ればすべてではなく、一部にしか過ぎない。したがって大谷光瑞像の総体を求めるには、大谷探検隊とともに彼の行動の総体そのものに比重を移し、追究すべきであろう。海外開教、特に清国開教の先導者としての姿、あるいは法主辞任後の実業家としての姿も求めていかなければならない。彼はアジア各地で、絹織物の生産、ゴム園、コーヒー園などの事業を手がけた。海外開教はともかくも、営利を求めるような海外経済活動は、宗教者にはあるまじき行為と見えてしまう。まったく視点さえも当てられず研究の対象とされなかったのはそのためであろう。しかし大谷光瑞の言葉を借りれば、それらは海外開教を含めて「国家の前途」を考えての行為なのだという。これが大谷探検隊を主宰した大谷光瑞と同一人物の自己認識の基底なのである。

よく知られているように大谷光瑞は、アジア仏教徒のリーダーであることを自負し、「国家の前途」を強く意識しつつ本願寺の果たすべき役割を、国家と社会との関わりの中で熟考した人でもあった。彼が主宰した「アジア広域調査活動」すなわち「大谷探検隊」だけ

が強調されがちであったが、彼の活動は、それだけに限定されるべきものではなく、本願寺の海外開教の先導者としての側面や近代日中交流史上での孫文との交流なども見落としではならないであろう。

従来、「大谷探検隊」が、ヨーロッパ諸国の内陸アジア調査に触発された大谷光瑞個人の特異な探検活動と認識されていたが、それを明治新政府と競うように近代化を推進した本願寺の近代化、つまり我が国近代史の問題としてとらえる研究はほとんどなかった。また同様に本願寺教団のアジア地域における活動も一巨大教団の特異な宗教活動と見なされて、その体系的掌握、歴史的掌握もほとんどなされてこなかった。

ここ数年大谷光瑞や大谷探検隊に関する研究が非常に活発であるように思える。没後 50 年には、学会誌『東洋史苑』(龍谷大学東洋史学研究室)において大谷光瑞師五十回忌記念号を編集され、光瑞や探検隊に関する論考を 14 編掲載し、学会の注目を引いたことは周知のことである。また、同年には本願寺をはじめ、光瑞にゆかりのあるところでは盛大に 50 回忌法要や講演会などが行われた。

50 回忌の動きを受けて、継続して大谷光瑞研究は新たな段階に入った。すなわち従来の「大谷探検隊」一辺倒の研究ではなくて、アジアの中で、あるいは日本国内で大谷光瑞をいかに位置づけるかという研究である。いわば歴史的存在としての大谷光瑞の研究といふ。

明治という時代に東方学術の優位さを自ら証明しようとして、国家の援助を受けず、本願寺だけの力で中央アジア探検を行ったことは、称賛されるべきではあるが、光瑞の全体像を知るためには、探検というところに光瑞を収斂してしまうのは木を見て森を見ずということになりはしないだろうか。常に「国家の前途」を考え、孫文をはじめとする革命党との交流や、上海での都市改造計画の策定や、中国の時局に対する強硬的な意見の開陳など、中国との関係の中で、光瑞の全体像が見直されなくてはならない。宗教家、探検家であるだけでなく、時には政治的な役割を果たし、また漢文に通じ、陶磁器の鑑定や書にも優れ、食通でもあった光瑞という人間を解明するには、到底一人の力では不十分である。古代史や近代史、あるいは美術史の人たちからなる共同研究を組織して取り組まなければならないということを実感している次第である。

大谷光瑞研究の現状としては、従来の大谷探検隊関係の研究が中心となっているのはいうまでもないが、この数年筆者を中心として、大谷光瑞個人の研究が始まった。その

先駆けとなったのは、高野静子『蘇峰とその時代』（中央公論社、1989年）である。光瑞と親交のあった蘇峰のもとには240通にも及ぶ書簡があり、それをもとにして、蘇峰と光瑞の関係を描いている。特に本願寺の法主を辞して以降、孤独な光瑞を支えたのは蘇峰であった。

さらに大谷探検隊に参加した隊員を描きつつ、光瑞像を見事にトレースしたのは白須浄真であった。『忘れられた明治の探検家 渡辺哲信』（中央公論社1992年）では、大谷探検隊の記録集である『新西域記』に収められている渡辺哲信の『西域旅行日記』を中心にして哲信の中央アジア探検と彼を取り巻く人物を描き出している。特に大谷光瑞や哲信を生み出した明治期の本願寺の教育システムやそこから輩出された人物についての描写は、非常に興味をそそられるものがある。白須が提起したものは、大谷探検隊というものが、本願寺の近代化とともに、我が国の近代史の領域で再考すべき歴史課題であるとした点である。引き続き白須は、『季刊せいてん』（浄土真宗教学研究所1996年）誌上で「大谷探検隊と明治という時代」というテーマで対談を行っている。ここで提起されたものは、決して探検隊のことではなくて、明治という時代の中で大谷光瑞あるいは本願寺を今一度見直していこうというものであった。それはやがて『大谷探検隊とその時代』（勉誠出版2002年）という一書となった。

その後、同じく第一次探検隊に参加した本多恵隆の生涯を描いたものに本多隆成『大谷探検隊と本多恵隆』（平凡社、1994年）があり、恵隆の自坊徳正寺に残された探検隊関係の資料や写真を多く紹介している。

さらに西沢教夫により『上海へ渡った女たち』（新人物往来社1996年）が発刊された。ここではミス上海に選ばれた井上武子が紹介されている。父親は大谷探検隊員であった井上弘円である。学術書以外の一般書においても大谷光瑞に関する話題が提供され始めた。

その後、筆者による大谷光瑞研究がある。元々筆者は、中国近代史を専門領域とするが、中国中山大学孫中山研究所の李吉奎教授や私の恩師の一人である上海師範大学教授馬洪林教授から、大谷光瑞と孫文のことを調べてはどうかという示唆を受けた。そこで『鏡如上人年譜』（鏡如は光瑞の法名である）を見ていると、孫文との交流の様子が数か所にわたり記されていた。

筆者は大谷光瑞の目指したものは、アジアを中心とした一大ネットワークの構築であ

ると考えた。このネットワークは、中国のみならずアジア全域に拡がり、当然仏教がその紐帯の役割を果たすものであった。それゆえに積極的に海外開教を推し進めた。ただ対華21か条要求や、五・四運動の高揚は、中国に軍閥割拠と反日運動を激化させた。このような状況の下では、新たな布教活動を展開することは容易ではなかった。したがって光瑞の関心は、小出亨一が指摘するように、国内外の産業開発構想（小出亨一「大谷光瑞の教育思想と大谷学生」『東洋史苑』50.51号）や「帝国の相談役」になり、新たな方向性を模索するのであった。具体的には、台湾や南洋を中心とした「ゴム園」、「コーヒー園」、「香料農園」、などの「熱帯農業」や「大谷光瑞興亜計画」、そして「欧亜連絡鉄道計画」などに見ることができよう。光瑞の関心領域は、北はロシア極東地域、樺太、南はシンガポールを中心とする南洋地域、西はトルコまで及んだ。勿論中心は中国であることはいうまでもなかった。したがって筆者の研究領域はロシアから中国、シンガポールまで及んだ。本論文がアジア広域と謳ってるのはこのためである。

孫文や、中国革命に親近感を持ち、またアジアの各地で起こった革命運動に協力を惜しまなかった光瑞と、対外的には非常に強硬路線であった光瑞という人物をどうとらえるかがこれからの大きな課題の一つであろう。

第一章 大谷光瑞とロシアーウラジオストク本願寺をめぐる一

第一節 本願寺と海外開教

1899（明治 32）年 1 月本願寺教団は、全国の末寺および門徒に向けて新門（次の法主に就任することが予定されている者）大谷光瑞の清国巡遊を発表した。開明進取に盈ちた光瑞の外遊は、宗門内外に大きな反響を呼び、宗門の機関紙『教海一瀾』には、「御渡清の御事の公示せらるるや、門末一同其の壮遊快舉たるを賛し、或は馳て上京し懇懃に奉送の誠を表するあり、或は遥に御送辭を奉げて護法布教の御壯舉を翼賛し奉るあり、或は御餞別を獻呈して惜別の至情を致すあり」（1）と、報ぜられるなど期待の大きさがわかるであろう。

さて、その目的は何であろうか、再び、『教海一瀾』を見てみよう。「吾人は今本年の教界史上、否な日本の佛教史上、特筆すべき重大の出来事に遭遇することとなりぬ、何ぞや真宗本派本山嗣法猊下（大谷光瑞）の支那飛錫の一事是れなり」と。この『教海一瀾』の所説は海外布教の重要性を示している。さらに「讀者の知る如く支那は日本佛教の爲には第二の祖國なり、現今日本流布の經典は皆支那譯の書なり、而して彼れ今佛教衰頽して見るべきものなく我より却て之を弘通せんとす」（2）とあり、仏教西漸とってもいいであろう。

もうひとつの目的は、「国家の前途と宗教の将来とに付て深く考ふる所あるに因る」（『清国巡遊誌』御親論 2 頁。本願寺教学参事部編纂、1900 年）ということにある。ここでいう「国家の前途」を考えるとということが、以後の光瑞の生涯を考える上で最も重要なキープポイントになってくる。

光瑞の父大谷光尊（明如）は、明治維新という未曾有の変革期に当たり、海外の宗教事情を視察させたり、学事の振興、布教の発展に力を注ぎ、また寺法を制定し、集会を開設したりした。さらに軍隊布教、海外開教などの近代的な教化方法にも大いに力を振るった（3）。このよう宗門の大改革を行ない、近代本願寺教団の基礎を確立した人物である。そして、その方針を継承したのが光瑞であった。

日本仏教の海外開教は、東本願寺のほうが一歩も二歩も進んでいた。すなわち東本願寺上海別院を中心とした中国開教は、早くも 1873（明治 6）年、小栗栖香頂たちによって創

められた。本願寺の海外開教は、1886（明治 19）年、ロシアウラジオストク布教所から始まるのである。

第二節 ウラジオストク本願寺

ロシアは、東方経略の拠点沿海州に求めた。ロシアはかねてから、トルコ、アフガニスタン、そして沿海州と海を求めて行動を起こした。イギリス、フランス両国のロシアに対する牽制、清国との間に結ばれたネルチンスク条約での領土確定問題、そして清国のアヘン戦争での敗北など国際情勢の一変がロシアをして東方に眼を向けさせた。1859 年の暮れ、東シベリア総督ムラヴィヨフ（1809 ～ 1881）が沿海州軍務知事カケザヴィッチに命じて、今のウラジオストクの地にロシア軍の哨所建設に当たらせた。しかし、実行されたのは翌年 1860 年 7 月 2 日のことであり、輸送船マンジュール号がニコラエフスクから派遣されたのである。ちなみにウラジオストク市はこの 7 月 2 日を開基の記念日としている(4)。

ロシアの動きに呼応するかのようになり、早くも日本政府は、1876（明治 9）年 6 月、ウラジオストクに貿易事務館を開設した。これは沿海州方面の日本人居留民を管理する日本政府の機関であった。領事館の役割を果たしていた。当時ウラジオストクには、船を修理するドックはなくて、必要なときには長崎まで運ばれたという(5)。ウラジオストクと日本の関係は、港に寄港する日本船の増加によって知られる。つまり、1880 年はわずか一隻だったのが、81 年 4 隻、82 年 11 隻、89 年 20 隻、90 年 35 隻、94 年 52 隻、96 年 56 隻、1900 年には 69 隻にも達している(6)。ロシア以外の国では日本が一番多かった。特にウスリー鉄道（シベリア鉄道）の着工以後、日本人の移住者は急激に増加し、特に九州出身者が多く、中でも長崎県人が圧倒的に多かった。上海の日本人居留民とまったく同じ傾向を示している。実際に 1870 年代の半ばにも、長崎のイギリス領事からの報告によれば、長崎港への入貨のほとんどが上海からの輸入品であると報告されている。さらには山東半島の商人（特に芝罘商人）が上海～山東～仁川～長崎～元山～ウラジオストクを貿易の基地にしていたことは注意しなければならない(7)。大谷光瑞や本願寺教団が、上海、青島、大連、ウラジオストクを重視していたのは、決して偶然ではなく国家間のモノの流れや人の流れをきちんと抑えていたからであろう。

東本願寺が上海に開教拠点を設けたというのは前述したが、本願寺教団は、ウラジオス

トクに本願寺の布教場を立て、日本人居留民のために布教を行った。これは本願寺教団の海外開教の嚆矢となるものである。東本願寺教団に少し遅れはとったが、大谷光瑞の海外布教拡張路線によって、東本願寺を凌駕するに至ったのである。1897（明治30）年10月30日に行われた集会（本願寺派の議会組織、帝国議会に先立って1880（明治13）年に集会規則が制定され、翌年第一回定期集会が行われた）で、「海外開教視察建議」が上程され、「夫世人が海外布教を説くや久し而して事素より至大、業素より至難、未だ曾て能く其任務を負て奮起せしものあるを聞かざるなり、嗚呼海外布教の事業其任務を擧て竟に何人に歸せしめんとする乎、内外人皆んな曰く世界佛教の聚点は日本なり、日本佛教の中心は本願寺なり、本願寺は佛教實力の積む所、佛教活氣の發する所なり、本願寺の擧措向背は世界佛教の消長起伏に係れり、本願寺起たずんば海外布教を如何せんと」（8）と、建議を認めた。ここに本願寺教団の海外布教にかける情熱を見ることができる。

さてここで簡単にウラジオストク本願寺の沿革を見ておこう。1886（明治19）年7月初めてウラジオストクに派遣されたのは、佐賀県神埼郡円楽寺の住職の多門速明であった。彼はこの地で亡くなり、ウラジオストク市の北郊山麓の日本人墓地に「弘誓院釈速明法師」と刻まれた長方形の石塔が立ち、また彼の命日を「多門忌」を呼び、毎年法要を営んでいたという（9）。その後、1894（明治27）年布教使矢田省三（のちに下間教證と改名）が、セメノフスカヤ街の民有地を賃借し布教場を建設する（10）。落成式には、本願寺から香川葆晃が派遣され、宗主（本願寺派の長のこと）明如上人の「消息」が発せられた。「先徳の言にも東漸つゆあたゝかにして、弥陀辺地の花香ひを發すと見えたり。まことなるかな浄土の法門遠く伝はりたまがきの内外もへだてなく、みづちのすむ山谷、くじらのよる海浜にいたるまで、念仏の声聞こえざる所なし。特留此經の金言、唯有浄土の判釈仰ぐべし信ずべし。されば維新の聖代に逢ひ、海外の旅行もたやすくなりぬれば、其地にもわが御国人多くおもむき、そが中には本宗有縁の人々も、少なからざるよしきこえつれば、さいつ年より布教の為に僧侶を遣はせしに、帰向日をおうて盛なること、喜び思ふ所に候、然れども未だしたしく巡化するに至らねば、二諦の教旨いかゞこゝろえられ候たと且つ暮心にかゝり候。〔中略〕殊に海外にあることなれば、造次にも皇恩を忘れず顛沛にも国威をはづかしめず、あはれわが帝国の臣民たるに耻ぢざるやう心掛けらるべく候。これこそ一流のながれをくむ所詮にて候へ。かへすぐもいそがしきいとなみの中にも、時々法筵に歩みを運びて、常々に法味を愛樂あれかしと、念願のあまり、筆を染むる所に候なり」とあり、

ウラジオストクには、本願寺と縁の深い人が多く、布教のために僧侶を遣わしたと記している(11)。

以後、蓮本連城、伊藤洞月、安倍道溟、清水嘯月(12)、村井選激が就任することになるが、太田覚眠がウラジオストク本願寺に赴任して以来、益々の尊崇を集め、近在の地域にも出張所などを設けるようになった。

ロシア政府は、外国人に対して土地所有権を認めなかったので、布教所の敷地については、賃借であったが、1901(明治34)年6月に、布教使村井選激が買い受け、ここに布教所は、本願寺の手に帰したのである(13)と、『明如上人伝』には、記されているが、実際はかなりいざこざがあり、本願寺から地所購入の経緯について、足利義山を派遣し、調査させている(14)。さらにウラジオストク日本貿易事務館の川上俊彦は、本願寺法主大谷光尊(明如上人)に布教所敷地について、「本山説教所地所及家屋長期借入ノ件ニ関シ客年(1900(明治33)年のこと、一筆者注)二月中村井布教使及信徒総代上京シ、親しく事情具申の末右賃料は一切貴本山に於て負担せらるる事に決し、差当り予約金として下付せられたる五千留(ルーブル、一筆者注)を受領し帰還したるを以て当港在留信徒一同は其趣を拝承し、孰れも貴本山の恩遇に感佩し深く満足ノ意を表し候。右の次第●最初五千留ヲ手付金のみにては契約の成立覚束なく頗る困難の事情なきに非ざりしも、世話掛一同熱心に斡旋の勞を執り、且つ其際契約の成立に關シ尽力可致様特に武田執行より小生に依頼有之候に於ても多少助力を与へ候。結果として地主シェウエリヨーツ氏も大に譲歩し漸く談判進捗し、最初に五千留の予約金を払込し、残額参万五千留の内壹万五千留は、客年十一月中、貳万留は、本年三月中払込の条件を以て客年賃借主双方当館に出頭し、小生立会ノ上契約を結了致し候次第に有之候。然に右賃料第二期払込みの際、若し第三期払込金をも一度に納入する事を得ば、直様地所家屋とも悉皆占有の権利を得、其利便鮮少ならざるに付特別支出の義貴本山に向て懇請致すへき趣きを以て客年十月村井布教使再び上京し、未だ帰来不致候。内貴本山より特派せられたる足利注記来港の上、第二期払込金は貴本山に於て支出せらるるも、第三期分は悉皆信徒の負担に帰せしむるものなる旨、突然信徒に向て宣言致候。右は在留信徒一同が夢にても予想せざりしことなるを以て、其驚愕一方ならず。今後如何なる処置を執るへきかと殆んど当惑致候……………」(15)と意見書を送っている。これによると敷地の賃貸料は4万ルーブルであるが、手付金として、5千ルーブルを先に支払うこととなっていた(この5千ルーブルについては、本願寺負担)であり、又第二期分の1万5千留も本願寺が支払う事となるが、第三期分の2万留については、門

信徒の負担となるということなので、門信徒は、びっくりし当惑している。このことは本願寺内でも議論となったようであるが、最悪の場合には、布教使の引き揚げも考えていたようである(16)。

本願寺布教所敷地問題は、また外交問題ともなったが、日露戦争勃発前後であったので、敷地の問題は進展せず、戦争勃発により、多くの在留邦人や本願寺の布教使は、後述の太田覚眠を除き日本に帰国してしまった。

第三節 太田覚眠という人

「西比利亜にありては邦人と露人の区別なく日本僧侶と云へば太田覚眠氏」(17)といわれるほど、ウラジオストク本願寺を語る中で、忘れてはならない人物として太田覚眠の名を挙げることができよう。太田覚眠(1866~1944)は、三重県四日市の法泉寺に生まれる。福島安正のシベリア単騎横断旅行や、郡司成忠の千島探検に心を躍らせていたようである。

「福島中佐のシベリア単騎旅行に対して、郡司大尉の千島短艇漕航、此の二大壮行は、当時青年層の胸を躍らし、血を沸かさしめたのであった。私は福島中佐には面識を得なかったが、郡司大尉とは、後年非常に御懇意になり、西比利亜出兵当時には直接、浦潮本願寺に在つて種々の尽力援助をしてくれたものである」(18)と、回想している。

その後、東京外国語学校でロシア語を学び、1903(明治 36)年に本願寺の辞令を受けてウラジオストク本願寺に赴いた(19)。

1904(明治 37)年、日露戦争に際して、日本政府からウラジオストク本願寺の太田覚眠をはじめ在留邦人全員に対して引き揚げ命令が出たが、覚眠は、シベリアの奥地に在留している日本人たちを見捨てて帰国することはできないとして、布教場の本尊を背負って一人でブラゴベシチェンスクに赴いた。引き続きロシア各地を回り、シベリアに取り残された 800 余名の在留邦人をドイツ経由で日本に連れ戻したのである。覚眠は、『露西亜物語』の中で、「私は仏様のおぼしめしを聞くことにした。船に乗るべきか、残留者を見舞ふべきか、幾度も、仏様のお心を聞いて見た。幾度訊ねても仏様は船に乗れとは仰しゃらぬのである。私は仏様の足となって仏様のおぼしめ通り、仏様の指し給ふ処へ赴かねばならぬと決心した」(20)と述べている。ここに私たちは、人を救わなければならないという仏教者の本当の姿を見ることができよう。

日露戦争後の 1906(明治 39)年、太田覚眠は、再びウラジオストクに戻り、カマロフ

スカヤ街の民家を借りて仮の布教場に充てた。その後フォンタンナヤ街の高台に移転したのであった。大谷光瑞が起工式に出席したのは、フォンタンナヤ街の高台に移転した時のことである。覚眠は、1931（昭和 6）年 12 月まで当地に残り、布教活動の傍ら、在留日本人の世話をしていたのである。

太田覚眠のウラジオストクでの大きな仕事は、ロシア政府から布教を認めてもらうことであった。1909（明治 42）年、覚眠の努力が実を結び、布教は公認され、また布教所建設の敷地としてアレウツスカヤ街に二千坪にも及ぶ広大な土地を与えられた。日露戦争後の国際情勢の一変が、布教及び布教所建設に有利に働いたともえよう。それは 1907（明治 40）年に締結された「日露協約」であり、日本とロシアは中国東北地方の利権を分かち、それぞれの勢力圏を互いに尊重することとなったのである。

「外交記録」（外交文書）（21）によって確認しておこう。

第三七一五八号

在浦潮斯徳沿海州庁

一九〇九年八月十一日

沿海州軍務知事

第二六三五四号

一九〇九年八月十二日

浦潮斯徳警察署長

受

沿海州軍務知事ハ曩キニ露国内務省外国宗教局カ
浦潮斯徳在留日本人ノ為メニ仏教寺院ヲ建築スルコトヲ許
可シタルニ就テハ当分ホンタンナヤ街第三十八号パウ
ルス氏所有宅ニ於テ仏教上ノ儀式ヲ行フモ差支ナキ
旨ヲ浦港警察署長ヲシテ浦港在住日本仏教本願寺
代理者太田覚眠氏ニ通知セシムルト同時ニ同所ニ於テハ日
本人カ仏教上ノ儀式ヲ行フ以外ニ他ノ宗教上ノ集会ヲ
ナサズル様常ニコレヲ監視セシムルモノトス

軍務知事陸軍中将 フローク

局長 セリワン

とあり、仏教上の儀式を行っても問題ないという許可を得たのである。さらにウラジオストク市議会から布教所建設の許可も併せて得ている。

露歴一九〇九年八月十七日開会浦潮市会

議事録

一 日本仏教礼拝堂敷地下附案

日本仏教本山代表者太田覚眠氏ノ請願に係ル

日本仏教礼拝堂建築敷地下附ニ関シ本年八月

七日開会ノ浦潮土地委員会ハ左記

(一) アレウーツスカヤ街端警察病院ノ向側

(二) ウェルヘカマローフスカヤ街シキデルールスキー

所有地の向側

ニヶ所ノ内其何レカヲ市会決議ノ地代ヲ以テ一般規

則ニ基キ下附スルコトヲ決議セリ

該請願ハ市会ニ提出セラレ左ノ如ク決議セラレタリ

一 日本仏教礼拝堂建築敷地トシテ一般規則ニ基キ

無代ニテ下附スヘキコト

一 該地方内ニ日本人会ハ樹木植込ミヲ為スコトヲ得

一 アレウーツスカヤ街端警察病院ノ西側ヲ該

地ニ充ツルコト

一 教務代議員ムラウエーイフ氏ハ該敷地ハホクロー

スカヤ寺院外柵ヲ距ルコト百サージュ以外ノ地タル

ヘキコトヲ申議セラル

議事録本書記名者

市庁員 クラソフスキー

書記 ウイリエフ

ここに初めて名実ともにウラジオストクで布教ができるようになった。好事魔多し、隣接するロシア寺院（上述のホクロースカヤ寺院か）が、必死になって妨害運動をはじめたのである。ロシア寺院には、勅任官、親任官相当の高位の僧侶がおり、裏で工事中止を画策したのであった。その結果、1911（明治 44）年当地の軍務知事より工事は中止すべしという連絡があり、やむなく工事は中止することとなった。太田覚眠は、回想して、次のように語っている。「その喜びは束の間であった。市役所から技師が来てくれて、土地を丈量し、本堂建築用地の標木を建て、敷地の周囲は仮木柵で囲ひ、建築の用意に取掛かっ

た。何ぞ図らん、マダ建築願を出さぬのに、縣の建築課から『都合に依り建築する事は許可せぬ、念の為に通知しておく』との厳命であった。土地は貰ったが、建築を許可されぬでは、何の役にも立たずタゞ困るばかりであった。故障の出所は露国寺院側であつて、浦潮本願寺が、新たに取得せし敷地の尖端がポリロースカヤ寺から、百サージン以内にあり露寺院の聖地近くに不潔物を（異教徒の寺院は不潔物と見做すのである）置く事は許されぬのである。これは浦潮の監督僧正から沿海黒龍兩州の総督に抗議を申込み、総督から地方庁に圧迫的に命令し来つたものである。如何ともする事能はず、タゞ困ったくで……………」(22)とっている。

この決定は、これまでの太田覚眠を初めとする浦潮本願寺側の努力を無にするものであった。本願寺とて、この理不尽な仕打ちに対して黙ってはいない。法主であった大谷光瑞は、外交問題にして、何とか解決を計ろうとしたのである。光瑞が、外務大臣内田康哉に提出した「陳情書」(23)を見て見よう。

陳情書

露領浦塩斯徳に於ける弊派出張所建築は、別記の手續きを經由し、既に工事に著手致居候処、本年九月一五日に至り浦塩警察署は同出張所主任太田覚眠を召喚し、突然工事中止を命令せり。仍て同主任は直に軍務知事を官邸に訪問し、右不法命令に対する説明を求めたる二、知事は「貴下に対しては甚だ気の毒なれども政府の命令なれば如何とも致し難し」と云うに止まりて、更に要領を得ず。此れ或は露国僧侶の反対運動に起因せるものかと察せられ候。尤も私有地を弊派布教場に無代にて下付せられたるは、固より露国僧侶の喜はさる所なるへしと雖、該地域は露国寺院を距る百サーシェン以上にして法規上我出張所建築に異議を挟むべき理由を認めず。既に軍務知事に於て認可せし建築工事を突然理由無くして中止せしむるか如きは不法の甚しきものにして畜々弊派布教発展上の大損害たるのみならず惹ては我国家の威信に関する事と存し候。右は太田覚眠より浦塩総領事館を經由し本野駐露大使と委細陳情致させ

置き候へとも何卒閣下より露国政府をして速に該工
中止命令を取消さしめ候様御高配に預り度此段情
を具し及請願候也。

明治四十四年十月十二日

真宗本願寺派管長 大谷光瑞

外務大臣子爵内田康哉殿

この大谷光瑞の「陳情」に対して、外務大臣内田康哉は、間髪を入れずウラジオストク総領事大島富士太郎に、「当方ニ於テハ事情不明ニツキ……至急ニ成行、御交渉ノ経過等、御報告……」(24)と、命じている。外務大臣からの電信に対して、大島富士太郎は、10月27日付「本願寺出張所建築見合わせに関する件」を返答しているが、欄外に「説明要領を得ず」とか「??？」が記されていた。10月31日に、大島総領事は、当地の最高責任者である沿海州黒龍江総督ゴンダッチ氏(25)を訪問し、「陳情書」の件について話をしている。「本願寺当地出張所会堂地区ニ関シ、本官ハ詳細ノ事情ヲ縷述シ、同地ヲ市会決議ノ通り、元ノ儘ニ本願寺ニ貸与相成候様配慮ヲ煩シ度旨申述候処、総督ハ本件ニ関シテハ、太田覚眠ヨリノ請願書ヲ漸ク今朝接手シタルノ事ニシテ、未ダ詳細ノ実情ヲ知悉セサルヲ以テ、当地滞泊四、五日中ニ親シク実地踏査スルト共ニ関係書類ヲモ閲読シ、滞泊中ニ本願寺ノタメ出来得ル限り、有利ナル解決ヲ与フヘキ含ミアリ度旨ヲ答へ候」(26)という返答をしている。

その後のやりとりを見ていこう。沿海黒龍江総督ゴンダッチからの正式な回答は、「遺憾ながら如何とも致し難きに付今後寺院建築用地としては不便ならざる可然き場所を撰定し、相当の便宜を与ふべき旨回答有之」というものであった。つまりは代替地を用意するということであった。それに対して、外務省は、ウラジオストク総領事に訓令を出し、新たに四項目の要求を示した。(1)子ども、婦女子が参詣しやすいように、便利な場所を確保する事、(2)面積は以前契約したものと同様にし、小さくならない事、(3)以前契約した条件をそのまま踏襲する事とし、新たに条件を付与しない事、(4)新しいところに移転完了すれば、現在の土地は市側に返還する。というものであった(27)。

この日本側の要求に対して、ロシア正教側は、「日本布教所を建設する事に対し異議を有せられず……ポロフスカヤ寺院より、見へざる様にし、且つ植込むに足る丈の地面を建物より隔て割与相成……」と回答した(28)。ここに本願寺布教所の建設用地は、元に戻ったのである。

第一次世界大戦の勃発により、三国協商側のロシアに対して、日本は同盟国となっていた。政治的に、このような経緯もあり、ロシアの日本に対する態度の変化が見られたのではなかろうか。この報告を認めたウラジオストク総領事代理野村元信は、問題の解決に際し、「今次時局に際し、日露両国の親交を利用」(29)とい、政治的決着を窺わせるものとなった。その余波を受け、本願寺の建設が認められることとなったのであろう。外務省や沿海黒龍江総督ゴンダッチをハバロフスクまで訪ねたり、本願寺建築のため献身的な努力をした太田覚眠の行動を忘れてはならない。「浦鹽斯徳は西本願寺だけ布教が許されて他派は何宗が乗込でも許可されぬことになって居るのは全たく其主任教開師太田覚眠氏の方であると云つても差し支えない」(30)と言わしめたのであった。本願寺当局もまた、執行所用係天津慈峰師をウラジオストクに派遣して関係官庁に謝意を表した(31)。大谷光瑞の外務大臣に対する一通の「陳情書」が、本願寺の土地問題を外交問題にまでしてしまったのである。光瑞の慧眼には驚くほかない。その後、従前の建築用地に新しい本願寺出張所が建てられる事となった。

当時は、物価高騰で物資が欠乏していたようであるが、ひとり本願寺の建築だけは別格であったようだ。また『中外日報』を見てみよう。「獨り本願寺にては第一着大岩石層を開鑿して千餘坪の地均をなし一面には高さ三間延長百五十間の大石垣を築造し宛然一城郭の屋敷を構えたれば露國人は皆目を峙てて眺め居れり、已に建築を終へたる對面所は間口七間奥行十五間の露國式角材積みの家屋にて中に七間四方の大廣間を有し屋根と玄關を日本式となせり、さまで宏壯と云ふにはあらざれども浦潮には日本式の家屋なければ玄關の枿方虹梁など日本の専門の大工が丹精を凝せし彫刻は一般の評判物となりて態々見物に来る者多し、全體の工事は三年計畫となし公費十萬留の豫算にて在留邦人一戸につき百留以上の寄附を募集し已に梵鐘、宮殿などの一寄進あり、申込の金額は五萬留に達せし由なれども僅かに五千人に満たず豫定額を充たすには尚ほ本山の補助、内地信徒の篤志に待たざるべからずと云ふ、兎に角本派本願寺が單獨にて三十年と云ふ長年月西伯利亞の開教を繼續し公然布教の承認を得て開教の基礎を確立せし功勞は多とするに足る」(32)とあり、正に本願寺が多くくの在留邦人にとって心の拠り所として存在したことがわかるであろう。

第四節 大谷光瑞とウラジオストク

前述したように、本願寺の起工式には、前法主大谷光瑞が参加している。当時光瑞は、

本願寺を去り、中国上海に拠点を置きながら、青島、大連、旅順などを自由に往来していた。

1915（大正4）年5月11日、上海を発ち、榊丸に乗船し、大連に到着した。その後、長春、哈爾濱を経てウラジオストクに向かったのである。『中外日報』は、「東清鐵道特別列車によりて光瑞氏は浦鹽に入り非常の歡待を大受けつつあり十五日はプシキン劇場に於いて一場の講演を試み聴衆多し、十八日は渠の露國官憲との間に於て久しく懸案たりしも最近日露親善の關係により解されし本派本願寺の建築起工式ありし筈なれば勿論臨場ありたるべし」（33）と伝えている。沿海黒龍江總督ゴンダッチ氏とも会見し、謝辞を述べている。光瑞は、ウラジオストクの重要性を早くから感じ取り、日本海を取り囲むように朝鮮半島、大連、旅順、青島、上海、そして台湾、南方へ続くひとつの要衝としてウラジオストクの存在を考えたのではないだろうか。

光瑞は、徳富蘇峰に宛てた手紙の中で、ウラジオストクについて次のように記している。少々長いが全文を引用する。「午後三時出發（哈爾濱）、翌十六日午後十時四十分、浦潮斯徳に到着仕候。今回はウェンチェリ副總裁の厚意により、一輛の一等車を貸與せられ、車中に起臥するを得、頗る便利を享く。沿道の風景は、露支の境上に近づくに従ひ、山嶺起伏し、寒氣猶嚴なり。特に微雨歇まず、征衣疎寒を覺ゆ。車中暖房の装置あるを以て、車外に出づるあらざれば、春暖盎々たるを得、沿線到る處、露人散點し、西伯利にあるの感あり、支那境内は多く耕耘を施せりと雖も、露境沿海州に入るに及んでは、放牧を主とし、牛羊群を成せり。蓋し支那人は、耕種を主とし、放牧を重んぜず。露人は肉乳を主とするを以て放牧を重んずるによるならんか。沿海州に入り、日本海岸に近づくに従ひ、春色漸く動かんとなす。沿途の樹木は、悉く枯樹の外観を成せるにより、樹名を知り難しと雖も、山地は『クエルカス』を主とし、沼地は『サリックス』を主とせるが如し。針葉樹は『ヒシア』『パイナス』『ラリックス』等ありと雖も、潤葉樹に比するに少し。唯だ春に先つは、『アドニス、アムールエンセス』の黄葩あるのみ。木材は一般に豊富なるが如く、沿道の機關車は、皆薪木を用ひ、石炭を搭載せず、所々に大貯薪所を設く。高地は猶降雪を見、枯林白花を著け、芳山の春色を見るが如し。江南春満ちて、緑陰滴るが如き所より來れる小生には、全然別世界の感を起し申候。浦潮斯徳は、我が邦長崎の如き地勢なるを以て猫額大の平地だもなし。街道は盡く傾斜し、二三の大街を除く外は、盡く石だも舗かず。加ふるに雨後なるを以て、泥濘靴を没し、所々に窪陷を出し、馬車担灰し、危險云ふべからず。此地七十年前の經營に係ると雖も、道路の如きは殆ど顧みざるが如し。市街の上下水も、未だ完備の域に到らず、従つし、て哈爾濱に比するに、一層の悪道なりとなす。

十七日正午、沿黒龍州總督ゴンダツチ氏に會見す。同氏はハバロフカより來りて、一等車一輛を浦塩斯德停車場に置き、是に起臥せり。小生は直ちに其隣に車輛を置き、數間を接して相列れり。今回日露親善の熟し來るや、多年の懸案たりし本願寺布教場敷地問題も、同總督の厚意により解決し、其他在留邦人の便利を享有すること、従前に比し隔世の感あり。同氏の談によるに、日露親善は必然の數にして、本職の在らん限りは、沿黒龍州の日本人は、何等の便宜をも與ふべく、何等の保護をもなし得べしと。數日前、小學兒童の日露手を携え運動せしを激亦し、小国民より此好感帯を注入し、兩國をして膠漆の間たらしめざるべからずと云へり。日露親善の實現は、正確に各方面に見るを得べく、露人の我に倚らんとするは必然の數にして、我亦この淮隣と交を皿うせざるべからず。我邦人の英語に於けるや、半ば國語の如く、僻陬の地に至るも、一村四五の英字を解するものあり、然るに露語に至るや、長崎を除く外多く其人なし。帝都二百萬の中、果して二百ありや否や、邦人の露國の事幕に通ぜざる、驚くに堪へたるものあり。小生は先生に請ふに、先生の主裁せらるゝ國民新聞に於て斷えず露國事情を我邦人に知らしむるにあり。事幕に通ぜずば、親善の意あるも實を擧ぐる能はず。特に商工業に至つては、廣漠なる大西伯利と、一億三千萬の人民とは、正に我顧客なり。ゴンダツチ總督も、我邦人の工業を、西伯利内地に起こすべきを慫慂せり。關稅の重き、以て工業經營の利益は、或は商業に勝るものあるべし。小生は斯業に通曉せず。加ふるに西伯利を踏査せざるを以て、具體的に説を樹つる能はずと雖も、専門家の調査を以てせば、意外の好果を獲べしと信ず。大西伯利の遺利は、豈獨沿海州の水産のみなりとせんや」(34)。ここでも光瑞は、はっきりとウラジオストクは、ただ水産のみの所ではないと断言し、北方の不凍港として戦略的重要地点と位置付けたのではあるまいか。

(注)

- (1) 『教海一瀾』37号、明治32年1月29日号。
- (2) 同上書、37号。
- (3) 本願寺史料研究所編『本願寺史』第3巻、5頁、1969年。
- (4) 原暉之『ウラジオストク物語』三省堂、18頁、1998年。
- (5) 加藤九祚『シベリア記』潮出版社、33頁、1980年。本派本願寺編『西比利亞開教を偲ぶ』4頁、1939年。には、「当時居留民の多くは、長崎、熊本、佐賀三県の人々で、たゞ貿易館員の少数の人々のみが、稀に他府県人であった。其頃浦塩へ行くのは、露西亜語を

学ぶよりは、先づ長崎のバッテン語を覚えておけと云われた程である。それほど、九州人のみの出稼ぎ地であった」とある。

(6) 同上書、84 頁。

(7) 古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会、71 頁、2000 年。

(8) 『教海一瀾』9 号 1897 年（明治 30 年）11 月 26 日。

(9) 前掲書、『西比利亜開教を偲ぶ』5 頁。

(10) 前掲書、『本願寺史』、422 頁。明如上人伝記編纂所『明如上人伝』836-837 頁。

(11) 同上書、『明如上人伝』837 頁。

(12) 清水嘯（松）月は、石光眞清『誰のために』（龍星閣、1965 年）では、別名花田仲之助とい、当時陸軍歩兵少佐であったという。前掲、『西比利亜開教を偲ぶ』には、花田中佐とある。さらに安倍道溟についても、「ある任務を帯びて大陸に渡って以来、生涯を蔭の仕事に捧げた人である」16 頁。とっている。後に安倍道溟は、台湾にわたり、霧社本願寺布教場に勤務している。

(13) 前掲書、『明如上人伝』838 頁。

(14) 『中外日報』1903（明治 35）年 1 月 15 日号。

(15) 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B12081601500、西京西本願寺浦塩出張所ニ関シ在同地帝国貿易事務官ヨリ稟請一件(B-3-10-1-14)(外務省外交史料館)」の中に、「川上俊彦から大谷光尊宛」(写 3) とある。川上俊彦(1861 ~ 1935) は、新潟村上の人で、新潟師範学校中退後、東京外語学校露語科卒業。同年外務省に入り、1900(明治 33) 年、ウラジオストク貿易事務官となる。日露開戦に当たり、居留民引き揚げに尽力する。その後、満鉄理事などを務める。

(16) 同上、本願寺教学局から発出されたもので、(写第 3 号) とある。「明治三十四年十一月十四日着 足利帰朝後、教学局より、川上事務官、杉浦に宛急電文「村井今日立つ、委細同人より聞け」教学局より釜山山城丸にて村井宛の電報「ハバロフスク、浦潮斯徳布教場引揚げ準備せよ」とある。杉浦は、当地「杉浦商店」の杉浦龍吉であろう。おそらくは門徒総代を務めていたものと思われる。黒龍会編『東亜先覚志士紀伝』(下) 原書房 755 頁に記載あり。

(17) 『中外日報』1906(明治 39) 年 7 月 13 日号

(18) 前掲書、『西比利亜開教を偲ぶ』6 頁。

(19) 松本郁子『太田覚眠と日露交流 ロシアに道を求めた仏教者』ミネルヴァ書房、126頁、2006年。(注) 33において、「この命令を発令した西本願寺の具体的な機関名は。資料がないため不明である」といわれているが、「本山録事」(本山が出す公式の通知や命令のことで、任免に関する辞令などを含んでいた)にあると思われるが、当該年の「本山録事」にあたってみたが、確認する事は出来なかった。

(20) 太田覚眠『露西亜物語』丙午出版社、4頁、1926年。また『中外日報』「太田覚眠氏の経歴団(上) 1904年12月22日号など参照。太田覚眠については、松本郁子、前掲書、『太田覚眠と日露交流 ロシアに道を求めた仏教者』がある。また麓慎一「ウラジオストック本願寺からシベリアへー太田覚眠とシベリアー」拙編『大谷光瑞「国家の前途を考える」』『アジア遊学』156号、勉誠出版、2012年。があり、太田覚眠がシベリアに在住していた日本人を救うために、単身でロシア各地を慰問し、彼らをドイツ経由で日本まで送り届けたという義挙に対して「叙位」「叙勲」運動があったことを紹介している。

(21) 前掲書、「西京西本願寺浦塩出張所ニ関シ在内地帝国貿易事務官ヨリ稟請一件」

(22) 前掲書、『西比利亜開教を偲ぶ』、12頁。

(23) 前掲書、「西京西本願寺浦塩出張所ニ関シ在内地帝国貿易事務官ヨリ稟請一件」

(24) 同上書。

(25) ゴンダッチ (1860 ~ 1946 Гондатти Николай Львович Nicolai,L,Gondatti) ロシアの政治家、北方、北東シベリア地域の探検家。沿海アムール地域の総督。経済的、社会的、文化的に沿海アムール地域の発展に貢献した人物であり、また日本や中国の拡大主義から、その地域を守った。また 1914 年に、ハバロフスクに大学を設置したり、村々に学校を作った。ゴンダッチの経歴については、新潟大学教育学部教授麓慎一氏の御教示を受けた。記して感謝したい。

(26) 前掲書、「西京西本願寺浦塩出張所ニ関シ在内地帝国貿易事務官ヨリ稟請一件」

(27) 同上書。

(28) 同上書。

(29) 同上書。

(30) 『中外日報』1915年7月27日号。

(31) 『教海一瀾』589号。1915年7月1日号。

(32) 『中外日報』1915年7月27日号。

(33)同上、1915年5月19日号。

(34)大谷光瑞『放浪漫記』民友社、181～186頁、1917年（大正6）年『大谷光瑞全集』9巻にも収められている。光瑞がウラジオストクを重視していたことは、側近であった精舎昌美を、ウラジオストクのロシア語学校に入学させて、卒業後は、当地東洋学院の講師をさせていたことからわかる。

第二章 大谷光瑞と満州

第一節 本願寺関東別院

(一)本願寺関東別院の創設

大連は、遼東半島の最南端に位置し、東は黄海、西は渤海を臨み、海を隔てて山東半島の煙台、威海衛と対峙している。この地は、世界有数の不凍港であり、また軍事の要地でもある。大連は、前漢時代には三山と称され、また唐代の初期には、三山浦と呼ばれた。唐代の中期からは、青泥浦と呼ばれ、明代では、青泥島あるいは三山海口といわれるようになった。清代には、青泥洼とか青泥海口と称された。帝政ロシアの統治時代になってダーリニーと呼ばれるようになった。その後、日本の統治期に大連湾に面していることから「大連」と呼ばれるようになった。

アヘン戦争後列強諸国は、しばしば大連、旅順近海に現れるようになったので、清政府は 1879 年から大連の海防と防衛に力を注いだ。清末の光緒帝は、李鴻章に責任を持って海防に当たるように命じた。李鴻章は旅順口を北洋海軍の根拠地とし、軍港とドックを築いた。また海岸を整備し、砲台を築き、魚雷、機雷学校を創設し、海軍公所などの軍事施設を置いた(1)。その後大連は、帝政ロシアの南下政策によってロシアの租借地となった。

日清戦争終結後の 1895 年、いわゆる三国干渉を経て、日本国内には「ロシア憎し」の声が増しに高まってきた。それは清国が、日清戦争終結後軍事賠償金支払いのために公債を募集すると、直ちに応じたのが帝政ロシアであったからである。同年に「露清銀行」を設立し、清国の財政に大きな影響力を持つに至った。翌 1896 年 6 月には、清国の李鴻章とロシアのウイッテとの間で「東清鉄道」敷設権が締結され、また日本の攻撃に対する共同防衛密約が調印されるに至った(いわゆる露清密約)。日露戦争前後のロシアの野望は、シベリア鉄道を満州の地まで開通させることと、さらに鉄道を南下させ、それによって得られる大連、旅順の良港を獲得し、東アジアに不凍港を得ることであった。

日本国内に巻き起こった反ロシアの動きは、本願寺当局を勢いづけた。『教海一瀾』の「日露交戦に対し我が宗徒の奮起を望む」という社説では「……起てよわが宗徒国難は直ちに仏教の存滅に関すればなり。若し誤て事を失せん乎、三千年の国土は荒野と為り、

大乘相応の日域は異教の礼拝を以て充たされん……猊下(大谷光瑞を指す)は一宗の安危、国家の存亡を以て一身に荷負し給い、心力の限り之に尽くし給う、門下の者豈に国家宗門の浮沈を度外視して可ならんや、嗚呼奮起せよ我が同胞、今にして奮起する所なくんば、千悔を他日に見ん、嗚呼速かに奮起せよ……」と主張(2)し、さらに大谷光瑞は、何度も門末(門徒と末寺)に対して訓示を出し檄を飛ばしている。1904(明治37)年には、「今や国家或ハ将ニ多事ナラントス、此際本末一致勤儉深ク持シ、一朝事アルトキハ身ト財トヲ挙ゲテ君国ニ報スヘシ」(1904年(明治37)1月4日本山事務開始式における御親示)、また、「方今時局容易ナラス、外交ニ関シ宸襟ヲ悩シ給フ折柄ニシテ、一旦緩急アレハ義勇公ニ奉スルハ国民ノ本分ナリ」(1904年(明治37)1月15日「御直諭」)という「直諭」を発し、宣戦の大詔煥発に際しては、「此安心決定ノ上ハ、真ニツケ俗ニツケ、粉骨碎身ノ思ヒニ住シ報恩ノ経営怠慢アルヘカラス、吾人幸ニ文明ノ盛代ニ遭遇シ、タヤスク殊勝ノ妙法ヲ聴聞スルコト、偏ニ国家保護ノ洪恩ナリ、然ニ今回ノ事タル、実ニ我帝国未曾有ノ事変ナレハ、挙国一致シテ之ニ当ラサルヘカラス」(1904年2月20日「御直諭」)と発している。さらに臨時集会の開場式において、「方今隣邦ト釁端ヲ開ク、国家ノ存亡、宗門ノ安危、是ヨリ大ナルハナシ、予ハ門末護法扶宗ニ赤誠ニ信頼シ、闔宗ノ心カヲ挙テ事ニ茲ニ従ハントス」(1904年2月15日 本願寺臨時集会における「御親示」)と自ら述べ、本願寺をして戦時体制を作り上げていったのである。

本願寺は1904(明治37)年1月7日に大谷光瑞の命で、本山に「臨時部」を設置し、万に備えた。ここでいう臨時部とは、国家の非常事態(日露戦争を指す)に際し、本願寺教団の奉公を統括する事務所であり、多くの職制(3)が定められていた。

第一条 臨時部は国家非常の事態に際し本山として務むべき奉公の臨時事務を管轄する所とす

第二条 臨時部に左の職員を置く

部長 一名 部員 若干名 書記 若干名 書記補 若干名

第三条 部長は法主に直隸して部務を統理し部内職員を指揮監督し其任免を具状す

第四条 部長室に左の二係を置き部員中に就き之を命ず

文書係 交渉係

第五条 文書係は文書記録に関する事務を掌る

第六条 部内に左の三係を置き部員中に就き之を命ず

布教係 庶務係 会計係

第七条 布教係は従軍布教・戦死者葬儀・追弔会等戦時に関する布教事務を掌る
庶務係は慰問贈答及び他係に属せざる事務を掌る
会計係は臨時事務に於ける金品出納に関する事務を掌る

第一条 各教区に臨時部出張所を置き、左の臨時奉公の事務を管掌せしむ

- 一 軍資献納また恤兵金品寄贈の奨励に関する事項
- 二 軍事公債・国庫債券応募の奨励に関する事項
- 三 出師凱旋の送迎慰問に関する事項
- 四 軍人留守家族の慰問及救護に関する事項
- 五 軍人傷病者の慰問に関する事項
- 六 戦死者の葬儀及追弔に関する事項
- 七 戦死者遺族の慰問及救護に関する事項

第二条 前条の他、国民の義気を鼓舞し又は門末の奉公を表明すべき事項ある時は本部の指揮を受けて之を掌る

第三条 出張所は教務所々在の地に之を開設し其所轄区域は教区の区域に依る

第四条 出張所は左の職員を置く

長 壱名 用係 若干名 書記 若干名 評議員 若干名

第五条 長は本部の指揮監督を受け所属職員を統督しその進退を具状す

第六条 用係は交渉・庶務・会計の事務を掌る

第七条 書記は記録計算を掌る

第八条 評議員は招集に依り庶務を評議し又は受持ち部内に於ける奨励事務を掌る

第九条 所轄内毎組に一名若くは二名の地方用係を置き組内に於ける奉公事務を掌らしむ

第十条 事務取扱細則は別に之を定む

ロシアとの間に戦端が開かれると、光瑞は、「凡そ皇国に生を受くる者、誰か報国の念なかるべき、今や国際の艱難に際し、畏くも宸襟を勞し給い、遂に宣戦の大詔を下し給うに至れり、陸海の軍人寒威の酷烈なるをも顧みず遠征の途に上り交戦の事に従う、一般の臣民宜く義勇奉公の志を励し、以て聖旨に奉対すべし……然に今回の事たる実にわ

が帝国未曾有の事変なれば、挙国一致して之に当たらざるべからず、況や本宗の教義を信ずる輩は、已に金剛堅固の安心に住する身を候えば、死は鴻毛より軽しと覚悟し、たとひ直ちに兵役に従わざる者も、或は軍資の募に応じ、或は恤兵挙を助け、忠実勇武なる国民の資性と、王法を本とする我信徒の本分をとを顕わし、ますゝ皇国の光栄を發揚すべきこと、今此時に在り、此旨よく心得らるべく候」(4)という「直諭」を發した。さらに教団挙げて戦時奉公に邁進するために、全国の本願寺教務所に、20の臨時部出張所と多数の出張所支部を設けた(5)。臨時部部長には執行長の小田尊順(6)を当て、臨時部出張所長は各地の教務所長が兼務した。臨時部員(本山)70名、同出張所員951名が配属された。まさに教団挙げての戦時奉公体制を作っていた。臨時部の活動内容は以下の通りである。

戦役中の経営項目 七条通過の軍隊に寄贈せし懷中名号及び書冊

懷中名号 440232 点 書冊 780328 冊 書冊内訳「錢出征」445239 冊 「傷病諸人諸君に告ぐ」30425 冊 「心身の慰め」54283 冊 「凱旋諸子に告ぐ」250381 冊

国債応募額 応募申込 5000000 円 募入額 829000 円

地方庁を経由して出征軍人遺族賑恤の為支出せし金額 12533 円 50 銭

遺族救助を目的とする団体へ寄贈せし金額 3470 円

留守軍隊布教員 122 名

戦地派遣の布教員 105 名

通訳を兼ねた布教員 8 名

傷病兵療養地の布教員 30 名

予備病院慰問のため寄贈せし書冊 91776 冊 書名内訳 「身心の慰め」32406 冊

「不死の神力」25240 冊 「軍人の覚悟」25530 冊 「心の鏡」3500 冊 「仏教或問」2700 冊

「原人論和訳」1250 冊 「真宗宝訓」1150 冊 その他造花並に慰問料等 若干

開戦以来戦病死者遺族に法名を授け弔慰状を發送せし数 法名 14402 帖 弔慰状

5513 通 軍人遺孤養育院 設立 37年11月21日 収容人員 14名

内地師団へ出張して帰敬式及び法名附与の数 法主及御代理の出張数 40 余回

名号授与 888370 帖 法名附与 499337 名

戦地の経営 戦地における本願寺慰問地開教地 大連 遼陽 柳樹屯 奉天 鉄嶺

法庫門 同備付品の種類 楽器 遊戯具 幻燈 蓄音器 玉突 新聞 雑誌 小説
理髮具 テニス 大弓 活画

戦地において凱旋部隊に配布せし絵葉書 30 万枚 小冊子「送凱旋」20 万部

活動写真部の各地巡回 1 か年余

戦時中における右の如き奉公事業に要した臨時部支出の直接費額は 39 年末までに金
814356 円 43 銭也 平和克復後も慰問部はなほ継続設置す(7)

このように教団は、日露戦争に際し、国家に多大な援助を行った。更に指摘しておかねばならないことは、従軍布教使の存在である。本願寺教団は、日露開戦と同時に「従軍布教使条例」を定めた。

第一条 日露交戦に際し戦地に於て布教事務を執らしむる為従軍布教使を置く

第二条 従軍布教使は執行に対し其指揮監督に従う

従軍布教使は親授若くは稟授とす

第三条 従軍布教使戦地に在ては所属司令官又は関係部隊長に稟議し其指揮に依て
執務すべきものとす

第四条 従軍布教使布教事務は左の如し

一 軍人軍属に対する説教法話

二 死亡者に対する葬儀及び追弔法要

三 傷病者の慰撫

四 前各所の他本山より特に命じたる事項又は所属司令官及び関係部隊長より
依頼を受けたる事項

第五条 前条布教事務は所属司令官又は関係部隊長の意見を聞き軍事に差支なき時
処に於て之を執るものとす

第六条 法話説教はわが宗議に基き精神の安慰義勇の鼓舞に務むべし

葬儀及び追弔法要は追慕の誠を表し静肅謹厳を旨として行うべし

傷病者の慰撫は懇切に之を為し看護の務めに従う

第七条 従軍布教使中に監督を置く

第八条 監督は従軍布教使を指揮監督す

監督は本山の命令及び下付の金品を所属の従軍布教使に伝え、又は所属従
軍布教使の諸申牒を本山に伝達す

監督は監督事務に関し重要な件は経伺の上決行し其他は之を専行す、但、

時日切迫経伺の違なきときは決行のあと認可を乞うべし

第九条 従軍布教使は重要な件は其所属監督の指揮を待て決行し其他は之を専行す。但、時日切迫経伺の違なきときは事後承諾を乞うべし

第十条 従軍布教使は日記を製し其任命の日より帰任復命の日迄毎週之を本山に報告すべし、但、重要な事項に就ては其の事項を抜き別に報告するを要す

この「従軍布教使条例」によって戦地に赴いた従軍布教使は 105 名に及ぶが、さきの日清戦争時に派遣した従軍布教使は 13 名に過ぎなかった。このことによっても日露戦争にかける本願寺教団の意気込みがわかろう(8)。

前述した臨時部は、海外にも置かれた。「教示第三十二号臨時部支部規定」によると、「第一条 遼東半島ニ臨時支部を置ク 第二条 支部ハ之ヲ青泥窪ニ開設ス」(9)とあり、遼東半島に「臨時支部」を置いたということである。青泥窪は上述したように、今の大連を指す。つまり本願寺教団は、帝政ロシア最大の基地である大連を中心に従軍布教使を配し、教線を張り開教を試みたのである。

大谷光瑞・本願寺教団は、臨時部を設置した後、直ちに升巴陸龍を大連に派遣している。升巴は、その後山東半島の芝罘(現煙台)に渡り、関東州内の宗教事情を探った(10)。翌年大戦の大勝が煥発されると、大谷光瑞の実弟である大谷尊由は、布教使谷口常之、花田凌雲、吉見円蔵の三師とともに大連に向けて出発した(11)。『大連市史』には、「明治三十七年五月、日露戦争將に酣ならんとする時、連枝大谷尊錫師(尊由のあやまりか一筆者注)は、多数の従軍布教師を率いて塩大澳に上陸し、六月進んでダリニーに入り乃木町に假布教所を設けて留錫した。之れ実に本願寺が大連に基礎を築いた最初であり、日本仏教の満洲進出の端緒である」(12)とあり、また『南満州(まんしゅう)ニ於ケル宗教概観』によると、「明治三十七年二月対露宣戦ノ詔勅煥発セララルヤ本派本願寺ニ在リテハ爰ニ従軍布教師ヲ派遣スルコトニシ機ヲ逸セス百数十名ノ布教師ヲ選抜シ各師団其ノ他重要部隊ニ配属セシメ説法感化ニ依リテ士氣ヲ鼓舞シ一方負傷者ノ慰問、戦病死者ノ弔祭等ニカヲ注キ同年四月ニハ本山ヨリ連枝大谷尊由軍隊慰問ノ為ニ渡滿シ八月ニハ大連乃木町ニ関東別院ヲ創設シ……」(13)とあるので、1904(明治 37)年に本願寺から大谷尊由が派遣され、大連に本願寺関東別院を創設したことは、ほぼ誤りはあるまい。

整理しておこう。大谷尊由は、1904 年 5 月に塩大澳(金州)に上陸し、しばらく当地に滞在し、6 月に大連に入り、当時の軍政官より乃木町 2 丁目の宿舎を与えられた。そして、

この宿舎を本願寺出張所としたのである。程なくして大連兵站病院の慰問を始めた。最初は諸般の準備が整わなかったため、患者のために講話と傷病者の書簡の代筆、それに蓄音機、幻灯機などを使って慰問するだけであったという。その後、慰問部は死者の火葬監督を一任されるようになり、そして西公園にある植物園内の温室事務室(元要塞司令部出張所跡)を借り受けて忠魂堂を建立し、遺族及び一般市民の参拝に供した(14)。

その後、大連に居住する日本人が増加するに伴って、本願寺も手狭になり、新たに本堂を建築する必要に迫られた。ただ本堂を新しく建築するには、多額の費用と工期が必要であり、京都の本山内でも議論となった。「本山の会計の現状に照らして十五万円の支出は実力に副はざる重負担にして到底堪えざる問題なり……若くは大連のみにて他に何等の経費を要せぬと云ふならば或は苦しき会計中割いて支出する勇氣もあれども、清国開教は其範圍頗る広く且つ三年五年の短日月間に成功の月桂冠をいただくべきという事業にあらず。……独り清国のみならず北には樺太の開教もあれば、韓国の布教も彼れの如く手を拵げつつあり、此の蝸の足程手を延して居る布教線を遺憾なく維持し、而かも内の経済を紊乱せしめざるやうに云うことは不可能である」というような反対論から、「然らば大連別院新築は中止するかと云へば然らず、是を中止しては本願寺の体面に掛る、曾つて軍人仲間に放言したる言質に対しては耻しき次第なり、謂はゆる騎虎の勢い止むを得ざる状態なれば、たとい本山の会計には欠陥を生ずるとも三年、五年の向ふで中止するの事止むを得ざる場合に立ち至れども、即ち斃れて後止む所まで行かねばならぬ」(15)という賛成の立場を表明したものであったようである。また大谷尊重(大谷光瑞の実弟、大谷光明)は、1905年(明治38)11月25日日本願寺の集会議場において、同日提出された議案第二号臨時開教費に関し、以下のように演説した。「本職は昨年九月大法主猊下の御名を拝し戦地に出張致しましたが、諸員の知らるゝ如く一昨日二十三日無事に帰山致しました次第で御座います……先づ戦地の状況を申さば、本職が出張以前より本願寺の事業は已に着手しつゝありしが、昨年九月、十月頃より本願寺の事業は着々其歩を進め日に盛代に至り、秩序的行動を見るに至りました……大連杯はご承知の通り開教地なるが、内地にては上等の大工は日当が七八拾銭位にて雇わるゝも、戦地にては貳円若くは貳円五拾銭を支出するも上等の大工を雇入るゝことが出来ぬ。故に實際を云えば貳万や参万では不足にして。貳参拾万も要すれども、左様な金額の出生もなく、依つて原案には貳万円と仮に定め提出せり、木材の如きも、大連地方にありませぬから、鴨緑江辺または日本

より輸入せねばならぬ、また別院を建設して布教場とし、其れを建つれば官有地でも差問なく貸下げらるゝことに成つて居る、故に何か建設せねばならぬ次第である。理由書にもある通りにて、今や戦後の経営として、国家の発展に伴うて、一派として相当の施設をせねばなりませぬ、既に実業社会の如きは満州経営に専ら尽瘁し、貴衆両院議員又は土方伯の如き、或は経営同志会か本願寺の如きは民政庁より別院を建築するなれば、地所は永遠に貸附らるゝことゝなつてあれば、必ず相当の別院なり布教場なり建築せざるときは、本願寺として大いに耻入る次第である。軒下十二尺ぐらいの日本建造物にあらねば、西洋風にせねばならぬ。大連は頗る建築法に八ヶ間敷土地なれば、仮建造にては立ち退きを命ぜらるゝことかある、依つて建築するには是非二万円以上を要する次第である……」(16)と語り、本願寺のメンツにかけても立派な別院にしたいという意気込みを語っている。ともあれ本願寺は1905(明治38)年には「弊派開教上の都合により、満州及び西比利亜教区の統括院として、大連に関東別院を新設、本堂、宗務庁、書院、対面所、輪番所、庫裡、学校、寄宿舎、茶所、経堂、鐘楼、太鼓楼、塔、宝庫、役僧住宅、寺男住宅、門三カ所、運動場、花園、貯水池等を建設致度候に付ては、市外地南山之麓、播磨町突当りの地区三万坪、特別の御詮議を以て、御貸下有之度願申上候也 右建設は明治四十年四月より逐次起工建築可致、図面等は位置御確定の上其都度提出可致候也」(17)とあるように、その筋と交渉して土地を獲得し、別院建築の許可を得て、1908(明治41)年6月28日起工式を行った。『教海一瀾』の伝えるところによれば、「永久我が租借地に歸したる大連の南方に位いする南山麓に約三万坪の敷地を有する関東別院は今や在留民の数日に月に其多きを加うるを以て、同院加談、勘定其他有志者は、一日も早く新築せられん事を切望し居りしが、漸く其機の熟するを見て、彌々茲に起工の式を六月二八日午後二時より挙行したり……」(18)とある。大連市内の知名の有志七百名余りに招待状を出し、四百有余名の参加者があったという。

しかしながら、南山麓の地に本願寺関東別院が建立されるのは1915(大正4)年まで待たなければならなかった。大連本願寺関東別院については、「西本願寺にて五カ年の継続事業と定め、廿五万円の予算を以て大連に建築すべき同別院は、工学博士伊東忠太(19)氏の手にて目下設計中の由なるが……」(20)という記事が『建築雑誌』上に見えるが、大連(たーりえん)本願寺関東別院の建設工期は五年の継続事業であるといい、かなり時間がかかっていたようである。また伊東忠太による本願寺建設案は成功せず、大連本願寺設計図は

幻のものとなってしまった。原因は二つ考えられよう。一つは、やはり資金不足であろう。伊東案では 25 万円の予算がかかるという。本願寺が用意した予算というのは、正確にはわからないが、先の大谷尊重は議会報告では 2 万円とっている。これだけ差があれば如何ともしがたいのではないだろうか。二つ目は「門徒の反対があった」ということである。伊東案はインドサラセン様式の玉ねぎ型ドームや破風型(家の両側面の屋根の切棟が下がって山形をなす一筆者注)といったアジア風の様式を取り入れている(21)。この何ともいえず奇抜な形が、当時の門徒をして受け入れられなかったのではなかろうか。さすがの光瑞も「門徒の反対」ということならば受け入れざるを得なかったのかもしれない。事実、1915 年(大正 4)に竣工した大連本願寺は、瓦屋根の木造の建物であった。伊東忠太、それに大谷光瑞の夢は、1934 年(昭和 9)の築地本願寺完成まで待たなければならなかった。

(二) 本願寺関東別院の活動

大連関東別院の創設については、日露戦争の動向と深く関係があったということが明らかになったが、ここでは本願寺関東別院設立後、大連に居住する在留邦人たちにとって本願寺別院とは、どのような存在であったのか考えてみたい。

満州の開教総長を務めた堀賢雄(22)は、「満州開教放話」の中で、「我々の開教は実際南は大連を起点に北支、奉天、新京、哈爾濱その他枢要都市を始め生産上、軍事上重要の地にして邦人の住するところ、開教使これ従うという元気だ。然し本派開教の中心は対象は未だ在留邦人で、文化言語その他の相違から今直ぐに満蒙人開教を行うことは不可能だ。そのかわり邦人の大部分は本派に信徒の多い近畿以西の出身者である関係から在満邦人には本派の信徒が異常に多い、さあパーセンテージはどの位になるか、ちょっと覚えていないけれど……」(23)と語っているが、その頃の大連は、本願寺派の信徒が非常に多かったということを如実に示している。1908(明治 41)年当時、大連に住む邦人の数は 21069 名で、その中、本願寺派信徒数は 10534 名にも上り、半分を占める(24)と語っているが、このような状況下で本願寺関東別院の活動は、在大連邦人社会の中で、特別な位置を占めるのである。

一 大連倶楽部

大連倶楽部は 1905(明治 38)年 2 月 24 日大連北公園内に本願寺の手によって設置された。輪番の龍江義信(25)の精力的な尽力を以て設置されたものであった。大連倶楽部の規約(26)を見てみよう。

- 第一条 本部は本派本願寺大連俱樂部と称し大連市北公園内に設置す
- 第二条 本部は身心悦樂の裡に体軀の發達と徳性の涵養を計るを以て其主旨とす
- 第三条 前条の主旨を達せんため大弓部、庭球部、音楽部、戯球部、図書部等の数部を置き、別に娯樂具を備え又時々講話会を開く
- 第四条 前条の各部に幹事数名を選定し部内整理の任を託す
- 第五条 本部維持費の中へ毎月銀參拾錢以上を寄付する方を部員とし、一時銀拾円以上の寄付者を名譽部員とす。但し兵士諸君はこの限りに非ず
- 第六条 部員には部員章を交付し本部借付品の使用及び各部の会合に参加共樂の自由を得せしむ
- 第七条 各部の細則は別に之を定む

とあり、初期の本願寺関東別院は、新たにこの地に来る人や軍人軍属のために慰安施設を作ることが最大の目的であったようである。したがって大連俱樂部は、従來の慰問部の發展的解消と見ることができる(27)。

大連俱樂部は、西洋風の二棟の家屋で、九室に区分けされており、最も広い一室には仏像を安置されていた。定例的に精神講話を開き、傷病兵士には内田宏道著「名譽の勇士を送る」、一般軍人軍属には「名和淵海著「軍人の覚悟」及び神根善雄著「不死の神方」などの施本が用意されていた。また義勇忠烈の心を鼓舞する 300 種類にも及ぶ講談本などを備え、申し出によって貸し出しをしていた。また室内には、音楽室(オルガン、アコーディオン、尺八、少年楽隊の楽器一切など)、新聞縦覧室(新聞も本山から 10 幾種が送付され、加えて西洋の雑誌なども備えつけられていた)、囲碁将棋室、玉突室、喫茶室などがあつた。外には大弓射場、及びテニスコート、相撲場、撃劍場などもあつたという。費用については、会費制を採用した。「俱樂部費は一ヶ月三十錢」あり、「部員は三十名内外」いた(28)。

二 大連仏教婦人会

本願寺教団は、近代的な婦人教会を 1888(明治 21)年、東京築地別院内に設立するが、これは東京在住の上流階級の婦人たちによって結成されたものあつた。上流婦人の社交的性格を出なかつたといわれる(29)。日露戦争時に際して、本願寺が組織的奉公運動を行おうとするとき、婦人の力は絶大であつた。そこで裏方(大谷光瑞の妻壽子のことである。一筆者注)は、戦時奉公に関して門末の婦人一般に対して「直示」を出した。「今や遠征の軍人たちは或は逆巻く荒浪の上にて、鉄の丸に命を奪われ、或は異国の荒野の末にて、

氷なす剣に軀を屠られ、親兄弟も家も財産もうち忘れ、君と国とに尽くされつゝありて、其が忠勲により、既にいくたびか勝利の報ありしこそ、御国のために最も喜ばしけれ、若しもこの戦あやまつことありて、敵の軍艦、四方より御国に攻め寄せたらんには、湊は潰され家は焼かれ、わらは等の生命まで亡きものとならん、さるを国民が飢えず凍らず、やすらげく家の業をたのしむは、この軍人たちの流れがせる血しおより受る恩恵に侍らずや、其を思えば、仮令へ女の身なりとも、つとめはげみて之に報る業に従わでやあるべき、況して軍のことはひとり軍人の任務のみとも覚えざらば、国人力をあわせ尽くさでやあるべき、女の身軟弱くて男子と同じき任務は為し得ずとも、自ら多くの軍資を献ずること能わずとも、女は又女に相応しき業も種々あれば、先ず内にありては己よりして、儉素を守りよく家の政を理め、親兄弟又は良人をして内に顧る憂なからしめ、又外に向かいては軍人の留守家族遺族を訪い慰め、或は傷み病る兵士をいたわり、或は繻帯を捲き調うるが如き類の業を撰り、何事はまれ、真意より仏の御名を称えつつ、御国のために尽し、我門末の婦人たる道を全うし給わんこと、偏に冀う所になん侍る」(30)。裏方籌子は、後の貞明皇后(大正天皇の後)の姉に当たる方だったので、この「直示」の影響力はかなりあったと思われる(むろんこの当時、まだ御成婚は決まったわけではない)。

さらに籌子とともに「仏教婦人会」創設に大きな役割を果たした人に、光瑞の実妹武子(31)がいた。武子は、籌子の弟であった九条良致に嫁したが、夫である良致がイギリスから10余年間帰国せず、深窓の佳人として世の夫人たちの同情を一身に集めた。この籌子および武子のコンビによる「婦人会」運動は、本願寺の奉公運動を側面で支えていた。

本願寺当局は、この「直示」に基いて具体的に婦人会規則などを作り始めるのである。正に日露の前線たる大連において「婦人会」が結成されたのは当然の成り行きであろう。ただ人口の増加に伴い、会員の数も多くなってきたので、「大連仏教婦人会」(1905年(明治38)年結成)は発展的に解消し、1906(明治39)年に「関東婦人会」と改称し、新たに再出発を図ることとなった。規約(32)には、

第一条 本会は関東婦人会と称す

第二条 本会の本部は大連市本派本願寺関東別院内に置く

第三条 本会は仏教の本旨に基づき婦徳の発展を計り並せて会員相互の交誼を親密にするを以て目的とす

第四条 本会は前条の目的を達せんがため、毎月十日、会員の会合を催し、宗教教育及び処世に関する講演を開き、又随時に共樂的演芸会等を開催すること

あるべし(当分の内毎木曜日には茶儀、土曜日には挿花等の教授をなす)

第五条 本会会費は毎月金五十銭とする

第六条 本会会員には会員章を交付する

第七条 本会は真宗婦人会総裁を推戴する

第八条 本会に左の役員を置く

会長 一名 幹事長 一名 会計二名 幹事十名以内

第九条 本会会長は関東州に在住して名望ある令夫人を以て推す

第十条 本会幹事長以下の役員は会員の互選により会長の承認を受くべき者とす

第十一条 本会役員はすべて名誉職とし、幹事長以下の任期を一カ年とす

但し満期再選する事を得

第十二条 本会会長は会務を統理し、幹事長は会長を補佐し以てその整理に任ず、
幹事は幹事長の指揮を受けてその庶務に従う者とす

第十三条 本会会務の裁決並びに会計等はその必要に応じ幹事会を開き其決議に依
り会長の承認を経る者とす

第十四条 役員改選並びに会計報告は毎年一月之を行うものとす

第十五条 本会は前条の外其必要に応じ総会を開き其決議に依り会長の承認を経て
各種の規定を設く

とある。総裁には法主の裏方壽子がつとめ、会長には初代関東都督大島義昌夫人大島初子が推挙され、役員のおおくは大連医会長夫人、新聞社社長夫人などが当たった。夫人たちの交際機関として大きな役割を果たした(33)。

三 大連仏教青年会

仏教青年会は、青年間の精神修養のため、大連本願寺別院輪番龍江義信の発起により、1906年(明治39)年11月に設立された。もちろん前項の「婦人会」組織を意識して作られたものであろう。規約(34)を見てみよう。

第一条 本会は満州仏教青年会と称す

第二条 本会は其本部を大連北公園本願寺大連倶楽部内に設け、支部を枢要の各地に置く。但支部細則は別に之を定む

第三条 本会は仏教の教義に基き徳性を涵養し風教の振作を図るを以て目的とす

第四条 前条の目的を遂行せんが為に仏教及び學術に関する講話会を開き必要に応じ慈善救済など諸種の社会的事業を企画するものとす

- 第五条 本会の趣旨を賛成する者は本会会員たることを得
- 第六条 本会会員には会員章を交付す
- 第七条 本会会員は左の四種とす
- 一、名誉会員 一、特別会員 一、正会員 一、賛成員
- 第八条 名誉会員は本会に対し、特殊の功ある者にして協議員会の決議により推薦する者
- 第八条 名誉会員は学識徳望をを有し本会の推薦によるもの
- 第九条 特別会員は本会に対し特殊の功労ある者にして協議員会の決議に依り推薦するもの
- 第十条 正会員は規定の会費を納入するもの
- 第十一条 賛成員は本会の事業を翼賛補助するもの
- 第十二条 会員にして本会の体面を毀損する者あるときは協議員会の決議に依り除名する事あるべし
- 第十三条 本部に左の役員を置く
- 一、会頭一名 一、副会頭一名 一、協議員参拾名 一、会計二名 一、書記一名 一、雇員若干名
- 第十四条 各支部には其他の状況に依り適宜役員を置く
- 第十五条 会頭副会頭及び会計は協議員会の選任するところにより、協議員は正会員及特別会員の互選による者とす、書記以下は会頭之を任免す
- 第十六条 役員任期は一カ年とし満期再選することを得
- 第十七条 会頭副会頭協議員及会計は名誉職として有給とす
- 第十八条 本会会員たらんとする者は会費として月額金五十銭を納付する者とす
- 但、一カ年分を即納する時は金五円とし、五十円を即納するときは終身会員を要せず
- 第十九条 本会会計の支出方法等は協議会の決議に依る者とす
- 第二十条 協議会は必要の都度これを開く
- 第二十一条 本会は毎年四月総会を開き役員改選並会計報告をなす

1908年(明治41)9月現在会員数は200余名であり、毎月15日を例会日としていて、また5日、25日は教義の研究日であり、維摩経や蓮如上人一代記などを読んでいるという(35)。

四 教育事業

大連は、本願寺の経営による数多くの教育施設が存在した。宗教と教育はいうまでもなく、不即不離の関係であることは言を俟たない。日本人子女の教育の問題は日本人社会の成立の経緯と深く関わっている。戦前の日本人は、いわゆる自国の教育体系をそのまま外国に持ち込んで当然とする考え方があった(36)。したがって本願寺の手によって日本風の「大連幼稚園」をはじめ外国語研究所「女子技芸学校」などが作られた。

(一)大連幼稚園

大連に邦人渡航の許可が許されたのは 1905 年(明治 38)1 月の陸軍省告示第 1 号によるものであったが、ただそれ以前にも相当の邦人が大連にいたようである。その後軍隊の必要物資を調達する商人たちが引続いて大連にやってくるようになった。同年 5 月には雑貨商、食料品商、建築土木請負業、旅館業、漁業、医師、運送業、材木商、料理店、飲食業、煙草商などに従事する邦人が居た(37)。そこで当然教育施設が必要となってくる。

本願寺の経営に係る「大連幼稚園」は、本来ならば 1906(明治 39)年内に開園する予定であったが、保母の選定に時間がかかり、保母が大連にやって来たときは 11 月中旬に当たり、厳寒の候になってしまったので、この時期の開園は不可能になってしまった。翌 1907(明治 40)年 4 月に仮校舎を大山通り 1 丁目 58 番地にある民有家屋を借りて 4 月 27 日に開園の運びとなった。開園以後市民は教育機関の増設に喜び、本願寺が教育に用意周到なるを感謝し、入園希望のものが多いが、教室が狭くて断っていたという。1907 年 6 月末には 101 名の園児が在籍していたが、校舎が余りにも狭いので、西通り佐渡町に 90 余坪の家屋を借りて移転の準備中だという。職員は花田頓成園長の外、5 名の保母及び保母見習いと嘱託医師 1 名がいた(38)。幼稚園の発展ぶりについては『教海一瀾』の伝えるところによれば、「本園は大連本願寺附属事業中最も市民の歓迎する所なり、漸次隆盛に向えり目下収容園児百七十余名花田園長以下職員七名在勤、校舎は借家にして一ヶ月金百六十円の家賃を要し、且つ狭隘を感ずるを以て目下新築設計中にあり、同園保育料は一ヶ月金壹円にて一戸二名已上の入園者は半額となす……」(39)とあり、幼稚園の益々の隆盛ぶりを伝えている。

(二)外国語研究所

「外国語研究所」は、幼稚園と同様に大連本願寺の附属事業のひとつであるが、初めから本願寺が設立したものではなかった。沿革について、当地の新聞は、「戦後に於ける大

連市の膨張に伴い実業家其他渡来する者日に多きを加え子弟に教育機関無きを憂い目下民政部に職を執る宮崎亀之助氏が三十九年四月其設定をなし超えて八月之を本願寺倶楽部に属せしめ、爾後本願寺経営の本にありて花田頓成氏之を担任して現今在籍者百十名あり、学科は普通科、英語科、清語科を置き初歩の者と雖も入学するを得るといふ(40)と伝えている。

本願寺は新植民地のため、「外国語」と冠する新しい学校を考えていたようである。科目は清語、露語、英語、国語、漢文、数学、法政、経済、倫理などの科目があった。教員は本願寺輪番龍江義信、花田頓成、谷口常之等の布教使をはじめ、谷信近、佐野武二、中島専之助(東京高等商業学校卒業生)、斉藤豊治、堀田延千代(東京外国語学校卒業生)後藤甚作、宮崎亀次郎(亀之助か?)、袁喜愷、馬場讓などが担当していた。月謝は1か月金1円50銭であったといふ(41)。

(三) 女子技芸学校

大連では、婦女子のため実用教育を施す学校がなかったので、本願寺はこれを憂い「仏教青年会」「婦人会」それに有志の者の賛同により、「女子技芸学校」を設立することになった。大谷光瑞が大連を訪問中であつたため、とくに光瑞に許可を賜り、大連民政署に設立出願し、1907年(明治40)5月末に設立が認可され、6月17日に開校式を行い、校舎は当分幼稚園の一部を借り受けていた。学生数は15名。開校式では校長の福田行恩氏が設立の趣旨を述べ、花田幼稚園長が生徒心得について演説し、来賓として本願寺総代である遼東新報社員堀田延千代氏の挨拶があつた(42)。堀田氏は前項のところで紹介したが、東京外国語学校の卒業生で本願寺の外国語研究所で語学を教えていた人物である。

技芸学校の科目は速成科(3か月)、本科(1年)、高等科(1年)と定められており、各科に甲乙種を分かち、2科目を兼修するを甲種とし、1科目専修を乙種とした。裁縫、編物、造花、音楽、修身の授業科目があつた(43)。さらに『満州日日新聞』にも女子技芸学校についての記載がある。「本願寺の保護により、園当時入学者三十余名になりしが、漸次拡張し本年(1909年)三月第一回卒業生九名を出し速成科二名をだしたり。学科は裁縫、密針、造花、編物、読書、算術、作文、修身にて一週三十時間教授し目下在籍生四十名ありといふ」(44)。

第二節 大谷光瑞と大連

新田光子氏の研究によれば、大谷光瑞が大連に足を運んだのは、実に 24 回にも及ぶという(45)。数日間の滞在もあれば数か月に及ぶものもあった。「二楽荘を他人に渡した今日余と京都本山とは無関係である。印度旅行を了えて後は内地に帰らず気候のよい大連に家を建てて永住する決心である」(46)といった光瑞にとって大連は魅力的な街であったに違いない。

本稿では、光瑞初めての大连訪問と、法主辞任後の大连訪問に絞って、光瑞と大连の関係について見ていこうと思っている。光瑞と深い関係にあった大连図書館や旅順博物館についても併せて見ていきたい。さらに 1947 年 2 月の引き上げについても本稿で取り上げる。

(一) 大谷光瑞初めての大连訪問

1906(明治 39)年 9 月 25 日、本願寺執行長大谷尊重は「本山録事」甲達第三十一号において末寺一般を対象にして「大法主猊下明二十六日午後四時五十七分七條駅御出発翌二十七日午前四時神戸港解纜「オセアニア」号ニ御乗船清国へ御巡錫ノ途ニ上ラセラル」という達示(47)を發表した。1899(明治 32)年に次いで 2 度目の清国訪問であった。

随行員としては、教学参事部長兼清国開教総監積徳院大谷尊由連枝を筆頭に賛衆兼安垣乗、教学参議部出仕渡辺哲信、清国開教総監付録事前田徳水、賛事補兼清国開教総監付録事堀賢雄、教学参事部出仕渡辺哲乗、室内部員福井瑞華、室内部員谷清輝の諸氏が当たった。今回は御裏方の同行もあるので、足利和里子のほか侍女数名が同行した(48)。

『教海一瀾』には「猊下の清国御巡錫」と題する社説があり「夫れ清国は我邦の善隣、東西大陸の要部を占めて、国大に民衆し、今や朝野靡然として文化の風を迎え、大に改新に実を求むるに急、我邦指導の責務漸く重を加え来ると共に、清国開教の機運また益々熟し来れり……嘗て遍く清国内地を視察あらせられしより以来、開教の案既に成り、近邇機の熟し来るや、其の緊急に应じて、漸次各地に開教使を派遣せられ、北は盛京の各都市より南は福建の各要地に至るまで、我が本願寺の教線を張らざる無きに至れり。此時に当りて法駕一たび清国を巡らせらるゝは、頗る時宜を得たる者にして……」(49)といい、本願寺の教線をさらに拡張するために、法主自ら今一度清国を巡遊するという計画である。大谷光瑞自身は海外開教に対しては積極的であり、また日露戦争後の大連に赴くことは光瑞の願いでもあったかもしれない。

ここに簡単に行程を紹介しておきたい。神戸—上海—漢口—鄭州—西安—成都—重慶—

漢口－上海－香港－上海－漢口－河南－北京－河北－營口－大石橋－奉天－大連－神戸という行程で神戸に着いたのは 1907(明治 40)年 5 月 4 日であった。8 か月にも及ぶ大旅行であった。本稿では、大連に関わる部分のみ紹介しておきたい。

1907 年 4 月 24 日、光瑞並びに裏方、積徳院一行は、出迎えに来た營口本願寺の寺本泰巖開教使たちと山海関を出発し、船で対岸の營口に渡った。營口では当地道台梁如浩氏の出迎えを受け、窪田文三領事主催の晩餐会に臨んだ。参加者は梁道台はじめ、大連都督府陸軍参謀総長の神尾光臣少将、平岡居留民団長など營口在住の名士達であった。その後、当地の忠魂碑を参拝し、また營口倶楽部で信徒総代、仏教婦人会員、仏教青年会員と親しく会見に臨んだ(50)。会見後、信徒 500 名の見送りを受け、満鉄の特別列車に乗り込み、奉天(ほうてん)に向かった。奉天より南下し、26 日光瑞一行は大連に到着した。大連本願寺関東別院輪番龍江義信はじめ、関屋民政署長、満鉄理事、仏教青年会員、仏教婦人会員など多数の出迎えを受けた。騎馬巡査の先導で宿舎となった満鉄中村是公副総裁宅に入った。小休止後、関東別院参拝、新しい別院の敷地などを巡視した(51)。新しく建設を予定されていた本願寺関東別院の土地は、1905 年に大連民政署より貸し付けられているが、形の上では、光瑞自らが用地の選定を行ったということになっていた。新田氏によると、「大連に渡った大谷氏は、民政署の役人に案内させて若草山に登り、「君、あそこからズーッとここまでを、本願寺の土地にしてもらおうよ」と、ステッキをぐるっと一回りさせた。これで約五万坪もあったかと思われる本願寺の土地が決定した」(52)と、大連神社の松山理三氏の言葉を引用される形で紹介されている。

翌 27 日には旅順に向かい、神尾参謀長、税所要塞司令官、瀧川鎮守府参謀長等の出迎えを受け、白玉山西麓戦死者仮納骨堂において読経後、宿泊先である鎮守府司令官宅に向かった。28 日も精力的に砲台や壕などの戦跡を回り、夕刻旅順を後にし、大連に戻った(53)。29 日には大連倶楽部にて、「仏教青年会」「仏教婦人会」会員に対し、「満州の経営には各人健全たる信仰の基礎に樹立し、以て益々奮勉努力すべし」との講話を、また裏方は「婦人会」員に対し、同様に「植民地における婦人の心得」について講話を行った。仏婦及び仏青の大会に臨んだ法主及び裏方一行に対して、各々総代は「千載一遇の盛時に遭遇」できたことの喜びをそれぞれ語っていた(54)。

大連での行事を終え、4 月 30 日「天草丸」に上船し、帰国の途に就いた。5 月 2 日門司経由にて 4 日神戸港に着き、同日京都本願寺に帰山した。この 8 か月に及ぶ大旅行はまさに「東亜の盟主たる我国特有の宗教が、教線を清韓各地に拡張して、以て彼等幾億の民心

を開導すべきは、これ蓋し必然の責任にして、避けんと欲して避くべからず。我が大法主猊下親ら先づ法駕を進めて法縁を到处に留め、以て開教の基礎を確立せられ、緩急を誤らず、順序を失せず、着々として教線を進めんことを企図し給うは、時機実に然らざるべからざる者あればなり……」(55)と語るように、本願寺の教線拡張に大きな役割を果たしたのである。

(二) 満鉄との関係

本願寺が満鉄の大株主であったことはよく知られている(56)が、満鉄と本願寺或いは大谷光瑞との関係は非常に密接なものがあった。いうまでもなく大連は満鉄本社が置かれた場所であり、大連に縁があるものはすべて満鉄とも縁があるといっても過言ではなかった。例えば本願寺との関係は、「満鉄会社から二万円の補助をくれた上に三名の立派な技師を別院に特派して月給を満鉄持ちでアノ別院の工事を完成させてくれたということは非常な厚意である。大連市街を眼下に見る見晴らし善き所の二万坪の敷地は十五間に十二間の本堂に八間に二十間の対面所を十三万餘圓にて出来上がって居る。此内にて本願寺からは三万餘圓足らずの錢より出て居ない。月末に支払いがむずかしいといえ、満鉄から代わって支出して居ることは珍しくない。実際本願寺の別院が満鉄の別院(・ ・ ・筆者)かわからぬくらいである」(57)といわれている。さらに本願寺を代表する大谷光瑞は、大連滞在中には満鉄本社で講演を行い、満鉄読書会などに参加をしている(58)。その上、自らの学生を満鉄の農業試験場に送り込み、満州開拓の推進者として有名な東宮鉄男の元に数人の学生を送り出したこともあった(59)。

さらに光瑞は、育英事業と図書館や博物館などの文化事業に関することに従事していた。

育英事業としては、「大連高等女学校」と「策進学院」の設立が挙げられる。「大連高等女学校」は『大連市史』によれば、「本校は大谷光瑞師の創設計画に依り、昭和十年五月八日財団法人大連高等女学校財団設立の件を出願し、同五月十七日を以て財団設立の認可を得、五月三十一日大連高等女学校認可と共に六月二十日開校す、市内回春街に校舎を新築し、一学年四学級生徒二百三十四名二学年四学級二百七名、現校長津田元徳氏である」(60)とある。大連本願寺関東別院は、前述したように、別院創設以来教育事業を布教活動と共に中心においていた。さらに旅順に「策進書院」を設け、自ら前途有望の青年に教育を施した。光瑞の興した育英事業としては神戸二楽荘に作った「武庫中学」が

挙げられるが、「策進書院」も「武庫中学」に劣らない英才教育を徹底的に行った。『鏡如上人年譜』1918(大正 7)年、4月の項を見ると、「是月全国県庁を通じて学生を募り、四十余名を旅順策進書院にて教育を初む」(61)とある。したがって 1918 年から育英事業に乗り出したのであろう。校長は堀賢雄が務め、授業科目には「西力東漸史」「東洋史」(大谷光瑞担当)、「ドイツ語」(関東都督府の野波静雄)、「農業」(関東都督府農業技師の木下氏)、「地理」「英語」「オランダ語」(校長の堀賢雄)、「数学」(旅順工科大学の永井氏)、「漢詩」(仁本正恵)、「仏教概論」(広瀬了乗)、「西洋史」「経済学」(下中弥三郎—後の平凡社社長))があった(62)。下中は、当時大谷光瑞に認められて、その蔵書の整理保管を任されていたので、策進書院で歴史を講じることとなったようである(63)。

(三) 大連満鉄図書館

「大連図書館」は、1907(明治 40)年南満州鉄道株式会社(満鉄)調査部図書室の設立にその淵源を求めることができる。そして 1910(明治 43)年には、「街の書齋」となるべく大連や鉄道付属地の主要な場所に図書館が設けられた。翌年 8 月には、東アジアといわれた満鉄「大連図書館」が、大連東公園町 29 号(現魯迅路)に創設された。この満鉄「大連図書館」は、日本が中国大陸に設置した最大の図書、情報資料の中心地であった。政治、経済、文化などの図書資料を収集するほかに、貴重な中国や西洋の典籍を収集することも十分に重視していた。

1925(大正 14)年、大谷光瑞は、自己の所蔵していた大量の書籍を満鉄大連図書館に譲り渡した。『満鉄附属地経営沿革全史』によると、「大谷光瑞の蔵書は最初は満鉄図書館に委託され、保存されたものであったが、大正 14 年 11 月に大連図書館に寄贈され、収蔵されたのであった」(64)とある。何故に蔵書を光瑞は大連図書館に委託して保存させたのか?大連図書館の元館長である張本義氏や元副館長であった王若氏は、次のように答えている。「年譜によると、大正 3 年西本願寺の財政上の問題で大谷光瑞師は住職の地位を辞して、南洋や中国などで布教活動をしたり、農場などの経営にあたっていた。大谷光瑞師は、大正 4 年 8 月に旅順新市街に居を移したが、後に資金不足から、南満州鉄道株式会社から巨額の借金をした。そこで、自分の蔵書や財産を担保としたのである。後に借金を返済することができなかつたために大正 14 年 11 月に正式に満鉄大連図書館に譲り渡したのである」(65)と。ただ光瑞がどうして巨額の借金をする必要があったのか、不明であるが、光瑞は、満蒙に新しい教線を開くために、奉天(瀋陽)に満州本願寺

を 30 万円の費用をもって創設し、本山となし、法主になろうとたくらんでいたらしい(66)。その真偽はともかくとして、光瑞は大連、青島、それに上海を基地としてアジア各地を飛び回り、日本には決して帰るつもりはないといていた時期である。

さて光瑞の蔵書である「大谷文庫」は、漢籍は 5 千冊あまり、洋書はおよそ 300 冊である。明末清初の通俗小説、地方志と仏教関係の蔵書が特に際だっている。これらの蔵書は重要な史料価値を有するだけでなく、非常に高い版本価値を有しているのである。蔵書の多くには、「写字台文庫」の蔵書印が押されているが、「写字台文庫」とは、もと本願寺にあって歴代の門主が収集し伝持されてきた書籍の総称である。

(四) 旅順博物館

旅順で大谷光瑞との関係を示すものとしては、旅順大谷邸(67)や前述した私塾「策進書院」、そしてここに取り上げる「旅順博物館」などがあつた。大連市旅順口区にある「旅順博物館」は、『旅順博物館二十年史』によると「大正五年十一月関東都督府訓令に由り、関東都督府満蒙物産館規定の定めらるるに及び創立当初の物産陳列館を廃して松村町庁舎に関東都督府満蒙物産館を開き越えて大正七年四月関東都督府博物館と改称して茲に大迫町の新庁舎を本館となし、従来松村町庁舎は其儘考古分館の名称のもとに継続開館」とあり、関東都督府満蒙物産館、関東都督府博物館に由来するという。そして「当時考古分館に収蔵せし列品は大谷光瑞氏の将来に係る中央亜細亜並に印度発見遺物」であつたと記している(68)ように、光瑞は、大谷探検隊が将来したインド・西域の考古文物を、この博物館に寄託していたのである。ただそれらは、かつての館員森修が回顧するように「昭和初年頃であつたと思うが、私は博物館に保管中の収蔵品の内、大谷猯下の収蔵品から経巻を除きその他の保管品を総額十万円に評価する書類の作成を命じられた。そこで各個にそれぞれ適切な価格を割当てた書類を作成し、大谷探検隊によって西域より将来された学術資料は旅順博物館の所有となつた」(69)といい、大谷光瑞から寄託された西域からの将来品は、大谷光瑞の手から離れ、旅順博物館のものになつたということである。前述の大連図書館蔵書と同じ運命をたどっている。大谷光瑞は手許不如意になつていたのか、或いはまた別の企みがあつたのかどうか興味深いところではある。

当初、大谷探検隊が将来した多くの文物は、神戸の光瑞の私邸「二楽荘」に集められた。しかし、程なくして実業家の久原房之助の手にわたり、一部を残して朝鮮総督府博物館と旅順に分散した。現在、韓国中央国立博物館と旅順博物館に所蔵されているもの

がそれである。しかしこの分散の経緯については、未だ詳らかでない。

(五) 大谷光瑞の引き揚げをめぐって

大谷光瑞は、1945(昭和20)年8月15日、敗戦の詔勅をヤマトホテルで聞いた。詔勅を聞いたあと、関東別院輪番宇野本空や筒井助勤たち側近に「戦いに敗けたことは誠に残念であったが、これも負ける理由がなかったでもない。しかし戦いは武力において負けたが、吾々に残された任務はこれからである。念珠を持つものの仕事はこれから始まる。心身を粗末にしてはならない。これから精神浄化の戦いは限りはない、皆解ったか」(70)と話したという。それに先立つ13日には、本願寺門徒総代の榊谷仙次郎(71)が、大連要塞司令官柳田と光瑞の処遇について相談をしている。『榊谷仙次郎日記』によると、「柳田司令官と別室にてお会いする。尚司令官は関東州に二万の兵力があれば、如何なることがあっても防衛する自信を持っているが、兵力もなければ機械もない。今更何をか況やと云っておられるので誠に悲痛の想いをしたのである……大谷光瑞さんのお話をしたところ、近いうちに何処かへ行かれるのかと尋ねられた。北京より飛行機は来ることになっているから北京に行かれるのでせうと話したところ、北京は危険である。それよりは奉天へでも行かれたほうがよかろう、大谷さんならば、貨物列車にでも便乗が出来るであらふと云って居られた。その他大谷さんについて重大なお話があったが之は略す」(72)。肝心の重大な話についての詳細がわからないが、翌14日には、関東州今吉長官との会談の中で、「昨日要塞司令官にお会い致しましたが、大谷光瑞殿下に対し容易ならざるお話が御座いましたが、斯如き事は閣下も御承知で御座いますかと其の内容をお話し申し上げたところ初耳である。そんな事があるか知らんと言はれ、全くご承知ない様でこれは軍の誤解だと思ひます」(73)。ここにある「容易ならざる話」と「重大な話」とは、おそらく同じ内容を指すものだと思われる。同日榊谷は、輪番であった宇野本空を呼び出して、光瑞のことについて話をしている。「西本願寺宇野輪番に午後一時お出下さる様に電話し最も大切な要件であるからと言ったのでお出になった。要塞司令官より極秘にお扱いを願ひ度いと前置し、要塞司令官又は今吉長官へお話し申し上げた事お伺ひした事を話したので輪番も非常に御心配の体であった。殿下には時々そんな誤解を受けられることがあります。先年も一度そんなお話があったと申し上げ殿下の御一身上に関する重要問題でありますから殿下には露骨にお話にならぬ様にされ御注意された方がよいと思ひましてお出を願ったのでありますと申し上げた所、誠に良い事を聞かせて頂きましたよく注意

を致します。何かの間違だと思えます。州庁長官の言はれたのが本当です。都合に依っては要塞指令官にお会ひして奉天行きの便乗をお願ひされるかたわら其れとなく様子をお伺ひされてはどうですかとお話し申上げたので、そう致しませうと今後のことに付き大体の打合せをなし、午後二時輪番はお帰りになる」(74)。「御一身上に関する重要な問題」とは何なのか、興味深いところではあるが、不明である。ただ、結果的には敗戦の前日であったので、日本が降伏するということと、その後の光瑞の処遇について話をされたと考えてもいいのではないだろうか。大連時代の光瑞の側近であった光岡良雄は、1945(昭和20)年8月上旬に光瑞の命により日本の敗戦後に備えて、上海、大連、北京、奉天に後始末のために赴いたと記し、満州教区83ヶ寺の引き揚げ状況を視察したという(75)。

大谷光瑞は、この年の11月に膀胱腫病で満鉄大連病院に入院するが、翌年の6月4日に大連市の公安局にスパイの嫌疑をかけられ抑留され、市政府の地下室に監禁された。榊谷仙次郎は、光瑞を助けようと沙河口本願寺と連絡を取り、本願寺の名義で20万円を集め、関係各部門と交渉した。しかし、光瑞は「内閣顧問」などを歴任していたので、この交渉は成功しなかった(76)という。しかし7月14日には釈放された。

この光瑞の引揚げをめぐり榊谷は、大連日本人労働組合内に設置された「引揚対策協議会」の中心メンバーであった石堂清倫氏とともに、光瑞の帰国に奔走する。石堂は、ソビエトの司令部に談判に行き、何とか光瑞の引揚げを認めさせたのである。「ソ連の憲法では宗教の自由は認めないのでしょうか」「とんでもない、認めますよ」「それじゃあ日本の宗教の代表者、大谷を釈放してくれ。日本人は、彼は信徒の代表として働いたのであって、戦犯とは思っていない。彼を釈放しないと、浄土真宗の門徒はこの後五十年百年のあいだ、ソビエト社会主義は宗教弾圧をした、と恨むでしょう」といった。その結果、ソビエト当局は、明後日出帆の引揚げ船で帰国することを条件に光瑞の引揚げを認めたという(76)。石堂自身の言葉を見てみよう。「終戦後大連で逮捕された大谷光瑞氏についても、これを内閣参議をつとめ「太平洋戦争」の積極的支持者である政治家と見るか、日本の多くの国民の尊崇を集める宗教家と見るか大きな問題となった。本願寺門徒総代として榊谷仙次郎氏が奔走した点もあって大谷氏は無事帰国をしている」(77)と語っている。

光瑞の側近であった仁本正恵は、「本願寺の明星」の中で、光瑞の帰国について触れている。「昭和二十二年二月二十八日、大連に集結した在留邦人の引揚げ第一船の帰還の日

である。この日、大連病院に突如ソ連の高官が上人を訪ね、そのまま自動車に乗せて、大連埠頭に直行した。埠頭には大連から祖国日本に引揚げる第一船の遠州丸が待機していて、すでに出港直前でタラップが上がりかけていた。上人は辛くもタラップを渡って、乗船を終えると遠州丸は出港した。間一髪であった」(78)と記している。その真偽の程はともかくとして、大谷光瑞の帰国の裏には、多くの人間ドラマがあったというわけである。

第三節 大谷光瑞と満州

(一) 大谷光瑞の満州観

大谷光瑞は、本願寺法主辞職後、朝鮮半島経由で満州に入った。満州の様子を徳富蘇峰(79)に宛てた手紙(1914年12月11日)の中で「満州の概況は、瞥見にて不分明なれども、邦人の大発展を為せるは、疑ふべからざる事実にて、大に人意を強く致候。安東は全く朝鮮式にて、奉天は満州式の真相を出せり。鮮満を比較するに、鮮は農を主とし、邦人は常に内地農村経営を試みんとせるが如く、従って移住者の居住も、純日本式にて、宛も北海道に至るが如き観あり。満州は商を主とし、到る処悉く商埠の観あり。大連に到っては、巨屋鱗次、市区井然、之を欧州に求むるも、敢て遜色なし、蓋し我帝国第一の美観たるべし。地の形勝を占むると、自由港なると、満鉄の大経営を施せりと、此三因の総合せる結果ならん。帝国の北進門戸として、此地の益々発展せんことを、小生は切望に堪へず。満鉄沿線附属地に、近頃農村を奨励せりと聞く、実に欣喜に堪へず。国威は商権によりて伸張し、農利によりて確立す、満州にして農村たらんか、即ち朝鮮と等しかるべく、齊一変せば魯に至らんの類か。租借地は狭隘なりと雖も、農村に適する地尠からず、邦人農と云はぐ米といふ。稲米素より農産の首位にあれども、稲米を産せずと雖も農産なしと云ふ可らず、是れ邦農の宿弊なり。菽麦可なり、果樹可なり、礮确耕す可らざるの地は林業可なり、豈獨り稲米のみを墨守するの要あらんや。年々二千戸の農民を、向かふ十箇年租借地及満鉄附属地に移住せしむるは、頗る容易にして、毫も狭隘を感じざるべく、朝野人士の移民奨励を為さんこと、小生は希望に堪えず……」(80)と語っている。満州の地の利、大きな港、満鉄の三位一体を以て更なる発展を遂げ、そして農産の可能性を大いに語り、移民奨励を説いている。

さらに翌年(1915年5月20日)長春から蘇峰に宛てた手紙には「日露親善と満蒙経営」というテーマで「哈爾濱は純露国市街なり。貨幣は露貨を使用し、言語も露語を使用し、我奉天居留地に比し、日を同うして語る可らず。市街の規模広大にして、百卅万の人口を容るも、猶局窄ならざるべし……哈爾濱を發する時、淡日暈を生じ、漸く南下するに従ひ、密雲凝って雨となり、蕭々新緑を湿せり。往行の時に比し、数日を過ぎざるに、杏花既に綻び、緑楊烟の如し……当地は、現今に於ける我勢力の北端なり、邦人の在留するもの四千に及べり。今回の条約は(筆者注一対華21か条のこと)、満州と東蒙に我勢力を樹つを得しを以て、当地は其中心たらざる可らず、土地の肥沃なるは、南滿全線に冠たり。加ふるに此より西して、東蒙の草原、正に我遊歩区域内に在り、各種の農産起して能はざるなし。特に豆類は、従来より大生産にして、当地を集散場となせり。当地に於ける人士の言によるに、数年間い長足の進歩を為せりと。当駅は、我帝国中第一の収入を挙ぐる地にして、日額三万五千円を出づること普通なりとす。皆豆類の貨物収入なりとす、当地方の農産の豊富なるは推知すべし。唯小生目撃するに、低窪の地は、排水工事を施さざるにより、行潦瀦して耕耘を妨ぐ。我農民の移住し来る時は、多少の排水工事を加へざるべからず。近年水稻の試験を為すせるものあり、成績や、良しと雖も、事既に僥倖に近し、豆類の栽培を改良するの安きに如かず。我邦農を云ふ、稲にあらずば農にあらざるの感あり。是れ農民の謬見にして、稲を栽ゑんをせば、宜しく南航赤道の下に行くべく、何を苦しんで朔北に水田を索めんや。今回の条約を有効確実ならしめんには、切に我邦人の移住し、努力奮励に待たざる可らず……」(81)といい、土地は肥沃で東蒙の草原では豆類の生産が盛んであり、その集散地としての哈爾濱は、我が国で最も多く稼ぎ出すところであるという。従って邦人が多く移住すべきであるといっている。まさにここで紹介した二信ともいうなれば移住の勧めともいうべきであろうか。

さらに同年5月24日付けの手紙「最も有望なる撫順炭坑」では、次のようなことを書き送っている。「撫順は御承知の如く、満州第一の炭坑にして、現今は毎年二百五十万噸に近く、販路は支那沿岸は勿論、海峡植民地に及べり。採掘は総て最新式を用ふるを以て、失費意外に軽く、九州炭の比にあらず。唯東洋市場の勁敵は、開平炭あるのみ。満州の炭坑は、多く『カーボニフェラス』若くは『メソゾイツク』等の地質に出づと雖も、この炭坑は『ターチアリー』(第三紀)に属す。本来より云へば、年代の古きを炭質の良とすれども、満州に於ては然らず、新しき撫順炭を最良とす……当炭坑の電力を以てせ

ば、其競争敢て難事みあらずと云へり。猶進んで化学工場の試験所を設置せんことを希望せり。小生も最も同感にして、今日本邦に於て最急務なるは、化学工業を勃興せしむるにあり。而して当地の如き、低廉の燃料と電力と、豊富の水量と加ふるに石炭、曹達等の原料亦饒多にして、化学工業の原料品の窮乏を感じず。之に加ふるに、満鉄の豊富なる資力を以てせば、漸次規模を拡張し、亜細亜第一の化学工業地となすは十年を出でざるべし。小生は我国家の進運に関し、此炭山に多大の希望を属し候」(82)といい、撫順から産する石炭とそれに付随して電力、化学工業を興すべきであるという。

我々はここに大谷光瑞の満州観を伺い知ることができよう。一つには豊富な資源をもとにした工業都市の建設、そして広大で肥沃な広野を利用して豆類等の栽培を行う。さらに大連の都市の完備なることは、大阪を凌駕するのみならず、ランカシャーに比肩するくらいであるとも述べ、満鉄の資力を以て新生満州を作ることができると考えていたのであろう。

(二) 「大行の嶮、蜀道の難」

大谷光瑞は、「満州国」建国後の1933(昭和8)年に、『満州国の将来』という書物を世に問うた。書き出しに「大行の嶮、蜀道の難」とあるように、満州国の前途多難な様子を書き留めたものである。とくに「凡そ国の興るや、天利、人和両ながら存せざるべからず。満州国は天利無きに非ざれ共、人和動もすれば之を欠く」(83)とあるように、天の利と人の力の二つの作用がうまく重なり合って国が安定するということであるが、満州国は今のところ天利には恵まれているが、人の力がうまく行っていないという。ここでは人材不足或いは政体の不安定さを指すのであろうか。

いうまでもなく、天利とは「農・林・鑛・漁」の四種類をさすが、前述したように、大豆を中心とする豆類は殊のほか豊富であり、また大行山脈や朝鮮国境の山地では樹木が生い茂り、林業もまた盛んである。鑛は豊富な炭坑に代表されるように、満州の工業の中核を為すものである。漁については、渤海、黄海では魚族が豊富であるが、国家の運命を託すまでには至らないとする。

さて問題は人和である。光瑞は、「現時の満州国は、纔かにその形を成せりと雖も、その実未だ挙らず。幸ひ我帝国は強大の勢力を傾けて、これが保護に任じ、その成育に力むと雖も、月の盈虧猶十指を屈するに至らず。焉ぞ克くその成を望まんや……」(84)といい、日本の強力なバックアップ体制が整っていても、まだ満州国の政体の不十分さを

書き表している。この責任を張氏一家(筆者注一張作霖および張学良一族)と国際連盟に求めている。「現状も歴史も知らず、その来りて之れを調査する(筆者注一柳条湖事件に際して、国際連盟が派遣したリットン調査団のこと)や、粗漏杜撰曠日彌久し、力むる処少なく、晏居して在支欧米人の言を唯一の資となせり……」(85)と激しく攻撃している。

(三) 移民のすすめ

では我々日本国民は何を為すべきか。「我帝国の生命線は、満州に在りと云ふも、満州国の生命線は、懸て我民族の移住如何に在り。故に我民族の移住に関して、満州国政府は十分努力をなさざるべからず。我帝国政府も移民奨励には相当の尽力をなせりと雖も、移民の最大条件は、生活の安定と容易とにあり。此の点を考慮せずば、仮に若干の移民ありとなすも、決して持続せず。移民とは必ず自己の故郷を離るものにして、移住地の状況が、自己の故郷より優良なるに非らざれば、決して定着せず。最近世相險悪、生活困難なるより、故郷を離れんと欲する念慮を生ぜりと雖も、移住地の状態にして故郷より不良ならば、早晚帰郷すべきは明了なり」(86)と述べて、国家を挙げて移民政策を採るように努めなくてはならないとする。この背景には、満州国自体が自分の故郷よりも良いところでなくてはならないという。満州には土地肥沃にして、農業には期待が持て、また石炭豊富なるが故に、工業の前途も明るい、ただやはりここでは人の力がなければただの広野であり、ただの山塊にすぎない。人間を呼び込むには魅力のある政策を採らなければならないといっているのであろう。

(注)

- (1) 顧明義等編『大連近百年史』遼寧人民出版社、1～2頁、1999年。
- (2) 『教海一瀾』195号、1904年2月15日号。
- (3) 本願寺史料研究所編『本願寺史』第3巻、476～477頁、1969年。
- (4) 『教海一瀾』195号。
- (5) 前掲書、『本願寺史』478頁。
- (6) 小田尊順(?～1923)広島の人。1903年に執行長に就任する。日露戦争開戦時に臨時部長となり、従軍布教の責任者となった。
- (7) 前掲書、『本願寺史』481～483頁。日露戦争に際して本願寺が京都府に提出した「仏

教各宗時局ニ対スル行動」(本派本願寺の行動)については、京都府立総合資料館発行『京都府百年の資料』六、宗教編 1972年。参照のこと。

(8)同上書、483～485頁。

(9)「本山録事」1905年1月14日。

(10)野世英水「真宗教団の中国開教と大連」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第40集、55頁、2001年。

(11)鏡如上人七回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』1954年 33頁。『教海一瀾』「積徳院連枝の戦地布教」209号、1904年6月4日。

(12)大連市役所『大連市史』1936年 741頁。

(13)松尾為作『南満州ニ於ケル宗教概観』關東廳教化事業奨励資金財團、43頁、1906年。

(14)『教海一瀾』335号。1906年11月3日。

(15)『中外日報』1906年12月13日号。

(16)『教海一瀾』287号、1905年2月2日。

(17)同上、332号、1906年10月13日。

(18)同上、424号、1908年7月18日。

鏡如上人七回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』1954年 81頁。

(19)伊東忠太(1867~1954)山形米沢の人。1892年東京帝国大学造家学科卒業。1905年教授となる。1902年雲崗石窟を発見し、さらに翌1903年貴州省楊松で大谷探検隊員の野村礼讓、茂野純一と出会う。本願寺「伝道院」や「築地本願寺」などを設計した。

若狭千代治「猓下と私」瑞門会編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』1978年 280頁～281頁。

(20)倉方俊輔「伊東忠太の西本願寺関連の計画について—明治期の図面類に見る伊東忠太の設計活動その二」『日本建築学会計画系論文集』第566号、2003年4月より引用した。

(21)同上書。鈴木博之『伊東忠太を知っていますか』(王国社、2003年)には、大谷光瑞は伊東忠太のパトロンであったとし、「大連関東別院」設計図については、「それまでの寺院の常識を破るものでした。木でなく煉瓦で作られ、内部に畳など敷かれていません。平面構成は、西洋風のホールに近く……」といわれている。異国の地にあつて祖国日本を想う最大の道具は畳であろう。畳のない寺院など門信徒にとっては考えられなかったのかも知れない。

(22)堀賢雄(1880～1949)大阪生まれ。本願寺連枝梅上澤融の子。1900年文学寮卒業。1902年第一次大谷隊に参加。その後大谷尊由と共に、ダライラマ13世と会見をしている。後年満州開教総長となった。

(23)『教海一瀾』830号、1936年3月5日。

(24)同上、447号、1908年12月26日。

(25)龍江義信(1874～1953)福井勝山の人。1896年文学寮高等科卒業。1897年明如上人の命を受けて、上原芳太郎、阿部一毛らと共にニューギニア及び木曜島に渡る。その後、大連本願寺関東別院輪番を務める。1909(明治42)年に、東洋拓殖株式会社に植民調査主任として入り、水産主任、土地買収主任などを歴任する。1915(大正4)年朝鮮沙里院出張所主任となる。1936(昭和11)年には、南洋協会評議員に大谷光瑞と共に就任している。

(26)『教海一瀾』312号、1906年5月26日。

(27)同上。

(28)同上、264号、1905年6月24日。

(29)前掲書、『本願寺史』490頁。

(30)同上書、491～493頁。

(31)九条武子(1887～1928)大谷光尊の二女、光瑞の実妹。1898年京都府師範学校附属尋常高等小学校卒業。大谷籌子(裏方)の設立した仏教婦人会を補佐。1909年九条良致と結婚し、ロンドンに赴くが、まもなく単身帰国する。1911年籌子の死去に伴い、仏教婦人会本部長に就任する。関東大震災の時には、罹災者の救護に務めた。他方和歌にすぐれ、佐佐木信綱に師事する。1926年発行の「無憂華」はベストセラーとなり、印税で東京に「あそか病院」を設立した。(『真宗人名辞典』法蔵館を参照した)

(32)『教海一瀾』349号、1907年5月25日。

(33)同上。

(34)『教海一瀾』364号、1907年5月25日。

(35)『満州日日新聞』1909(明治42)年3月19日。

(36)小島勝「上海の日本人学校の性格」『上海の日本人社会—戦前の文化・宗教・教育—』永田文昌堂、1999年137頁。

(37)前掲、『大連市史』240頁～258頁。

(38)『教海一瀾』386号。『満州日日新聞』1907年(明治40)11月23日号には「大連幼稚

園の現況」と題する記事があるが、記事が一言一句『教海一瀾』の伝える記事と同じである。『教海一瀾』から記事を転載していたのであろう。1915年12月8日付け『満州日日新聞』に大連幼稚園園長の花田頓成氏の葬儀を伝える記事がある。当時の幼稚園は播磨町にあったことがわかる。

(39)『教海一瀾』445号、1908年12月12日。

(40)『満州日日新聞』1908年(明治41)9月1日。

(41)『教海一瀾』341号、1906年12月15日。

(42)『教海一瀾』369号、1907年6月29日。

(43)同上書。

(44)『満州日日新聞』1908年(明治41)9月1日。

(45)新田光子「西本願寺関東別院と大谷光瑞」『佛教史研究』38号、76～77頁、2001年。

(46)『中外日報』1914年12月10日。

(47)「本山録事」1906年9月29日。

(48)『教海一瀾』330号、1906年(明治39)9月29日。同行した福井瑞嘉は『清国巡遊日記』を残している。

(49)同上書。

(50)『教海一瀾』362号、1907年5月11日。

(51)『教海一瀾』363号、1907年5月18日。

(52)新田、前掲書、79頁。

(53)『教海一瀾』362号。

(54)同上、362号、364号、1907年5月25日。

(55)『教海一瀾』361号「百万門末の決意を問う」1907年5月4日。

(56)菱木政晴『浄土真宗の戦争責任』岩波ブックレット、56～57頁、1993年。「本願寺派と大谷家は、この会社(筆者注－北支那開発株式会社)とかの「満鉄」、南満州鉄道株式会社の大株主であったので、戦後、その負債が教団に大きく響いたほどである」。と記している。

(57)『中外日報』1915年10月15日号。

(58)前掲、『鏡如上人年譜』1917(大正6)年10月の項には、「十月一日(三日まで)満鉄本

社にて、「第一義諦」を講演する。二十二日大連関東別院にて満鉄読書会・満鉄仏教青年会のため同上講演」とあり、満鉄のために講演などをおこなっていた。

(59)大乗社『大乗』第5巻第10号、43頁 1954年10月。石森克巳「周水子の思い出」

瑞門会編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』380頁、1978年。光瑞は金州管内大魏家屯の西海岸魏家屯川の下流に位置する愛川村を訪問し、この地を「正に平和の極楽浄土なり」と語り、移民を慰問したとある。『満州日日新聞』1915年5月27日号。

(60)前掲書、『大連市史』728頁。

(61)前掲書、『鏡如上人年譜』81頁。

(62)若狭千代治「猯下と私」 瑞門会編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、280頁～281頁、1978年。

(63)下中彌三郎伝刊行会『下中彌三郎事典』平凡社「策進学院」の項目参照、134頁、1971年。

(64)『満鉄附属地経営沿革全史』からの引用であるが、ここでは、張本義・王若著、拙訳「大連図書館「大谷文庫」蔵書について」『龍谷史壇』第113号、77頁、1999年。によった。

(65)同上書、78頁。

(66)『中外日報』1923年12月1日号。

(67)城始「旅順大谷邸新築に就いて」『建築と社会』第16輯第2号、1933年。「京都伏見の三夜荘に起居せらるる大谷光瑞氏は、満州国の新興を契機とし、多年氏が蘊蓄せらるる東亜経営の大綱を携げ、奮然居を関東州内の旅順に移さるることとなり、既に建築敷地も決定し、本春を期し、愈邸宅の新築に取かかるる予定である」とあり、精巧な設計図と共に紹介しているが、結果的には旅順においては大谷邸は完成を見なかった。ただ設計図は後に大連周水子に建設した「欲日山荘」を彷彿させる。旅順では関東庁から斡旋された吾妻町の家に住んでいた。ここには前述した「策進書院」が併設されていた。

(68)旅順博物館『旅順博物館二十年史』該書はコロタイプ版の未定稿版であり、旅順博物館用箋を用いている。該書の閲覧については、大連図書館日本文献分館の王子平さんにお世話になった。記して感謝したい。なお旅順博物館の沿革については、以下を併せて参照のこと。白須浄眞「大谷探検隊将来資料と旅順博物館と大連図書館」『東洋史苑』57号、龍谷大学東洋史学研究会、2001年。「現在の旅順博物館の起源については、二つの見方が

あるという。一つは1915(大正4)年11月26日の「物産陳列所」の開館に起源を求めるもの……でもう一つは、1917(大正6)年4月1日の「満蒙物産館」の開館に起源を求めるもの……」といわれる。『大連近百年史』(下) 遼寧人民出版社、1999年、1297頁。『旅順要覧』

旅順民政署、昭和7年。61頁。劉廣堂「旅順博物館の歴史と活動」 『旅順博物館所蔵品展』図録 京都文化博物館1992年、13頁。

(69) 森修「旅順博物館の思い出」『古代文化』38巻11号 1986年。

(70) 光岡良雄「終戦の日の猊下」瑞門会編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』164頁、1978年。

(71) 榊谷仙次郎(1877～1968) 広島県安芸郡下蒲刈島村(現在の呉市)に生まれる。1904(明治37)年堀内組に入社、日露戦争が始まり、臨時軍用鉄道の建築をはじめて請け負う。1909(明治42)年東京築地工手学校土木科を卒業する。1919(大正8)年大連市で榊谷組を創立する。1928(昭和3)年満州土木建築業協会理事長に就任する。日本の敗戦後、大連日本人労働組合の中に設置された「引揚対策協議会」の中心メンバーであった石堂清倫氏に協力して、日本人の引揚げに一定の役割を果たした。1947(昭和22)年3月に日本に引き揚げた。1968(昭和43)年9月東京都立荏原病院にて急性肺炎のため逝去する。築地本願寺にて葬儀が執り行われた。『榊谷仙次郎日記』は1910(明治43)年から、休むことなく40年近く書きつづけられた日記である。膨大な量なのですべてを刊行することが出来ず、一部は抜粋となっている。原文は国会図書館に収められている。

(72) 榊谷仙次郎日記刊行会『榊谷仙次郎日記』(非売品)1945年8月13日、1969年。

(73) 同上書、8月14日。

(74) 同上。

(75) 『光岡良雄13回忌、そや(光岡の妻)17回忌 記念小冊子』2000年(非売品)。

(76) 森戸睦子『大連“引揚げ”を見届けた男』高橋庄五郎の日中友好五十余年。創土社。92頁、2000年。

(77) 石堂清倫『大連の日本人引揚げの記録』青木書店、178頁、1997年。

(78) 前掲書、仁本正恵「本願寺の明星」『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』248頁。

(79) 徳富蘇峰(1863～1957) 熊本生まれ。同志社中退。平民的欧化主義を取る雑誌『国民之友』を発行。大谷光瑞とは、終生の友人で光瑞の『放浪漫記』は蘇峰に宛てた書翰をまとめたものである。なお高野静子『蘇峰とその時代』(中央公論社、1989年)によると、光

瑞の蘇峰宛て書翰は 240 通にも上るといわれている。

(80) 大谷光瑞『放浪漫記』民友社、15~17 頁、1917 年。

(81) 同上書、186~188 頁。

(82) 同上書、192~197 頁。

(83) 大谷光瑞『満州国の将来』ここでは『大谷光瑞全集』10 卷によった。大乘社、165 頁、1935 年。

(84) 同上書、166 頁。

(85) 同上。

(86) 同上書、323 頁。

第三章 大谷光瑞と上海

第一節 上海日本人居留民と仏教

上海には、明治初期より日本人が居留し始め、それに伴い、真宗大谷派（東本願寺）が、日本仏教の嚆矢として上海で布教を始めた。中国人、在留邦人を問わず布教活動をし、また学校の経営、慈善事業、墓地の管理など、初期の日本人社会の中で大きな役割を果たした。続いて本願寺派や、日蓮宗本圀寺派などが、東本願寺の後を追うように上海に入ってきた。とくに本願寺派は、大谷光瑞を中心として、教線を上海のみならず、中国各地に拡げていった。

上海は、アヘン戦争後の南京条約によって1843（天保13、清道光23）年、11月に開埠されたが、日本人が上海に姿を現すのは、開埠後、20年余り経った1862年（文久2年）6月（5月）のことであった。長崎から千歳丸で上海に入港した人たちであった。この船には、長州藩の高杉晋作、薩摩藩の五代才助（友厚）たちが乗船していた。この千歳丸は、江戸幕府によって派遣されたものであり、主たる目的は、海外貿易の実態を調査することであった。イギリスの帆船アーミスチス号（Armistice）を、時の長崎奉行が幕府の名義で購入したものであった。

高杉晋作は、上海の様子を、「午前ようやく上海の港についた。ここは支那第一のにぎやかな港である。ヨーロッパ諸国の商戦・軍艦数千隻が碇を降ろしている。マストが林立し、港を埋めんとしている。陸上には諸国の商館が壁千尺を連ねている。まるで城郭のようである。その廣大激烈なることは書ききれぬものではない」（1）と記し、また納富介次郎も同様に、「黄浦中來舶スルトコロノ蠻船百餘舟。中ニ軍艦十四五艘モ有ルベシ。且唐船ノ碇泊スル幾千ト云フ數ヲ知ラズ。帆檣ノ多キハ萬頃ノ麻ノゴトシ」と記している。町の様子を、「城門ヲ英佛二国ノ兵卒ヲ請フテ守ラシムルコトハ、去ル辛酉ノ春唐西ノ和議全ク調ヒシヨリ以来ノコトナル由……上海市坊通路ノ汚穢ナルコト云フベカラズ。就中小衢間逕ノゴトキ、塵糞堆ク足ヲ踏ム處ナシ。人亦コレヲ掃フコトナシ……或ハ死人ヲ蓆ナドニ包ミテ處々ニ捨テタリ。且炎暑ノ頃、臭氣ヲ穿ツバカリナリトゾ。寔ニ清國ノ亂政コレヲ以テ知ルベシ」（2）と記し、町の不衛生と清国の混乱ぶりを同一視している。

さて一般の日本人が、上海に居住し始めたのは、1871（明治4）年9月13日（7月29日）に締結された日清修好条規により、国交が開かれてからのことであった。1875（明治8）年には、三菱商会により横浜・上海の定期航路が開かれ、翌年には、三井物産が上海支店を開設した。漸次日本人が増加すると、それに伴い旅館や日用雑貨商店などが次々と上海に入っていっ

た。東本願寺が上海別院を開設したのもこの年であった。

（一） 東本願寺上海別院

真宗大谷派（東本願寺）は、日本の仏教教団の中で、最も早く海外開教を行ったことで知られるが、恐らくこれは東本願寺側の事情によるものであろう。東本願寺は、その沿革上、徳川幕府と非常に密接な関係であったので、江戸時代は、幕府の保護によって、その勢力を保持できたが、明治維新後は、長州藩と深い関係にあった本願寺派が、勢力を伸ばすに至った。そこで東本願寺は、さらなる発展を海外に求めたのであろう。

1876（明治9）年7月、東本願寺法主大谷光勝（巖如）は、中国開教に赴く小栗須香頂、谷了然に対して「親諭」を發した。「今般弘教之為支那国ニ出張セシムルコトハ、未曾有ノ大事業ニテ、殊ニ諸宗ニ先チ吾真宗ニ於テ海外布教ノ着手ニ及コト実ニ一宗ノ面目コレニ過キス……布教の為ニ支那ニ赴クコトハ、更ニ格別ノコトナレハ……若覆敗ヲトルニ至テハ、タンニ一宗ノ大患ノミナラス、併セテ国家ノ大患ヲ生スルコトナレハ……」(3)。まさに東本願寺の海外開教にかける意気込みが伝わってこよう。

同年8月12日、小栗須香頂、谷了然の両師によって、上海英国租界北京路に「真宗東派本山本願寺別院」が開設されたのである。同月20日には、御入仏供養会が執行され、入仏式には、品川忠道初代上海領事、及び領事館関係者、軍関係では、福原陸軍大佐、古川中尉、町田海軍主計、曾根海軍中尉、三菱商会や上海在住の商人である上野、田代たちが出席した。また中国側においても、龍華寺の住持空山が18人の僧侶を引き連れて参加している。総計は1000人を下らないといわれるほどの盛況であった(4)。後に谷了然は、「本尊を安置する際に、不覚にも涙が出てきて止まらなかった」と回想している。入仏式法要の際には小栗栖香頂は、中国語を用いて説教をしていたという(5)。

本山東本願寺側も、上海別院建築費寄付金を集め始め、その寄付金をもとにして、別院建築用資材を日本から運んだのであった。上海の田代屋源平は、東本願寺から送られてきた材木を貰い受け、浦東に積み置いたという(6)。その後、1883（明治16）年、上海別

院は、北京路から虹口地区の武昌路に移転したのである。

東本願寺上海別院の活動は、布教だけに止まらず、教育活動においても初期の日本人社会に深く貢献した。1880（明治 13）年、佐藤伝吉は、東本願寺の一室を借り受けて、「親愛舎」という寺子屋式の教育機関を設置した。しかし日本国内における教育改革が進展する中で、寺子屋というのは如何にも時代遅れであった。そこで本格的な在留邦人の為の学校設立が要請されるようになった。東本願寺輪番の菅原碩城が中心となり、「開導学校」の設立に至ったのである。「明治二十年十一月着任以来屢々領事高平小五郎氏ニ謀リシ結果翌二十一年一月廿日付ヲ以テ小学校設置並ニ私立開導学校名称ノ件認可 一、教室 間口三間奥行四間ノ二階建ヲ以テ階上ヲ事務所兼休憩所トス 一、教員 熊本県人井出三郎（7）ナル者支那語研究ノ為来居リ（目下熊本市選出衆議院議員）此ノ人ヲシテ最初教授ノ任ニ当タラシメ、松ヶ江賢哲、松林孝純ノ二名ヲ助手トス」（8）という記録が残っている。ここに正式に日本人居留民子弟のための初等教育機関が設立されたのである。東本願寺の機関誌『配紙』によると、「同校は、日本政府の小学校令に基き教科書の如きは東京府の規定により、高等尋常とも英語学を教授し、本邦居留人民の子弟を教育するものなり」を報じている（9）。

やがて「開導学校」は、その役目を終え、1906（明治 39）年 4 月に上海日本人協会に移管され、「上海開導尋常高等小学校」と改称された。その翌年 11 月 3 日に上海居留民団設立と同時に居留民団立「上海尋常高等小学校」となった。ここに「開導学校」は、東本願寺の手を離れ、新たに出発することとなった。

（二）本願寺上海別院

1997 年 10 月 5～6 日にかけて大谷光瑞の終焉の地でもある大分県別府市の本願寺別府別院において、「鏡如上人五十回忌法要」が勤められた。当地大谷公園では、新たに碑文が建立され、「大谷探検隊」の偉業を顕彰するとともに、従来、顧みられなかった探検隊に関わった人たちの顕彰も併せて行われた。碑文は、本願寺上海別院の形を模して作られた。大谷光瑞の中国での一連の活動は、やはり上海抜きでは語れないということであろう。

浄土真宗本願寺派の海外開教は、東本願寺に比べると比較的遅く、本論文中第一部第一章で示したように、1886（明治 19）年、ロシアウラジオストクに布教使を派遣したことにはじまる。その後、本格的に中国開教に乗り出すのであるが、その契機となったのは新門（次期法主）大谷光瑞の清国訪問であろう。「教田を拓き仏種を蒔く」（10）という壮大な意気込みであった。

上海本願寺の創設は、1906（明治 39）年の秋に、乍浦路 123 号にある民家を借りて出張所としたことにはじまるが、創設に先立つ 7 月 16 日に本願寺は、藤山尊証(11)を上海に派遣し、布教場開設について調査をさせている。『教海一瀾』は、「清国上海は、世人の知るが如く、地勢上商業上支那屈指の要港にして、我本山にては已に業に布教場開設の計画ありしも、日露の戦役に際し、従て折角の計画も中絶の止むなきに至りしが、今や日露の国交旧に復し、該地は、益々重要な地点となりたるを以て、此際新に布教を開設し、普く内外人に二諦の妙教を宣伝せんとの趣意より其取調の為斯くは藤山氏の渡清せられたりなりと」(12) と報じている。藤山尊証についての詳細は、本論文、第二部第一章「大谷光瑞と辛亥革命」の項を参照していただきたいが、彼は、上海布教場開設と同時に設置された「清国開教総監部」の総監を務めた人物である。

1908 年（明治 41 年）には、イギリスの会社ランドイベンベスメント社が建設した四階建てレンガ作りの建物を、月百両で賃貸して、本願寺を文路に移転した。そこで「仏教婦人会」「洗心講」「青年会」「日曜学校」などを設立した。そして 1913 年（大正 2）年には、「上海女学校」を開校し、1926 年（昭和元）年に、新しい本堂建立のために土地を確保した。1931 年（昭和 6 年）本願寺上海別院(13)に昇格、新本堂が建立された。この本堂は、インド、アジャンター式を採用し、インド文様をちりばめるなど、光瑞が関与したと思われる(14)。本願寺上海別院は、上海事変勃発に伴い、砲弾数発を落とされ、甚大な被害を受けた(15)。上海別院はまた、上海陸戦部隊兵站部の役割を果たしていた。(1)総務部、(2)弔慰部、(3)情報部、(4)通信部、(5)交通部、(6)配給部、(7)遺骨部、(8)送迎部、(9)警備部、(10)法要部の各部署に分かれ、総勢 30 名が働いていたという(16)。大谷光瑞の大きな活動は、慰問品の配給活動であり、国内の仏教婦人会組織などを通じて上海に集めることであった(17)。さらには、1944 年（昭和 19 年）には、インドブッダガヤの大塔を模した高さ 36.6 メートルの仏塔が作られた。9 階建て 2 階に御内仏を安置していたという。正面玄関中央に、表階段があり、築地別院とよく似ている(18)。ここに上海における大谷光瑞の理想郷が実現されたと考えるべきであろう。

さて本願寺別院の主な活動は、定例の仏教講演会の他に、布教活動として「酬恩会」「仏教婦人会」などがあり、また「御命日法要」や、「報恩講」などを行っていた。光瑞は、「獅子吼会」を結成し、講演等を行っている。「獅子吼会」は、満鉄、正金、郵船、三井などの大会社の支店長を始め、上海の実業家が正金支店の楼上や日本人倶楽部などに集まって、光瑞の講演を聴く会であった。「般若心経」や「維摩経」、「勝鬘経」、「金剛般若経」

など諸経の講話が行われた。1921年（大正10年）からはじまって1926年（昭和元年）ぐらいにかけて年に数回行われていた（19）ようである。さらに光瑞は、「中支宗教大同連盟」（20）の総裁に就任している。該会は、日本の上海特務機関が、中国で布教している各宗教教団の布教効率を高めるために、1939年2月に上海虹口区虬江路624号において設立したものである。仏教、神道、キリスト教など各宗派が参加した。

第二節 大谷光瑞と上海

（一）無憂園

光瑞は、ハウスボートでの水上生活に終わりを告げ、1921年（大正10）年の暮れに、広さ一万坪にも及ぶ邸宅「無憂園」を作った。上海共同租界の西郊、北は新加坡路（現余姚路）西は膠州路に面し、蘇州河畔に接した位置にあり、その四分の一は池であり、「滄浪の池」と名づけられた。滄浪の名の由来は、本願寺の「飛雲閣」滴翠園の名池によるものであろう。光瑞の居宅は「濯足堂」と呼ばれていた。この地に日本の桜を始め、珍しい植物を植え、花見の頃には、在留邦人を招いて園遊会を開くほどであった。光瑞は、「無憂園」について、「園の廣袤五十畝に近し。而して水其四分の一に居る。東吳本より水澤の地たり。その勝亦水に在り、地を穿ち、水を湛へ、土を堆して丘となす。園に名くるに、無憂を以てす。古に曰く、狂者無憂聖人亦無憂、と。我性疏狂既に世と相違ふ。浪跡江湖其欲する所に随ひ、亦憂なし。素より狂者たれば足れり。何ぞ聖人を學ぶ要あらんや。池に名づくるに滄浪を以てす。清濁問ふ所に非らず、我夫れ此間に漁父たらん乎、堂に名づくるに濯足を以てす。清濁問ふ所に非らず、我夫れ此間に漁夫たらん乎、堂に名づくるに濯足を以てす。長江万里の流れ、何の日か清流を見ん、禹城終に横潰す。濁浪九州に澎湃せり。我既に冠冕を辞せり。冠なくして何の処纓あらんや、又清流を欲せざるなり……」（21）。と語っている。まさに本願寺を引退した自分の姿を投影させているのである。ここでは、雑誌『大乘』（22）が発行されていた。光瑞の個人的な雑誌という性格が強いものである。内容は光瑞の多岐にわたる論考や講演の筆記が主であった。また「策進学院」と呼ばれる学校を作り、中等教育に準ずる教育を施し、家族の一員として、一緒に生活していた（23）。要は光瑞の意のままとなって動く人材の養成であった。

（二）大谷光瑞の上海観

大谷光瑞は、青年時代から晩年にかけて長く上海に居た。世界の大都市、東洋の魔都と呼ばれた上海は、また世界各地の情報の集まる場所でもあった。「開国進取」の徒である光瑞にとっては、これ以上の場所はなかった。「支那の中に入る處可なりと雖も江南最も好し。江南の地は豊饒に気候温和にしてわが帝国の九州と大差なし。不肖既に久しく上海に居住せり。而して時に故国に到るや人の来り訪ふに、不肖の上海に居住する理由を質せり。不肖は如此き愚問に答ふる要なきを以て一笑して答へず。……不肖の見る所に於ては、上海の位置は将来東京よりも大阪よりも、神戸よりもさらに大なる政治工業商業航運の中心たるべく、恐くは學術も亦東京、京都を凌駕するに到らん。即ち、亜細亜の東部に於ける第一の人口を有する大市街として遠く歐洲のロンドン、パリ、米国のニューヨークと相競うに到るべし」(24) といひ、上海を国際都市として視ていた。また、「当地は支那の国運の如何に関せず、地理的に支那の中心たるは、将来一千年の後と雖も變ぜざるべし……宜しく重点を上海に求めざるべからず。政治の中心は、現に北京にありと雖も、一朝遷都せば、国内に於ける一市鎮に過ぎざるのみ。滿蒙素より我が圏内に属すと雖も、下揚子江に比するに、北海道と東海、近畿の如し。下揚子江は、地利既に全支那に冠絶せるのみならず、地味の富饒なる亦全支那の最優たり……」(25) と語るなど、上海を非常に重視していたのである。

大谷光瑞の生活は、短期間の借家住まいが中心であり、また「吳淞丸」というハウスボートの中での生活が主であった。「小生今回は、船を家とし、之に起臥し、陸上に居住せず。船は長さ五十五尺、幅十二尺、吃水二尺五寸、総噸数三十三噸〇六登簿噸数十九噸一二なり。名づけて吳淞丸と云ふ」(26) とあり、本格的な水上生活であったようだ。この背後には、常に上海一ヶ所に留まるということではなく、大連旅順・青島、南洋各地、そして日本などを頻りに往来していたということによるものだろう。

第三節 孫文との交流

(一) 水野梅暁という人

私は、孫文と大谷光瑞の交友の仲介者として、水野梅暁という人物を考えてみた。水野梅暁(1878～1949)は、広島県生まれ、7歳の時に遠縁に当たる曹洞宗長善寺住職水野桂巖のもとに養子として出された。後に京都に出て大徳寺高桐院高見祖厚について修行し、

ついで根津一(27)の知遇を得て、上海東亜同文書院に学んだ。第一期生であった。彼は同文書院在学中に、自分の使命を中国と日本の仏教を結合させることにあると考えるようになった。在学中に浙江天童山に如浄（道元禅師の師、道元が修行しその法を伝えた）の墓塔を拝し、住職の敬安に日中仏教の提携を約束したといわれる。卒業後、敬安の勧めに従い、1905(明治 38)年に湖南省長沙に赴き、当地で僧学堂を開き、仏教の研究と布教活動に従事していた。その後、大谷光瑞の知るところとなり、曹洞宗から本願寺へと僧籍を移し、たびたび光瑞の側近として中国や南洋に随行している。やがて『支那時報』を創刊し、その編集に当たり、また「浩然学舎」を作り、中国第二革命失敗後、日本に亡命してきた李列鈞、陳其美、戴季陶、殷汝灑などの革命党の人たちを援助した。大谷光瑞が水野梅暁に宛てた書簡が東京大学法学部附属近代日本法政史料センター原資料部にマイクロフィルムで残されている(28)。

水野梅暁と大谷光瑞との接点を考えてみよう。確かな資料がなくて、はっきりといえないが、『水野梅暁追懐録』によると、「水野さんが、湖南にいた頃、大谷光瑞さんが向こうへ行ってみて、水野さんの評判を聞いた。逢ってみると忽ち意気投合してしまって、南洋へも一緒に行ったんですね。革命の前頃でしょうかね。そのころ西本願寺の柱本さん(柱本瑞俊)が時々西沢(西沢旅館)へ来た。大正五年でした。柱本さんがいうのに、水野さんも家がなくては困る。旅館では金がかかりすぎる。一軒家を構えた方がいいとおっしゃる。そんな話にあたしも共鳴して、水野さんは日本に居ないとき、一軒大きな家を借り、水野梅暁の表札をかけたんですよ。家賃三十五円の堂々たる家。書生を四人おいて、毎月五円づづやっって学校へ通はせましたね……仕送りは西本願寺がするというのでした」(29)。この記述によると、辛亥革命前に、すでに光瑞は水野梅暁と出会っているということになる。ただ光瑞は、当時湖南省長沙に行ったという記録は残っていない。1906(明治 39)年9月に再び清国に行くことになる。日露戦争後の教線拡大の必要性を考えたためである。光瑞は長沙からほど遠くない漢口に清国開教拠点を設けた。そこで水野梅暁と会ったかもしれない。もう一つ考えられることは、光瑞は1909(明治 42)年9月にインド旅行に行く途中に上海に立ち寄っている。この時東亜同文書院院長の根津一に会っている。水野梅暁は東亜同文書院一期生であり、同席した可能性も考えられる。水野梅暁が曹洞宗から浄土真宗(本願寺)に転宗したことは前述したが、彼の度牒(僧侶であることを証明する文書)が残されている。「広島県土族 神石郡父木野村百十四番屋敷 水野桂厳養子 水野梅暁 明治十年一月二日生 右度為本宗僧侶加新潟県三島郡本与板村光西寺衆徒乃授牒如

件 明治四十二年十一月十八日 執行所」(30)とある。ここで注目すべきは、水野は、新潟県光西寺の衆徒となっていることである。光西寺といえ、大谷探検隊の一員としてインド仏跡調査に参加した藤井宣正の寺である(31)。この当時藤井宣正はすでにこの世に居ない。水野と藤井の接点は全くないといってもいい。では誰が水野を藤井宣正の寺に紹介したのであろうか。まさか法主である光瑞が自ら紹介することはない。ともかく明治42年の段階では、大谷光瑞の知遇を得ていたことになる。この外光瑞と水野の関係の深さを表すものとして、大蔵経の寄贈がある。湖南南嶽の霊場に日本で印刷された黄檗版大蔵経を寄贈するため、湖南長沙にいた水野梅暁が、日本内地で浄財を募って個人で寄贈した。湖南の大学者王闈運がこの顛末を起草し、軍機大臣であった瞿鴻禨(32)が筆を執ったものである。そこには協力者として大谷光瑞の名が上がっている(33)。根津一の側近中の側近であり、東亜同文書院出身で、支那通の水野梅暁を同じく支那通を自認する光瑞がほっておくはずはなかった。

1911年11月の『中央公論』誌上において、水野は「長江一帯に於ける孫氏の人望」と題する一文を寄せている。「私はまだ孫逸仙といふ人にあつたことがない。が今度の革命軍の起つた中清地方には十數年間も居つて、あの地方の状況及びあの地方に於ける孫逸仙の聲望の大なることについては、大抵の人よりはよく知つて居る積もりである……孫が大人物であるや否やは私は深く知らない。然しながら私は長江一帯を旅行して、学界、軍界、政界、果ては車夫馬丁の類に至るまで、調べてみた所によれば、其革命思想の瀰蔓して居る事、未見の孫逸仙を神の如く救世主の如く尊崇して居ることの甚しいのには實に驚嘆を禁じ得なかつたのである。で孫逸仙の如何の人物かは論ぜぬとして、此人望、此尊崇を得たるものは決して只策とか略とかのみによるものでなく、是実に孫氏の有する天爵であり、又天位であると思ふのである」(34)と。水野梅暁は人間として孫文の魅力について語っている。光瑞は、水野を通じて孫文の評判を聞いていたものを思われる。

辛亥革命当時の水野梅暁の動きについては、本論文中第二部第一章大谷光瑞と辛亥革命」の中で、詳細に記したが、当時水野梅暁は、清国開教部総監部出仕を本山から命ぜられていた(35)。主として南京にある本願寺救護病院で行動していた。『教海一瀾』によると、「……布教使水野梅暁、佐々木徳母二氏に依りて経営され、已に今日まで千九百餘人の施療を為し、入院患者も亦數十を下らず、本願寺事業として最も當を得たるものにて、陸軍醫院の漸く客月一日その開院式擧ぐるに先き立ち率先して救護事業に従事せるは、将来布教上に於ける影響尠からざるべし、而して患者は何れも北伐隊として、南京に集合せる各省

派遣の兵卒その十分の九を占め居れりと、本願寺救護團の事業成績の好評あるは、黄興元帥の之に對する感謝状を送れるにても知らるべしと云う」(36)。さらに光瑞は、水野から中国に関する様々な情報を得ていた。その一端を紹介しよう。光瑞が水野に宛てた書簡の中に、「孫氏モ来テ候。ナニカト御イソガシキ事ト奉存候。漢口地所ソノ後申来リ候ヘドモ一寸申出低價ニスキ猶押問答ヲ致サネバナラヌト存候。ツイテハ土地圖御手許ニ有之分至急漢口正金支店長宛小生ノ要求ニヨリ御送リスルトノ意味ノ御書面ヲツケ御發送願上候。松岡静雄氏ニハ是非トモ数日懇談致度候間ソノ御ツモリニテ旅順へ御来遊ノ程切ニ願上候。床次ニハタダ蘭領保全不割讓特種利権ノ話ダケ申シ置キ支那問題ニモ英米獨ニモ内政ニモ觸レス別レ申候。佃氏ニハ面會致シタレドモ他ニ同客アリ雑談ダケニ致折キ候。シカシナガラ英皇族ノ来朝等多少外交方面不利益ナ事ガナケレバヨキカト憂慮致置候。秘中秘デ御探リノ上御報願上候。六月十九日 瑞 梅曉殿」(37)という情報である。これは1922（大正11）年のことであるが、この当時、文面にもあるように、イギリスの皇族が日本を訪問している。イギリスをめぐる内外の動きは活発になってきている時期であった。例えば、インドにおいては、イギリスに対する非暴力運動が盛んに行われていた時代であった。イギリスの支配下にある、東洋の民族がインドと同じ様な運動を起こす可能性もある。中国にもそのような動きがあるかどうか、光瑞は知りたかったのであろう。従って秘密に探らせているわけである。

（二）孫文の本願寺訪問

1913年孫文は、全国鐵路督弁の資格で日本を訪問した。行く先々で大歓迎を受け、まさに国賓待遇の扱いであった。2月13日に長崎に上陸した。すぐさま東上し、政財界の人士と積極的に交わった。3月9日には、京都を訪れ、本願寺に大谷光瑞を訪うている。『孫中山年譜長編』によると、「先生（孫文）は、西本願寺に行き、大谷光瑞伯と会談した」と記されている(38)。『教海一瀾』は、このことを、次のように伝えている。「本月九日午後二時三十九分京都驛着にて入洛せる中華民國の名士孫逸仙氏外隨行諸氏は、同日午後三時三十分本派に來山あり大玄關にて積徳院殿（大谷尊由）を始め藤山監正部長、堀通報所長、塩谷通報所員其他數名の出迎を受け、一行は先づ両堂に参拝の後ち白書院一之間に於て大法主猊下並に新御門跡、積徳院殿の御會見ありしに、孫氏は、其後の久闊を謝し更に一昨年清國革命變亂に際し我本山が濟世爲物の本領を發揮し官革兩軍に對して救護の慰問に多大なる援助を受けしを滿腔の熱誠を以て再三感謝しつつ談は支那時事問題に移り對話數次に及び、手厚き茶菓の饗を享けて退散せり、猶ほ當日來山記念として京都の特産

たる精巧なる刺繍を施したる卓上掛一枚並に本願寺寫眞帖等を贈せられたりと」(39)。短時間ではあったけれども、孫文は再会を喜んでいただろう。事実翌朝、忙しい中を、随行員を本願寺まで再度訪問させて、昨日の感謝を述べたという(40)。帰国後、孫文は大谷光瑞に対して、今回の訪問に際し再度感謝を表すとともに、感謝状を贈っている(41)。その後、光瑞と孫文は、上海で再会を果たすこととなる。光瑞没後7回忌法要に際して、出版された『鏡如上人年譜』によると、1916年(大正5年)9月に光瑞は、上海仏租界アルバート路(今陝西南路)に借家し居住、「近隣孫文邸と往来す」(42)というような記事がある。その当時、光瑞は霞飛路506号(今淮海中路)に住んでいたため、このアルバート路というのは、霞飛路と交差するあたりだと思われる。孫文は、環龍路63号(今南昌路59号)に住んでいたことがわかっている。大正5年頃の光瑞にまつわるエピソードとして語られているのは、「当時、孫文は革命に成功し、いわゆる三民主義運動は、燎原の火のようにひろがろうとしていた時期で、光瑞師は、その思想と大構想に共鳴し、孫文を高く評価し、ひそかに交渉がすすめられていたようである(43)。「あのお医者、よくわかった男です」孫文は、医者の出であったから、師はいつも、「あのお医者」と親しみをこめて、しきりに側近にほめていられた。……」(44)という話である。

(三) 一枚の写真から

1996年孫文(孫中山)の生誕百三十年を記念して、一冊の写真集(45)が発刊された。その中に孫文と大谷光瑞と一緒に写っている写真があるので、簡単に紹介したい。

該書の説明文によると、「1916年10月31日黄興が病没した。11月24日に孫中山と慰問に来た友人たちが、上海の哈同花園で一緒に撮影したものである。前列左より一、廖仲愷、四、陳炯明、六、章太炎、七、寺尾亨、八、孫文、九、有吉、十、胡漢民、二列目右より一、蔣介石、二、宮崎寅藏」とある。ここに名前はないが、朱執信や、唐紹儀の顔も見える。

この写真の中で、とくに注目したいのが、前列胡漢民の



上海孫中山故居記念館編『記念孫中山先生生誕130周年』より転載

右隣に座っている男である。この人物こそが大谷光瑞である。この時期光瑞は、活動の拠点を上海においていた時期である。前述したように、孫文と光瑞は、互いに近隣に住んでいて、たびたび往来する仲であったと思われる。この写真は、1916年に上海で撮られたのであるが、孫文生誕125周年記念の写真集『中華之光』では、1912年に広東で写されたもので、章炳麟（太炎）及び日本の友人を歓迎するとなっている。また、『孫中山全集』第4巻では1917年に広東で写されたものとなっている。要するに一枚の写真に三種類の解説が付されていることになる。『孫中山年譜長編』や『鏡如上人年譜』を見ても、このことについての記載はない。ただ上海総領事の有吉明が同席していることなどから考えると、1916年に上海で撮られた可能性は強い。『鏡如上人年譜』1918（大正7）年3月の項には、「孫文政府最高顧問となり、広東訪問」（46）とあるが、孫文側の史料にはこの件は出てこない。さらに、孫文の死後挙行された国葬に際しては、当時上海別院の輪番であった小笠原彰信を代理で出席させている（47）。いずれにせよ、孫文と大谷光瑞の関係はかなり深かったと考えてもよいのではないだろうか。

（注）

- (1)高杉晋作『航海日録』（『東行先生遺文』東行先生五十年祭記念会、民友社、1916（大正5）年）「午前漸到上海港、此支那第一盛津港、歐羅波諸邦商船軍艦數千艘碇泊。檣花森欲埋津口。陸上則諸邦商館粉壁千尺。殆如城閣。其廣大嚴烈不可以筆紙畫也」。
- (2)納富介次郎「上海雜記」『文久二年上海日記』所収 全国書房、1946年。
- (3)高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』東本願寺上海別院、7頁、1937年。
- (4)同上書、7頁。
- (5)同上書、248頁。谷了然「入仏式報告書」に「本日早晨、本尊等を安置する時、不覺落涙」といつている。また小栗栖香頂は、中国語を学び、当地の僧侶と交流し、説教を中国語を用いて為したという。
- (6)田代屋とは、田代源平が、上海に開いた日本人最初の商店であった。田代源平は、肥前有田の人で、陶器商を営んでいたが、また上海には、宿泊施設がなかったので、併せて旅館も開設した。陳祖恩『尋訪東洋人—近代上海的日本居留民—』上海社会科学出版社、19頁、2007年。
- (7)井出三郎（1862～1931）熊本の人。済々黌卒業。清国に留学し、日清戦争時には陸軍

通訳となる。明治 31 年東亜同文会の設立に関わり、のち上海で漢字紙「滬報」、邦字紙「上海日報」を発刊する。東京大学法学部明治法政資料センターに「井手三郎文庫」があり、「目録」が発行されている。

(8)前掲書、『東本願寺上海開教六十年史』資料編、323 頁。

(9)『配紙』1891（明治 24）年 9 月 30 日。

(10)『教海一瀾』37 号、1899（明治 32）年 1 月 29 日。

(11)藤山尊証（1878 ～ 1926）滋賀県神崎郡（現東近江市）本行寺出身。1902 年仏教大学（現龍谷大学）を卒業。清国開教総監や本願寺通報部長などの要職を務める。本行寺には瞿鴻禨（1850 ～ 1918）から送られた扁額がある。瞿鴻禨と藤山の関係は不明だが、本論中に示したように、大谷光瑞と瞿鴻禨との間には交流があった（松田江畔『水野梅暁追懐録』私家版、1974 年を参照のこと）。

(12)『教海一瀾』324 号、1906（明治 39）年 8 月 18 日。

(13)以下、上海別院沿革については、白須淨眞氏の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

(14)「満州建築協会雑誌」11 卷 6 号に、大谷光瑞が、「上海別院」本堂建築に関わったことがわかる。「本寺院は在上海日華佛教協会理事主任布教師小笠原彰信氏及荒木、芝田、梶原などの同派布教師の発願により日華佛教会総裁たる大谷光瑞伯により建築並びに資金等の基礎的計画を樹立せられ、施工に関しては同伯と知己の関係にある市内島津禮作氏並びに陳信記氏之を請負ひ建築の設計監督上に於ける実務は岡野建築事務所がその任に当たりたるもので、中国随喜者を代表して追う王一亭氏並びに邦人建立委員五十六名を挙げ昭和五年五月十七日重光代理公使により定礎式をあげ同六年四月三十日竣工盛大なる入佛式を舉行したるものである。本堂の建築様式を印度アジャンタ式に則り細部の彫刻は或いは阿弥陀経に依り或いは伯の所持品中より暗示を得たるものにて、上海の地理事由に徴し此の計画は流石に光瑞伯の着眼であると一般に好評を博しつつあるが、設計施工並びに彫刻者渡辺素川氏の如きも、皆大連に関係深き人々なる点は吾人の興味を感ずる所以である」といい、光瑞の関与が窺われる。この雑誌の入手については、末岡宏先生（富山大学人文学部）にお世話になった。記して感謝したい。

(15)『大乘』（大乘社発行）1932 年（昭和 7 年）3 月号のグラビアには、砲弾を浴びた本願寺上海別院の写真がある。

(16)上海居留民団編『上海事変史』573 ～ 577 頁、1933 年。

(17)加藤愛「大谷光瑞と上海事変」拙編『大谷光瑞－国家の前途を考える－』『アジア遊学』156号、勉誠出版、85頁、2012年。『台湾日日新聞』1932年2月18日の報道によれば、「上京の用件は、主として在留邦人の慰問品募集にある。陸海軍や、外務当局にも会って意見を述べ…」

語るなど、上海の在留邦人保護のために奔走している。

(18)足立沙織「上海別院－幻の大仏塔－」拙編『大谷光瑞－国家の前途を考える－』『アジア遊学』156号、勉誠出版、212頁、2012年。

(19)『大谷光瑞全集』や『鏡如上人年譜』によると、光瑞が上海で講演したのは以下の通りである。

年 月 日	講 演 題 目	場 所
1921年12月13日	「戦後の欧州遊歴談」	場所不詳
1921年末～1922年初	「勝鬘經講話」	上海日本人倶楽部
1922年	「唐朝の内憂と外患」	場所不詳
1922年5月7日	「佛説阿弥陀經講話」	上海日本人倶楽部
1922年	「維摩經講話」	場所不詳
1923年夏	「能断金剛般若波羅密多心經講話」	場所不詳
1924年1月	「仏教の原理」	上海横浜正金銀行
1924年	「觀世音菩薩」	場所不詳
1924年3月23日	「支那国民性の昔と今日」	上海日本人倶楽部
1924年11月19日	「無量光如来安楽莊嚴經講話」	上海日本人倶楽部
1925年3月6日	「仏教の応用」	上海日本人倶楽部
1925年10月3日	「生死即涅槃」	上海日本人倶楽部
1926年1月9日	「無量寿經講話」	上海日本人倶楽部
1935年1月27日	「仏説不増不減經講話」	上海本願寺別院

(20)遊有雄『上海近代仏教簡史』華東師範大学出版社、140頁、1988年。

(21)大谷光瑞「濯足堂漫筆」『大谷光瑞全集』第9巻、大乘社、322頁、1935年。

(22)『大乘』の編集を担当していた岡西為人は、回顧録で次のようにいっている。「11年（大正11年）の1月から月刊雑誌「大乘」が出され、私はその経理部門を担当しました。最初は本願寺の別院でやっていたのが後無憂園の中に大乘社ができてそこに移りました……12年の1月からは編集長を兼ねることになって大乘という雑誌は全部自分一人でやるようなことになりました。この雑誌は始めどうせ三号雑誌だろうと悪口をいわれておったのですが、戦争中に雑誌が統制される迄20年余り続けました。これは狛下の仕事としては一番長続きした仕事の一つだろうと思います。この雑誌は狛下を中心として同人雑誌でよその人の原稿はとらない。従って原稿を集めるのには非常に骨を折ったのです。その当時上海に獅子吼会という会があって、三井とか正金、満鉄、日本郵船、そういう一流の会社の支店長を集めて狛下が仏教の講演をされました。お経の講義が主で般若心経、勝鬘経、能断金剛般若波羅密多経、こういうようなお経を次から次へ講義をされました。それを筆記して大乘に載せたのですが、頁数を稼ぐ為にできるだけ長く伸ばさなければならぬ。それでお経を引っ張り出したり、それを長くする為いろいろ勉強しました……」

「竹孫先生（岡西為人）半生記由来」『漢方と臨牀』第21巻第2号 1974年 48～49頁。この資料については猪飼祥夫先生から提供を受けた。記して感謝したい。

仁本正恵「本願寺の明星」『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』（瑞門会、昭和53年）242頁。杉森久英『大谷光瑞』367頁を参照。

(23)小出亨一「大谷光瑞と瑞門会」拙編『大谷光瑞とアジア-知られざるアジア主義者の軌跡-』勉誠出版、457頁、2010年。

(24)前掲書、「支那の将来」『大谷光瑞全集』第10巻。140～142頁。

(25)前掲書、『放浪漫記』151～153頁。

(26)前掲書、「濯足堂漫筆」『大谷光瑞全集』第9巻、288頁。

(27)根津一（1860～1927）山梨県の人。軍人として日清戦争に従軍する。上海で日清貿易研究所の運営に当たり、また上海の東亜同文書院の初代・第3代院長となる。日中間で活動する人材の育成につとめた。

(28)水野梅暁については、拙稿「孫文と大谷光瑞」『孫文研究』21号 1997年。「水野梅暁と日満文化協会」『仏教史研究』第38号 2001年参照のこと。常光浩然『明治の仏教者』（下）（1969年 春秋社）に略伝記がある。また松田江畔『水野梅暁追懐録』（1974年 私家版）が関係者の回想などを載せていて水野の全体像をつかむのには絶好の書である。

水野梅暁については、他に坂井田夕起子「1950年代の日華仏教交流再開--玄奘三蔵の遺骨「返還」をめぐる」『現代台湾研究』32号 2007年や辻村しのぶ「戦時下一布教使の肖像」『東京大学宗教学年報』XVI 2002年などを参照のこと。

(29)松田江畔編『水野梅暁追懐録』85～86頁、1974年

(30)常光浩然『明治の仏教者』(上) 春秋社、391頁。1972年。

(31)新潟県長岡市本与板にある本願寺派光西寺のこと。水野梅暁は、藤井宣正の兄、藤井界雄と何通かの手紙のやりとりをしている。その手紙は、東京大学法学部附属近代日本法政史料センター原資料部にマイクロフィルムとして残されている。藤井宣正については、拙稿「インド仏跡調査に心身をささげる」『新潟日報』1997年12月2日号を参照のこと。

(32)瞿鴻禨(1850～1918) 湖南省善化人。1871(同治10)年進士となる。内閣学士、工部尚書等を歴任。その後軍機大臣となり、日露戦争後の東三省の利権回収に努力する。清朝の立憲準備体制の中心的な人物であった。辛亥革命が湖南に波及すると上海に逃れた。

(33) 前掲書、『水野梅暁追懐録』146～147頁。

(34)『中央公論』1911年、11月号、161頁。

(35)『教海一瀾』503号、「本山録事」、1911年12月。

(36)『教海一瀾』509号、1912年3月1日。

(37) 大谷光瑞が水野梅暁に宛てた書簡。上海より投函されたもので、1918年(大正7年)6月19日のものである。現在東京大学法学部附属近代日本法政史料センター原資料部にマイクロフィルムが残されている。詳しくは、『辛亥革命研究』第5号「水野梅暁関係資料調査」を参照。

(38)『孫中山年譜長編』(上冊)、中華書局、784頁。

(39)『教海一瀾』534号、1913年3月。

(40)『日出新聞』1913年3月11日。「馬氏(馬君武)は一行を代表して西本願寺に至り、前日の歓待を謝し……」という記事がある。

(41)『教海一瀾』536号、1913年4月。「敬啓者文等此次觀光 貴國、備受各界熱誠觀迎。足證明 貴國人士以愛同種同文之國爲心、以保全亞洲爲務。凡我亞洲人士無不馨香崇拜、並期極力實行以副 貴国人士之望。文等當盡全力以貴国人士好意布諸国民俾。兩國日增親密匪特、兩國之幸實世界平和之幸也。專此肅函敬謝招待之厚意。並祝前途幸福 大谷光瑞殿 孫文、馬君武、何天燭、戴天仇、袁華選、宋嘉樹」とある。

- (42)本願寺鏡如上人七回忌法要事務所『鏡如上人年譜』79頁、1954年。
- (43)『文系春秋』1938（昭和13）年12月号。新疆省の租借と布教権の問題を交渉したといわれる。
- (44)『大乘』、第5巻10号、26～27頁、1954年。
- (45)『孫中山先生記念誕辰百三十周年』写真集、上海人民出版社、1996年。
- (46)前掲書、『鏡如上人年譜』81頁。
- (47)同上書、102頁。

第四章 大谷光瑞と漢口

第一節 漢口の歴史的位罫について

(一) 漢口の歴史的沿革

漢口の地は、漢陽・武昌とは違ひ、いわゆる武漢三鎮の地でありながら、その歴史的沿革は異なっていた。漢陽・武昌は隋、唐時代より地域の中心地であったが、漢口に至っては、1861年の開港まで一漁村に過ぎず、開港後、瞬く間に漢陽・武昌を凌ぐようになった。長江中流地における最大の都市であり、交通の要地でもあり、中国の心臓部でもあった(1)。

夏の時代にあつては、武漢一帯の地は、三苗の故地(2)として知られ、苗族の根拠地であった。周の時代は荊洲に属し、周末の天下大乱時期には、七大国の一つである楚の支配するところとなった。秦が統一すると邾の管下となり、両漢の頃には、江夏郡に編入された。三国時代を経て、孫権が都を武昌の地に遷すことによつて、中国中央部の要衝の地となった。隋代には江夏郡となり、唐代においては、太宗の地方制により、武昌は江南西道に属し、鄂郡となり、漢陽・漢口は淮南道に属し、沔湖となった。五代には再び武漢三鎮は荊洲となった。宋代になると、荊湖北路になり、元代には武昌に荊湖省が置かれた。その後湖広と改め、武昌は湖北、湖南、広東、広西四省の首都となった。明代には広東、広西は分離したが、なお湖北、湖南両省の首都であった。清の康熙時代には、湖広を湖北、湖南に分け、湖南長沙に巡撫をおいた。

近代に入りアヘン戦争勃発後の南京条約の締結により、中国の港は漸次開港を余儀なくされ、1843年には上海が開港され、そして長江沿岸を遡及するように鎮江、南京、蕪湖が相次いで開港された。そして1861年に至り漢口の開港となったのである。武昌・漢陽の後塵を拝した漢口は、ここに至つて大都市となったのである。さらに日清戦争後、重慶が開港されたので、四川からの物資が長江を下り、漢口に集まるようになった。その上、京漢、粵漢鉄道の開通により益々交通の便も発達し、漢口を中心として物資などが四方八達し、中国内地における重要都市の位罫を占めたのである。「両湖饒れば天下足る」といわれた湖北・湖南両地域は、米を主要な生産物にして、茶・綿花・桐油・胡麻油・豆類・牛皮・烟草・獣皮・麻・生糸・木臘・鉄・薬材・小麦などを産する(3)一大農

産地である。これらの農産物は、長江の本流と長江に注ぐ諸河川、つまり中国十八省のうち九省を通ってきた水が漢口に注ぐという「九省の会」といわれるぐらい地勢的に恵まれた「武漢三鎮」の地に集散されたのである。さらに近郊の大冶県の鉄鉱石や江西省萍郷県の石炭を用い、また豊富な水量を利用して重工業が発達した。湖広総督張之洞(1837～1909)が創設に関わった紡紗局・織布局(武昌)や鉄政局、兵工廠(漢陽)、漢口には燧昌燧寸製造所などが設立された。その結果、「東洋のシカゴ」とも称されるようになった。

(二) 鉄道の要地

北京から漢口まで中国縦貫鉄道の観を呈しているのが京漢鉄道(虚溝橋から漢口)であり、また広東から漢口までは粵漢鉄道が走っている。まさに中国の北と南を繋ぐ大動脈であり、その中継地が漢口である。京漢鉄道は全長およそ1300キロにも及ぶ。この鉄道は、湖広総督張之洞の発議により1895(明治28)年に線路の測量を始めたが、莫大な費用がかかるために中国側でその費用を工面することができず、湖広及び直隸総督はこの鉄道を担保にして、外債を募集した。この外債に応募したベルギーのシンジゲート間に借款契約が成立した。

粵漢鉄道は、元来アメリカに敷設権があったが、のちに中国側が回収して両湖及び広東に鉄道を敷設することになった。広東区間は順調に工事が進んだようであるが、湖広区間は資金不足のため敷設することができなかった。そこでまた鉄道を担保にして、四国銀行団から借款し、欧州市場に公債を売り出したのである(4)。この粵漢鉄道の完成により、香港や広東を通じて輸入される海外の物資も漢口に集散されて、さらに四川などの奥地に転送されるのである。このようにして漢口の経済的位置は益々向上してきたのである。

第二節 租界地としての漢口

(一) 西洋列強租界

「国中の中の国」といわれた租界は、一般的にいうならばアヘン戦争以後に中国各地に形成されたものである。結果として半植民地となるが、その半面、租界を中心として近代的な建築が立ち並び、交通網が整備され、埠頭の改築により国際貿易が可能になり、金融制度が整い、また西洋や日本文化の流入により、教育、音楽、体育、宗教などの新しい文化が花開き、従来の郷民に変わる市民社会の到達に影響を及ぼしたという最近の

研究も見られる(5)。このような租界は、近代中国社会の一つの特徴といえよう。

漢口「租界」は、イギリスが武力を用いて、中国に開国を迫り、上海など 5 港の開港を要求し、内陸部にある漢口にも触手を伸ばし、開港させたのが「租界」の始まりである。イギリス租界は中国人街と接しており、また長江に面しているなど商業上、貿易上、好位置にあった。内陸部から集散する農産物の輸出が主な活動であった。

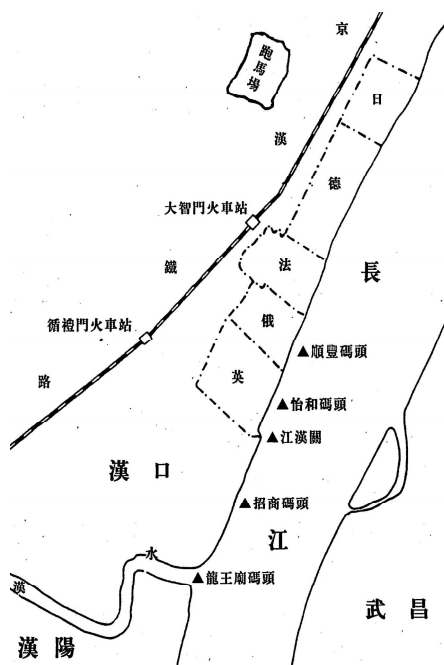
ドイツは 1895 年に、イギリスに引き続き漢口に租界を設置した。またフランス、ロシアは 1896 年に租界の権利を獲得し、長江沿いに租界地を形成した。とくに日清戦争後の三国干渉に関与したことにより、ドイツ・フランス・ロシアが中国にその代償として租界地の獲得を要求した(6)。

(二) 日本租界

日本租界もまた上述の国々に続いて長江沿岸に並ぶように形成された(図 I 参照)。日本の漢口における租界権利は、1898(明治 31)年に日清両国によって協定されたものである。以下その協定文を紹介しよう。

「漢口日本居留地取極書」(外務省告示第 24 号命 1898 年 12 月 6 日)(7)

「日本居留地は、漢口鎮独逸国居留地の北隣より起る。其東界は、揚子江に沿ふこと百丈(筆者注一丈は十尺でおよそ 3.2 メートル)、南界は、東の方揚子江沿岸より起り、独逸国居留地境界に沿ひ、西の方



鉄道地界迄、西界は鉄道地界を以て境となし、北界は東界の北端なる揚子江沿岸より起り、西界の北端なる(図 I 漢口租界図『中国的租界』より転載) 鉄道地界迄直線(此直線は江南界線と平行すべし。傾斜するを得ざるものとす)を画きし界内を日本專管居留地と為し.此取極書を定めたる后、員を派して立会ひ界標を設けくべし……右界内の道路、隠塘、溝渠、波止場及警察の権は、日本帝国領事に属し、又其道路、隠塘、溝渠、波止場は日本帝国領事に於て法を設け、修築するものとす、道路、隠塘、溝渠、公共用の地内に若し官街、官地あれば、借地料、租税を免除し、又民地なれば借地料のみを交付し、租税を納むるに及ばず」など、このような取り決めがあった。

この「漢口日本居留地取極書」が締結された翌年に大谷光瑞は漢口を訪れている。光

瑞に同行した上原芳太郎の記事によると、「漢口此地は、長江漢水合流点に在り。古は漢陽の一部落に過ぎざりしも、今は湖北有数の市となりて、漢陽共に州の首府たる武昌と鼎時の姿をなせり。此地を貿易場と注目せしは、仏国宣教師ヒューヌなるもの也。1861年、開放せられ、英国居留地は市の西端に在り。城郭は髮匪（筆者注一太平天国の乱のこと）の時、築城せるもの。又居留地の街衝は広くして、江岸に沿へる延長半哩あり。加督教の大会堂あり、又プロテスタント、希臘教会堂あり。希臘教会堂は露国のレジデントの手によりて成れり。又、露国居留地には、露人の経営にかかる団茶製造所あり。此地の人口 80 万と称す。対岸、漢陽には鉄製局あり。此地より茶の輸出高、1897 年に於て、41 万 0019 ピクル、磚茶 48 万 3192 ピクル也。又、鴉片の輸入高は 97 年に於て 518 ピクル、如此少数なるは、此地に産出品ある故也。97 年の貿易総高は 4972 万 630 両也……（中略）……猊下（筆者注一大谷光瑞のこと）は駕子にて、余等は少舟にて領事官に随行。該館は英国居留地の中にあり。領事の東導により日本居留地を見る。英租界の北隣は露の租界にして有名なる薄茶製造所あり。又多少の商館あり。其北は法（筆者注一フランス）租界。これは英露の如く建造物あるを見ず。又、道路も未だ整頓せず。此地に来る時、驟雨あり。城壁の廊門内の関帝廟に避け、須臾にして小降となるを以て発す。法租界の北端は、漢口城郭にして一門「通濟」と名く。又「漢南雄鎮」と遍す門を出れば、独租界、江に沿へる長さ 300 丈。此を過ぐれば、我居留地也」（8）と記している。往事の日本租界の様子が窺われよう。ただこの時期は、租界設置後まもなくにして、日本人の数もまだそれほど多くなく、領事館や旅館、貿易商社、武備学堂の日本語教師ぐらいであった。しかしながら、この地の重要性をいち早く感じ取った大谷光瑞は、間もなくこの地に本願寺を設立し、中国大陸における拠点としたのである。

その後、1906（明治 39）年、ドイツ租界内に本願寺の布教所が設置され、また翌年には「日本人小学校」「幼稚園」「青年英語学校」や「日語学校」などが本願寺の手によって次々と創設されている（9）。日本人の増加に伴って、生活方法、習慣なども日本と同じようになってきたのであろう。寺院や学校の設置などがそれを如実に示している。また日本「租界」の拡張に伴って人口も増加し、郵便局や新聞社、銀行、商社、商店、工場なども新しく作られていった。当時『大阪毎日新聞』は、「当租界内には三菱公司、高昌公司、本願寺、菜市场、日本人倶楽部、倉庫、貸家等の建築物は既に落成せるもの又は工事進行中のものたるを聞はず建築工事は非常に旺盛なり。如斯趨勢なれば当租界の経営

を了りし部分は遅くも本年末には一空地を見ざるに至るべし。前記の如き家屋建築に伴ひ従来他租界に住居せし邦人も来住するもの多く落成したる家屋は殆んど空地を見ざる盛況なり。尚料理屈飲食店も本月中には転住するもの多かるべし」(10)と記述している。ちなみに 1906(明治 39)年当時、漢口における在留邦人の数は 660 名であったというが、すぐさま 600 名の増加があった(11)。その後、漢口の貿易額が上昇するにつれて、邦人の数も漸次増加してきた。1914(大正 3)年には、1380 人の日本人が漢口に住んでいた(12)。この数は租界を設置している国の中では最も多いものであった。

第三節 漢口本願寺出張所

(一) 本願寺出張所の創設

1906(明治 39)年 10 月 24 日、本願寺法主大谷光瑞は、上海・蘇州・九江を経て漢口に到着した(13)。中国開教の拠点を決めるためであった。

漢口本願寺設立のために派遣された田中哲敏(14)は、『漢口本願寺創建顛末』の中で、「明治 39 年の秋、当時の本派本願寺法主大谷光瑞上人が日露戦後邦人の支那に於ける発展を想い給ひ、支那各商埠に派勢の伸張と教線の普及とを企て北京上海はもとより遠く西四川省に、南雷州島に及ぶ一大飛躍を試みられし際、吾が漢口にもその設立を見たるものにして……」(15)と記し、大谷光瑞の中国における教線拡大の一環としての漢口本願寺出張所創設であることがわかる。当時の漢口は、田中の伝えるところによれば、「漢口本願寺の当地は現今 80 万余の人口を有し且つ将来甚だ有望にして支那本部に布設せられたく若くば將に布設さるべき鐵路及び長江を上下する各船舶は必ず此地に稿湊すべきを以て貨物の緊散人馬の往復陸続頻繁の地と相成り……目下の上海の夫れより優るとも劣るまじく支那本部その他の地の最も枢要の地点と相成り本派本願寺が経営する開教事業は明に緑叢中の紅一点となり優に一大光彩を放つもの……である(16)。長江中流域の大都市であり、また鐵道の要地であり、上海よりも優るとも劣らない中枢の地であるとの認識であった。

大谷光瑞もまた同様の見方をしていたようである。つまり漢口は、将来にわたって浄土真宗の中国開教の中心地になるところであった。また『教海一瀾』は次のように伝えている。「明治 39 年猊下清国御巡遊の際、清国開教の中央根拠地点として漢口日本租界

及び跑馬場附近に十数万方の広大なる土地を買収して、将来大規模の根本道場建築の計画なりしが、今回官革両軍の関ヶ原は即ち本派本願寺の該別院予定地たりしなりと(17)と。大谷光瑞が漢口で買い求めた本願寺建設予定地の場所は、日本租界地とドイツ租界地からほど遠くない跑馬場(競馬場)の西側に位置していた(詳細については、本論文中第二部第一章「大谷光瑞と辛亥革命」を参照のこと)。中国開教の一大拠点として最も有望な地であることが田中哲巖からの手紙から窺い知れるであろう。

第四節 大谷光瑞の漢口観

(一)『清国巡遊誌』について

大谷光瑞が漢口を如何に重視していたかということをも 1899(明治 32)年の「清国巡遊」(18)を通じて考えてみたい。

大谷光瑞の「清国巡遊」を公式に伝えたのは、1899(明治 32)年に発せられた「本山録事」(本願寺の公式文書)においてである。

甲達第一号 新御門跡不日御発途清国へ御巡遊相成ル

甲達第二号 新御門跡今十九日午後三時二七分七条駅御出発清国巡遊ノ
途ニ上ラセラル

随行員としては、随行長に本願寺教学参議部総裁武田篤初、教学参事部録事本多恵隆、教学参事部・奉仕局用係朝倉明宣、奉仕局員池永三章、市川達讓、中島裁之それに雇員として野村伊二郎、室末吉が加わった。その他連枝(法主一族の男子の敬称)藤枝沢通は見送りとして上海まで同行し、香川黙識は浙江省杭州布教駐在派遣として上海まで同行した。さらに上海から上原芳太郎と通訳李学恵が一行に加わった。

簡単に外遊日程を記しておこう。1899(明治 32)年 1 月 19 日京都出発、同夜神戸港解纜のフランス郵船「ラオス号」に乗船、途中下関、長崎に立ち寄り、22 日上海に到着。24 日香港に向けて出航、26 日香港着。3 月 3 日まで香港、広東などを周遊し、当地より四日には梧州に向かう予定であったが、海賊出没のため、香港に引き返す。8 日に香港を發ち、厦門に行く予定であったが、航海の都合、針路を上海に変え、11 日に上海に到着した。その後杭州に向かい、西湖などを遊覧する。27 日再度上海に戻る。3 月 4 日に上海を發ち、南京経由で漢口に向かう。8 日漢口に到着する。漢口、武昌、漢陽などを巡歴し、15

日漢口を出発し、信陽、開封、そして保定などを通り、7日に北京に入る。9日同行の野村伊二郎が当時北京で流行っていた「天然痘」に罹り、治癒したものの心臓麻痺で死亡する。25日北京を離れるまで長城や十三陵などを見学するほか、李鴻章や清朝の諸大臣などを訪問し、皇帝にも謁見を願ったが、戊戌政変後のことであり、会見は叶わなかった。また雍和宮に喇嘛僧を訪問したり、西藏經典の印刷所などの見学を行った。25日早朝北京を発ち、天津の塘沽に向かった。塘沽より招商局の汽船泰安号に乗船し、渤海湾口を過ぎ、山東半島威海衛を臨み、28日上海に着岸した。29日未明エンプレスオブインディア号抜錨、一路神戸に向けて出航する。5月2日午後9時神戸港に着船し、3日朝の上陸まで船内に留まった。3日午後3時20分一行を乗せた汽車は七条駅に到着した。ここにおよそ3か月半近い大旅行は幕を閉じたのである。

(二) 張之洞の街漢口

かつて白須淨眞氏は、大谷光瑞の「清国巡遊」に際して、留意すべきは張之洞と光瑞の関係であると言及された(19)が、私もその見解には全く同意するものである。ここでは大谷光瑞と張之洞の双方の関係を見ていくことによって、「張之洞の街—漢口」を考える端緒としたい。

漢口は上述した通り、水運の便に恵まれ、また近隣には鉄鉱石などを産出するなど地勢的にも恵まれたところであった。湖広総督を20年近く務め、湖北を第二の故郷といわしめた人物張之洞は、まず東アジアといわれた製鉄所を漢陽に創設し、その後、軍需工場を開いた。また武備学堂や自強学堂など新式の学校も創設した。その上、留学生の派遣を推し進めたのである。さらに軍隊の近代化を図り、鉄道建設にも関わった。洋務から変法期にかけて最も活躍した官僚の一人であった。

大谷光瑞は「国家の前途」を考える上で、「殖産興業」「富国強兵」を唱えた張之洞にそのモデルを求めたのではなかろうか。従ってどうしても漢口に行かなければならなかったのではなかろうか。

さらに当時本願寺が創設した「文学寮」や「普通教校」などの学生有志が発行していた『反省会雑誌』や宗教雑誌『教学報知』（後の『中外日報』）などは、海外開教や清国に関する新しい情報を報じていた。たとえば、『反省雑誌』（1892年「支那伝道に就て」（11月30日））や、『教学報知』（1898年「清韓布教の時機」（5月15日））は、清国巡遊の妥当性を、さらに「海外宗教の視察」（5月29日）では人材の欠乏を、「支那布教私見」（6月9日）

では、支那布教の方法を、すなわち(1)皇帝に謁見し、仏教の優位を述べる、(2)喇嘛教との接点を考える、(3)医療福祉の観点から仏教を弘めるといったことなど)などが報じられている。さらに張之洞についても、「張之洞氏の勸学篇」(8月5日)「夫の勸学編は清国皇帝の御覧を経たる上此程左の上諭を下されたりと。原書内外各篇、朕詳かに披覽を加ふ持論平正にして大に裨益あり副本四〇部は軍機処に由りて各省総督巡撫学政に各一部を頒ち広く刊布せしめ実力勸導して以て風教を重んじ唇言を杜がしめよ」。と報じている。これらの記事を光瑞は当然読んでいたと思われる。何となれば光瑞はヨーロッパ漫遊中にも日本の新聞や本願寺の機関誌『教海一瀾』などを閲していたからである(20)。

張之洞はまた、戊戌政変後、最も勢力のあった官僚の一人であった。日本との関係も「対支借款」「正金銀行借款」「湖広銀行設立の件」「兵器購入」などで深く繋がっていた(21)。また日本の軍部が、張之洞と関係を謀ろうと画策していたことも明らかになっている(22)。「国家の前途」を考える光瑞のこと、張之洞に関心を抱くのは当然のことであった。さらに本願寺関係者は、張之洞輩下の7名の留学生を受け入れようとしていたのである。「張之洞輩下七名の留学生の教育及び全般の監督を外務省に依頼し來たる。外務省は是をドクトル高楠順次郎氏に依頼したる由にて同氏は反省会の櫻井義肇並びに前の文学寮教授梅原賢融氏等に協議し種々目下教育上のことを打ち合わせ居らるゝ由にて、また寄宿舎の監督には久敷支那に在りし文学寮出身の中島裁之氏これに当たるゝ由に聞く。東洋多事の今日清国留学生の塾性なる少壯有為の仏教諸氏の手にて委ねられたるは頗る慶すべきことにして…」(23)。さらには張之洞の孫に当たる張坤申も引き受けようとしていた(24)。当然張之洞も本願寺や大谷光瑞に関心を寄せたと思われる。大谷光瑞一行を厚遇する理由はここに見られるのである。高楠、櫻井、梅原の諸氏はいずれも本願寺の設立した教育機関(文学寮、普通教校 現在の龍谷大学)の卒業生であり、引き受けた学校は高楠順次郎らの設立に係る「日華学堂」(25)であった。本願寺と張之洞の関係は浅からずあったと見るべきであろう。ただ「日華学堂」には、張之洞が派遣した学生は結局入学しなかった。また張坤申も学堂の見学にはやって来たが、彼もまた入学せず、当時貴族院議長であった近衛篤磨が院長を務めていた学習院に入学した。

明治以降大谷家は、一方では親鸞聖人以来の血脈を守り、本願寺の法主として絶大な権力と財力を有し、一方では爵位を頂戴するなど貴族階級の一員として存在していた。従って今回の外遊に際しても、外務省の斡旋及び保護などがあったことが窺える。行く

先々で領事などが光瑞と共に行動をしていることはその証左となろう。また張之洞の例を出すまでもなく、清国の官僚たちの協力もあったと見るべきであろう。張之洞は眼疾のため、光瑞とは会うことが出来なかったが、漢口では光瑞一行のために警護などの便宜を図るなどしていたのである。

(三) 『清国巡遊誌』 記述比較

最後に漢口での大谷光瑞一行の「清国巡遊」の記録を比較しておきたい。『清国巡遊誌』、本願寺の機関誌『教海一瀾』、それに随行員であった上原芳太郎の『外遊記稿』「南船北馬」である。記録の意図した違いがわかれば幸いである。

	『清国巡遊誌』	『教海一瀾』	『外遊記稿』「南船北馬」
3月8日	漢口に入り商船会社の埠頭に着す。時に午前七時なり…埠頭には一行に先ちて発せし香川及び瀬川領事、会社の支店員と共に迎へ居れり。猯下は直ちに東肥洋行に入らせらる。続いて瀬川領事其他の訪問者多く、当地洋務総弁何蔚伸氏、特に警吏一名兵士二名を派して御滞在中の警護に充つ……。	前七時商船会社の碼頭に着す…本船に前日先駆として出張したる香川氏、及瀬川領事、商船会社支店員、東肥洋行店員等、来迎、朝食後東肥洋行に御投宿、領事瀬川氏其他訪問者甚多し、当地洋務総弁何蔚伸より御滞在中、警護の為警吏一名と兵士二名を派遣し来る……。	午前七時漢口の商船会社の埠頭に着す。漢口は右岸にあり。埠頭の下流に日本居留地。英独露仏の租界を望む。先発の香川氏来迎。又瀬川領事、東肥洋行店員、商船会社員出迎はる。九時半上陸。一行、東肥洋行に投ず。……当地洋務総弁何蔚伸氏警吏兵士を派し、警衛と用務に使う。「上海道台の打電に接せし為」と。兵士等をして行李運搬の人夫取締、及使役方を依頼し、便を得たり……。
3月9日	午前十時、猯下は瀬川領事と共に、仏国領事	前十時猯下日本領事館に御成、領事と共に仏	午前自強学堂の日本語科生二名伺候、巧みに

<p>を其領事館に訪ひ、同領事の紹介にて、更に同居留地倶楽部に滞在中の、同国技師某に御面会あり、某は数日前北京より陸路を経て当地に着せるもの、此の御面会は実に一行が内地横断大旅行の為に尠なからざる便宜を得たりと云ふ…其れより露国居留地に至りて、磚茶製造所を縦覧せり…午後二時より武昌に到り、有名なる張之洞の武備学堂、及自強学堂等を巡覧す。武備学堂は現今百五十余名の生徒を有し、兵学専門の学堂にして独逸教師二名と他に邦人大原某外数名ありて、翻訳編輯の任に当れり、帰途漢陽に到り晴川閣等の勝地を遊覧す…。</p>	<p>国領事館御訪問、更に仏国領事の案内にて、同居留地倶楽部に滞在せる仏国技師に御面会、此技師は北京より陸行して前日当地に着せしものなり、一行の参考と為るべき有益の談話多かりき、該所にて仏国領事と別れ、露国居留地にある磚茶製造所縦覧…午後二時より武昌に御成、武備学堂、及自強学堂、御縦覧、武備学堂は現今生徒百五十名内外、兵学専門にして独逸教師二名外に大原某氏外数名の邦人ありて、翻訳編輯の任に当れり、又自強学堂は語学を主とし、生徒は日本科二十名、此教師邦人三名、其他英露独仏の四科、每科生各十五名内外なりと、帰途漢陽に渡り、晴川閣等御遊覧。</p>	<p>邦語を轉し、頻りに日本の事情を尋ね、且日本に遊びたしとて其希望等を説く、一行携へ来りたる写真器望遠鏡其他諸機具等を示して、一々説明を為し、又日本の事情を告げ、且遊学の志あれば種々幫助及便利を与ふることを述べしに、非常に喜悅して辞し去れり…。正午湖広督標中營都司衛藍翎俛先守備田天林（我海軍少佐相当官にして、実は一旅舎の主人なり、前年金を納めて官を得、軍船を保管し水上警察の如き職を帯ぶるもの）官服を纏ひ且漢陽に駐筈せる統領（陸軍少将相当官）張寿廷の意を告げて云、本日午後軍艦を以て江漢の勝地を案内し、総署に於て晚餐を供したしと、一行既に發足期日の迫れるを以て、探勝のことは再遊</p>
---	---	---

			に譲り且饗宴に臨むの 余暇なきの故を以て謝 絶し、更に其軍艦を借 りて一応総署を訪問す べしと対へしに、時間 を期し辞し去る、午後 三時軍船に御乗込…… 漢陽城下の江左碼頭に 上陸すれば、既に数名 の兵士ありて上陸せ し、水平と共に前後を 護衛して総署に赴く、 中門にて輿を下れば、 張統領迎へて前に在 り、一堂にて挨拶を為 し、更に後堂に入り茶 菓の饗を受く、夫より 種々の談話を為す、総 署より更に張氏田等已 下数名の案内により五 里を阻つる(我一里)帰 元寺に行く……。
3月10日	午前十時瀬川領事の案 内にて漢陽の鉄政局を 観る、鉄政局は別ちて 製鉄槍礮の二廠とす、 総督張之洞が清廷の許 可を得て創設さるもの に係る、一行到るや張	前十時瀬川領事来訪、 昼餐後同領事等の案内 にて漢陽の鉄政局御巡 覧、鉄政局は鉄廠と槍 礮廠の二ありて、総督 張之洞氏の設立に係る、 鉄廠に至れば既に張氏	午前自強学堂の邦語科 生二名、来訪。邦語を 以て談話す。其語調、 高尚也。兩人共二年科 生にして「新撰読本書 取会話等を修せり」と。 内一人は「本夏日本に

	<p>氏の電命と称して主幹某等数名迎接し、遍く場内を案内せり、一見規模頗る宏大にして設備完全せるが如し、現今傭聘の外人二十名ありて、内十七名は白耳義人、他は皆英人なり、原料の鉍鉄は大冶県の産出にして、石炭は内地産及本邦産のものを用ひ居れり……。一行導かれて客室に入り酒菓の饗を受け、又記念として砲弾一箇の贈を受く。</p>	<p>よりの電命ありとて主幹某迎接し、小憩後工場内を案内す、規模甚壮也、現今雇人の白人は二十名にして内十七名は白耳義人、他は英人なり、鉍鉄は大右産の産出にして、石炭は内地産及日本産を用ひ居れり……。一覽後導かれて客室に入る。酒果を供し又記念として砲弾を贈れり。</p>	<p>遊ばん」と語れり。正午湖広総督・標中營都司衛・藍翎繡・先守衛・田天林氏来訪。本日午後三時より軍艦を泛べて、漢陽探勝の東道となるべしとて、案内の辞を述ぶ。一行快諾し、時に至って田氏及大尉相当官某氏に誘はれ碼頭に至れば、軍艦とは普通の布帆船に似たるもの。舳艫一門の砲を備ふ。又、数十の旋旒を樹てたり……。遂に総署に至る。中門に下乗す。門側に張統領官服を着し迎ふ。一行を引て客堂に導き挨拶を交換す。更に後室に導き、茶菓の饗をなす。張統領座を離れ平服と改め席に着く……。種々の座談をなし畢て、張・田氏等と輿を連ねて僅か一里を離る帰元寺に至る……。</p>
<p>3月11日</p>	<p>此日商船会社支店の招待に依り、午後六時より</p>	<p>商船会社支店の招待により午後六時より該社</p>	<p>北京より仏国人伴ひ来たりし、劉某来る。内</p>

	<p>猯下一行と共に同店に赴かせらる。</p>	<p>へ御出。</p>	<p>地旅況を談ず。一行は 仏国領事館に赴かれ、 此夕は、商船会社支店 長の晩餐会に臨まる。 余は朝倉氏と午餐後、 小舟にて武昌に渡り 「梅花水」と票石を立 てたる処より上陸し、 城内に入る。異臭紛々 たり。城壁に沿ひ小丘 に登れば、有名なる黄 鶴楼趾あり、既に髮匪 の乱災に罹り重修せし も、十年已前再び焼失 し、今は下層の九壁と 遺蹟あるのみ……………。</p>
<p>3月12日</p>	<p>午前自強学堂の日本語 学科生徒二名伺候す。 猯下御対話あり。彼等 少しく日本語を話し得 るを以て、種々日本の 事情を尋ね、他日必一 度渡航すべき旨を陳ぶ。 携へ来りたる写真器、 望遠鏡等を取て一々説 明を与へ、且渡航せば 相当の便宜を与ふ可き 旨を語るに彼等は喜び て辞し去れり……。正</p>		

	<p>午湖広総督標中営都司衛田天林来訪し、統領張寿廷の意を伝へて云ふ、本日午後軍船を以て一行を迎へ、江漢の名勝を案内し、帰途総署に於て聊か晚餐の供を為さんと、然れども一行出発の期既に迫るを以て探勝の事は再遊を約し、晚餐は其好意を謝し、単に軍船を借りて総署を訪問すべきを約し時間を期して別る。午後三時約の如く軍船到る、一行之に乗じて江を遡る……江左碼頭より上陸す、兵士数名前後を警衛して総署に到り、中門内にて輿を下れば、張統領迎へて此に在り、後堂に請じて茶菓を供し、暫時対話の後、張、田諸氏と共に帰元寺に詣る……。</p>		
3月13日	<p>此日午前松原深諦山命を帯びて上海より来着す、午後四時 猯下松</p>	<p>午前七時松原深諦氏上海より来着猯下は午後四時より松原香川二氏</p>	<p>午前七時大井川丸入港す。杉原、本多、市川三氏来着。依って間宮</p>

<p>原、香川を従へ田の宴席に臨ませらる。帰元寺の役僧三名昨日の返礼として来る。</p>	<p>を従へ田天林氏の饗宴に御臨席、此日帰元寺の僧三名昨日の挨拶の為来る。</p>	<p>氏よりの状に接し、留守宅一同無事なるを知り、甚だ安堵せり。午前は荷物整理の為繁忙を極む。三月四日已来の状況を書面に綴り、京都へ差出さんとす。其他私書を一束とし、不日帰朝の杉原氏に托す。一行御滞在中、種々好遇を与へられたる張之洞氏へ代理として中島氏を差向けらる。氏帰り報じて曰く「張氏は謝し、且日一回必拝顔を希望するも、即今重症の眼病に罹れるを以て、甚だ遺憾なりと挨拶せられたり」と。……午後帰元寺の僧三名、昨日の答礼として来館。御法衣類を覽せしむ。驚嘆せり……。午後四時、一行は田氏の招宴に赴かる。車馬雇用周旋の件を、田氏に倚頼す。田氏来館、種々打合わせをなせり。夕景、昨日来訪の</p>
--	---	---

			学生二名再来。
3月14日	<p>午前自強学堂の生徒数名伺候す、明日は愈々当地出發、陸路北京に向け大陸横断の大旅行に上る可き予定なるを以て、前日来之が準備に忙がはしく、先づ旅行用として備入れたるは馬車六輛、馬匹十八頭、馬丁八名なるが…</p> <p>…是等の事に関しては田氏等大に斡旋の勞を執れり、斯くの如くして大陸横断の準備は不十分ながら大畧整頓せり。神戸出發より今日まで五十余日、上海香港等の各地到る處本邦領事の周旋と、在留邦人の歡迎とにより、旅行としては最も安然に、且愉快なる旅行中に在りし 猊下を初め一行は、明日より道路と云ふ道路無く、旅舎と云ふ旅舎無き、浩々莽々たる二千五百清里の内地を横断して北京に到る</p>	<p>午前武昌の自強学堂生徒数名来伺、皆当地より北京に至る、乗用の馬車六輛、及馬匹十八頭、附隨の馬夫八名の備入契約を為す……此事に付て前記田天林氏等、非常の周旋を為せり。</p>	<p>午前自強学堂学生数名来伺。山西会館を見る。規模の壮大、目を驚かすに足る。田氏来館、車馬雇用の約なる……洋務総弁何蔚紳氏來訪…松原氏、夜八時出港の大井川丸にて帰帆の途に就かる。</p>

	<p>可く、古今稀に有るの大 旅行に向て出発查せざ るべからず、半夜江聲 夢を驚すの処一行の成 果して如何なりしか。</p>	
--	--	--

(注)

(1) 拙編「大谷光瑞初めての外遊」『東洋史苑』龍谷大学東洋史学研究会、99頁。1998年。

(2) 三苗の故知とは、堯舜の時代より、江、淮、荊州(現在の湖北、湖南、江西)地方に居した蛮族の名前。『史記』五帝紀には「三苗在江淮荊州」とある。上海古籍出版社『二十五史』所収『史記』。1988年。

(3) 水野幸吉『漢口』富山房、101頁。1907年。なお水野幸吉(1873～1914)は、兵庫県淡路島の出身で1897年東京帝国大学政治学科を卒業後、外務省に入り、漢口総領事やアメリカ総領事などを歴任する。1913(大正2)年、中国公使館参事官となり、伊集院彦吉、山座円次郎両公使のもとで、辛亥革命後の善後策や借款問題に奔走した。本願寺の門徒として知られ、日本に一時帰国の際、本願寺を訪うている。『教海一瀾』(351号、1907(明治40)年「清国漢口領事は、東上の途次同婦人同伴にて、両堂参拝の為、去る20日午前11時来山せられしに付、賛事木村省吾、注記補鎌田正親の両氏出迎はれ、黒書院に休憩、次いで淳浄院殿(筆者注—大谷光明(尊重)のこと、光瑞の実弟)、並びに武子様(筆者注—のちの九条武子、光瑞の実妹)御会見、種々の御物語あり……領事は其厚遇に感謝して帰館せられたり」。という記述からも光瑞との関係が窺われよう。光瑞はこのときは外国巡遊の途次であった。

(4) 曾田三郎「湖南における鉄道利権の回収運動」『広島大学総合科学部研究紀要』1号、1978年。

(5) 上海市歴史博物館等編『中国的租界』上海古籍出版社、2004年

(6) 周徳鈞『漢口的租界』天津教育出版社、6頁。2009年。

(7) 「漢口日本居留地取極書」については、水野幸吉、前掲書、509頁以下によった。

- (8) 上原芳太郎「南船北馬」『外遊記稿』所収。該書は未定稿文書で罫紙に毛筆で書かれている。龍谷大学大宮図書館蔵。ここでは白須淨眞「上原芳太郎「外遊記稿」所収の「南船北馬」」『龍谷史壇』103・104号、1994年。によった。
- (9) 田中哲巖編著「漢口本願寺創建顛末」2頁、発行所並びに発行年月不明。
- (10) 『大阪毎日新聞』1909（明治42）年9月30日号。
- (11) 『教海一瀾』335号、1906（明治39）年11月。
- (12) 日清汽船株式会社編『漢口事情』出版社不明、奥付には印刷所は東洋印刷株式会社とある。28頁、1914年。この日清汽船は白岩龍平によって創設された船会社であり、漢口のイギリス租界内に本社があった。その堂々とした建物は現在も残されており、武漢市の保護建築物になっている。白岩龍平（1870～1942）は、美作の人。荒尾精が1890（明治23）年、上海に創設した日清貿易研究所で学び、大東汽船、湖南汽船、日清汽船などを次々と創設した。1898（明治31）年の東亜同文会の設立にも関与した。
- (13) 鏡如上人七回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』1954年、42頁。
- (14) 田中哲巖（1882～1946）滋賀県犬上郡八坂町（現彦根市）本光寺出身。本願寺開教練習生として1906年、初代漢口本願寺出張所長護城慧猛らとともに、漢口本願寺に赴任する。その後成都本願寺に異動するが、辛亥革命後再び漢口本願寺に勤務する。帯広本願寺輪番や樺太開教監督などを務める。本論文第二部第一章注(17)を併せて参照のこと。
- (15) 田中哲巖編著、前掲書、1頁。
- (16) 前掲、『教海一瀾』。
- (17) 前掲、『教海一瀾』。
- (18) 大谷光瑞の清国巡遊については、拙稿「大谷光瑞初めての外遊」『東洋史苑』50・51号、龍谷大学東洋史学研究会、1998年、99頁。拙稿「清国巡遊誌を読む」拙編『大谷光瑞－国家の前途を考える－』勉誠出版、『アジア遊学』156号、2013年。白須淨眞「上原芳太郎『外遊記稿』所収の「南船北馬」」『龍谷史壇』103・104号、1994年。などを参照のこと。
- (19) 白須淨眞「上原芳太郎『外遊記稿』所収の「南船北馬」」『龍谷史壇』103・104号、1994年。
- (20) 大谷光瑞から本願寺内局に勤務していた神根善雄宛の書簡に「……予ハ頃日本邦ノ新聞ヲ閱スルニ……教海一瀾ノ記事ハ……」とあり、この書簡はヨーロッパ漫遊中にスイス

から投じたものであるが、ヨーロッパの地においても日本の新聞を読んでいるのであるから、当然日本では読んでいただろうと思われる。この史料は白須浄眞先生から提供を受けた。記して感謝する次第である。

(21) 馮天瑜、何曉明『張之洞評伝』南京大学出版社、2009年。

(22) 李廷江「日本軍事顧問と張之洞 1897 - 1907」 亜細亜大学アジア研究所『アジア研究所紀要』27号、2002年。

(23) 『教学報知』1898(明治31)年7月25日。

(24) 宝閣善教『行雲録』一八九九(明治三十二)年一月二十一日付け日記に見える。「午後、湖北道台張斯拘并に張之洞の孫張坤申等、檜原氏と共に来堂……張坤申君も愈々近々の中当学堂に入学する事となりぬ。張斯拘君は五十余歳の老人なるに、巧みに英語を話し、時勢に明なるは遠がは自強学堂の総辦たる威望あり」宝閣善教は福井県の出身で本願寺文学寮卒業後、仙台にある二高に進み東京帝国大学を卒業する。高楠順次郎とともに日華学堂創設に奔走し、堂監となる。『行雲録』のほかに『燈焰録』(明治31年の日記)もあり、「学堂日誌」とともに、当時の中国人留学生の実態を知る貴重な資料である。この資料の入手については、東洋大学の飯塚勝重氏より甚大な協力を得た。ここに深謝する次第である。なお日華学堂については、さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981年。拙稿「日華学堂日誌 1898 - 1900」『新潟大学国際センター紀要』第9号、2013年を参照のこと。

(25) 日華学堂は1898(明治31)年7月に東京帝国大学の高楠順次郎等によって本郷西片町に設立された学校で、設立の趣旨は、「もっぱら清国の学生を教養し、つとめて学生をして、我が言語を速やかに講習し、我が風俗に精通し、並びに普通学科の学を修め、専門学科を治るに、基礎をなして人材の育成を期する」というものであった。

(26) 中島裁之「支那伝道に就て」『反省雑誌』第十年第八号、1891(明治24)年9月10日。なお中島は清国巡遊の際に、「今夏日本に遊ばん」と語った漢口自強学堂の学生張溥を日華学堂に連れて来ている。宝閣善教『明治32年学堂日誌』5月19日付け「本学堂ノ創立当時ノ舎監中島裁之氏、清国ヨリ携へ来レル張溥(十八歳)ヲ伴ヒ来堂……」という記事がある。

第五章 大谷光瑞と台湾 — 「逍遙園」を中心にして—

第一節 本願寺派の台湾開教

(一) 日清戦争と軍人布教

ここでは先ず本願寺と台湾開教の関係を概説しておきたい。台湾と本願寺の関係は、日清戦争前後に遡ることができる。すなわち 1894（明治 27）年から 95 年の日清戦争において従軍布教を展開させたことに始まる。『真宗本派本願寺台湾開教史』（台湾開教教務所臨時編集部 1935 年、以下『台湾開教史』と記す）冒頭に、「抑も本派布教使が足を台湾に踏み入れた最初の目的は、従軍布教にある」（1）と記していることから明らかであろう。ここにいう従軍布教とは、戦争に際して、兵士への慰問、死者への追悼、葬送、戦争に際しての心構えなどを説くことであった。「明治二十七年夏、朝鮮東学党の乱を端緒として、八月一日わが国は清国に対して宣戦を布告するに至った（実際は戦闘が先に起こった一筆者注）が、これより先七月二十五日在韓信徒及び出征軍隊慰問のため、使僧として大洲鉄然、加藤恵証を派遣し、陣中名号千幅・書籍・清酒などを寄贈した。八月七日臨時部を設置し、大洲鉄然を部長とし全国各地に使僧を派して軍資の献金を奨励し、また出征軍人に対する臨時帰敬式は時日を定めず随時執行することとした……十月十四日宗主（本願寺 21 世大谷光尊、明如上人のこと一筆者注）は本山鴻之間において門末一般に親諭を發し、また陸海軍人に対する教諭を印刷し『劍の光』と題し随時寄贈することとした。十一月には再度大洲鉄然を朝鮮に派遣し、軍隊を慰問せしめ、名号を授与し、教諭書数万部を寄贈した。同月二日宗主は広島大本營に明治天皇を奉伺、二十六日在清軍隊慰問兼従軍布教の許可を得て従軍布教使を戦地に派遣することとした。すなわち大本營の許可を得て、まず十二月から木山定生を戦地に派遣し、戦線を巡回して、各營所、病院等を慰問せしめると共に布教・葬儀にあたらしめ……戦線が澎湖島・台湾等に拡大してからは、それらの地方にも布教し……」（2）とあり、さらに『本願寺史』は、

- 一 各兵營を慰問し、本山の意志を伝へ、書籍などを寄贈すること
- 一 各病院を訪問し、患者に対して慰安を与ふること
- 一 適宜の所に教筵を開き、兵士と軍夫に対して安心立命及び衛生・風紀などに関する説話をなす事

- 一 死者の遺骸を火葬若しくは埋葬して葬儀を営む事
- 一 追悼法要を修行する事
- 一 死者の遺骸及び遺物を本人の郷貫に送致する事

と具体的な従軍布教に関する内容を記している(3)。

さて、「澎湖島、台湾等に拡大してからは…」という記載があったが、台湾には「三月(明治二十八年)我が軍澎湖島を占領せんとするに当り、下間鳳城・名和淵海の兩名に命じて同月七日混成枝隊に従属し該地に向はしむ。然るに上陸後悪疫猖獗を極め、下間鳳城は同島馬公港に於て病没し、名和淵海は患者の看護及び死者葬儀の為に頗る困苦を嘗めたりと言ふ……………同年九月、小野島行薫を征台慰問使とし、豊田巍秀、長尾雲龍の兩名を従軍布教使として共に渡台せしむ。然るに豊田巍秀は、南進軍に従ひ、澎湖島碇泊中、悪疫に感染して病死し、長尾雲龍は同年同地平定まで滞在布教せり」(4)とあり、まさに命がけの布教であった。『教海一瀾』は、「台湾の帝国版図に帰すると同時に、本派の同島布教は開かれたり、戦役より未だ五星霜を経ず、布教の効績を此の僅々たる歳月の間に見んとする、素り能くすべき所にあらず、然れども之を短少の時日に較べ之を新拓の難地に於てするに考るときは、頗る見るべきものあり……………」(5)と記し、困難な状況にも拘わらず、熱心に布教活動を行っていることを報告している。

本願寺教団による正式な開教は、翌明治 29 年 5 月まで待たなければならなかった。正式の開教というのは、常駐すべき場所を確保し、台湾全島に布教使を派遣したことによるものである。明治 29 年 3 月に開教使として台北に赴いた紫雲玄範(6)は、駐在所選定のために奔走し、明治 29 年 5 月、台北北門外「至道宮」を借り入れ、ここに「真宗本願寺派巡教使駐在所」を開設したのである。

本願寺教団は、翌明治 30 年 11 月に、布教局長武田篤初を台湾に派遣し、併せて「布教監督職制章程」(7)を定めた。

- 第一条 台湾ニ布教監督一人ヲ置キ親授トス
- 第二条 監督ハ布教執行ノ命ヲ受ケ台湾駐在ノ各開教使ヲ監督シ兼テ之ヲ指揮ス
- 第三条 監督ハ毎年六月十二月ノ両度各開教使ノ考課ヲ具申ス
- 第四条 監督ハ開教使ノ転免処置ニ関シ具申ス
- 第五条 監督ハ開教使ノ願伺ヲ受ケ意見ヲ付シテ之ヲ進達ス
- 第六条 監督ハ台湾布教ノ計画ニ関シ意見ヲ具申ス
- 第七条 監督ハ事務ニ関シ臨時最寄ノ開教使ヲ使用スルコトヲ得

布教に関する環境整備が整うと、紫雲玄範を先頭にして、台北地域の布教活動を進展させた。それに伴い、至道宮の「駐在所」が手狭になってきたので、本山に布教所の拡張を申請した。そこで本山から執行（本願寺の役職名で内局を構成し、寺務を執り仕切る者）蓮居法岸、後藤誠諦の両名が渡台し、新たに新起街に地所を購入し、信徒を中心に寄付金を集め、明治34年4月に「台北別院」が創設されたのである。

今般台北別院設置ノ件ヲ允可シ其發布ヲ命ス
龍谷寺務印

執行長 梅上澤融
稟教 執行 大洲順道
執行 松原深諦

教示第十号

寺法細則第一章第二条ニ依リ台北県太加蚋堡新起街へ別院ヲ設置シ台北別院ト称ス(8)

また台北別院は、本山からの干渉もほとんど受けなかった。その理由は、以下の史料を見れば明らかであろう。

乙達番外 台北別院知堂

其の別院は新領地最初の別院にして直に内地諸別院の例に準じ難く候(9)。

国内の諸別院とは同列に扱うことのできない特例であった。

台北別院の主な任務は、「臨時定例の法要、官民応請の葬儀法事、信徒会館に関する事項…教会講中の布教、崇信徒並に〔本島人〕の布教、特に規定するところの布教」(10)等であった。

明治36年1月大谷光尊(明如上人)宗主の遷化にともない、明治39年2月に尊骨を奉迎することとなった。尊骨は、宗主ゆかりの寺院などに分骨されているが、台湾開教は大谷光尊によって開教の道が開かれたので、分骨されるようになったのである(11)。『教海一瀾』には、「明如上人の御分骨は、愈よ来る二月上旬監院積徳院（大谷尊由のこと一筆者注）供奉の上、台北別院に御分納遊ばさるゝ筈なり」(12)とある。「明如廟」があるのは、そのためである。

(二) 原住民〔蕃人〕布教

本願寺の台湾における開教事業は、単なる布教のみならず、日本語学校を開設したり、〔本島人〕の教育にも携わった。在留邦人、〔本島人〕、台湾原住民〔蕃人〕に対する布

教をも開始した。ここにいう〔本島人〕とは、台湾を占有した日本人による呼称であるが、12世紀以来、持続的に中国大陸の福建、広東地方から渡来して定住した平地人（一般に台湾人）と呼ばれた人たちであり、台湾原住民〔蕃人〕とは、マライ・ポリネシア語族系の山地人である(13)。(表 I)

	平地人	山地人	日本人	外国人	総計
1905年	2,979,018	76,443	59,618	8,223	3,123,302
1914年	3,307,302	85,634	141,835	19,582	3,554,353
1919年	3,454,167	84,514	153,330	22,888	3,714,899
1936年	4,956,564	152,350	282,012	60,973	5,451,863

(表 I) 台湾の人口分布 許世楷『日本統治下の台湾』より引用した。

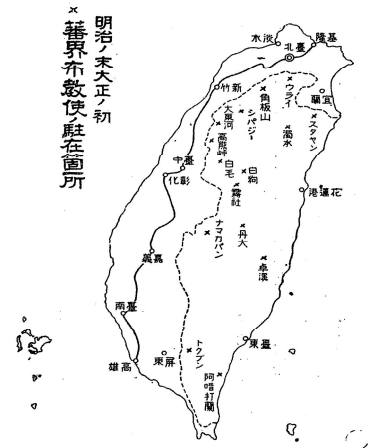
ここでは、台湾開教の特徴の一つとしてあげられる台湾原住民〔蕃人〕開教について見ていくことにする。本項では本島人とか蕃務、蕃人といったような差別的用語を用いているが、本来ならば台湾人と表記すべきであるが、歴史的用語なので〔 〕をつけることにする。

『台湾開教史』には、「嘗て清国時代、化外の民とまで呼びなせし〔土蕃〕、凶暴放縦にして自族以外、天下を知らざる無知蒙昧なる〔蛮族〕は、憐れ我が皇化の至れるを知らず、時々猶ほ跳梁出草することさへ、随所比年の有様であった。当局は或は撫育に、或は懐柔に手を尽すも、常道を以て律し難く、頑迷にして、度し難きによって、明治三十九年、総督佐久間大將は就任と共に、断然膺懲の意を決せるものゝ如くであった。是に於て明治四十二年十月、総督府官制の改革には、警察本署に代うるに〔蕃務〕本署を以てし、大津麟平氏を〔蕃務〕総長とされた。大津総長は深く考うる所あって、今一応宗教方面よりの慰撫教化を試む（・・・筆者）ため、予て紫雲輪番に諮り、又本山の同意をも得て、同年布教使を〔蕃務〕事務囑託として、別記の通り本派より十名（臨濟宗より数名）採用せらるることになった」(14)とあり、理藩総督と呼ばれた佐久間左馬太の時代に、原住民を抑圧して服従させようとしたのである。

総督府の方針に従い、台北別院輪番（別院に置かれる職称で、法主に任命され、院務を統理する者）紫雲玄蕃は、宗教の力で蕃人を懐柔させる方策を採ることとなった。そのために、紫雲は、自ら「〔蕃務〕囑託」の辞令を受けて、本願寺当局へ「〔蕃界〕布教使」採

用の上申書を提出した。その後、〔蕃界〕駐在布教使 10 名が採用され、任地に向かったのである。

前述したように、佐久間総督就任以来、原住民に対する方針の展開があったことは、前述したが、1910（明治 43）年、台北で布教使会議が招集され、総督府〔蕃務〕総長大津氏より、「布教政策の主眼」が示された。挨拶の中で、「知識浅薄、事理を辨へず、一般人類と相互する能はざる不幸なる〔蕃人〕を済度救護する為めに、諸氏は万難を排して、此の事業に従事されるるものにて、その責任の大なるは勿論のこと、その成功の如何は忽ち理蕃計画上



本願寺国際部編『アジア開教史』より転載

に至大の関係を有するもの……当初〔生蕃〕に対する政府方針は、懐柔策を取りたることありしも、實際上不適切なところもあり、遂に此れを変更して、今日となりては〔凶蕃〕は之を武力を以て威圧し、抵抗するものは之を全滅するといふの威力を示し、一旦帰順したるものは、之を撫育し、所謂恩威併行的の方針を以て〔蕃人〕を治むるにあり。故に茲に武力を以て〔蕃社〕を全然反抗の余地なきを悟らしむるや、此の機を逸せず、進んで撫育の方法を取るは、無智の民を治むる上に於て最も必要なり……」(15)と述べ、布教使の活動が、総督府の〔蕃務政策〕と相関することを示した上で、抵抗することは、無駄だということを、併せて教える必要があるとした。そのため原住民に対する教育が重視され、原住民居住地域 6 か所に、日本語学校が創設され、147 名の原住民に日本語教育がなされたのである(16)。

総督府の方針は、撫育による懐柔策を採らなかったが、一部原住民地区の布教使たちは、総督府の方針に従わず、宗教者として、原住民に接する者もあったようである。そのため総督府〔蕃務〕本署は、「〔蕃界〕布教使中不熱心、或は苦情不満などにて、持久の見込無之者あらば、此際解職を断行すべき…」(17)との命令を出した。本願寺派においては、11 名中、4 名の退職者を出すに至った。紫雲輪番は、「我宗派の威信を保つべき現職にありながら、一己の私情を恣にし、自俣の行動を執れる者を、黙過すべきに非ず」(18)、述べるほどであった。組織としての行動よりも、一個の宗教者としての行動が、原住民布教に対してなされたのであろう。「悪人正機」を標榜する真宗ゆえのことであろう。

その後、宗教者による原住民教化の方針は、中止され、警察官の掌握するところとなっ

た。彼らの生活を徹底的に破壊し、「文明」という恩沢を押しつけたことに反発する、原住民の反抗は絶えず起こり、「霧社事件」(19)を以て最高潮に達したのである。

第二節 大谷光瑞の台湾訪問

大谷光瑞の台湾訪問は、意外に遅く、疑獄事件(20)の責任を取り、本願寺管長職及び本願寺住職を退任した後のことであった。自由奔放にアジア各地を遊歴していた頃に当たる。『年譜』を確認しておこう。1917(大正6)年11月13日に、大連から門司に入り、直ぐさま、「アメリカ丸」に乗船し、16日に台湾北部の基隆に上陸した。台北別院輪番を務めた紫雲玄藩が随行していた(21)。『台湾日日新聞』は、大谷光瑞の訪台を、「大谷光瑞師は、十六日入港亜米利加丸にて満州より渡来せり。石井秘書官其他の出迎を受け大阪商船楼上にて少憩の後、午前八時発列車にて台北に向ひ、同八時五十五分台北駅に著せり。台北駅にては、下村民政長官及び信徒等多数の出迎ありたり。光瑞師は、自動車を下りて鉄道ホテルに入れり」と伝えている(22)。基隆港に光瑞を出迎えた当時台湾総督秘書官兼総督府参事官の任にあった石井光次郎は、「大谷光瑞さんは、すでに伯爵を辞し、また最高の僧位である西本願寺の法主も辞して居られ、これから先は、仏跡で収集したいろいろなものを整理して展覧所を作り、学術的な方面で尽くしたいという意向だった。訪台の目的は、それらの収集品を運ぶ手立てをするためだという。今弘法大師といわれたくらいの方だったから、総督府でもみんなで歓迎しようということになり、私が代表で、お迎えに行った。基隆港に行ったら、日本人の信徒がいっぱい、詰めかけていた。大谷さんに「あなたの信徒らしいですよ」というと、「かまわず行って下さい。わたしはものをいいませんから」といわれる。信徒総代みたいなのが、ものいいたげに寄って来たが、なにもいわずにさつと外に出て、用意した車で郵船の支店に行き、汽車の時間まで休まれた。そこへ信徒の代表が来て、私に、ちょっとでもご挨拶させていただきたいという。「大谷さん、会ってやってくれませんか」ととりつぐと、「ほっておいてください。くせになるから。もう私は法主でも何でもないし、一大谷光瑞だから」「しかし、せっかく集まっているのだから」「では駅で挨拶しますよ」といって、どうしても会わない。駅に行ったが、汽車の窓からちょっとその方向を見ただけで、相変わらず何も言わない。何とぶっくら棒なことだろうと思っているうちに発車した。台北駅でも、きっと多くの人々が、待っているだろうし、その人々がかわいそうに思えたから、「台北に着いたら、ちょっとだけでも挨拶されたら

いかがですか」というと、「駅で乗り物に乗りかえるとき、ちょっと挨拶しますよ。駅長室で会うことは、勘弁して下さい」という。台北駅に着いてから、用意していた長官用の馬車に、私と二人で乗ると、みんなが寄りすがって、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と手を合わせる。私も一緒に拝まれた感じだが、大谷さんは知らん顔をしている。練達の士は違うなと思った。眉一つ動かさない。動き出すと、ようやく手を上げた。それが挨拶だったが、こんな挨拶は、ほかで見たことがない(23)と回想している。

台北では、20日に城南小学校で行われた講演会に臨んでいる。「南洋視察談」と題された講演会は、「東洋協会」「南洋協会」「警察協会」「台湾教育会」の主催によるものであった。その後、台湾各地を巡回するが22日には、台中に行き、当地で開催中の「台中展覽会」を見学し、23日は嘉義に赴き、製材所、林業試験所などを視察後、阿里山に向かった。その後、阿里山から下山し、27日には、南部の大都市打狗（高雄）に到着し、セメント工場や製糖工場、打狗港などを見学している。当地で午餐会に臨んだ光瑞は、「打狗は立派な港である。金さへ掛ければどうにでもなる素質を持って居る……此打狗港を発展させて香港の仲継貿易を奪うと云うのが私の時論です……」(24)と語るなど、打狗の港に重大な関心を寄せている。打狗からさらに南部の恒春に向かう予定であったが、変更し台南に向かい、製糖工場や市内見学した後、当地の歩兵連隊場で講演を行った。程なくして台北に戻り、後藤新平の別荘であった「無名庵」に投宿していたが、体調が思わしくなく、台北医院で診察を受けたところ「大腸カタル」と診断された(25)。全快後、台北で「忘年会」や下村民政長官との会談(26)などをこなし、12月31日発の「亜米利加丸」に乗船し、門司に帰港した。

前法主を迎えた台北別院は、前法主に対して如何なる接し方をしたのであろうか。光瑞は、自分は本願寺とは全く関係がないといっているが(27)、台北別院側にとっては、そうも行くまい。突然の訪問であったので別院側の狼狽ぶりがよくわかる。総督府がすべて差配していたようで別院側は全くの蚊帳の外であったようである。ただ光瑞の誕生祝いを別院で催して、溜飲を下げていたようである。『台湾開教史』は、「何分猥下には法務に御関係なく、従って前法主としての待遇を御避ける御様子なりしも、然らばとて別院側にては御遠慮申す訳にもなり難く、従って職員・役員等よりの懇請を以て、十二月二十八日、別院にて御誕辰を御祝申上ぐるこゝとし、会場は院内集会場全部を充て、準備をなすと共に……別院関係の一同を代表して、御宿所に参り御誕辰の賀表を呈した。斯くして同夕六時、自動車にて御来院あり、藤枝連枝も御列席にて紫雲前輪番、佐々木盛徳学院副院長の

御随行であった。狛下には総代より祝辞を受けさせられ、御機嫌殊によろしく、開宴約一時間半、後本堂前にて撮影を許され、復北投へ御帰りになった」(28)と記している。

その後光瑞は、1930(昭和5)年12月23日、香港に向かう途次、再度台湾を訪問している。『年譜』には、「十七日神戸日枝丸にて香港に向ふ。二十三日上海方面視察のため渡航中台湾基隆に寄港、農事試験場視察、総督府主催の招待会に出席、本派台湾別院に立寄り、台北ホテルの門信徒茶話会に臨む」(29)とあり、多忙な中、別院に立ち寄り、新本堂建築工事などを巡覧している(30)。

さらに、1935(昭和10)年2月16日に、三度台湾を訪問している。今回は児玉拓務大臣(児玉秀雄、元台湾総督児玉源太郎の長男―筆者注)の斡旋によるものであり、総督府殖産局長である中瀬拙夫氏等が同行していた。『台湾日日新聞』のインタビューに、「台湾はこれで三回目、主として熱帯農林産業の視察にやって来た訳です。二十日まで台北にみて各方面の調査を済ませ、恒春まで足を延ばし東海岸の方も廻って来ます……」(31)と答えている。台北では、大谷光瑞の個人後援会「光瑞会」も組織された(32)。22日には、嘉義に向かい、仏教講演会を開き、翌日には台南に入り、サトウキビ農場を視察し、夕方高雄に向けて出発している。24日、水産試験場及び、海軍油田を見学している。27日には知本に行き、その後、東海岸を上り花蓮に入り、花蓮からタロコを經由し、台北に戻った。

今回の台湾訪問は、「熱帯農業」の調査であったが、台北の本願寺別院では「台湾の経済的価値」(33)と題する講演を行っている。台湾は、熱と光に恵まれているが、産業開発はまだ遅れており、四分の一程度の開発しか行われていないという。最大の原因は、鉄道や、道路を初めとする交通機関のインフラが遅れているということ述べている。

同年10月には、「熱帯産業調査会」(34)委員等とともに、神戸解纜「高千穂丸」で基隆港に入った。19日から23日まで総督府主催で「熱帯産業調査会」が催され、その会議に出席するためであった。会議の主な内容は、日本の「南進策」を直接援助し、南支南洋と提携し、香港の中継貿易を、台湾に奪取しようということであった。台湾が、「南進政策」の重要な拠点となったのである。

第三節 「逍遙園」について

本願寺の台湾別院は台北にあったが、一方台湾南部の高雄には、「逍遙園」と呼ばれる

大谷光瑞の別邸があった。光瑞は、「熱帯農業」に関心を持ち「農は国の本」(『熱帯農業』)という信念のもと、台湾で稲作、製茶、製糖、製材などを手がけた。また「熱帯産業調査会委員」に就任し、また「台湾拓殖会社」設立にも関わり台湾の産業振興を積極的に唱えていた。

(一) 大谷光瑞と高雄

高雄は、前述したように元来「打狗」(台湾語で Takau)と呼ばれていたが、1920(大正9)年に総督府によって「打狗」と発音の近い「高雄」に改称された。

光瑞が居した高雄は、「都市の勝景としては台湾第一」(35)であり、また港湾としての機能は「中継港として第一位たると重軽工業地として我領土中第一流に属す」(36)のものであった。前節で触れたように、1917年初めて光瑞は、高雄(当時は打狗)を訪問し、良港に期待をかけ、香港に取って代わることのできる良港だと見做した。光瑞の卓見は賞賛されるべきであろう。

1930年前後から日本政府は、資源確保の観点から南洋を重視し、とくに南洋からの石油や資源などを確保するために、いわゆる「南進論」を積極的に推し進めていた。その中で「中継港」として浮上してきたのが高雄であった。

光瑞は、高雄に居住することを考えていた。前述した「熱帯産業委員会」会議終了後に高雄に向かった。当時高雄州の知事を務めていた内海忠司は、「十月三十一日 午後四時半、大谷光瑞師を駅に出迎ふ。同車、寿山館に至り、一週間滞在の由なり……」(37)と日記に記し、光瑞に随行し、屏東の農事試験場、日出村の煙草耕作移民地、台湾製糖所などを廻っている。11月11日付けの日記には、「午前八時戸田師来訪。大谷光瑞師の手紙を持参す。同氏居宅敷地の件なり」(38)と記している。1936(昭和11)年2月29日には、「大谷師十時半来訪…大谷師住宅の件、打ち合す」(39)とあるなど、光瑞の居宅選定に奔走している様子がうかがえる。その後、『台湾日日新聞』は、光瑞の土地検分を伝えている。「高雄州下に於て山茶栽培を始め、各種事業を起すべく高雄市内に居住することに決定した大谷光瑞氏は住宅敷地選定方を内海知事に依頼してみたが、州当局にて選定した数カ所の候補地を過般大谷氏来高滞在中実地視察をなした結果市内大港高雄刑務支所前の水田一万七千坪を買収することに決定した……」(40)と報じている。後に「逍遙園」が建築される大港埔の土地のことである。

(二) 「逍遙園」について

1940(昭和10)年11月1日「逍遙園」の開園式が、当地の名士を招待して盛大に行われ

た。参会者には台湾島を描いた皿（周囲にはバナナ、サトウキビといった台湾の名産がデザインされている）が配布されたという。宗藤高雄市長は挨拶の中で、「わが高雄市は新南群島を編入して、海上数キロに互る面積を有し世界に誇る大都市となり更に世界的人物たる猯下をお迎へして二拍子揃った」（41）と述べるなど、朝野を挙げて「逍遙園」の開園を歓迎した。

「逍遙園」は、おおよそ 17000 坪の敷地に、建坪 250 坪余り、周囲には農園が広がっていた。建物は、二層式の和洋折衷住宅で、鉄骨と木造の梁によって支えられ、一階の防空壕は、周囲をセメントで固められていた。建築資材の大半は、京都三夜荘（本願寺大谷家の別荘）より運搬されたものであり、また三夜荘の一部が移築された。建築に関わった大工も日本から連れて来られた者であった（42）。ただ瓦や木材などの一部は、台湾の鶯歌で焼かれたものであり、総督府の営林署から切り出されたものを使っていた。

「逍遙園」の名前の由来は、二つ考えられよう。すなわち「逍遙」という言葉は、何ものにも束縛されることのない、絶対に自由な人間の生活という意味であること（43）から、本願寺法主辞任後、自由奔放に生きたいという光瑞の考え方を反映したと考えられる。他方、中央アジア亀茲国の鳩摩羅什の故事に、「姚興時鳩摩羅什至長安七年正月姚興如逍遙園引諸沙門聽什説仏経」（44）とあり、「逍遙園」は、仏経を聞信する場所であるということから、「逍遙園」と名づけたのかも知れない。

第四節 大谷光瑞の夢

（一）大谷学生

光瑞は、「逍遙園」では「大谷学生」と呼ばれる門下生と寝食を共にしていた。「逍遙園」一階には、学生用の講義室があり、二階には食堂が用意されていた。彼らは「逍遙園」に併設されていた宿舎に住んでいた。ここにいう「大谷学生」とは、中等教育に準ずる科目を勉強し、家族の一員として養育され、光瑞の事業を補佐する 12 才から 15 才までの学生であり、「国家的人間」の養成を目指したものであった（45）。ただ、台湾「大谷学生」は、大連旅順、上海時代とは異なり、農作業が主な仕事で、当時の学生であった岩佐博男氏は、「一日の生活は午前六時に起床し、食事を摂った後、農園に出て朝から夕方まで米、落花生、トマト、ナス、サツマイモなどの作物作りのために水やり、肥料、雑草刈に終われる毎日であった……自分たちが農園で収穫した米、野菜で自給自足を行っていた米の収

穫量が少なかった時には、サツマイモの葉を炊き込んで食べた」(46)と回顧されている。台湾時代は、岩佐氏が回顧されているように、毎日が農作業の連続であり、授業などは行われていなかったようである。ただ学生たちは、早稲田大学の講義録を自学自習していたり(47)、また高雄商業でマレー語を教えていたインドネシア人にマレー語を学ぶなどしていたようであるが、系統的な教育は実施されなかった。

(二) 大谷農園

大谷光瑞は、「熱帯農業」に関心を示し、「茶園」「果実園」「缶詰工場」「蔬菜園」などを自ら経営した。とくにバナナは、長崎に送り、そこから上海に輸出するように光瑞自らは手を整えたのである(48)。



茶の栽培については、「今度の視察の主要目的の一は、野生茶の状況調査だが、未だ新竹方面を観てゐないから正確に全般的の事は、そのあとでないと云へないが、中部、南部にはなかなか広く分布して居る。高度五百米以上、一千五百米以下の山地は全島栽培好適の土地で、台湾は茶業の上に実によく恵まれてゐると感じた。内地人、〔本島人〕を問はずまた〔蕃人〕を指導してやっても結構だし、此の天然茶を利用して茶業の発展を図ることは台湾の山地開発上最も有効適切なことと思ふ」(49)と述べ、茶の栽培に台湾の将来をかけている。自ら台中州新高郡魚池及び埔里街方面の高地を払い下げて貰い、紅茶の栽培に当たっていた(50)。また果樹園についても、屏東郡麟洛の農園で、レモンなどを栽培するとともに、バナナ、パイナップルなども大谷農園で栽培し、缶詰工場を併設していた。蔬菜についても大谷農園で栽培し、これを満州方面に輸出するという。バナナは、台湾の産物中、第一であるとし、15万トン以上生産し、80%は輸出しているという。またパイナップルについては、生食用よりも缶詰にした方がいいと提言をしているほどである(51)。

光瑞は、何よりも台湾経済の自立を考えていた。米や茶、甘藷、柑橘類の栽培、それに製糖など地の利を活かし、輸出することによって自立が出来ると考えたのである。そのために前述したように、「熱帯産業調査会委員」になり、また台湾における経済の振興、工業の発展、交通施設の拡充を図るために設立された「台湾経済審議会委員」(52)にも選出されたのである。

(三) 飛雲閣との類似性

「逍遙園」には、本願寺の「飛雲閣」と類似するところが多々見られる。一つは唐破風の様式である。屋根の妻に取り付けた二枚または一枚の厚板を破風というが、中ほどが盛り上がり左右がほぼ水平となる反転曲線を持つものを唐破風という。門や向拝、玄関、車

寄せなどに用いられることが多い。本願寺の唐門は有名である。

写真 (A) は「逍遙園」竣工時のものであるが、で囲んであるところが、唐破風の様式である。京都本願寺に飛雲閣に残っている唐破風様式の写真 (A') を見ていただきたい。同様にで囲んである部分である。寺社仏閣なら唐破風様式は珍しくはないが、「逍遙園」のような個人の住居では非常に奇異に感じる造りである。

次に写真 (B) を見ていこう。この写真は、「逍遙園」の玄関と車寄せの部分である。現在は車寄せの部分が、一部壁になっており、往時のものとは異なっている。一階から二階へと延びる階段が非常に狭くなっている。写真 (B') は、飛雲閣の玄関である。飛雲閣は茶室なので、屋形船の小さな出入り口（にじり口）が玄関となっていて、船寄せ場と一体になっている。この構造が類似性を持っている。さらに写真 (C) を見ていこう。「逍遙園」のもう一つの入口である。円形の窓があるのがわかる。飛雲閣の玄関の上部には同様に円形の窓があるのが見える (C')。建物の入口に円形の窓を配している。

最後に写真 (D) を見ていただきたい。ここは「逍遙園」の二階部分である。玄関から階段を上った所に待合室があり、その奥の部屋に通ずる所にある「火灯窓」と呼ばれる部分である。「火灯窓」とは、数個の曲線からなる形の窓のことで、禅宗寺院などによく見られる形式である。ここは鮮明に形を残している。写真 (D') は、飛雲閣二階の「火灯窓」の部分である。ここにも同様の曲線からなる「火灯窓」に類似性が見られる。

その他「明り障子」や光瑞の寝室などに見られる「半月形の壁」などには中央アジアの建築物を彷彿させる造りもあるようだが、「逍遙園」の破損がひどく比較するのは困難な状態である。以上簡単に比較をしてきた訳であるが、「逍遙園」と本願寺「飛雲閣」には、同様の意匠を見ることができた。上海本願寺や築地本願寺などの建築物には、インド風の様式を含んでいることは知られているが、これは大谷光瑞の想い、そして願いを顕したものといえよう。同様に「逍遙園」も、光瑞が幼いころに走り駆け巡った本願寺を顕したものでなかろうか。

「逍遙園」には、「大谷学生」「大谷農園」それに原体験としての「本願寺」があるように思える。明治大正と激動の時代を走ってきた光瑞にとって、「逍遙園」は自分の夢を具現化する場所であったと思われる。



(A)



(A')



(B)



(B')



(C)



(C')



(D)



(D')

(注)

- (1) 本願寺台湾別院編『真宗本派本願寺台湾開教史』本願寺台湾別院、1 頁、1935 年。以下『台湾開教史』と略す。
- (2) 明如上人伝記編纂所編『明如上人伝』、明如上人廿五回忌臨時法要事務所、885 ～ 886 頁、1927 年。
- (3) 本願寺史料研究所編『本願寺史』第 3 巻、368 頁。
- (4) 前掲書、『台湾開教史』2 ～ 3 頁。
- (5) 『教海一瀾』17 号、1898 (明治 31) 年 3 月 26 日。
- (6) 紫雲玄蕃 (? ～ 1933) 大分の人。1895 (明治 28) 年に本願寺が創設した「清韓語学研究所」の第一回の卒業生といわれる。台湾原住民布教に際して、紫雲は懐柔策を主張するが、総督府は討伐策を取り対立した。1899 (明治 32) 年には、厦門に赴き布教を始める。清国開教の嚆矢となったのである。その後 1905 (明治 38) 年には北京本願寺に転じ、日本人小学校を開設した。
- (7) 前掲書、『台湾開教史』5 頁。
- (8) 本願寺「本山録事」明治 34 年 4 月 15 日。(本山録事とは、本山が出す公式の通知や命令のことで、任免に関する辞令なども含んでいた。『教海一瀾』の巻末に付されていた)
- (9) 前掲書、『台湾開教史』34 頁。
- (10) 前掲書、『台湾開教史』54 頁～ 64 頁。「台湾は上人の寵児」(56 頁) とある。
- (11) 同上書、33 頁。
- (12) 『教海一瀾』295 号、1906 年
- (13) 許世楷『日本統治下の台湾』東京大学出版会、5 頁、1972 年。
- (14) 前掲書、『台湾開教史』101 頁。
- (15) 同上書、107 頁。
- (16) 同上書、107 頁。
- (17) 同上書、109 頁。
- (18) 同上書、110 頁。
- (19) 霧社事件とは、1930 年 10 月に台湾中部能高郡霧社地方の原住民が蜂起し、日本人 100 名以上を殺害した事件。当局は軍隊を動員し、討伐行動を起こし、戦死、自殺者を含めて 644 名の原住民を殺害した。

(20)疑獄事件は、1914（大正 3）年、本願寺教団が、真宗生命保険会社や慈善会から資金を流用し、また神戸須磨にある大谷家の別邸を宮内省に買い上げて貰う際に、宮内省に多額の金品を贈ったという事件である。宮内省を巻き込んだ事件でもあったので、光瑞はその責任を取り、本願寺住職、本願寺派管長の座を辞したのである。龍谷大学大宮図書館に『西六條幻夢抄』と題する疑獄事件に関する新聞の切り抜き帳がある。

(21)『台湾日日新聞』1917年11月18日号に、紫雲玄蕃の訪台を伝える記事がある。「新起街本願寺別院を創設せし功労者紫雲玄蕃師は、這般大谷光瑞師に従ひ来台中なるが……同師は領台以来前後十余年台北に駐在し、現在別院の本堂庫裡其他敷地等の不動産も大部分は同師在任中の遺物なり。随って帰依信徒も尠からざれば定めし参聴者多かるべしと」ある。

(22)『台湾日日新聞』1917年11月17日号。

(23)石井光二郎『回想八十八年』カルチャー出版社、177～178頁。1976年。

(24)『台湾日日新聞』1917年11月28日号。

(25)同上、12月6日、12月9日号。

(26)同上、12月28日号。

(27)前掲書、『台湾開教史』121頁。

(28)同上書、121頁。

(29)鏡如上人七回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』104頁、1954年。

(30)前掲書、『台湾開教史』121頁。

(31)『台湾日日新聞』1935年2月18日号。

(32)同上、2月22日号。

(33)同上、3月3日号。

(34)「熱帯産業調査会」は、台湾総督府によって創設された政策組織である。1935年11月に台北で会議が行われ、台湾産業の発展、工業化の促進などを建議した。また三つの特別委員会があり、「貿易振興」「工業振興」「交通や文化施設の改善」などが討議された。台湾が南進基地の中核を為すということが決められた。この献策によって「台湾拓殖株式会社」が設立された。

(35)大谷光瑞『台湾島の現在』大乘社、626頁、1935年。

(36)大谷光瑞『大谷光瑞興亜計画』第5巻、大乘社、158頁、1939年。

(37)近藤正己・北村嘉恵・駒込武編『内海忠司日記』京都大学学術出版会、644頁、2012

年。

(38) 同上書、646 頁。

(39) 同上書、667 頁。

(40) 『台湾日日新聞』1936 年 3 月 19 日号。

(41) 同上、1940 年 11 月 2 日号。

(42) 京都にある「ニカク工務店」のホームページ (<http://www.nikaku.co.jp/profile/history.html>) に、「西本願寺 22 代門主大谷光瑞猯下の台湾高雄別邸逍遙園新築工事」に関わったという記事がある。

(43) 福永光司『莊子』『新訂中国古典選』7 卷、朝日新聞社、1971 年、によった。

(44) 崔鴻撰「後秦録」『十六国春秋』台湾中華書局、89 頁、民国 58 年(1969 年)。

(45) 小出亨一「大谷学生と瑞門会」拙編『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡ー』勉誠出版、457 頁、2010 年。

(46) 同上書、463 頁。

(47) 加藤斗規「大谷光瑞と台湾」拙編『大谷光瑞ー国家の前途を考えるー』『アジア遊学』156 号、勉誠出版、126 頁、2012 年。

(48) 『台湾日日新聞』1930 年 4 月 11 日号。

(49) 同上、1935 年 11 月 10 日号。

(50) 同上、1936 年 3 月 26 日号。

(51) 同上、1936 年 11 月 16 日号。

(52) 「台湾經濟審議会」は、台湾における工業の振興、交通施設の拡充整備を計る目的で設置されたもので、27 名の委員からなり、会長には台湾総督が就任した。

第六章 大谷光瑞とシンガポール本願寺

第一節 シンガポール本願寺

(一) 本願寺と南洋

本願寺とシンガポールを含む南洋との繋がりは非常に早く、すでに1898(明治31)年には、巡教使土岐寂静・朝倉明宣の両師が本願寺の命を受けて、南洋に宗教視察のため訪れている(1)。もちろんこのことは来るべき海外開教に備えてのことであった。

さらに本願寺と南洋の関係の先鞭を付けた者として上原芳太郎(2)があげられる。上原は大谷光尊の命を受けて、1897(明治30)年の12月に、探検家小嶺磯吉(3)とともにニューギニアを目指し、先ず北オーストラリアの木曜島に向かって出発した。龍江義信と阿部一毛を伴ない、その後、ニューギニアに向かい、そこで英領ニューギニア総督に「日本はホルモサ(台湾)を占有し、更にコレア(朝鮮)に手を着けつゝある。然るに君達は何故に遠く赤道を越え、我が領土を志すか」と言われたが、最後には日本人にも土地所有権を与えると声明したという(4)。上原は、その後、同年9月から翌年2月にわたるまで再度南洋を旅行している。この時の様子は『外遊紀稿』(蘭領印度)によって窺い知ることができる(5)。

本願寺の海外開教を積極的に推し進めたのは、時の法主であった大谷光尊(1850年～1903年)(6)であった。彼は極めて進歩的な考えの持ち主で、明治初期の廃仏運動に抗するとともに、宗門内の新進僧侶をヨーロッパやアメリカ、アジア各地に派遣したり、また本山運営に議会制度を取り入れるなど、宗門の近代化に努めた。光尊は、日清戦争後、海外開教の機運が高まってきたので、嗣法(法灯を嗣ぐべき者のこと)鏡如(大谷光瑞)とともに、積極的に海外開教に出たのである。アジア開教に限っていえば、1886(明治19)年にロシア沿海州ウラジオストクに多門速明を派遣したことに始まる(7)。北の要地にまず本願寺を創設し、次に南の地にも勢力を伸張し、最後に中央部すなわち中国を視野に入れて、各地に本願寺の拠点を作り出していったのである。

(二) 本願寺出張所の創設

シンガポール本願寺に話を戻そう。初めてシンガポールの地に本願寺の命(8)を受けて派遣されたのは、佐々木千重であった。佐々木は、福井県の生まれで、1894(明治27)

年、本願寺の設立に係る文学寮高等科を卒業している(9)。その後、大谷光瑞の援助によって、1896（明治29）年9月、南洋渡航を企てて、翌30年より木曜島で布教を開始したが、うまく行かなかったようである(10)。そして、自費でマレー語を学びに来ていた佐々木芳照とともにシンガポール・ヴキクトリア街に布教所を設立した。その時の様子を佐々木千重は、『教海一瀾』に、「當布教場は昨年八月、小生始めて山命を奉じ、渡航の上、市の中央、ヴキクトリア街三百七十七號に現はれ、已來小生及び馬來語通譯生佐々木芳照の二名の駐在となり、夫々弘教傳道の法を講ぜしが、其當初は僅に手を在留日本人間の子弟教育に着けたるに止まりしも、遂に場内多少の増築を施し、漸く會堂の形と爲し、開場式を本年一月二十八日舉行することゝ爲れり、場は本屋、食堂、浴室、料理屋、便所の五棟に分かれ、就中本屋は七間四面、洋風二階立の木造にして、階上を客室及び住宅と爲し、階下を會堂學校事務室の三とす、各室の構造配置等、假布教場用としては、恰かも新たに建築せしが如く至極適當し尚ほ屋の前後には廣き庭園を有し熱帶異様の樹木は、四時不絶異種の花果を結び、庭前の門戸亦高くして粗なるに非ず、而かも其周圍諸宗の會堂寺院を以て満たさるゝは奇中の奇に候」と記している。さらに1月28日舉行の開場式については「本年（1898（明治32）年）一月廿八日午後二時、豫て本場の開場式に付、樓上樓下に控へたる多數の參集者は、振鐸數聲、式の開始を告ぐるを、同時に式場たる樓下の會堂に着席したるも、其數の意外に多かりし爲め、堂内装置の腰掛は直に填充して止むなく隣室まで佇立を請ふに至れるは、嘗て日本人の會合として當地に見ざるの盛況なりき、固より人を貴賤貧富に由りて別つ可き筈なく宗教界の事なれば、日本人としては帝國領事を始として、醫師商人より其他妖嬌を競ふ女子に至るまで、外國人としては錫蘭、支那、緬甸、其外各種の人種、一切平等入り交じりて、一堂に會せしことなれば、目も綾に珍らしき光景、中々本國に於て見能ふ所に非ず、就中特に記す可きは錫蘭の高僧六名、他に緬甸の高僧一名都合七名が、彼の印度大菩提會長ダールマパーラ氏と共に、此式場に參列したることゝす、彼等は曩に印度北部テライ地方に於て、新たに發見せられたる釋尊降誕の地より得たる遺物送骨等の英政府より、暹羅、錫蘭、緬甸の三國に分配を蒙ることゝなり、錫蘭佛徒教代表者此一行七名が、右拝受の爲、暹羅に到り、歸途幸に此式場に列することを得たるなり、さて式は小生自ら教壇に立ち、佛前に禮拜誦經を以て始まり靜肅の間に進行して後參會者に對する小生の挨拶并に將來本場の起さんとする布教上の計劃、及希望等に關する一場の演説を爲し、續ひてダールマパーラ氏は氏の

經歷談及印度宗教事情、并日本佛教徒に對する希望等の演説（佐々木千重通譯）を爲せり、次に布教場附屬教育部生徒總代鶴山善太郎の祝詞朗讀次に來賓中よりドクトル中野光三氏の演説ありて、終りを告げ、別室に於て立食の饗應あり、又錫蘭人の佛陀伽那寫眞畫配布等ありて、賑々しく同日午後五時太陽の入ると共に閉場を告げたり」（11）と記し、釈迦誕生の地から発見された遺骨をシヤムから持ち帰る途中で新嘉坡に立ち寄ったセイロン仏教会代表団と、セイロン出身でインドの高名な僧侶であるダルマパーラ氏が開場式に参列された喜びを語っている（12）。

シンガポールにおける本願寺は、平素の布教や、読経などの仏教儀礼は固より、前述にあるように、附屬教育部や、その他の様々な活動から成り立っていた。「余が目下の事業たる何分此大區域地に在りて、漸く一名の駐在勤務なれば、計畫通り事業をして満分に進歩せしむる能はざるも、定期説教として毎月第一日曜及十五、二十八日三回を開き、其の外機會を得れば、地方巡教として本港を隔て、三四百里内外の各都邑に出張布教を試み、已に本月も馬來半島の舊都コーランボー府日本人設立厚德會の招聘に應ぜしが、余は其當時盛大な歡迎を請けたり」といい、また教育部は「教誨の傍ら日々六時間づゝ四十餘名の邦人、支那人等の男女の子弟を預かり諸種の學課中邦人には重に英學、支那人には加ふるに邦語學を以てし、妻は専ら裁縫の一課を擔任せしむ夜學研究生亦數名を存する爲め、實に晝夜忙殺さるゝ計にて、佛陀洪恩の萬分の一を報ぜざる可けんやと……」（13）という仕事の内容を紹介するとともに、法務の合間を縫ってボランティアとして英語・日本語などを教えていたことがわかる。

本願寺文學寮で佐々木千重の後輩に当たる清水黙爾(14)は、インド・ネパールへの留学途中シンガポールに立ち寄っているが、当地では佐々木の世話になっている。清水の日記には、「久しぶりに家の中に寝た、船中の苦痛とは雲泥の相違である……日本人の家は百軒には足らない、夫でも布教者が熱心に布教をすると、仲々善く世話をするさうだ。日本人の中では佐々木君の盡力で、共濟會といふ毎月廿五錢掛の會が出来て居て、會員が死ぬと、五十圓の葬式料を會から呉れるので、立派な葬式が出来さうだ……佐々木君は、朝は八時から午後二時まで小學校風の教授をなし、夜は七時から十時頃まで日本の青年に英語を教授されて居る。毎月第一の日曜日に説教がある。令閨は、日本の若い婦人に裁縫を教授されて居る。夜和洋兼帶の料理を喫しながら、文學寮時代の無邪氣な生活の懷舊談やら、同窓の友人の變遷の談に時の移るのも知らなかった」（15）と語って

いる。

(三) その後の本願寺

シンガポール本願寺布教所開設に尽力した佐々木千重は、生涯海外開教の仕事に関係することとなったが、佐々木氏以後、本願寺から派遣された僧侶の記録は『海外開教要覧』に少し記述があるだけで、正確とは言い難い。というのは、戦前のシンガポール日本人社会を鳥瞰した『南洋の五十年』の中に、本願寺の記載は多くはないが、記されている僧侶名は『海外開教要覧』には見当たらないからである。

その『南洋の五十年』を見てみよう。「明治三十八年本願寺から太田周教師が派遣され、布教の傍ら熱心に児童教育等にも力を盡して居られたが機縁熟せざりしものと見へ布教所を開設するに至らず間もなく歸朝され暫く其儘となつてゐたのが、大正四年桑野淳城師來星ベンクレーン街に眞宗教會粗創立六年愈々本願寺出張所となり婦人會も出來て何事にも奔走してゐたのであるが、同師歸朝後中村順三師時代、經谷某別に布教所の看板を掲げ信徒も亦分裂して見憎い宗門の恥を曝してゐたのであるが、渡邊師統一融和の任を帯びて來星し、再び、兩派を併せて布教所を擴張し現在のところに移轉し、同師歸朝後井上師一時主任を代理し現在の清水師に及んで居るのである」(16)との記述があるが、前述の『海外開教要覧』には、太田、桑野両氏の名前は記載されていない。シンガポール本願寺のいざごさは佐々木千重の時代からもあったようである。「譯も分らざる偽稱肩書を持して日本西本願寺天下佛教有信講總代何々杯言觸らし大々的名刺を以て、當地方を横行せし僧侶四五年前此地に顯はれ、直に僧にはあらで密航婦誘拐者なりとのこと露顯し、或地に説教眞最中の一婦人より袈裟を剥ぎ取られし、大惡無慚の者、其外復た西本願寺南洋宗教視察員某と云ふ、嘘八百の或賽錢主義の僧一時讀出して何時も西本願寺を擔ぎ出されしは、尤も驚き且つ余に大に困難を與へしが、爾來此種の妖僧漂着滅滅し、些しく日本佛教の聲價回復し來りたるを以て、余は時々日本本願寺傳道の行動に付、當地タイムス新聞に投書するに近來稍々世の耳目を惹く緒に付けり……」(17)と記しているように本願寺にとっては迷惑な話であるが、前述したようにお家騒動がたびたびあったのであろうか。

(四) 渡邊智修という人

まず渡邊智修師を簡単に紹介しよう。師は、1877（明治10）年7月1日新潟県中蒲原郡大江山村字北山（現在新潟市江南区北山）の浄土真宗本願寺派誓岸寺に生まれた。本願寺

文学寮高等科二年修了ののち、明治33年4月高輪仏教大学を卒業した(18)。その後、熊本人吉別院副輪番、樺太大泊別院輪番を勤め、昭和7年2月にシンガポール出張所主任を命ぜられ、帰国後の昭和11年10月には大阪堺別院輪番となり、昭和16年2月帯広別院輪番として勤務中に当地で死去された。今回使用した『日記』は、昭和8年の1年間であるが、シンガポール時代の様子が克明に記されている。シンガポール本願寺での行動がよくわかる。

「本山録事」には、昭和7年2月28日付で渡邊智修師に、「新嘉坡駐在ヲ命ス」(19)とあるが、昭和8年1月4日付けの『日記』(20)には、「本山より來電 新嘉坡本願寺出張所駐在の電命なり 家内相談の上御請の返電す 三月下旬赴任の要請す」とあるように渡邊は3月下旬のシンガポール赴任を望んでいたが、本山側は、かなり急がせていたようである。「今月中に赴任せよの命なり」(1月5日付)、「夕本山より來電 謄本及証明書持参上京すべしとなり」(1月10日)とあり、本山側もかなり急いでいたようである。翌日早速上洛し、本山執行所へ出所し、「教務部にて色々内情を聞きしに従来よりより経緯を聞き暫く赴任の事を考へせしめられしが執行より執行の会議室へ出頭を請求され特に赴任の事を頼まれし為遂に大なる決心の下承諾す」(1月12日付)とあり、何かわけのありそうな事が想定されよう。翌13日には伏見三夜荘に、大谷光瑞前猯下を訪問している。「夕伏見三夜荘に前猯下を御伺し御指し図を受くる所あり 猯下は是非に行けよセメテ三年の辛抱をすれば褒美をやるとの仰せ殊に猯下上海御飛錫の由にて可成二月五日を九日發に延期し上海よりも香港まで送り呉るるからとの御仰せらるるは実に御礼を申し上げる言葉さえ出でず夕飯をよばれて宿に帰へる」とあり、光瑞に激励されている事がわかる。光瑞自ら予定を変更してまでも送り届けるということは、かなり特別扱いしていたということだろう。その後、新潟に戻り、シンガポール行きの荷造りや暇乞いに忙しく、新潟を発つのが2月5日であった。「新嘉坡赴任の為今日午後二時亀田駅出發す」と記し、2月9日の『日記』には「三時伏見三夜荘の猯下と共に諏訪丸に同乗 家内三人と渡航す」とあるので、実際の命令よりはおおよそ1年遅れでシンガポールに赴任したことになる。

さて渡邊師一行や光瑞を乗せた諏訪丸は、2月9日、神戸を解纜し、一路上海に向けて出發した。船内では、光瑞からの開教上の注意点などを受けていた。「昼猯下より家内へお茶を下さる 之より先抹茶をたて猯下へ差上ぐ 別室にて拙者の将来家内の健康上の御注意雅枝学校に入る手續等便宜の御意見其他開教上に於ける心得事項等親しく手を引く様より微細の事にまで御教へるなり 親の親切にも勝るいはり有り難かりし日なり」(2月9日付)と記して光瑞の配慮に感謝している。

2月17日香港着、「今朝七時香港に着船 朝食船中にて八時供食せらる 九時光瑞猯下三井物産支店長宅におなりになる 拙等も上陸して香港の市内及山上までドラゴン港内を一千三百尺の上より俯瞰し昼飯を千歳館にすませ猯下の許を訪ひお暇乞いを申上げ二時乗船す」(2月17日付)。その後、シンガポールには22日に到着した。「今日十一時新嘉坡に到着 拙者赴任の通知も電報も本山よりなき為との理由にて誰れも迎への者一人も居らじ幸にセンターホテルの五人來たり呉れ直ぐ様梶尾七太郎氏に電話して迎へに來て貰ひ漸く本願寺出張所に入る 兼ねて之ある事と豫想もせしこと故(・・・筆者)扱て前後策を畫策す 中村順三はサクラホテルへ引移る先づ第一の有利を占む」(2月22日付)シンガポールに到着した日からもめ事に巻き込まれそうになるが、渡邊師はそのことについては覚悟の上の赴任であった。

シンガポール本願寺出張所は前述したように、中村順三師が主任を務め、布教使経谷師との間に確執があったようである。渡邊師は、まさにこの確執の調停役を任されたのであろう。

渡邊師がシンガポール本願寺出張所主任時代に成し遂げた大きな仕事としては、前述したように、本願寺の内紛の一扫であり、また本願寺本堂移転があった。1935(昭和10)年5月に本堂竣工式及び御本尊遷仏法要が営まれた。『教海一瀾』に言う、「五月十二日午前十時から渡邊智修氏の調聲にて法要を嚴修し、信徒代表西村武四郎氏の焼香、柴田總領事の祝辭があった。この日階上廣間の女子青年會の生花は、日本趣味を満喫せしめ非常な好評を博した」(21)とある。そのほか、スラングンにある日本人墓地(22)での葬式活動、そして日本人会への入会や本願寺出張所日本人役員会の組織立ち上げなどを行った。さらに同年9月のシンガポール郊外のバトパハー市に本願寺の布教所を設立したことが上げられよう。『教海一瀾』は、この時の様子を「新嘉坡より北方百哩馬來半島ジョーホール州バトパハー市は中部西海岸のの都市にして、近時邦人の移住激増に伴ひ「本願寺布教所」開設希望の切なるものあり。本年八月十日付にて、新嘉坡駐在渡邊智修氏より本山に對し設立申請中の處、本山にては九月三日付にて許可せられ、御本尊並に佛具等を下附せられた」(23)と伝えている。

渡邊師はこの布教所の設立を最後の仕事にして、日本に帰国することになる。「本山録事」は、1935(昭和10)年6月を以て「依頼新嘉坡駐在ヲ解ク」(24)と命じているが、渡邊師の帰国は、「去る昭和七年末新嘉坡駐在を命ぜられた、本派本願寺布教使渡邊智修氏は、同地に滞ること四年、其間同所の移轉、改築、更らにバタパハ方面の新教線を開拓

し、功成り名遂げ、今回同地駐在を辭し、十一月廿一日同地出發歸朝の途につかれた」(25)と伝えるように11月のことであった。

(五) 昭南本願寺

シンガポールは、イギリスのアジア経略の一大拠点であった。ただ日本の大東亜共栄圏の建設や南進論により、日本軍はマレー半島からシンガポールを窺う形勢となってきた。イギリスはA B C D対日包囲網あるいは対日資金凍結などでマレー及びシンガポールを死守したので、シンガポールから多くの在留邦人が日本に引き揚げ始めた。本願寺とて例外ではなく、1941(昭和16)年6月に最後の輪番清水祐博師が引き揚げた(26)。その後、日本軍は、仏印進駐やマレー攻略を経て1942(昭和17)年2月にシンガポールを陥落させた。宗教界においては、シンガポール陥落法要が厳修され、国内は固より、満州においても盛大に陥落記念法要などが厳修されていた(27)。シンガポールから名称も昭南島と改められ、文字通り大東亜共栄圏の南方における一大拠点として光り輝いていた。この結果引き揚げていた本願寺もまた戻り布教を開始したのであった。

『本願寺新報』には「現地軍民の熱意で昭南島本願寺復活」という大きな見出しとともに、喜びの記事が掲載されている。「敵國イギリス東亞侵略の牙城であつたシンガポールは、いまや日章旗翻へる大東亞南方圏の最大據點たるべく再生の息吹も強く整備建設に邁進しつつあるが、このほど軍の非常なる好意により昭南島本願寺がここに力強く復活されることになつた朗報がもたらされ當局をはりきらしてゐる。本願寺が明治三十二年にシンガポールに出張所を開設し、爾來在留民の精神的中核として重要視されてをり、清水祐博氏が大東亞戦の直前、最後の便船で引上げるまで在留民のため努力してきたところであつてシンガポールが昭南島となつた今日、本願寺の復活が現地在留民からも熱望されてゐた折柄、軍の非常なる好意もあつて本願寺が再現されることになつたのは限りなき喜びである。今度開設される地は市街を脚下に望むオークスリーライズの高地で宏壯なる建物に本願寺の御本尊竝に須彌檀佛具等に移し、英靈奉安所の供養、軍隊病院への慰問法話、軍人に對する精神的休養所、日本語學校の經營、戦争のために生活力を失へる在留邦人の更正援助等の事業に乗り出すことになつた。尚本派關係の某軍人は昭南島に入るや直に前本願寺を訪れたが空屋で寂寥を感じてゐたところ、その後本願寺の移轉を知り、早速オークスリーライズに往くと丘の上に堂々たる本願寺があり、しかも英靈奉安所として護衛されてあるをみて驚喜し、開設已來四十餘年間、イギリスの

壓制下にあつた在留同朋の力となつてきた本願寺が大昭南島誕生と共に酬はれていま日本領土の最南端に大本願寺が再現された喜びを頼りにしてゐた」(28)という記事が掲載されているが、「軍の好意」で復活でき、また英霊奉安所が護衛付きで境内に建てられたということがわかる。これはまた本願寺と軍の関係が密接であつたと考えていいだろう。

第二節 大谷光瑞とシンガポール

(一) シンガポールとの関わり

「不肖は京都のサバズシを、伊豆宇鮎店に命じ、十四日の後シンガポールに於いて食せり。素より船中は冷凍せりと雖も、店主の妙技はその味を、十四日以後に適當ならしむべき鹽度と壓力を加へしなり。不肖の経験せしは十四日なれ共、恐らくは更に長時間に堪ゆべし」(29)。と光瑞は語っているが、そのことはとりもなおさず光瑞とシンガポールの関係の深さを示すものであろう。

大谷光瑞が、初めてシンガポールを訪れたのは、1899（明治32）年のことであり(30)、インド仏跡巡拝とヨーロッパにおける宗教制度の研究のためにイギリスに向かう途中に立ち寄つたのである。本願寺の新門時代あるいは法主時代さらには隠棲時代と、その後、何回もシンガポールには立ち寄っているが、当地本願寺との関係は不明である。ただ前述したように、シンガポールに赴任する渡邊を光瑞が京都伏見の三夜荘に呼んで「セメテ三年辛抱すれば褒美をやる……」と言って赴任を勧めたようにシンガポール本願寺には重大な関心を持っていたと思われる。シンガポールは東西文明の融合地でもあり、また東西を結ぶ交通の要地でもあつたので、光瑞が重視するのも当然のことであつた。

大谷光瑞と南洋の関係を示すものとしては、光瑞側近の原田了哲氏が、雑誌『大乘』誌上に「猯下は、世界中をまわつて、いつも、日本がいかに弱国であるかを、知っており、いつも憂いておられた。そのくせ、元気のいゝ開戦論をぶつこともあつた。こんなでは負けると知りながら、矛盾に平氣であつた。やはり、南の方がよほど好きだつたのであろう。つとに南洋方面には研究をすすめておられた。私は猯下と一緒に、マライのゴムや米を視察したり、ジャワ、スマトラの地質調査をやつて、強くそのことを印象づけられた。ミンダナオでは、某アメリカ将校に夕食をよばれた際に「原田、ここにわしの別

荘を建てることにしようか」とささやいていたずらっぽく笑っていられた。あるいは本心だったかも知れなかったのだ。木曜島方面には尊由（1886～1939 大谷光瑞の実弟、1937年近衛内閣の拓務大臣を務めた。後内閣参議、北支開発会社総裁などを歴任した）氏をやり、真珠貝に関する調査をさせられたが、その尊由氏すら「よくみておけよ、いずれはもらうからナ」と呵々大笑する始末で、何も知らぬ私など返答にこまった。ボルネオでは、私は、土地の状態をくわしく調べ、日々、日記につづり尊由氏が、その日記の上に、じつにくわしいスケッチをつけ加えられていた。この日記は、後、海軍省に、それから陸軍省にまき上げられ、行方が今だに（・・・ママ）わからなくなった。猯下のことだから、これら南洋に日本人をうつし、新しい日本を建設する考えでもあったのかも知れない。あってもいゝのじゃなかったかと思う。しきりに日本の人口問題を研究していられたから」と記している(31)。『鏡如上人年譜』によれば、「大正六年（一九一七）二月中旬南洋へ渡航する。とあり、是年蘭領印度農林工業株式会社をジャヴァ島スラバヤ市に設立、最初セレベス島メナドに根拠し、大森林の開拓に着手したが、その後中止し、主力をジャヴァに集注し、農園の経営を初む」(32)とある。これらの記述からも伺えるように光瑞と南洋の関係はかなり深かったものと思われる。さらに大谷光瑞が側近の一人であった水野梅暁(33)に宛てた書簡の中に、「拝啓 益御清穆奉賀候御書拝見仕候賢台将来ノ御計画ニツキテモ雲南カ最良ト存候當今ノ状勢テハ小生ノ希望モ到底近キ将来ニ果シ得ヘシトハ思ヒモヨラス現今ノ政府ハ小生ノ為ニハ非常ノ都合ヨキ政府ナレトモ意見ハ千万ニ一モ行ハレス且ツ所謂青年改造派ナトハ小生ノ極端ナル軍國主義トハ氷炭相容レスソレ故トテモ近キ将来ハ申スニモ及ハス遠キ将来ニテモ見込ハ無之候ソレ故小生ハ南洋ヲ主トシ支那ヲ傍トシ(…筆者) 実力アル根據ヲ築造シ十年ノ後人ノ世話ニナラストモ獨立獨行南方ノ富強ヲ以テ祖国ヲ動シ救済ヲ行フ考ニ決定致シ…」(34)とあり、光瑞は、第三革命後の雲南の動きに注目しつつも、恐らくは孫文派の動向を注意深く観察し、その両者が、南北対立を引き起こしたので、ひとまず中国から南洋の方にひとまず退散するという考え方に至ったのではなかろうか。

(二) ゴム園の経営

1916（大正5）年のシンガポール在留邦人名簿の中に「栽培 大谷光瑞」(35)という名が見える。法主引退後、シンガポール、スマトラ、ジャワを中心として動き回っている大谷光瑞の姿が見える。自由人としての面目躍如というべきであろうか。

因みに、『鏡如上人年譜』によると、「大正五年（一九一六） 八月中旬、シムラ滞在中心臓炎を病み、治療のため大連に向はんとしてカルカッタに出で是日セイロン丸にて出航す、柱本瑞俊ピナンまで出迎へ、新嘉坡に達し、次いで上海に至る。この頃新嘉坡に農園を経営し、ゴムの栽培をなす（大正七年まで継続）」(36)とあるが、ここに登場する柱本瑞俊(37)は、当時光瑞の側近として仕えていた人である。瑞俊は、光瑞より13歳年下であったが、幼い時代から側近として仕えた人物であった。

当時の日本人ゴム園調査及び番付表の中に、柱本の名前が見える。番付は前頭で1400斤の生産高であったと言う。柱本のゴム園は、シンガポール郊外のライジンサング園というところで、創業は大正五年、既成園買収とあり、資本金は六萬圓、持ち主は柱本瑞俊である。「西本願寺前法主大谷光瑞師の殊寵を受く、年少氣鋭の事業家なり」という紹介文が記されている(38)。ビキクトリア街花屋旅館内仮事務所を置いていた。柱本は、光瑞のゴム園の経営を実質上任されていたのであろう。光瑞の関心事は、ゴム園のことであったと思われる。来たるべく自動車社会の到来に備えて、タイヤに使われるゴムを栽培しようとした先見の眼には驚かされる。

(三) 大谷光瑞とマレー半島善後処理方案

1942（昭和17）年2月15日、マレーの虎こと山下奉文将軍が率いる第25軍は、イギリス領シンガポールを占領し、マレー半島全域に軍政を敷いた。山下のもとで、軍政初期の政策立案に関わったのが、渡辺渡陸軍大佐であった。彼は軍政部次長（昭和16年11月より17年3月）であった時期に、南洋に深い造詣と知識を有する大谷光瑞にマレー半島善後処理について助言を求めていた（39）。「大東亜建設審議会」委員であり、「内閣参議」でもあった大谷光瑞の考え方を拝することは、渡辺にとっても当地軍政部内での指揮権の拡大に大きな力となったことであろう。

ここに紹介するのは、光瑞によって策定された「マレー半島善後処理方案」である。このことはとりもなおさず、大谷光瑞とマレー半島の関係の深さを示している。陸軍の罫紙に書かれており、表紙に本願寺大谷光瑞師案と記されている。陸軍省が光瑞の策定した方案を転記したものであろう。以下にその章と条文数を示そう。

「馬來半島善後処理方案」

- 1 政体-----7条
- 2 政治及議會-----6条

3	司法	5条
4	地方行政	5条
5	財政	5条
6	交通	3条
7	首都	4条
8	産業	4条
9	諸法律	14条
10	土着人及外国人	5条
11	国語及教育	5条
12	宗教	9条
13	税法	9条

以上13章75条からなる方案であるが、今日では首肯し難い点も少なくない。例えば、第1章「政体」では、その4条で、「第一期元首ハ日本政府是ヲ推薦ス」とあり、また6条では、元首の一人は、「日本最高官吏ヲ充テ終身トスル」と規定されている。また第三章「司法」においても、2条で規定されているのは、三審制を取りつつも、終審である大審院は「帝國政府ニ屬ス」とある。10章の「土着人及外國人」の4条では日本人は旅券あるいは帝国領事の発給する証明書があれば、日本人と認定されるという。これは「新建國家ニ援助セル功勞ヲ感謝スル爲直ニ住民權ヲ付与ス」と規定されているからである。また日本人であることの優位さを示す条文としては、第11章1条において「國語ハ一語ヲ制定スルハ能ハザルニヨリ次ノ國語ヲ以テ之ヲ定ム」とあり、マレー語・タミル語に並んで、3項に「日本語（日本人ニ對シ感謝ノ爲國語トス）」とされている。このように政体上は、立憲君主制を採用し、議会による内閣制度を導入し、各地方のスルタンによる政治への参画など多少の民主的な要素も含みながらも、マレー半島の実質的な支配者たる日本帝国の優位さを認めるなど軍政下のもとで策定された方案であったことは否めない。

(注)

(1)『海外開教要覧』西本願寺海外開教要覧刊行委員会、1974年。には、「日清戦争後国力の著しい発展にともなうて、南洋の各国々に出向く日本人の数も多くなった。特に香

港、シンガポール、マニラには、それ以前からの移住者も多く、またフィリピンのベンゲット道路工事のために多数の邦人が渡航し、病魔にたおれるものが数知れなかつたと云われ、その生存者がミンダナオ島ダバオに渡ってマニラ麻栽培に従事し、成功者が多く、日本仏教の進出が望まれていた。こうした状況の中で明治29年10月佐々木千重が山命によってオーストラリア及び南洋各国の視察を行い、また明治31年6月には土岐寂静、朝倉明宣を香港、シンガポール、セイロン等を開教視察使として派遣した。その結果同年11月にはセイロン仏教霊地協会から仏教再興運動を本山に請願するところがあった。明治30年2月佐々木千重は木曜島で伝道を開始したが、結実を見るに至らず、よって32年シンガポールに赴き佐々木芳照とともに伝道を開始し、同年八月にはヴィクトリア街に布教場を設置した。それははじめ日本人子弟の教育を兼ね行う場所として僅堂を設けたものであったが、その後明治三十三年一月には洋館二階建ての布教場兼学校の建築を見ている」とある。また不幸にして土岐師は途中病に斃れ、現地(セイロン島)で亡くなっている。彼らの様子を伝える記事が『教海一瀾』に残されている。シンガポールの様子を伝えているので、長くなるが引用しておく。「此の如く一行は六日の航程を経て、二十七日午前五時半安に新嘉坡に着したり。二氏は同地視察の要あれば直ちに上陸す、同船の人も上陸する者ありき、二氏は同港海岸にある本邦人の業に屬する日新館と云える旅館に投じ、暫時休憩の後ち、帝国領事館を訪へり、領事森川四郎氏懇懇に接遇し、諸種の質問に答ふ、二氏は在留日本人の状態、および今後發達の豫期、領事の在留人其他に關する意見、宗教上に於ける考案等に就て談話して歸宿したり、時に土岐氏病氣治せず、在留本邦醫三根英二氏の診察を受けたるに右下腹部に於ける塊は稍や太り、桃實大なりたり、故に病體にて他の診察を為すに苦み、朝倉氏亦た氏に離るるに由なく、主として療病に勗めしめたりと。此地に在留する日本人約六百名、而して其の四分の三は醜業婦に屬す、其他は官吏、貿易商、旅宿業等の者なり、當地には三井物産會社出張店あり、澁谷商店、乙宗商店と名くるあり、日本雜貨室内粧飾品等を売る、旅宿には日新館及び松尾旅館あり。當地には支那人過半に居れり、ジャワ渡来のマライ人及び印度人等其他の一半をなせり、在留の西洋人は余り多くはあらざる趣なり、基督教會は例に依て處々に見ゆ、其會堂の数三四も在りしと覺ゆ、當地には豫ねて本派の僧侶佐々木芳照氏の留學せるありて(氏は大阪教区管事佐々木鴻熙氏の嗣子)旅寓に訪ひ來れり、氏は昨年四月より此地に私費留學を爲しマライア語學校に於て語學を研究し、傍ら在留日本人の爲に

讀書習字數學を授けつつあり、氏の語學研究は將來に記する所あるを知らしむ、一行も氏の在留せるありて、大に視察上の便を得たりと云へり」（『教海一瀾』第27号）とある。この記事によると、本願寺派の佐々木芳照師が当地に私費留学し、在留日本人のために読書、習字、数学などを教えているという。さらに将来に備えて語学の研鑽に努めていると述べている。佐々木芳照師はのちに本願寺ロスアンゼルス別院の輪番を勤める（『教海一瀾』799号 1933（昭和8）年7月20日）。

(2)上原芳太郎（1870～1945）本願寺派の家臣、大谷光瑞の側近を長く務める。1897年には南洋蘭領インド旅行に赴く。さらに翌年香港、シンガポールからインドに向かい、1899年大谷光瑞の「清国巡遊」に上海で合流するなど、光瑞の旅行にたびたび随行した。また随行記録を数多く残した。白須淨眞「上原芳太郎の「外遊記稿」」『アジア遊学』32号、勉誠出版、2001年。和田秀寿「上原芳太郎と本派本願寺」『龍谷史壇』第131号、2010年。同「大谷光瑞と上原芳太郎」拙編『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡—』勉誠出版、2010年。などを参照のこと。

(3)小嶺磯吉（1886～1934）長崎県有家町（旧堂崎村石田）に生まれる。1881（明治14）年15歳の時に職を求めて朝鮮仁川に渡り、海軍御用達福島屋に奉公人として住み込んだ働いた。その後オーストラリア木曜島に渡り、真珠貝の採取に従事することとなった。1897（明治30）年1月に一度帰国し、協力者を求めて再度英領ニューギニアに渡った。その時の協力者こそが恐らく上原芳太郎であろう。小嶺はドイツ軍の鎮撫工作役を買って出たり、椰子園や造船業などの事業を興し、大成功を収めた。財界の大物大倉喜八郎のなどの協力もあり、「南方開発」の大規模なプロジェクトに着手した。第一次大戦の最中、イギリスオーストラリア艦隊がドイツ領ニューギニアに大挙して急襲したので、小嶺は単身日本刀を背負い、ドイツ艦艇に投降を勧めた。これは「ドイツ軍拿捕事件」として内外に知られることとなった。以上は篠原徳之「郷土の先覚者小嶺磯吉物語」『嶽南風土記 有家史談』創刊号 有家町史談会 1994年を参考にした。

(4)上原芳太郎「四十年前の蘭印」『大乘』第19巻9月号、1940年。

(5)『外遊記稿』上原芳太郎の旅行記で全六冊。1905（明治38）年から1906（明治36）年にかけて書かれたものである。一冊目は「韓国小記」「海南飛鴻並附録」二冊目「蘭領印度」三冊目「南船北馬」「酷暑酷寒」「欧米記勝」「小燕京記」四冊目「聖蹟探古」五冊目「鷄林遊記」六冊目「滿漢紀行」「苾題記遊」「燕京日記」が収められている。活字化

されていないので、すべて手書きの和綴じ本である。閲覧を許可して下さった龍谷大学大宮図書館に記して感謝する次第である。冒頭部分とシンガポール到着の部分を書き出して見ると、「九月九日 晴 昨夜中村楼ニ於テ高楠、三谷、伊藤、九条、桃園、湯川、日夏諸氏ト留送別會ヲ催ス 午前九時廿一分七条駅●東ニ移ス 神戸後藤ニ入ル 金五百円ヲ英貨ト交換シ五十磅十志ヲ得写真師中村方ニ赴キ現像液用薬ヲ求ム 新嘉坡迄上等船券百五十円夜八時常陸丸ニ乗込ム……」とあり、後年仏教学の碩学となった高楠（順次郎）や大谷探検隊第一次メンバーであった九条（後の堀賢雄）などの名前が出てくるのが興味深い。シンガポール到着の様子は以下に記す。「午前四時徐行水先案内來り七時「タンジョンパカ」ノ棧橋ニ着ス此所市ノ西端ニ在リ大船十余隻碇繫ス我船着スルヤ清人「ピンズスタン」人馬來人等争ヒ來リ船ニ上リテ旅舎案内両替車馬貝殻ヲ客ニ勸ム雜踏高シ九時半頃佐々木芳照氏本船ニ來リ迎ヘラル愉快限ナシ相携ヘ馬車ヲ賃シ荷物モ載セテ「ロビンソンロード」ノ日本旅館日新館（福山シマ）方ニ投ス昼餐ヲ佐々木氏ト喫セル時船中ノ同宿林、山梨、長島、等諸氏來憩市街見物ニ赴カン……」とある。

(6) 大谷光尊（1850～1903）浄土真宗本願寺派第21代法主。明治初期の激動期に本願寺派法主となる。教団の近代化に努め、欧州に僧侶を派遣するなど開明的な廃仏毀釈の嵐が吹き荒れる中、信仰の自由についての建白書などを政府に提出した。

(7) 本願寺史料研究所、前掲書、423頁。本論文中第一章「大谷光瑞とロシアウラジオストク本願寺をめぐる一」を参照のこと。

(8) 上原芳太郎『明如上人畧年表』真宗本願寺派護持會財團、80頁、1935年。「明治三十二年八月是月佐々木千重を新嘉坡に派し、布教場を創む（數年前より佐々木芳照自費留學）」

(9) 『高輪同窓倶楽部名簿』（高輪同窓倶楽部 1927年）参照。この高輪同窓倶楽部というのは、高輪中学、高輪商業の同窓会が合併してできた組織である。本願寺文学寮が廃され、新たに東京に高輪仏教中学、高輪仏教大学が設立されたことによるものである。詳しくは『高輪学園百年史』高輪学園 1985年を参照のこと。

(10) 前掲書、『明如上人畧年表』74頁。

(11) 『教海一瀾』96号 1901（明治34）年4月。

(12) 佛骨奉迎使一団が、シンガポールに到着した様子を本願寺出張所主任佐々木千重が「新嘉坡通信」として『教海一瀾』に寄せている。「（1900年）六月二十四日 日本各宗

派佛骨奉迎使一行十八名、暹羅帝より佛骨を奉受し、獨乙コーラット號に乗じて、盤谷府より當港へ同日午後四時着、六時半上陸、大谷奉迎使はラッフルスホテルに、曹洞宗並びに妙心寺派奉迎使の日置、前田の兩氏は松尾旅館に、我が本願寺派奉迎使藤嶋氏は本願寺派布教場に直に投館せらる 二十五日 大谷奉迎使我布教場に臨場せらる 二十六日 午前八時奉迎使一行十八名、當地植物園を巡遊せられ、佐々木千重先導申上げ數時間の間園内散歩後歸路大雨に遭ひて急に歸館 二十七日 休養 二十八日 午後一時我本願寺布教場に於て南條博士、并曹洞宗日置黙仙、我が本願寺派藤嶋了穩の諸氏を聘し、演説會を開きしが先づ佐々木千重開會の主意を述べ次に南條博士は因縁釋、日置氏は佛の字釋、藤嶋氏は和讃を題して説教一席を演述せらる。數百の聽衆渴仰の顔をうたれ、歡喜の内に午後四時半退散 二十九日 奉迎使一行歸朝の途に就かん爲め、彼阿船マルタ號乗込、三十日午前八時當港解纜」とある。仏教徒にとって佛骨を迎えるというのは一大イベントであつたに違いない。このことについて『現代佛教』105号（1933（昭和8）年 現代佛教社）忽滑谷快天「佛骨奉迎回顧録」に面白い記事があるので紹介しよう。「国王より各員に小佛像まで懇ろに贈られ、歸帆を揚げて再びシンガポールに著いた。すると如何なる都合であつたか、藤嶋了穩師は佛蘭西へ遊學するとて一行と別れ、歐洲へ往つて了うた。また日置黙仙前田誠節二師は大谷派の人々とは別の旅館に投じた。といふのは黙仙師の舊隨の一人がシ市に布教してゐたが、其男がマライ語のできる所から、便利のため師の左右に侍して種々斡旋してくれた。彼の謂ふにラフレス・ホテルなどに泊つて大金を抛つより、自分が好い宿屋を紹介させようと、つれこんだ旅館は日本人の經營にかゝるもので、二師と僕等とは何も知らずに投宿した。けれども變な女が數多ゐるので、不審を懷いた、これは青樓であつたらしい。教祖の靈骨を奉迎する我々が何も知らずに之に投じたのは大失態で僕は中心から懺悔せざるを得ぬ」とあるが、果たしてこの斡旋した僧侶こそは佐々木千重が「新嘉坡通信」で以下のように告發した僧侶であらうか。「偕て當新嘉坡に於ける日本佛教僧侶の沿革を尋ねるに、由来遙かに遠しと雖も、先づ其長くして且つ其尤も古きものは殆ど、七年間此地に滞留して、目下或女郎屋の食客門番となり居る、口に曹洞宗とやら稱ふる某なる者ありて自ら日本僧と名く、晝夜酒徳利を枕にして醜業婦の明巢を狙ふ、厄介腥坊主あり、常に葬式を慕ひ、讀經の切賣を押賣し、盛んに日本佛教の體面を汚しつつある大膽物あり……」と。

(13) 『教海一瀾』96号 1901（明治34）年4月25日。

(14) 清水黙爾（1875～1903）は、島地黙雷の次男として、東京に生まれる。1894（明治27）年5月本願寺文学寮に入学し、1897（明治30）年4月文学寮高等科を卒業する。その後本願寺よりインド遊学を命じられる。明治35年、大谷光瑞率いるインド探検隊に加わり、ネパールの深林を跋渉する。その後ベナレスで梵学の研鑽に励むが、病に冒され、当地で死去する。28歳であった。

(15) 清水黙爾『紫風全集』鶏聲堂書店、1907年、246頁。

(16) 『南洋の五十年』南洋及び日本人社、1938年、512頁。

(17) 前掲、『教海一瀾』96号。

(18) 前掲、『高輪同窓倶楽部名簿』。渡邊師は明治30年文学寮本科卒業である。

(19) 『教海一瀾』（本山録事）794号、1933（昭和8）年 2月11日。 なお『教海一瀾』793号には渡邊布教使渡航という、以下のような短信が掲載されている。「今回新嘉坡駐在を命ぜられたる渡邊智修氏は、二月九日正午神戸出帆の諏訪丸にて渡航せられたり」と。

(20) 渡邊智修師、昭和8年の日記である。以下『日記』からの引用は末尾に日付を記す。

(21) 『教海一瀾』821号、1935年5月25日。

(22) スラングン日本人墓地や当地にあった曹洞宗西有寺については、『中外日報』次のような記事があるので参照されたし。「釋教山西有寺は舊名シンガポールのセラングーン日本人墓地内に在り……ベングレーン街にはその出張所もあるが、西有寺開創の起りといふのは明治二十六年日支の風雲漸く急を告げて國內何となく物情騒然たる當時、長崎皓台寺の釋種樸仙といふ一禪僧が印度佛跡參拜の目的を以て同志二人と共に同地に渡り日本人の爲一座の法要を修した。當時在留居民の中の有力者たる二木多賀次郎氏は一行に手厚い保護を與へ、そんな關係から遂に釋種氏のみ在留して不幸壯圖空しく異域に客死した日本人墓地の守護を爲す事に決心して墓地内に小堂を建てて墓守たること十年一日の如く、その如法の生活がいたく二木氏及びこれも二木氏同様在留民中の有力者であった澁谷浣治氏の心を動かし兩氏はゴム樹一千株を植ゑて釋種氏の生活を保護し、更に明治四十三年頃に至って一堂をベンクレーンに建立して西有寺出張所とした。翌四十四年偶々覺王寺日暹寺住職であった永平寺の貫首日置黙仙禪師が暹羅皇帝戴冠式に参列の爲め來馬琢道氏を帯同して同港に立寄ったのを機會に十二月十九日を卜して開堂式を擧げ總持寺の開山西有穆山禪師を開山に勸請して茲に正式に西有寺と名付けられるに到った。即ちこれらの事は明治四十四年釋種樸仙氏の手によって日本人共同墓地内に建てら

れた記念碑の碑文に最もよく盡されてをりこの記念碑は戦禍さえ免れてゐたら今なほ昭南島にあるはずである」。

「日本共同墓地記念碑

凌三千之鯨波踏九千之鵬程者	歴亂之地化爲森嚴之靈境矣
誰無業苦不成死不還之氣慨耶	雖謂須居留諸氏之賛佐者甚多
特至草創以來兩氏之用力看則	其功不可勝算也。楳仙駐錫於
此地二十余年目具視之大有所	感，明治三十八年栽護謨樹一
千余株一以紀念乎不忘兩氏於	千載之後一以補當山持沙門之
衣資。後來●我者體斯意不悖	則我願足耳

明治四十四年辛亥十月

大日本曹洞宗沙門楳仙謹誌」

西有寺との関係もとくに悪くなく、共同で行う仏教行事などの打ち合わせに西有寺から本願寺に挨拶に来ている。「西有寺挨拶に来る。四月八日の灌佛會の案内に来る」

『日記』（4月3日付）。

(23) 『教海一瀾』825号、1935年9月25日。

(24) 同上書。

(25) 『教海一瀾』826号、1935年10月25日。

(26) 『本願寺新報』942号、1941年10月25日。

(27) 『本願寺新報』953号、1942年2月15日。本願寺関係では「敵の牙城シンガポールの陥落は全世界注目のうちに迫りつつあるが、陥落と共に本山竝に地方における感謝祝賀の行事は左の要項を中心として行ふやうに指令せられた。一、本山を中心とせる行事 1、戦捷奉告法要……新嘉坡入城式當日午前十時より阿彌陀堂に於て 2、記念講演會……教務部にて準備中、差定に關しては式典部、記念講演會に關しては教務部に於て夫々立案中 一、別院、末寺、教會に於ける行事 1、戦捷奉告法要……新嘉坡入城式當日午前十時を期して執行。

2、記念講演會……法要後引續き開催 3、出征軍人遺家族慰安 イ、婦人會、青年會、少年會員を動員し遺家族を慰問し佛壇に献花す ロ、遺家族慰安會の開催……演藝會、映畫會 ハ、護國神社（東京ニテハ靖國神社）參拜 ニ、陸海軍病院へ感謝の慰問使派遣 ホ、陸海軍墓地清掃」とある。さらに『中外日報』1942（昭和17）年2月17日付けによる

と、西本願寺では新嘉坡入城式当日を期して報国法要を厳修するとのこと、また東本願寺では、同じく当日に大谷光暢法主直修のもと戦捷報国法要を厳修し、一山全役員は護国神社参拝、両堂白洲の前で万歳三唱する。知恩院は、宮内大臣に電報を打ち、陥落記念法要を修する。天台宗では陸海軍大臣に感謝の電報を打ち、祈願会を修することになっている。大日本仏教会においても、東京築地本願寺で法要を行うということである。また龍谷大学においても、本館前広場において式を行うということである。また『朝日新聞』1942（昭和17）年2月19日付けによれば、「戦勝祝賀の十八日午後二時から大日本佛教会、東京佛敎教團共催のシンガポール陥落祝勝奉告大法要が築地本願寺で執行された。とくに京都から大谷光照法主が上京して本法要の導師となり、東京市内各派僧侶六百餘名が参列、大東亞戦に敵斃した護國の英靈に對し、巖肅な感謝法要を行った」とある。このようにして日本の仏敎教團は戦争に協力する体制を取っていったのであった。

(28) 『本願寺新報』965号、1942（昭和17）年6月15日。

(29) 大谷光瑞「食」『大谷光瑞全集』第八卷、大乘社、55頁、1935年。

(30) 鏡如上人七回忌法要事務所『鏡如上人年譜』19頁、1954年。

(31) 『大乘』第5卷第10号 大乘社、55頁、1954年。さらに矢野暢『「南進」の系譜』（中公新書、1975年）に、次のような文章があるので引用しておこう。「ところで大谷光瑞である。西本願寺の固苦しい伝統と格式の中で生まれ育った彼は、その反動として、豪放で行動主義的な性格の持ち主として成人した。大谷光瑞と南方との接触は、大正四年初頭の南アジア旅行の時に始まる。そして、大正六年にはスラバヤに蘭領印度農林工業株式会社というのを設け、大正七年にはセレベスのメナド近くの高原にあるノーガン珈琲園を買収、大正九年には、ジャワ東部に農園を入手している。ソレまでの仕事はあまりうまく行かなかったようで、大正十一年にはプレアンガン州に香料植物を栽培する農園を新たに拓いている。そして、その香料園を、「大谷光瑞農園」と名付けて終生いつくしんだ。それは高台にあったので、避暑のために別荘「環翠山荘」をそこに建築、大正十三年にこれが完成した後は、昭和九年まで毎年七、八、九月の三ヶ月をここで過ごす習慣になった。昭和五年にはガロー近郊の蘭人経営のホテルを買収し、これを「大観荘」と名付けてもう一つの別荘とした。ジャワの在留邦人が「準滯留者」とみなすほど、光瑞はジャワでの生活と開拓事業を愛好した」。

(32) 『鏡如上人年譜』、前掲書、79頁。

(33) 水野梅暁（1878～1949）広島県に生まれる。7歳で、遠縁にあたる曹洞宗長善寺住職水野桂巖のもとに出され、のちに京都に出て大徳寺高桐院高見祖厚について修行し、ついで根津一の知遇を得て、上海東亜同文書院に学ぶ。一期生であった。彼は同文書院在学中に自分の使命を中国と日本の仏教を結合させることと考えるようになった。在学中に浙江天童山に如浄（道元禅師の師、道元が修行しその法を伝えた）の墓塔を拝し住職の敬安に日中仏教の提携を約束したと言われる。卒業後、敬安の勧めに従い、湖南省長沙に赴き、当地で僧学堂を開き、仏教の研究と布教活動に従事していた。その後、大谷光瑞の知るところとなり、曹洞宗から本願寺へと僧籍を移し、光瑞を側近として中国や南洋に随行することたびたびであった。やがて『支那時報』を創刊し、その編集にあたった。

(34) 大谷光瑞が水野梅暁に宛てた書簡。東京大学法学部附属近代日本法政史料センター原資料部所蔵。

(35) 西村武四郎『在南三十五年』安久社、248頁、1936年。この西村武四郎氏はシンガポール本願寺の総代（寺院にあって門信徒の代表者）を務めた人であった。

(36) 鏡如上人七回忌法要事務所『鏡如上人年譜』、79頁、1954年。

(37) 柱本瑞俊（1888～1958）は大谷光瑞の従兄弟にあたる。鹿児島県性應寺に生まれる。中学校入学と同時に上京し、明治36年頃に錦華殿に宿泊した。そして錦華殿の書生として旧制京都府立第二中学校に通学し、卒業と同時に執行所用係室内部員となった。光瑞の側近として南洋に随行した。錦華殿は、明治30年代に建てられた欧風様式で、ホールやバルコニーもあった。光瑞、壽子夫妻の新居として使用された。柱本の経営していたゴム園については「シンガポールで柱本師をマレー半島ゴム園に案内し、500ドルを頂き、丹沢さんより二千元程度の商品を日本から船送していただく契約を取り交わし、柱本師が保証人となって下さった。爾後、丹沢さんは輸出、私は輸入業者の関係が生じ、私の人生は大転換した。私は爾来、タイ・サイゴン・スマトラ・ジャバなどに支店、出張所を設け、終始一貫、雑貨貿易を業にしたのである。当時、木全という友人を、柱本師引率の塾生達のマレー語教師として、私が推薦した。丹沢さんは日蘭貿易を丸ビル二階に設立され、友人の木全君は同社シンガポール支店長のポストを得ました。丹沢さんと柱本師は私の生涯の恩人であります」と柱本に世話になった佐藤武英氏編の『南洋時代—佐藤徳十郎のプロフィール—』に書かれている。このことについては、柱本照映『桃源山明覺寺誌』を参考にした。また『中外日報』昭和17年2月8日号には、柱本瑞俊氏にインタビューしてい

る記事が掲載されている。「大正4年から12年にわたり馬來半島は勿論スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベスやバリーやロンボリック島その他を網の目のやうに巡って研究して居る」

(38) シンガポール日本人会『戦前シンガポールの日本人社会』 Kyodo Printing Co(Singapore)Pte Ltd、48～50頁、2004年。

(39) 「渡邊軍政—その哲理と展開（一九四一年一二月～四三年三月）」明石陽至編『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』所収、岩波書店、29頁、2001年。なお大谷光瑞が草した「マレー半島善後処理方案」も同書を参考にした。

第二部

大谷光瑞の中国認識

第一章 辛亥革命と大谷光瑞

第一節 本願寺教団と国家

(一) 真俗二諦論

近代における浄土真宗の教えの中で大きな位置を占めるものに「真俗二諦」という考え方があり、ここでいう「真俗二諦」とは、仏法を真諦、王法を俗諦とするもので、真諦とは、出世間の教え、すなわち浄土往生の教法を意味し、俗諦とは世間の教え、すなわち国家社会において守るべき世俗的な教えを指すものである。この「真俗二諦」論は、よく車の両輪に譬えられるが、相互に助け合うものとして理解されてきた。浄土真宗の教団にとって、この「真俗二諦」論は、社会の中の真宗、国家の中の真宗など政治との関わりの中で考えられることが多く、教団が時々の国家社会に随順するための行為規範として多用されてきたものでもある(1)。

大谷光瑞は、後述するように、「国家の前途」を常に考え、帝国の臣民として、忠君愛国を説いていた。1910(明治43)年1月12日本願寺鴻之間において「御消息」を發し、真俗二諦について次のようにいっている「抑モ本宗ノ教義ハ、真俗二諦ニ 互リ現当二世ヲ益セリ。其真諦トイフハ、弥陀本願ノ名号ヲ聞信スル一 念ニ無上大利ノ功德ヲ得、水(ママ、永の誤りだと思われる。筆者注)ク生死ヲ出離スルニ在リサレハ下根最劣ノ機ナリト雖モ、コノ勝益ニモルル者アルヘカラス。ヒトヘニ不思議ノ願力ヲタノムハカリナリ。コノ信決定ノ上ニハ、称名相續シテ広大ノ仏恩ヲ念報シ奉ルヘシ。次ニ俗諦トイフハ、世有常道ノ仏語ニ從ヒ、産業ノ振興ニ勉メ、自治ノ發達ヲ計リ、国家ノ安寧ヲ助け、社会ノ幸福ヲ全クスルニ在リ。故ニ我教義ヲ弘題スルハ、即チ忠君愛国ノ誠ヲ致ス所以ナリ」(2)。社会的にはまさに「国家の安寧を助け」「忠君愛国」の態度を示すことが、真宗信者の務めであると主張するのであるが、これが「国家の前途」と結びついていることは改めていうまでもない。また光瑞自身もこの俗諦との係わりに極めて大きなウェイトを占める政治に強い関心を抱いていたことは、

…光瑞伯の性行政治家的にて宗教家らしからぬとは人も許し己も認め居る所にて予てより機会あらば、是非手腕を企業家または政治界に振はんとする態度を表はしたること屢々なりしが、今回愈々意を決し……自ら政治界に打って出づることとなりた

りといふ…… 『朝日新聞』(3)

といった当時の新聞の風評的論調によっても垣間見ることができよう。

(二) 光瑞初めての外遊

1899年(明治32年)1月、嗣法(4)大谷光瑞は、清国巡遊の旅に出かけた。それは「国家の前途と宗教の将来とに付て深く考ふる所あるに因る」行動であった。後日出版された旅行記の冒頭「御親論」に、次のように語られている。

いまや世界列強の眼は一斉に東方垂細垂に注ぐに至り、清国は恰も之が孤注たる姿となりて二十世紀の序幕は何等か彼国に於る政治的意味の変動、若くば列強が利益の衝突に因て開始さるべしとは東西識者の一致した意見である。果して然らば清国と僅に一葦帯水を隔て唇齒輔車の関係を持てる我邦が独り晏然として傍觀の地に立つを得べきや否や深く考ふべき事である(5)。と。そしてさらに、

清国と我国とは、啻に同文同種なるのみならず又実に同一仏教を奉ずるの国なれば彼にして若し一朝瓜分の虞あらんか、我独り之が影響を蒙らざらんや、然ば則其蒙を開導し、其陋を啓発し、其をして文明の域に進ましめ、依て以て列強が窺叢の念を未前に防遏せん事は固より善隣扶植の大義なりと云へども、抑亦国家自衛の必要上止むべからざるものあるに因ると云はねばならぬ(6)。

と。つまり欧米列強諸国による瓜分体制下の中国で、西洋文化の窓口となった上海や香港、それに洋務運動期の指導者の一人であった張之洞(1837～1909)の影響下にあった武漢を視察することによって、中国の現状から日本の将来を考える機縁を見出そうとしたに相違ない。しかもそれは、「…要するに皆他日布教開拓の材料を蒐集せんが為…」(7)と明記するように、他日の中国大陸への布教への足がかりを築こうとするものであった。光瑞のいう「国家の前途」と並行させた「宗教の将来」、つまり中国における布教活動の開始は、深い相関の中に置かれていたのである。

第二節 辛亥革命と本願寺

(一) 大谷光瑞の漢口訪問と本願寺の創建

辛亥革命が勃発した武漢は、「両湖饒れば天下足る」といわれた中国穀倉地帯の中にあ
り、穀物としての米を中心に、茶、綿花、桐油、胡麻油、豆類、麻、小麦などを産する豊

かな地域であった。またこの地は、「九省の会」と呼ばれたように、長江に注ぐ諸河川、中国十八省の内九省を通過してきた水が漢口に注ぐ水運の要衝でもあった。またこの漢口は、1861年の天津条約で開港された港の一つであった（天津条約は1858年に漢口を含む10港の開港を決定したが、実際に漢口が開港されたのは1861年3月のことであった一筆者注）。武昌、漢陽の後塵を拝していた漢口が、大都市へと変貌したのは、そのためである。そしてさらに、日清戦争後の重慶の開港に伴って、天府の国といわれた四川の物資が、長江を下って漢口に集まるようになった。またさらに、京漢、粵漢鉄道の開通によって水陸交通の拠点となり、中国内陸における主要都市として発展を続けることとなった。加えて近郊の大冶県の石炭や隣省江西省萍郷県の鉄鉱石と長江の豊富な水量を利用する近代を象徴する重工業も起こった。湖広総督張之洞が創設に関わった紡紗局、織布局（武昌）、鉄政局、兵工廠（漢陽）、燐寸製造所などが次々と新設され、「東洋のシカゴ」と形容されるまでになった（8）。

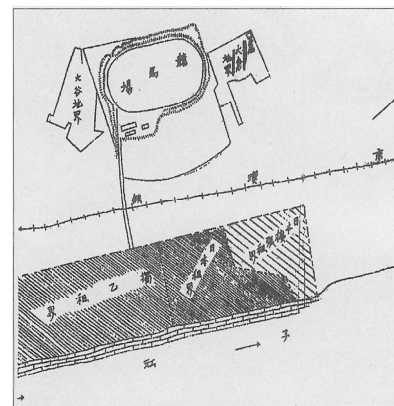
1899（明治32）年、清国外遊の途次、嗣法・光瑞が、この漢口を訪問したことは前述したが、1906（明治39）年9月光瑞は、再度この地を訪れている。『教海一瀾』は、その漢口訪問を次のように伝えている。

明治39年猊下清国御巡遊の際、清国開教の中央根拠地点として漢口日本租界及び跪馬場附近に十数万方の広大なる土地を買収して、将来大規模の根本道場建築の計画なりしが、今回官革両軍の関ヶ原は即ち本派本願寺の該別院予定地たりしなりと（9）。

と。図（I）に示したように、大谷光瑞が漢口で買い求めた本願寺建設予定地の場所は、日本租界地からほど遠くない一等地であり、後に日本陸軍兵営地の候補となつたところである（10）。おそらくこの地は、1899年の漢口訪問時に、すでに視野に入れていたものであろう。

光瑞の漢口訪問後、漢口駐在となった本願寺の田中哲巖（11）は、清国開教総監（12）大谷尊由（13）宛への報告書の中で、漢口の様子を次のように述べている。

当地は現今八十萬余の人口を有し、且つ将来甚だ有望にして、支那本部に布設せられたる若くば將に布設さるべき各鉄路及び長江を上下する各船舶は、必ず此地を輻湊すべきを以て、貨物の聚散人馬の往復陸続頻繁の地と相成り、隆盛ヲサヲサ目下の上海の地夫れより勝るとも劣るまじく、支那本部其他の地の最も枢要の地点と相成り、



図(I)漢口大谷地所図「アジア歴史資料センター」『陸軍省大日記』

本派本願寺が経営する開教事業は明に緑叢中の紅一点となり、優に一大光彩を放つものと存じ候。居留日本人は、昨年末より本年六月末に至る間六百人の増加を、三、六月以降の増加亦是に譲らざるべしとは、水野領事の談にて有之候。随って学齡児童も二十余名有之候へば是非生等は開教の付屬事業として教育をも兼摂すべきものかと存じ且つ有志者諸氏の希望に有之候。生等の赴任に付き、領事其他二三の者の意向を徴せしに、開教着手は好時機居留民の多くは、甚だしく不如意を嘆てるもの有之候由伺致に有之候（14）。

つまり漢口への本願寺を創建は、上海をしのぐであろう「支那本部其他の地の最も枢要の地点」という認識下に置かれたものであり、それは中国各地に否アジア各地に放射線状に開教基地を作ることを意図したものであった。加えて邦人の増加を十分に熟知しての設置であったことも見逃してはならない。漢口に対する光瑞の目の確かさをうかがい知れよう。

こうして 1906 年、漢口に出張所が設置され、護城慧猛（15）が初代布教使として任命された。そして布教活動はもとより、学校経営、日本人墓地や火葬場の運営にも乗り出した。漢口日本租界の発展の様相を伝える『大阪毎日新聞』も、

当租界内には三菱公司、高昌公司、本願寺、菜市场、日本人倶楽部、倉庫、貸家等の建築物は、既に落成せるもの又は工事進行中のものたるを問はず建築工事は非常に旺盛なり(16)。

と報じている。

（二）辛亥革命の勃発

漢口に出張所を設置した本願寺が、中国内陸部の動静を、独自に直接、しかも即座に掌握したことは説明を要しない。それは辛亥革命の勃発に当たっては極めて有効に機能した。『教海一瀾』は革命の勃発を「清国革命軍の蜂起」と題して、その第一報を次のように詳細に報じている。

去月十一日夜武昌の砲兵隊反旗を翻し、布政使衙門を焼けり、原因不明なれど、予て革命党と連絡を通じ居りしものと思はる瑞総督（17）は既に軍艦にて漢口に逃れたり、右に付き漢口の各国居留地は義勇兵を招集せり。師団長張彪（18）氏は十一日午後一時重圍を衝きて武昌の城門を出で、本邦人の為に救はれて従卒十人と共に漢口に逃れ来れり。今回叛旗を翻せるは武昌に於ける砲兵一箇大隊、歩兵四箇大隊など及び工兵輜重兵にて、成都の暴徒鎮定のため四川に派遣せられし軍隊以外の殆

ど全部なり。右は瑞総督が数日前革命党員を捕縛して之を惨殺したる結果、総督を殺して恨みを晴らさんとするものを生じ、遂に軍隊の大反乱を誘起するに至りしなり、武昌城内は全部叛軍に占領せられ、各城門は左腕に白布を纏へる叛軍によりて守備せられつゝあり。越へて十二日午後漢口は全く暴徒に占領せられ市街は大混雑を来し既に火災起れり、革命党は大別山に砲列を布き漢陽を砲撃しつゝあり。又清国軍隊は武昌を砲撃したるも暫時にして中止せり。右につき直隸省保定府より急派せる討伐軍の一箇大隊は、十三日漢江附近に到着せり、北京よりの一箇大隊到着を待ちて行動を開始する予定にて未だ何らの行動を取らず而して政府の強圧策は反りて形勢を危殆ならしむる虞あるが如し (19)。

またさらに、革命軍の司令官黎元洪 (20) による「革命宣言」も併せて掲載している。その内容は次の通りである。

革命軍司令官黎元洪は各国に向て独立を宣言するため、在漢口領事団の手を経て左の宣言書を各国政府に通牒せり黄帝の子孫たる我等は、不俱戴天の満朝を斃し、漢人の国家を建立するの好機に達せり、今や四川を平定し、長江一帯を定め、独立の基礎既に確然たり、然れば列国と清朝との締結したる条約及び懸案は黄朝に於て其責任を負ふことを約す、若し列国にして清朝を援助する如きあらば我等は已むを得ず、敵視すべし、希くば列国は黄朝の臣民と清国と交戦中は、局外中立を厳守せられんことを (21)。

このように『教海一瀾』という本願寺教団の機関誌は、辛亥革命をオンタイムで、しかも極めて詳細に掲載した。これは今日の通常感覚からすれば、教団の機関誌の一般的性格にはなじまない。しかしこの時代のそこに本願寺の強い意図があったのであり、それを読み取らなければならない。この革命の動向は、本願寺の漢口開教だけでなく、対中国開教総体に、さらには日本という「国家の前途」にも係わる重大な事件、当初からそうした認識に貫かれていたのである。

よく知られているように、辛亥革命は、1911 (明治 44) 年 10 月の武昌蜂起に端を発する。武装蜂起した軍隊 (新軍) の指導者は、先に触れた黎元洪であった。その時、孫文は、アメリカに居たが、革命の一報を聞くや直ぐに帰国し、翌年 1 月 1 日に臨時大総統に選出され、南京を首都として中華民国臨時政府を成立させたのである。

(三) 特設臨時部の設置

すでに述べたように、漢口を含む武漢三鎮 (漢口・漢陽・武昌) は、光瑞にとって特別

な地であった。初めての外遊の地であっただけでなく国家と社会の関係について思いを馳せた所でもあった。また自らが中国開教の中心地として策定した所でもあった。その武漢の地が、今や中国革命の策源地となり、中国はもとより欧米列強諸国及び日本などがその行方を固唾を飲んで見守ることとなったのである。こうした中、列強諸国や日本政府とは自ずと立場を異にする本願寺は、一宗教教団として、光瑞はその法主（光瑞は1903（明治36）年に本願寺22世法主となる）として、辛亥革命に独自にしかも積極的に関わることを選択した。その大きな原因は、日本の仏教教団の中で本願寺のみ、たまたま漢口に出張所を持っていたという偶然性に依拠したのではなく、漢口を上海をもしのぐ所とみなして本願寺の中国開教の拠点としていたことによるものであった。その重なりがすばやい決断をさせたと見るべきであろう。しかしことはそれだけに終わらない。本願寺が一方だけでなく官革両軍を分け隔てなく後方支援したことを看過してはならない。当時、革命の行く先を定め切れぬ中であって官革両軍の支援である。それは、たとえ事態がどのように推移しようとも、本願寺が中国布教への展望を失わず最先端でありつづけること、それに対する周到な方策と見なすべきであろう。『教海一瀾』に、

本派大法主猊下は、清国内地を御巡遊あらせらるること二回に及びて、足跡四百余州に遍く、清国開教には年々巨多の資財を投じ居ることゝて、武漢発乱以来は非常の注意を該方面に傾注し、上海に清国開教総監部あり、漢口に本派本願寺出張所あるにも拘わらず、更に漢口に「臨時部」を特設して清国通の開教使を増遣し機に応じて最も機敏に活動せしめつゝあり（22）。

とあるように、「上海に清国開教総監部」、「漢口に本派本願寺出張所」があるにもかかわらずさらに重ねて、漢口に「臨時部」の特設が、それを裏付ける。また『教海一瀾』の「特設臨時部の開設」という記事によれば、

今回揆乱の根拠地たる武漢地方には本願寺出張所ありて井上布教使夫妻（23）並びに水上布教使（24）あり、官革両軍が死力を出して奮闘を試みし跪馬場附近は、即ち我本願寺が漢口に於ける別院建設の予定地なりとす。……変乱は変乱を生み時局の変転測る可らざれば、機に応じ、変に従ひ、最も機敏に活動して、各地所在の同胞移民を慰安保護し、其行動の連絡統括を計り、日本仏教徒たるの天職を完ふせんが為に、更に規模を拡大し、事務を整備して、茲に特設臨時部の開設を発表せらるゝことゝなり。大谷開教総監を兼特設臨時部長に、其他支部長、賛事長、出張所長等、それゞ任

命せらるゝに至れり。吾人は本派本願寺が各宗派に率先して機敏なる活動を試むる英断と勇氣とを激称すると共に、各門末の僧俗が能く力を本願寺に協せ、慰問救助等の事に尽瘁して、本末一致の実を現はさんことを切望して止まざる也 (25)。

とあるように、革命に対応して大谷開教総監を兼特設臨時部長とする「特設臨時部」が設置されることとなった。この「特設臨時部」は、本願寺教団組織の中に位置づけられた巨大組織であった。そしてその役員として、藤山尊証、横田諒英、水野梅暁、木村常諦、龍溪玄義、押野慶浄、原田了哲、堀賢雄、茂野純一、林嶺信、高木俊一、五條恵猛、真鍋道円、堀川乗道、弘中観純、塩谷了源、豊田教哲、藤井尊法、谷治達瑛、花田凌雲、藤井玄瀛、網代照隆、青柳恒忍、沢実教、井上慈曠、田中哲巖、水上覚忍、寺本泰巖、桜井法操、前田徳水、筒井冠見、白石寿覚、伊津野法雨、熊谷正俊、津村雅量、口羽義教、渡辺哲乗、植松伊八、龍山玄英、松原秀勲、斯波髓性、松原達蔵らが任命された (26)。また情勢の推移に伴いさらに人員は追加された。多くは水野梅暁に見られるように、いわゆる中国通の僧侶であった。さらにこれと並行して、本願寺は、神戸の二楽荘内にも清国語研究所を設け、中国通の開教使の養成にも着手した (27)。

さてこの「特設臨時部」の設置は、まさしく教団を挙げての辛亥革命との関わりを強固にする、つまり中国との関係をさらに重視しようとする教団の施策でもあった。先の日露戦争時においても、法主大谷光瑞は、教団内に「臨時部」を設けた。1904(明治 37)年 1 月のことである。この「臨時部」とは、国家の非常事態に際し、本願寺教団の奉公を統轄する組織のことで、全国の本願寺教務所に 20 の臨時部出張所と多数の出張所支部を設けた。その時の臨時部員 (本山) は 70 名、同出張所員は 951 名にも達した。それは、光瑞の「直喩」が、

凡然に今回の事たる実にわが帝国未曾有の事変なれば、挙国一致して之に当たらざるべからず、況や本宗の教義を信ずる輩は、已に金剛堅固の安心に住する身を候えば、死は鴻毛より軽しと覚悟し、たとひ直ちに兵役に従わざる者も、或は軍資の募に応じ、或は恤兵挙を助け、忠実勇武なる国民の資性と、王法を本とする我信徒の本分をとを顕わし、ますゝ皇国の光栄を発揚すべきこと、今此時に在り、此旨よく心得らるべく候 (28)。

と語るように、日露の戦いに際して教団を挙げて戦時奉公を円滑に推進しようとするものであった。とすれば今回、辛亥革命に際して設けられた「特設臨時部」も、前回の「臨

時部」に相当する教団挙げての体制作りと認識してよかろう。

辛亥革命が終結すると当然ながら、「特設臨時部」も閉鎖された。本願寺はその閉鎖に当たり、部員の多くに褒賞を与えその功労に報いた。『教海一瀾』には「明治 45 年清国事変ニ際シクク職務ニ尽瘁シ其効績不尠ニ付今般戦時教務賞興條例第二條ニ照シ……畳袈裟ノ着用ヲ許ス」(29) とあるのがそれで、特設臨時部長であった大谷尊由以下、原田了哲、渡辺哲信、藤山尊証、堀賢雄、花田凌雲、井上慈曠、青木文教、藤井玄瀛、水野梅暁、田中哲巖、木村常諦、龍溪玄義、水上覚忍、押野慶浄、佐々木徳母、都甲文雄、そして多田等観らが対象であった。いずれも本願寺の要人たちであった。また『教海一瀾』は、辛亥革命下における本願寺の活動を振り返って次のような「社説」を掲載している。長くはなるが全文を転載しておこう。

清国の変乱は武漢の起兵に始まり、倏ち十数省を風靡して、時局の推移殆ど揣摩するに苦しみ、大勢の趨くところ奈何ともする能はず、媾和折衝の末、遂に満朝社稷の顛覆となり、皇帝の退位と共に、中華民国の創設を見るに至りぬ。「国体一日決せされば生民一日安からず、今全国の民心多く共和に傾き南北の諸省亦之を主張す、人心の帰嚮天命知るべし、朕又一身の為に億兆の意志に逆らふに忍びず、特に皇帝統治権を全国に公にし、共和立憲政体となし、近く海内の乱を定め、遠く古聖賢に倣ふ」とは即ち是れ退位当時に煥發せられし上諭の一節也、何ぞ其辞の痛切にして悲壮なる、あゝ帝王の尊貴、社稷滅亡の悲運を免れたまはず、人生誰か桑海の変に魂絶せざらんや。我本派本願寺が清国変乱に際し、生靈の不幸を思ひ、国際の友義を重んじ、いかに活動せしか、はた宗教家としての天職を發揮せしかは、已に世人の熟知する所、彼我国民に対する保護慰安、傷病者の医療救護、戦死者の遺体収容、其他軍隊慰問等の事に至るまで、殆ど力の尽くさるゝ範囲に於て、あらゆる困難と危険とを侵して、其天職を完ふせしことは、実に近来の快事たりき。今や変乱已に収まりて、事局終結を告げ、茲に本派本願寺は特設臨時部を閉鎖し常務に復するに至りぬ、吾人深く其功労を謝す。清国の事変は已に解決せられぬ、されど北京の騒動と云ひ、各省に起れる粉乱と云ひ、暗澹たる風雲はなほ揺動して、未だ全く平和の光明を認め能はざるものあり。由来清国の境土は頗る広大にして種々の民族を包轄せり、されば新政府が能く是等の民族を統括し、境土の隅々までも革命の意志を疎通せしめ、国民の世論を一定する事は甚だ容易の事に非ず。さればたとひ共和政府顛覆して再び王政の復興を見るに

至らざるまでも、事局の転化は未だ全く絶無なりと卒断すべからず。たゞ吾人は成功は成功を生むの諺にもれず、清国革命党の成功が、更に今後より以上の成功を収め得て、長く極東の平和を確立せんことを希ふの外なき也。清国の革命は、其党員の多くが、米若くは我が国とに關係を有するのみにあらず、人種上よりするも、地理又は文学上の便宜よりするも、他の列国に比して我が国は最も深き關係を今後の支那に有すべきこと明かなり。又我が国の立場よりするも、支那を扶養し啓發して、共に文明の舞台に立つべきことは実に遅くべからざる使命なり。此使命を帯ぶる我國民の覚悟は今更言ふ迄もなく、我が国の宗教家としても敢て拱手退嬰して傍觀すべきにあらず、寧ろ進んで彼國民の信仰、道德、智識等の上に刺激を加へ、指導を与へ、物質的文明と共に精神的文明の扶植を図らざる可らざること勿論也、されば一旦閉鎖せられし本願寺の特設臨時部の如きも、其組織が形式的に解かれしのみにして、實質に於ては依然として存すべきのみならず、眞實の精神的活動は之を今後庶幾せられざる可かざる也 (30)。

(四) 本願寺の救護活動

すでに触れたように本願寺は、負傷者の收容や死屍收容並びに在留邦人の避難活動を積極的に行った。『教海一瀾』は、その様子を、

清国の変亂に就ては、我本願寺が他宗派に率先して戦亂区域の移住民救護慰問等に尽瘁し、特に臨時部を開設して、時局の変に應ずる計画を定め、着々実行しつゝあることは、前号既記の如くなるが、今次更に官革兩軍戦死者の葬儀を営むこととなり、夫々在清国開教使に対し訓令を發せられたり。凡そ戦闘の結果が悲惨を極むることは今更言ふまでもなけれど、殊に軍事制度の不完全なる清国の如きは輻重継続せざる為には後陣中掠奪を逞ふる兵士あり、衛生看護の設備欠けたる為には戦場に遺棄せられたる負傷者あり、鮮血に塗れて收容せられざる戦死者あり、累々として算を紊だせる屍体は糜爛腐敗して、粉々たる臭氣鼻を撲ち、其悲絶凄絶なる惨状は殆ど目も当てざれざる光景を呈し、遺族者をして転た痛恨の情を堪へざらしむるものありと。乃ち我大法主猊下の至人至愛なる、深く是等戦死者を憫み、且つ遺族の心情に同情を寄するの余恩怨平等の仏意に基き、自ら私財を投じて官革兩軍戦死者の遺骸を收容し、彼の国風に順ひ、丁重なる葬儀を執行せしむることとなり、追ては内地若くは清国に於て大追弔会を営み、以て戦死の英魂を憑弔せらるゝ筈なりと。吾人は深く猊下の深重なる盛旨を体し窃かに感泣の情措く能はざると共に、我日本仏教徒の体面を發揮すべき義

拳として、中心深く歓喜に堪へざるものあり (31)。

と。こうした光瑞と本願寺の辛亥革命期の漢口における行動は、ほとんど知られていなかった。こうした活動をどのように見做したらよいのであろうか。宗教教団としての活動であったことを視野に入れるべきか否かによつて、評価は大きく分かれるであろう。もちろん宗教教団としての活動を含めたとしても、その背後には教団の範疇には納まらない光瑞の思惑が働いていたことは予見の範囲である。こうした光瑞の行動の背景を明確化するには、光瑞の指示下に活動していた中国通として知られた水野梅暁について承知することも必要であろう。水野は元來曹洞宗の僧侶であったが、大谷光瑞の知己を得て真宗の僧侶となった人物である。辛亥革命前後に外務省の囑託として、湖南省調査を中心にして、「革命党の現勢及び関係各派」「日露協商の反響」などを報告している (32)。

しかし本願寺の活動は、この漢口だけではなかった。もう少しその実態を追ってみよう。

(五) 慰問袋運動

辛亥革命勃発に際して本願寺が先ず最初に執った行動は、慰問品の送致であった。『中外日報』は、本願寺清国開教総監付賛事長藤山尊証 (33) の行動を次のように伝えている。

西本願寺連枝清国開教総監付賛事長藤山尊証師は、本年五月已來上海に駐在せられつゝあるが、賛事木村常證氏と共に同地布教所に赴き銳意画策せられ、龍溪、押野両開教使を督して布教に大発展をなさしめ、着後成功の穉に達しつつあり。旧年に比し全く別天地の觀あり、而して藤山師は同地のみならず、清国各地の出張所をも一新せしめるため、七月九日先ず満州にある別院及び出張所の教況視察に赴かれ漸く九月一九日に至りて上海に帰られ、近日中に公務を帯びて一時帰京せらるゝ筈なりしも湖北省武昌城にある清兵拳って一大革命の反旗を起し、既に新政を布き新曆を用い、而も漢陽、漢口の二大市をも占領し頗る猖獗を極めつゝあるを以て帰京期を延期し、武漢に地在留邦人慰問のため布教使及び近侍を随え慰問品携帯の上、十四日急遽同地に向かはれたり ……」 (34)

これによれば、藤山尊証は、中国各地の本願寺出張所を視察して日本に帰国しようとしていた時革命に遭遇し、在留邦人慰問のために急遽武漢に向かったのである。こうした在留邦人への支援は、慰問という形態によって本格的に展開されることになる。それは、本願寺の仏教婦人会による慰問袋の送致運動が中心となった。中清地方の武漢及び長江一帯の地域は、戦乱のため交通事情は悪く、当地方の居留する邦人の困窮を救うためであった。慰問袋の中には、書籍、齒磨き、石けん、絵はがき、用事、ハンカチ、手拭い、風呂敷、

紙、筆などの日用品等を入れるように指示されていた (35)。

こうした国内の活動に加えて、中国各地の本願寺出張所などにあっても慰問袋の送致運動が展開された。漢口本願寺では、

漢口本願寺出張所々属仏教婦人会は、朔風耳を劈く該地方（武漢を指す）に勤務せる軍人の労苦を慰めんとて、慰問袋を募集し、同市駐屯隊及び守備隊に寄贈せし…」(36)とあるように、武漢在住の軍人たちに慰問袋を贈っている。また大連本願寺内関東婦人会も、

先般湖北の地に於ける第三艦隊並びに義勇団に送るべく同会主催となり広く南滿沿線各地の同胞に謀り慰問袋を募集せしが其結果極めて良好にて、長春、奉天、大石橋、旅順、大連等の各地より輸送し来れるもの其数既に一千五百余个に達せしを以て去月八日大連出帆の神戸丸に托して発送せし所頗る諸将士の満足を得、……実に多大なる効果を得しと。因に其後又各地より送り来りしもの又既に数百個に達せしを以て近日中に再び第二回の寄贈をなすと云ふ (37)。

とみえる。こうした慰問袋運動は、

上海出張所にては …… 清国開教総監部の命令を以て清国各地の出張所及び内地同信の同胞並びに真宗婦人会に向け慰問袋の募集を極力勧誘しつゝあり猶戦況の発展次第にては平等大悲の宗意を發揮して官革両軍の傷病者に一賭同仁の同情を注ぐべく救護隊を編製して施薬医療等にも尽力する計画なりと(38)。

とあるように、在留邦人だけでなく、官革両軍の傷病者などに広げられようとしていた。

こうした慰問活動は、慰問袋運動だけでなく、漢口本願寺内の慰問部の設置のような形態も取っていた。それは『教海一瀾』によって次のように伝えられている。

漢口よりの報に依るに、中清派遣隊にては、着漢夫々地理の不明なると、列国兵士間の関係等より一般外出を厳禁し（練兵の外）居れるを以て、兵士の苦痛少なからず、司令部に於ても其方法なきに苦めるより尾野司令官と協議し、去月十四日より我本願寺出張所の一室乃至二室を開放し、隊員の休息兼慰安所たらしむることとし、左の規定を設けたり。

本願寺慰問部

1. 本部は中清派遣隊員諸士の休息所として本派本願寺出張所内に開設す。
2. 中清隊派遣隊員諸士は何時にても本部に出入り随意たること。

3. 本部には左の設備をなし隊員諸士の慰問に供す。

新聞 東京朝日新聞、大阪毎日新聞、萬朝報、大阪朝日新聞、福岡日日新聞

上海日報、漢口日報、中華民國公報、大漢報

娯楽機具 五番、将棋盤、カルタ、其他。

文房具 筆、墨、紙、封筒等を備へ付け随意使用。

入浴 毎週水日の二曜は朝より夕刻まで風呂を沸かし随意入浴。

茶菓 常に茶を煎じ置き干時菓子を饗す。

右は東奔西走漸く以上の設備を整へ一月十四日の月曜より開設せり (39)。

本願寺は、中清派遣部隊の慰問も行っていたのである。ここでいう中清派遣部隊とは、辛亥革命の成功により 1912 年 1 月 1 日に南京において中華民國臨時政府が樹立されたが、同日漢口に日本から陸軍の一部隊が派遣された。この部隊を中清派遣部隊という。規模は陸軍歩兵一個大隊（歩兵四個中隊）と司令部からなり、650 人から 700 人の規模であった。毎年第 18 師団（久留米）あるいは第 6 師団（熊本）の各連隊より選ばれて派遣されたのである (40)。

こうした本願寺の慰問活動には、

森下仁丹及び高橋清快丸は、西派本願寺が清国時変に関して慰問袋を増遣することを聞き、今回仁丹五千袋を特派の慰問使に托して、官革両軍の傷病兵并に清国居留同胞に慰問として寄贈せり (41)。

とあるように協力者も現れている。もちろん本願寺だけがこうした活動を行ったわけではない。日本政府を中心に日本赤十字社等も積極的に慰問品等を送っている (42)。政府が在留邦人の保護を行い、人道、公平、中立、奉仕などを掲げる日本赤十字社がこうした行動を取ることは、その任務と使命感に照らして容易に理解できるが、日本の一仏教教団が外国の革命に即して特設臨時部まで設置し、組織だった大規模な活動を率先して行ったことは異例であり、見方によっては奇異にさえ映る。ここにそれを指揮した大谷光瑞の考え方、その下にあった本願寺教団のあり方が具現化していると見るべきであると私は考える。

(六) 救護団活動

【漢口での救護団活動】

戦闘激戦区域であったいわゆる武漢地域において、本願寺の主要な任務は負傷者の救護と死屍の掩埋作業であった。『中外日報』が、

支那変乱地の中、殊に漢口、漢陽方面に於ては官革両軍の戦死者及び人民の死没者頗る多く、死屍累々として頗る惨鼻の状を呈し居るが、西本願寺光瑞法主は其等の死没者を悉く本願寺の費用を以て埋葬せんと欲し、上海なる臨時本部に対しその旨訓令したりといふ（43）。

と伝えるように、それは光瑞の直接指示により掩埋作業が行われたのである。さらに『教海一瀾』が、

官革両軍並に良民の死体收容の掩埋隊は、愈本部を漢口本派本願寺出張所内に設け、高洲領事、横尾警察署長、河野同仁病院長、上野赤十字社救護団長、大間知漢口居留民団長、同漢口日報社社長橘三郎等の諸氏を顧問として井上隊長水上以下数十名隊員にて、昨年十二月十日組織されたり、紅十字の腕章を附せる隊員が紅十字と日章とを交叉せる隊旗の下に、約百名の人夫を使役して活動を開始したり、追て機を見て其内大追弔法会を執行する予定なりと（44）。

と詳報するように、漢口本派本願寺出張所に本部を置き、「高洲領事、横尾警察署長、河野同仁病院長、上野赤十字社救護団長、大間知漢口居留民団長、同漢口日報社社長橘三郎等」を顧問として井上隊長のものに、「官革両軍並に良民の死体收容」を行ったものであった。つまり本願寺の主導で行われたということを確認する必要がある。そしてその中心となった井上隊長、すなわち漢口井上開教使は、極めて興味深い報告を行っている。『教海一瀾』の報によれば、

武漢の地に於ては官軍が日本に対する反感情は宛然敵側の觀をなしつゝあり、此際日本の立場としては清国宮廷に感情融和の方法を講ぜざるべからざる次第なるも、是に対する何等の策なく、松村総領事（45）以下大に当惑を感じつゝありし折柄、端なくも漢陽陥落の当日を以て我が大法主猊下深厚無涯の御思召を以て、恩怨平等に死体收容の事業開始の命伝はりしより、井上氏は直ちに松村総領事及高洲領事等に相談の結果、此事業こそ日本が最も公平にして、決して偏頗の行動を執りつゝあるものに非ざることを官軍側に通ずる最妙の方法なりとて、即座に掩埋隊を組織に着手し、松村総領事より馮国璋（46）に向て交渉開始することゝなれり。此を以て該事業が例ひ實際の行動を開始するに及ばずして万々一終るが如きことありとも、日本が満朝廷に対し特に武漢の地に於て外交上温かき感情を有せしことを、官軍司令官に通ずる唯一の方法として、実に遺憾なき機関となれる次第なりと。右の事業なるを以て、松村総領事は掩埋隊成立するや、直ちに外務大臣に向て我が猊下の事業が国交上至大の影響を

与ふるに力ありしことを上申に及ぶと共に、馮国璋に交渉せる結果、左の如き復照文を送り来たり、乃ち今日に於ける我掩埋隊は満を持して放たざるの形勢あるものゝ如し(47)。

と見えるように、本願寺の死屍収容、掩埋隊の活動を外務省が利用して、現地の「官軍」と「満朝廷」の「日本に対する反感情」を払拭しようとしていたのである。本願寺が革命勢力と清朝政府に対して共に公平であることを仏教教団のあり方として強烈に提示し、革命の推移がどうなるうとも中国における開教活動の主導権を確保しようとした光瑞の思惑に国家、外務省が便乗しようとしたのである。松村総領事は、この光瑞の活動を官軍側の馮国璋に交渉したのである。その馮国璋の「復照文」(48)は、次のとおりでその様相を伺うことができる。

陽曆十月三日(マ) 初一日に、貴総領事から御手紙をいただきました。貴国大谷光瑞伯爵が費用を出されて、漢口の戦地で骸骨を掩埋して頂けることを承知致しました。貴国の方々を派遣して頂き実施方法をお教えて頂ければと存じますので、本状を差し上げました。大谷伯爵の御慈愛及び御仁義に従い、漢口漢陽等の戦地で弊軍軍医官長は兵士を率い、規定に沿って掩埋しておりました。事情はすでに総軍医官に伝えました。総軍医官は、大谷伯爵の派遣して下さった方々の御協力頂くことを承知いたしました。その上で、掩埋の場所等に関する事は別紙で申し上げると存じます。御協力を下さいようにお願いいたします。

取り急ぎ、書中をもって、お願いまで。

敬具

十月十二日

【南京での救護活動】

まず当時の南京情勢を確認しておこう。『中外日報』によれば、

(1911年11月)二十八日の支那発電は南京の陥落を報じ、又た漢陽の陥落を報じ来る、南京の陥落は官軍に頗る打撃を与へ漢陽の陥落は革命軍の勢力を削ること大なり。斯くして官革両軍の勝敗固より未だ判ずるべからざれども動乱の永く続かんことは決して喜ぶべきにあらず……然れども革命は大勢なり、万一今回に於て形勢非に陥ることあるとも、数年ならずして更に必ず大變乱を惹起するの期あるや疑ひを容れず

而して必ず其素志を貫徹するに至らん。然れども今度の動乱に於て若し革命軍勝利を得るに至らんか。専制主義の満州朝廷に代りて新たに共和政治行はるゝに至るべし。

斯くして君主専制の国は共和政体の国とならん (49)。

と南京の陥落を伝え「然れども革命は大勢なり」として共和政治に移行するには必定であるとの見解を提示している。南京で孫文を臨時大総統として中華民国臨時政府が成立し、共和制に移行したのは、一か月後の 1912 (明治 45) 年 1 月 1 日であった。

さて南京にあつては、

上海よりの報に依るに総司令部内に設けたる我救護所の死体収容に就ては、堯化門停車場付近に製棺所を置き、九名の大工をして政策に従事せしめ、所要に応じて送付するの計画をなせしが、堯化門方面に於て敵の間諜を銃殺せし死体は、重傷落命せし死体を収容せる外、南京陥落意外に早かりしを以て、製作間に合わざるのみならず、其運搬上種々故障を生じ、予定の行動をなす能はざりしも、天寶城の七十八、孝陵衛の二十三個に対しては、総司令部より附属せしめたる苦力五十名を指揮し、或は埋葬し、或は入棺収容等、陥落已来水野出仕 (水野梅暁) は、姚委員其他の団員を指揮し、其収容に務めつゝありしが、満州旗人衛に於ても 掠殺其他自殺せしもの十数名あるを聞き、一視同仁直ちに着手し九名を収容せり、こゝに南京仁育医院長張世銓、商会黨事陳灝は、仏教信者として従来行路病者孤児其他公共慈善の事業を経営しあるもの、今回我仁慈的行動を聞き感佩措く能はず、是非我等も参加を許され度旨苦力数十名を伴ひ請ひ来りしを以て、直ちに之を許し、死体収容に力めしが旧臘十日を以て全部終了せりと云ふ(50)。

とあるように、総司令部内の本願寺の救護所は、棺桶の製作及び死体収容が主であったが、医療活動も併せて行っていた。しかもその活動は、総司令部をも動かすほどであった。本願寺特設臨時部出仕水野梅暁の活動が際だっていることが注目されよう。それは『教海一瀾』によって明らかにされている。ここでいう総司令部とは、中国革命軍側総司令部で水野梅暁は本願寺清国開教総監の藤山尊証とともに、1911 年 11 月 26 日徐総司令官 (徐紹楨 (1861 ~ 1936)) と面談したとあるので、間違いなからう。

創設当時より自家の多忙も顧みず、特志を以て南京に出張治療事務に尽力せし、水野主任、辻医長以下の人々は、何れも開設已来危険の巷に出入し、献身的に我救護事業を補佐しつゝありし人々は左の如し。

龍谷会救護主任 水野梅暁 医長 予備陸軍一等軍医仏教青年会員 辻一 鍼術
マッサージ 岡村福松 医師 佐川幸之助 看護婦 築山豊子 同 同人娘 総
司令部派遣専属委員 姚光鎔 日本高等工業学校留学生 魯觀成 同 何恢禹
龍谷会員常請員三名 (51)

とさらに詳細に知ることができる。光瑞は、本願寺きっての中国通水野を南京の医療所の主任として派遣していたのである。彼は、東亜同文学院第一期生であり、又根津一との関係が深かったので、黎元洪や孫文などとも交流があったものと推察される。また医師看護婦の増員もあった。

救護所は、地点の好位置なるとその周囲に警備係其他約老万の兵員宿営しつゝあるを以て開設已来日々来るもの数十名の多きに達し、到底一名の医員にては之を救護し得る能はずとて客月十日よりさらに医員一名を急派し、看護婦数名を派遣せりと(52)。

(七) 本願寺と避難活動

武漢三鎮には多くの在留邦人がいた。革命の策源地となったこの地は、戦火飛び交い、掠奪など日に日に激しさを増していった。その中で在留の邦人の安全確保が日本政府の喫緊の課題であった。外務省外交史料館所蔵の外務省記録（外交文書）の中に「上海到着後ニ於ケル漢口避難民ノ始末ニ関シ報告スル件」と題された次のような記録が残されている。1911（明治44）年11月8日、漢口総領事松村貞雄が外務大臣内田康哉に宛てた公信である。

当地在留本邦婦女子其他ヲ上海迄避難セシメ候義ニ関シテハ去月廿八日付公第三百五十七号ヲ以テ申進置候処予定ノ如ク三十一日午前六時日清汽船会社汽船大貞丸ハ漢口避難民二百九十三人宜昌避難民十三人合計三百〇六人ヲ乗セ当港出帆致候。同一行ノ船中保護者トシテ当地居留民団ヨリ依頼シタル西本願寺開教使水上覚忍本日上海ヨリ帰漢シタルヲ以テ当地民団ヨリ当館ニ報告スル所ニ依レバ同船ハ十一月二日夜上海ヘ到着シ右避難民中翌三日朝帰国ノ目的ヲ以テ日本郵船会社汽船弘濟丸ニ乗替ヘタルモノ五十五人又一時総領事館ニ引渡セシモノ百二十八人各自知人ヲ頼リ自由上陸ヲ願出タルモノ百二十三人ナリシカ前記総領事館ヘ引渡セシモノハ更ニ西本願寺ニ七十八人東本願寺ニ三十二人日本人倶楽部ニ二十八人ヲ収容シ十日間救護ノ予定ナル趣ニ有之候…… (53)

これによれば、「本願寺の僧侶水上覚忍」が避難民を上海まで送り届け、又上海において

も東西本願寺が避難民の宿舎に充てられたことが明らかである。それは、

十一月二日上海領事館より本派本願寺上海出張所に避難同胞の件に関して電話あり、木村賛事は領事館に出頭協議の結果、出張所及び龍谷会の全部を開放して同胞を七十名収容せり（54）。

あるいは、

上海出張所にては避難同胞を収容して、無資力者の費用は全部を所費にて負担し、また一方には清国開教総監部の命令を以て、清国各地の出張所及び内地同信の同胞并に真宗婦人会に向け慰問袋の募集を極力勧誘しつゝあり、猶戦局の発展次第にては平等大悲の宗意を發揮して、官革兩軍の傷病者に一視同仁の同情を注ぐべく、救護隊を編製して施薬医療等にも尽力する計画なり（55）。

とある『教海一瀾』の記事によってもより詳細に状況を把握できよう。本願寺の救護活動は、同胞の避難だけでなく「無資力者の費用は全部を所費にて負担」するなど、日本政府が本来ならば担当すべき事までを肩代わりするものであった。一宗教団体が当時日本政府を超えるような活動をしていたことは注目してよからう。

第三節 革命党と本願寺

(一) 大谷尊由の南京、武漢訪問

こうした光瑞、本願寺の様々な救護活動に対して、官革兩軍は、それぞれ感謝の意を表している。ここでは黎元洪、孫文、黄興といった中華民国の指導者たちの感謝の言を整理してみよう。まず光瑞の弟、大谷尊由が本願寺特設臨時部長として南京、武漢を訪問したことから触れていこう。

『教海一瀾』には

…… 今や清朝の退位問題、南京共和政府の組織等時局の推移は時々刻々に急ならんとするより特設臨時部長大谷尊由師は臨時部出仕渡辺哲信氏外数名を随え、客月二十三日午後四時四十八分京都駅発の列車にて出神、同夜十時神戸港出帆の「マンチュリア」号に乗船渡清の途に就かれたり。聞く上海到着後は武漢地方に向ふて、我派が組織せる龍谷救護団の実況等を視察せられ、次で北京に趣かるゝ予定なりと、吾人は一行が長途の旅程を終りて恙なく帰朝せらるゝに日を待つと共に一派将来の対清政策が

如何に実現さるゝかを読者と俱に留意せんとす。而して出発に際しては、嗣法猊下を始め藤枝、本多、後藤三執行、大洲総監、朝倉次長、痴山賛事長、堀所長、親授各役員、在京の採訪使、各総班長等は京都駅に、原田賛事長、内田課長、湯川主事は神戸まで見送れたり、同駅には金屋採訪使、龍島総班長、婦人会、青年会等多数の見送りあり、本部長にはミカドホテルに休憩、予定の如く十時抜錨、渡清の途に就かれたりき (56)。

なお『中外日報』には、この大谷尊由の行動に関連して、「本願寺には北清通もあれば南清通もありて支那を解釈するには最も人物に富み居り、殊に今回執行長に随行したる渡辺哲信師 (57) は最も支那通なれば今回は何事か見付けて清国布教の基礎を定むるならんと云ふ」(58)。

と述べている。突如として勃発した辛亥革命に際しても、本願寺が素早い対応を見せたのは、ここに記されたような豊富な人材を蓄積していたことが背景にあったことを伺わせる記事である。

(二) 大谷尊由と孫文との会談

さてこの大谷尊由の訪問は、南京、漢口を主要な対象地とした。それは従前の清国布教を水泡に帰させないこと、さらに革命期における本願寺の活動を背景として、革命政府とのコンタクトを取ることが光瑞と本願寺の最大の目的であったことを推察させよう。それは中華民国臨時大総統孫文との会見に始まったことによって裏付けされよう。光瑞、本願寺は先の辛亥革命に際しての本願寺の公平な支援に対して感謝の言質を得ようとしたに相違ない。感銘の進展を背景に、革命政府の影響力の増大を考えてのことだろう。

さて南京到着の様子を『教海一瀾』は、

本年一月渡清の途に就かれたる特設臨時部長大谷尊由氏は、上海に於る用務も略ぼ終了せしかば、渡辺出仕、藤山賛事長を随へ、客月十日午前七時四十五分上海発の一番列車にて南京に向はれ、同日午後二時三十七分着、寺尾博士 (59)、鈴木領事代理、山口書記官、有隣館救護隊長古賀三郎、高倉正治、山本勇吉、小池信美、中世古悌次、濱野譲二、栗林王城、前田耕作、吉村伝助等の諸氏に出迎はれ、日本領事館より差廻したる馬車にて、寺尾博士の邸に至られしが、領事鈴木栄作氏 (60) を初め数多の来訪引きも切れざりし愈々明日午後四時を以て孫大総統に会見の予定を以て、博士邸に一泊せられたり (61)。

と伝えている。日本領事館を筆頭とする南京在住の朝野の人々により大歓迎を受けた。そ

して、『教海一瀾』が、

翌十一日は紀元佳節なるを以て領事館より出迎への馬車にて午前十時拝賀式に参列、式終て鈴木領事と暫時会談あり、此間に於て大元帥黄興より差廻したる馬車の著せしかば、之に乗車せられ、本願寺龍谷救護団を視察し、茲に記念の撮影ありて一先帰邸、午後更に寺尾博士等と、明の孝陵を巡覧の後ち、愈々約束の午後四時、寺尾博士の案内にて、藤山賛事長、渡辺出仕を伴ひ、孫大總統に会見、特設臨時部出仕渡辺哲信氏の通訳を以て、約一時間歓談ありき、孫文は常に温乎たる微笑を以て之に接し、衷心より遠路の来訪を感謝せるものゝ如く、その言語動作の上に於ても明に察するを得たり。今後之が為我派が活動上多大の利益を獲得するは言を待たずと云ふ（62）。

とあるように臨時大總統孫文と会談した。なおこの会見は『孫中山年譜』や『孫中山史事詳録』にも「接見日本駐寧領事及本願寺総理」（63）と記載されている。

そして孫文との会見を終えた大谷尊由は、

同日午後六時より大元帥黄興は、特に大谷臨時部々長を招待し、晚餐会を開催に付、同夜その席上に臨まれしが、款待至らざるなく、午後十時帰邸せられたり（64）。

とあるように、大元帥黄興との晚餐会に臨んだ。後日、孫文及び黄興は大谷光瑞に対して、今次の本願寺教団の救護活動に対して、感謝状を送付することになる（65）。『教海一瀾』は、

昨年来の清国変乱に際し、長江一体の交戦区域に於いて我が本山が傷病兵の救護慰問、死屍収容、埋葬追弔等に関し、懇切周到に終始尽瘁せし事は、その都度本誌上に記載せしが、右に対し、孫文、黄興の両氏より「大谷光瑞法主台啓」総統府緘として、左記の如き自筆の感謝状を特送し来たりと、遠がに革命大家の筆とて、孰れも風骨稜々たる中にも孫の閑雅なる黄の雍容たる何れも其人となりを偲ばしむるものありと。

前置きして、

大谷 光瑞 法主殿

謹啓

中華民國の再興にあたり、種々御援助を頂き、我が国民を代表して、謹んで感謝の意を申し上げます。御健康に留意されることをお祈り申し上げます。

取り急ぎ、書中をもって、御礼申し上げます。謹んで白す。

中華民國元年三月十六日

孫 文

拝啓

我軍は革命を始めて以来、負傷兵の收容と治療していただいております。御厚情に対し敬服致すとともに感謝致します。

取り急ぎ、書中を以て御礼まで。

敬具

黄 興

大谷 光瑞 殿

とあるのがそれである。

さて南京での目的を達した大谷尊由は『教海一瀾』が伝えるように、

特設臨時部長大谷尊由氏は、南京に於いて大總統孫逸仙と会見の後、渡辺臨時部出仕を従へ、二月十四日漢口着、多数の出迎を受けて、一旦ポーマースホテルに投ぜられ更に松村漢口総領事夫妻の厚意に依りて総領事館内の新築官舎に宿泊せられたり

(66)。

とあるように革命の地漢口に向かった。当地漢口では辛亥革命の立役者であり中華民國副總統に就任した黎元洪と会見した。元々清朝側の軍人であった黎元洪は、湖広総督瑞澂將軍や張彪將軍がいち早く漢口に脱出したが、彼は革命派に捕らえられてしまった。しかしながら革命派には主要な指導者がいなく（武昌蜂起は突発的な出来事であったため）、何と革命派の指導者になってしまった。彼は本願寺漢口出張所所長井上慈曠に対して、

拝啓

お名前をかねがね伺っております、何時かお目にかかりたく存じます。このたび、井上様から清快丸を一万包いただきまして、心より感謝の意を申しあげます。我軍諸將兵も喜びが絶えません。御厚情に感激しております。

取り急ぎ、書中をもって、謹んでお礼を申し上げます。

敬具

一月十七日

黎 元洪

と光瑞宛に感謝状を送っていた (67)。これに対して光瑞は、

拝啓

先日、貴軍隊供用のため、ささやかな財物等を差し上げましたが、親切で熱意ある御返事を頂きまして、誠に恐縮に存じます。貴副大統領は、天命により、革命の機に当たり、国の政体を改めました。国民は春になったように喜び、共和を喜びました。これは実に四千年以来初めてのことであり、その偉大さは書ききれぬほどです。作り出すことには困難が伴います。策略などもつきまといます。軍需の会計や兵器の出納についても周到に計画して行わなければなりません。今立派な規則を作らなければ将来困るでしょう。貴副大統領は軍隊を統率し、政治を指導することは優れています。遠く離れていますのでますます敬慕の念がますます強くなってきています。この度弟尊由（大谷尊由）を貴国に派遣し、今は上海にいますが、近日長江をさかのぼり武漢に向かい、到着すれば訪問することでしょう。微力ながら力になりたいと思いますので、遠慮なく申し出て下さい。また武漢には井上慈曠も居りますので、面倒を見ることでしょう。御迷惑をおかけしますが、御指導のほどお願い申し上げます。

敬具

との返書を出している (68)。つまりこのような経緯も加わっての黎元洪との会談であった。その様子を『教海一瀾』は次のように伝えている。

予て漢口特設臨時部支部長に対し臨時部長着漢の上は、会見を請ふ旨副総統黎元洪より交渉ありしかば、二月十七日渡辺出仕、井上支部長を従へ、大谷部長には総領事館特別仕立てのランチにて長江を渡り、武昌都督府に黎副総統と会見せられたり、黎元洪は連枝の遠路来訪を感謝し、懇懇に打解けて談話を為したり、その中の一節に「猯下及び貴連枝は日本に於ける学徳兼備有名の宗教家にして且つ政治家たる事を拝承せり、我革命政府は此を樹木に譬ふれば、漸く発芽したる計のものにて、生育発達して開花結実に至るは前途頗る遼遠なりと感ずれば、今後は何か就けても御助言と御注告を乞う云々」と陳べ、夫れより更に語を継いで、日本陸海軍の将官連の月旦より遂に一転して大隈伯爵の身上に説き及ぼし、我革命政府が、日本に負ふ処実に慚からずとて、感謝の誠意を表せり、後ちシャンペーンを酌みて、猯下並びに連枝の健康を祝したりと云ふ」(69)。

なおこの一連の会談において「西蔵問題」も話し合われたことは、「外交記録」を検討した白須淨眞は、すでに明らかにしている（70）。

孫文は、1913年の訪日の際、大谷光瑞の革命に対する功績に感謝の意を直接伝えるために、京都本願寺に大谷光瑞を訪うている（71）。そして次のような感謝状を送っている。

拝啓

このたび、貴国観光に際し、わたくしどもは各界の方々より熱烈な歓迎を受けました。貴国の人は同種同文の国を愛し、またアジアの保全を務めとされるという貴国の御厚情をしみじみ感じております。我々アジア人にして大変誉れであり、崇拝しております。私たちが貴国の御期待に応えられるよう全力を尽くします。私たちは全力で貴国の好意を国民に伝えます。両国の親密は両国の幸のみならず、世界平和にとっても幸なものであると存じます。ここに御招待の好意を謝し、御幸福のほど、お祈りいたします。

取り急ぎ、書中をもって、御礼申し上げます。

敬具

孫 文

馬 君武

何 天炯

載 天仇

袁 華選

宋 嘉樹

大谷 光瑞 殿

この孫文からの感謝状は形式的なもの（72）に過ぎないが、光瑞、本願寺の辛亥革命期の活動を考慮すれば、孫文の訪問は日中近代史における一つの大きな事件と見なしてよからう。

第四節 本願寺の中国開教

本願寺教団は、辛亥革命にあたって混乱する中国の地にあつて支援活動を日本の仏教界においてはほぼ一手に引き受けて実施した。それは在留邦人だけに限られたのではなく、官革両軍双方に対する救護・慰問・医療活動として展開され、その上、死屍の収容などにまで及んでいた。前世紀初頭の国内ではなく国外であったことを考えれば、やはり驚きべき事である。これを仏教教団の行った単なる「慈善事業」の枠の中にだけ押し込めてしまうのであれば歴史性の無視となろう。さらには、日本政府も後追いするような通常では考えられない行動を差配した本願寺法主大谷光瑞という人物の特質も見いだせなくなってしまふであらう。

さて本願寺教団は、一連の救護活動によって、何を得たのであろうか。

『中外日報』は

されば西本願寺が清国布教に手を付けたるは今の法主が始めて渡清したる当時に始めて既に十年の星霜を算するに至つた其間に於いては隣山の東本願寺の布教と衝突して両派互に争ふたることもあれば外教徒の迫害に逢ふて問題の持ち上がったこともある、兎に角に此過去十年間に於ける布教上の歴史は面白からず、又何等得る所もなく只旅費は日当を与へたる布教使を清国要所に駐在せしめたと云ふに過ぎざりしが、只多少慰むるものあるは今回の動乱あるに及びて既に出張所が上海にも漢口にも設立しありたるを以て此出来事のために新たに設立するの必要なく平時の状態を臨時状態に直せば足る訳なるを以て此点に於いては大いに得る所ありたる次第にて過去失いたるものも多少は戻りたる訳なり。満漢何れの人種が中央政府を確立すると本願寺の今回の行動がよく彼ら清人の眼に映じて来るべき日清両国間に取極めらるべき布教問題に聊かにでも貢献する所ありたらんには今回の本願寺の功績は非常なる功名手柄にして延いては夫が忽ち過去十年間の功果と云ふことになるから其間たとい一人の信者を得ずとも一教会堂の根柢を固むることを得なかつたとすると今回の一事を以て充分とする次第なるが、向後の時間に果して如何なる功果を与ふるものにや大いに拝見すべきことなり、併し本願寺としては斯くの如きものを以て満足すべき者にあらず、大に布教を拡張して内地は云ふに及ばず支那人に向つて布教して説教所の独立し他の独立せざるものも一方の独立したる教会より費用をもつて行つて伝道する様にして清国は清国自ら開教して漸次拡張する様にならざれば真の布教の目的は達せられざる次第なり、されば今回の如き官革両軍の間に入ってよく本願寺の顔を知られたるを以て此機を逸せず清国布教に一層の力を添へたならば慥かに効果あらん、若し其のことなくし

て単に官革両軍の死者を葬って遣った位の事にて布教師も引揚げて布教上何等の施すこともなかつたならば今日までの総べては徒勞に終る次第なるが向後に於て本願寺たるもの如何なる態度に出ずるものにやと杞憂し居る人あり (73)。

と記していることは参考になる。ここでは今回の辛亥革命に至るまでの本願寺の清国布教を総括して、「官革両軍の間に入ってよく本願寺の顔を知られたるを以て此機を逸せず清国布教に一層の力を添へ」、「清国は清国自ら開教して漸次拡張する様にならざれば真の布教の目的は達せられざる」のだと主張している。「官革両軍の死者を葬って遣った位の事」だけに終わらせるのであれば「今日までの総べては徒勞に終る」として辛口ながら本願寺を鼓舞し、中国における自立した布教活動を求める論調となっている。おそらくこれが光瑞の意の代弁であろう。光瑞の目的はここにあったと見てよかろう。それは九州門司に新たに鎮西別院を開設し「大陸新教線發展ノ根拠地トシテ」(74) したことによって具現化されることとなった。その別院起工式において、

(1911 (明治 44) 年 11 月 ... 筆者補注) 去月二十八日の鎮西別院起工式に際し、予て九州地方御巡教中なる、大法主猊下を始め嗣法猊下并に本派重役の人々多く関門の地に集合せらるゝを機とし、我一派の対清教略を議定すべく、当時清国開教総監を兼務せられたる、執行長大谷尊由氏は去る二十五日を以て北海道の巡回を了へ、直ちに京都にて嗣法猊下の一行に合して西下せられ、鎮西別院起工式挙行後に於ける機密会議は、大法主猊下御乗船龍田川丸の御用務室に於て開かるゝことゝなれり、目下世界の一大懸案たる清国時局に関する意見は、先づ清国開教総監によりて滔々数万言、支那現当の趨勢より列強の大勢に及びて余蘊なく開陳せられ、甲論乙評数時間に渉り、穩健慎重なる対清大教略は議定せられたり、而して該会議に列せられしは教学参議部長として嗣法猊下特設臨時部長として清国開教総監大谷尊由氏、藤枝、本多、後藤の三執行、本山駐在特設臨時部支部長原田賛事長にして本派は今次清国の事変に関しては、曩に武漢の地に變乱爆發してより多大なる注意を払ひ各要地の出張所等に三々五々、支那通の開教使等を増派し。布教々範規定により特設臨時部を編成し、急に応じ機宜に従ひ施設肅策しつゝある処なるが、此事変たるや支那全省に動亂の過流に捲かれ、其終極は逆賭し難きものあるを以て、茲にその大勢に鑑み遠大なる対清教略を一定し、歩一歩多年清国開教に抱負せる方針を実現し以て濟世為物の本領を發揮せんとするにありと、今後我臨時部が堅忍持久着々対清教策の上に施設せんとする雄図は、世の刮目に値するものならん乎」(75)。

この場所において今後の対清政策が策定されたのである。「甲論乙評」とあるので議論がなかなかまとまらなかったようであるが、「穏健慎重」なる対清方針が決定されたのである。この具体的中身については非常に興味関心のあるところであるが、目下のところ具体的史料に乏しくこれ以上の言及はできない。

(注)

(1) 真俗二諦論については、山崎龍明編著『宗教と真宗－「真俗二諦」問題を問う』－大蔵出版、1996年。信楽峻磨「真宗における真俗二諦論の研究（その1）」『龍谷大学論集』第418号、1981年。同「真宗における真俗二諦論の研究（その2）」龍谷大学真宗学会『真宗学』65号、1982年。等を参照のこと。真俗二諦論については、野世英水氏や白須浄眞先生から御教示を受けた。記して感謝したい。

(2) 例えば1904年本山事務開始式における光瑞の『親示』によると「今ヤ国家将ニ多事ナラントス、此際本末一致勤儉深ク持シ、一朝事アルトキハ身ト財トヲ挙ゲテ君国ニ報スヘシ」といい、また『直諭』（『教海一瀾』195号1904(明治37)年2月15日号)に依れば「…王法を本とする我信徒の本文とを顛し、ますゝ皇国の光栄を發揚すべき…」とっている。

(3) 『朝日新聞』（東京）、1908年11月7日号。

(4) 嗣法とは法統を受け継ぐ者を指すが、同時に大谷家の跡継ぎをも意味する言葉である。潮留哲真「大谷光瑞と「親鸞聖人 650 回大遠忌法要」」拙編『大谷光瑞とアジア－知られざるアジア主義者の軌跡－』勉誠出版、355頁、2010年を参照のこと。

(5) 教学参議部編『清国巡遊誌』「御親諭」、仏教図書出版 1900年。6頁。

(6) 同上書7頁。

(7) 同上書109頁。

(8) 漢口については以下の諸論文等を参照のこと。拙稿「大谷光瑞初めての外遊」『東洋史苑』50.51号、1998年。同「漢口の歴史的な位置づけと本願寺」共同研究「中国の居留地と租借地における浄土真宗本願寺派開教と日本人子弟教育」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42号、2003年。野世英水「真宗本願寺派の武漢開教と漢口本願寺」共同研究「中国の居留地と租借地における浄土真宗本願寺派開教と日本人子弟教育」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42号、2003年。同「大谷光瑞と漢口」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』

勉誠出版 2010 年。白須淨眞「上原芳太郎「外遊記稿」所収の「南船北馬」-その解説と録文」『龍谷史壇』103・104 号、1994 年。孫安石「漢口の都市発展と日本租界」神奈川大学人文学会編『人文研究』第 149 集、2003 年。(のち大里浩秋・孫安石編著『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』御茶ノ水書房、2006 年所収) 漢口租界志編纂委員会編『漢口租界志』武漢出版社、2003 年。

(9) 『教海一瀾』502 号、1911 (明治 44) 年 11 月 15 日。

(10) 「建築課 漢口兵營敷地選定の件」「陸軍省大日記」、アジア歴史資料センター、レファレンス番号 C08010376200。競馬場は、もと西商競馬場といわれ、イギリスが先頭となって作ったものである。現在の漢口解放公園あたりである。『漢口租界史』を参照。日本租界地から新たに道路を建設する必要があったため、採用には至らなかった。しかし決定されたとしても、大谷光瑞が売却したか否かはわからない話ではあるが。

(11) 田中哲巖 (1882 ~ 1946) 滋賀県犬上郡八坂町 (現彦根市) 本光寺出身。本願寺開教練習生として 1906 年、初代漢口本願寺出張所長護城慧猛らとともに、漢口本願寺に赴任する。その後、成都本願寺に異動するが、辛亥革命後再び漢口本願寺に勤務する。帯広本願寺輪番や樺太開教監督などを務める。自坊本光寺には、前田慧雲の撰による「漢口本願寺記」拓本がある。拓本の閲覧等については、現本光寺住職田中康勝師にお世話になった。記して感謝したい。

(12) 清国開教総監部は日露戦争後の 1905 年 12 月に上海に設けられた。大谷尊由が総裁に就任し (内地在勤)、翌 1906 年藤山尊証が上海に赴任した。このようにして上海を中国開教の中心地として教線が展開された。1906 年 9 月から 1907 年 5 月まで法主大谷光瑞が再び清国を視察したが、そのときに光瑞は、漢口を開教の拠点に定めた。

(13) 大谷尊由 (1886 ~ 1939) 本願寺 21 世大谷光尊の四男、光瑞の実弟。1906 年光瑞とともに中国に渡航する。中国開教総監部長となり、1910 年本願寺執行長 (宗務総長) に就任。特設臨時部部長を歴任。1937 年近衛内閣で拓務大臣となる。また北支開教総裁などを歴任。中国張家口で客死した。

(14) 『教海一瀾』335 号、1906 (明治 39) 年 11 月 3 日。

(15) 護城慧猛 (1875 ~ 1928) 大分県豊後高田興隆寺出身。12 歳で涵養舎に入門、篤海量容について漢学を学ぶ。京都三高に入学するが、門徒の要請により大学林 (現龍谷大学) に転じ宗学を学ぶ。1897 年に大学林を卒業後、漢口に赴任し、本願寺漢口出張所を創設する。その後本願寺富山、鹿児島別院の輪番などを歴任する。護城の略歴については、大

谷記念館副館長掬月誓成氏にご教示を受けた。記して感謝したい。

(16) 『大阪毎日新聞』、1909年9月30日号。

(17) 瑞澂（1864～1912）中国清末の高官、字は莘儒、満州正黄旗の人。1909年湖広総督に就任、武昌蜂起前、革命党の人々を弾圧、殺害し戒厳令を布いたが、革命勃発後上海に逃走した。

(18) 張彪（1860～1927）山西太原の人。山西巡撫張之洞に抜擢され、娘を妻とした。義父張之洞に従い、湖北に入る。諸工業を起し、巨万の富を得る。辛亥革命勃発後渡江し、天津日本租界に逃れる。

(19) 『教海一瀾』501号、1911(明治44)年11月1日号。

(20) 黎元洪（1864～1928）湖北省黄陵の人。北洋水師学校卒業。かつて幾度も革命党の行動を妨害したが、武昌蜂起の際に、推されて軍政府鄂軍大都督となり、南京臨時政府成立時には副総統となった。

(21) 前掲、『教海一瀾』501号。

(22) 前掲、『教海一瀾』502号。

(23) 井上慈曠（1874～1954）兵庫県伊丹市法専寺出身。1902年仏教大学（現龍谷大学）を卒業後、海外布教使として、6年間アメリカに滞在した。日露戦争時には、対馬守備隊において、軍隊布教に従事した。その後中国や東南アジアにおいて布教使を務めた。井上の自坊法専寺には黎元洪から贈られた扁額「獅子吼」が掛けられている。井上の略歴などについては、法専寺現住職井上一朗師にお世話になった。記して感謝したい。

(24) 水上覚忍（1880～1966）福岡県中間市覚正寺出身。漢口本願寺在勤の時に、革命が勃発し、避難のため在留邦人を上海まで送り届けた。その後、上海本願寺別院などに勤務する。1932（昭和7）年地元福岡中間に仏教会館を設立し、後進の指導を行った。水上の略歴については、現覚正寺住職水上覚也師に御教示願った。記して感謝したい。

(25) 前掲、『教海一瀾』502号。

(26) 同上書、「本山録事」。

(27) 本願寺は教団内に清国開教練習所と清語研究所（武庫仏教中学内）を設け、開教使の養成に当たった。注（17）の田中哲庵は開教練習所出身である。

(28) 『教海一瀾』195号、1904（明治37）年2月15日。

(29) 『教海一瀾』512号、1912（明治45）年4月15日。

(30) 同上書。

(31) 『教海一瀾』503号、1910（明治43）年12月1日号。

(32) 水野梅暁（1878～1949）広島県に生まれる。曹洞宗長善寺住職水野桂巖の養子となる。その後、京都に出て大徳寺高桐院高見祖厚について修行し、ついで根津一の知遇を得て、上海東亜同文書院に学ぶ。彼は同文書院在学中に自分の使命を中国と日本の仏教を結合させることと考えるようになった。在学中に浙江天童山に如浄（道元禅師の師、道元が修行しその法を伝えた）の墓塔を拝し住職の敬安に日中仏教の提携を約束したといわれる。卒業後敬安の勧めに従い、湖南省長沙に赴き、当地で僧学堂を開き、仏教の研究と布教活動に従事していた。その後大谷光瑞の知るところとなり、曹洞宗から本願寺へと僧籍を移し、光瑞の側近として中国や南洋に随行すること度々であった。やがて『支那時報』を創刊し、その編集に当たった。また浩然学舎を作り、第二革命失敗後日本に亡命してきた李列鈞、陳其美、戴季陶、殷汝灑などを援助した。詳しくは外務省外交史料館「外務省記録」明治41年12月2日在長沙領事高洲大介発信機密信第22号「在清国本邦布教者・布教状態取調報告」やアジア歴史資料センター「水野梅暁清国視察一件」レファレンス番号B0305609500を参照のこと。また櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』（岩波書店2009年）によると、水野梅暁は、1911年11月5日に陸軍参謀本部から1000円の特別機密費を受け取っている。「その出納記録書簡である「特別機密費支払証書綴」の最初には、第一革命に際し、革命党首領との連絡並に同黨員操縦費等に支出したことが記され……たとえば11月5日に水野梅暁に1000円支出されている。これは水野と孫文との親密な関係をふまえてのことである……」91頁。とあるが、1911年10月には本願寺より特設臨時部出仕の辞令を受け、南京で龍谷救護団、本願寺救護病院の経営に当たっていた時期である。それにしても南京での水野の動きはある種不可解である。本願寺の救護所主任として八面六臂の活躍をする反面、時の実力者である宋教仁を幾度も訪い、布教権の話し合いを持っている。参謀本部から特別機密費を受け取り日本仏教の布教権を認めさせようとしたことは明らかであろう。水野自身「吾人の天職たる布教権問題」（「水野梅暁在清日記」『辛亥革命研究』6号1986年）と語り、また布教基地として土地の購入に深く関わり、大谷光瑞の南京訪問を伺わせる記載もあり（この件については、『文藝春秋』1938年12月号に「大陸建設の先覚者座談会」の中で、渡辺哲信が、「孫文と黄興が南京で革命をやつて清朝を倒したという時に、光瑞さんが特命を受けて南京に行つて、新疆省を租借する交渉、それからもう一つは教権問題、この二つを持って行つて上海に行つて、孫文、黄興に会つたけれども、巧い具合に成功しなかつた」と語っている。『文藝春秋』掲載記事について

は、狭間直樹先生から御教示いただいた。記して感謝したい。非常に興味深い史料である。水野梅暁と本願寺あるいは大谷光瑞については稿を改めていずれ詳しく論じる予定である。水野の南京での行動については、注(50)を併せて参照のこと。

(33) 藤山尊証(1878～1926) 滋賀県神崎郡(現東近江市)本行寺出身。1902年仏教大学(現龍谷大学)を卒業。清国開教総監や本願寺通報部長などの要職を務める。本行寺に清末の碩学瞿鴻禨(1850～1918)から送られた扁額がある。瞿鴻禨と藤山の関係は不明であるが、大谷光瑞と瞿鴻禨は交流があった(松田江畔『水野梅暁追懐録』私家版、1974年を参照のこと)。

(34) 『中外日報』、1911(明治44)年10月20日。

(35) 『教海一瀾』506号、1912(明治45)年1月15日。

(36) 同上書。

(37) 『中外日報』、1911(明治44)年12月1日。

(39) 『中外日報』、1911(明治44)年11月11日。

(40) 『教海一瀾』507号、1912(明治45)年2月1日。

(41) 櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』岩波書店、177頁、2009年。

(42) 『中外日報』1911(明治44)年11月13日。このうち「高橋清快丸」は格別革命軍の兵士から歓迎を受けたという。「革命軍に持参せし清快丸一万包は多大なる感謝と興味を以て歓迎せられたり、其所以は清快丸を支那音にて読む時は「チン、クワイ、ワン」にて即ち「清朝が早く滅亡する(清快亡)」と云ふ意味なるを以て目下北伐軍の続々として武昌より出陣する最中特に幸先よしとて歓迎せられたるものあり、商品の命名も亦一考の価値ありと云ふべし」『中外日報』1912年2月2日。

(43) 櫻井良樹、前掲書、李廷江「辛亥革命と日本の反応」『亜細亜大学国際関係紀要』第8巻1号。参照のこと。本願寺以外の仏教教団の動きについて『中外日報』は、曹洞宗及び浄土宗の動きを以下のように伝える。「曹洞宗にては支那変乱の起こるとともに旅順・大連・安東県に駐在せる布教師に対し、各其の近傍の状況を調査報告すべき旨命令を發した」(1911(明治44)年11月21日号)。「浄土宗は清国騒乱慰問布教師を各地へ派遣したるが、其受持は阿部を大連に、徳武を旅順に、八木を奉天に、福田を遼陽に、乃美を安東県に、角田を營口に、伊藤を老虎灘に、古屋を北京に、峯旗を各地に、福田開正の諸氏は騒乱地在留邦人慰問と開教視察に皆宗務所の命令により其任地に赴けり」(1911(明治

44) 年 12 月 17 日) とある。福田闡正 (1876 ~ 1953) は、1912 年 1 月 7 日、南京に水野梅暁を訪い (『水野梅暁渡清日記』)、2 月 3 日に南京に孫文を訪うている (「接見……革命戦乱地方慰問及開教視察使福田闡正……」『孫中山年譜長編』(上) 648 頁)。また真宗大谷派 (東本願寺) も 1912 年 1 月 12 日に上海別院内に、「清国布教監督事務所」を置いたが、清国布教の統一を図る目的のために設置されたもので、辛亥革命後の布教の云々とは何の関係もない (参考 高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』177 頁)。

(49) 『中外日報』1911 (明治 44) 年 11 月 18 日。また『読売新聞』1911 年 12 月 8 日には「本願寺法主大谷光瑞伯より漢江附近戦死者屍体の原野に曝されたと嘆き自費にて埋葬方を照会し……」とあり、さらに『大阪毎日新聞』にも、「本派の動乱地慰問」(1911 年 10 月 20 日)「革命乱と本派の活動」(1911 年 11 月 11 日)「赤十字会と本願寺」(1911 年 11 月 16 日)「本派救護所の活動」(1911 年 12 月 22 日)等の記事が散見される。このように一般新聞にも広く掲載されたのは、本願寺の慰問及び救護活動の事の大きさを示すものであろう。

(44) 『教海一瀾』505 号、1912 (明治 45) 年 1 月 1 日。

(45) 松村貞雄 (1868 ~ 1923) 土佐高知の人、1894 (明治 27) 年和仏法律学校 (現法政大学) を卒業。1897 年外交官及び領事官試験合格。1910 年漢口に総領事として赴任する。

(46) 馮国璋 (1859 ~ 1919) 河北省河間の人。保定の蓮池書院で学ぶ。その後、北洋武備学堂に入学し、卒業後同校教師となる。1899 年袁世凱に従い、山東の義和団を鎮圧する。1911 年辛亥革命時には、第一軍総統として革命軍を鎮圧する。1913 年の二次革命の際にも袁世凱の命に従い、北洋軍を率いて南京を攻略した。江蘇都督に任じられ、李純、王占元とともに、「長江三督」と称せられた。袁世凱の死後直隸軍閥の首領となり、北洋政府の大総統代理となるが、段祺瑞と合わず引退する

(47) 前掲、『教海一瀾』505 号。

(48) 同上書。「巡復頃接

貴総領事陽曆十三月(マ) 初一日函開現有本国

伯爵大谷光瑞捐出費情願掩埋漢口一帶戰

地骸骨業已救人在漢理合函清派員指示辦法

等因具做大谷伯爵胞與為懷人至義尽易

勝尚激惟某現在漢口漢陽等処戰地骸骨業

經本軍々医官長遵照定章督率兵夫分途掩

埋茲唯前因佈知総軍医官知応借助大谷伯

爵派出人員邦帛同掩埋之处自当具函

奉請比副

雅誼先函謝祇頌

日社 名別具」

(49) 『中外日報』、1911（明治44）年12月2日。

(50) 前掲、『教海一瀾』505号。同号に「上海着電に依るに、徐司令官は、諮議局総司令部の最も大切な一部を我が本派救護所に充て……」とあり、また「水野梅暁在清日記」辛亥革命研究会『辛亥革命研究』第6号 1986年10月。に依れば「1911年11月26日午前10時麒麟門の総司令部に到り、来意を伝え且つ上海陳都督の紹介及び仁丹を交附し、且つ柏師団長の護照、領事の公文、宋教仁の紹介を示し、徐総司令官に面会を求めたるに……暫く待ち呉れとの事にて……間もなく司令官帰り来り全軍を代表して感謝の意を述べ、藤山部長は本派を代表して慰問の辞を述べ、本派の意志の存するところを語り……救護団を戦線を去る 15 清里の東流市に設くる事及び死体収容の件を許可し……」とあるので総司令部は革命軍のところにあつたといえよう。

(51) 同上書。

(52) 同上書。

(53) 外務省外交史料館蔵「外務省記録」「上海到着後ニ於ケル漢口避難民ノ始末ニ関シ報告スル件」アジア歴史資料センター レファレンス番号 B08090221700。なお「外務省記録」には、その他にも、「清国革命動乱ノ際在同国本邦居留民並ニ官革両軍ノ傷病車ニ対スル帝国ノ救護事情雜纂」鈴木栄作南京領事から外務省通商局長坂田重次郎宛。や坂田通商局長から本願寺大谷光瑞宛、同じく通商局長から鈴木栄作宛などがある。いずれも本願寺の南京での救護活動に対して、「義挙」という表現を使い感謝の意を表明している。これに対して光瑞も通商局長に対して、南京本願寺救護団の件や清国各地に展開される本願寺救護団について、実弟の尊由を派遣して調査に当たらせている。詳しくわかり次第報告するという事を返事している。アジア歴史資料センター レファレンス番号 B08090245200。『中外日報』1911年11月19日号にも、「西本願寺法主の義挙」と題して「……法主は飽迄恩怨平等の仏道に基き極力官革両軍の戦死者弔葬の義を継続すべき意気込みなりといふ……」という記事がある。

(54) 前掲、『教海一瀾』502号。

(55) 同上書。

(56) 前掲、『教海一瀾』507号。

(57) 渡辺哲信(1874～1957)広島県三原の人。本願寺派浄念寺で生まれる。1895年本願寺文学寮卒業。大谷光瑞の命を受けロシアに赴き、ロシア語を学ぶ。その後、光瑞の中央アジア探検に同行した。また北京の「順天時報」の社長を務めるなど中国通として活躍した。白須浄眞『忘れられた明治の探検家渡辺哲信』(中央公論社)を併せて参照のこと。

(58) 『中外日報』1912(明治45)年1月26日。

(59) 寺尾亨(1859～1925)福岡県出身。1884年司法省法律学校卒業。ボアソナードの下で刑法を学ぶ、1891年東京帝国大学教授となる。1911年の辛亥革命の際に、中国に渡り、革命政府の法律顧問となる。

(60) 鈴木栄作(1879～?)静岡県浜松の人、1900年東京高等商業学校(現一橋大学)を卒業。1902年外交官及び領事官試験合格。1910年南京に総領事として赴任する。

(61) 『教海一瀾』509号、1912(明治45)年3月1日。

(62) 同上書。

(63) 『孫中山年譜長編』(上)、中華書局、1991年 654頁。王耿雄『孫中山史事詳録』天津人民出版社 1986年 176頁。

(64) 前掲、『教海一瀾』509号。

(65) 『教海一瀾』513号、1912(明治45)年5月1日。

(66) 『教海一瀾』510号、1912(明治45)年4月1日。

(67) 『教海一瀾』508号、1912(明治45)年2月15日。

(68) 大谷光瑞の黎元洪に対する返書『教海一瀾』509号、1912(明治45)年3月1日。

「敬肅者、日前微物数事、薄供 行璋之用、反蒙 瑤覆、詞意懇篤、深忝
挹遜、益加愧悚、不敢居、不敢居、惟貴副總統、夙察天命当革之幾、始立順天
応人之績、一呼而復斯神泉、洗革旧物、撫輯億兆、熙然同春、以納之共和休光
誠是四千年來未有之創業、罄南山之竹 莫以鏤其偉列也、蓋、創業之不易、治法所由、
有内有外、征謀所出、或攻或守、至他軍需會計、兵械出納之務、非深慮遠籌、日繼以憂勤惕勞
則其事隳焉、況於前無良規、而後貽宏矩者乎、
貴副總統、善處於此、董軍之功、發政之績、烈烈如是、所謂名不虛立、
功不虛成者、殆不誣之矣、弟遠隔鯨波、日对煙浪、末由高会暢襟、與聞渠誨、而景慕綦切、乃使舍

弟尊由,航赴貴邦,現次滬上,近当溯江抵鄂,通謁轅門,以致素懷,幸賜光霽,所有要事,微力足以辨濟者,不吝台命為荷,且在平日、漢鎮有井上慈曠、在必能照料不辭其勞、便宜下教、固所祈也、茲伝布防順頌頌 崇祺 不宣」

(69) 前掲、『教海一瀾』510号。漢口本願寺所長井上慈曠は、黎元洪と1912年1月17日に会っている。「…黎副大統領は本願寺本山及び大谷伯爵家の事情を知らんとするものゝ如く頻りに質問を發するを以て余は詳細なる説明を与へ、且つ本派本願寺が今日迄革命動亂の為に尽くせし活動の次第を逐一演述せしに黎は頗る感激せる……」『中外日報』1912年2月2日。とあり、本願寺や大谷光瑞に対して興味を示している。注(23)で示した黎元洪から井上慈曠への扁額「獅子吼」贈呈などを見ていると、かなりの交流の深さを見て取れる。

(70) 白須淨眞「ダライラマ13世による明治天皇への上書・献納品謝絶の顛末—「自明治四十五〔1912〕年至大正六〔1917〕年、西藏・達頼喇嘛ヨリ我皇室へ献納品謝絶の一件」と題された外務省外交記録の紹介と解説」。同「外務本省に提出された西藏問題に係わる一報告書—1912(明治45)年2月13日、西本願寺が提出した報告書の紹介とその解説」。白須淨眞編著『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命—』勉誠出版、2011年所収。

(71) 『孫中山年譜長編』(上)、中華書局、784頁、1991年。

(72) 車田穰治『日中友好秘話 君ヨ革命ノ兵ヲ挙ゲヨ』六興出版、260頁、1979年、に梅屋庄吉に宛てた感謝状が残っているが、その内容は大谷光瑞の宛てたものと全く同じである。

(73) 『中外日報』、1912(明治45)年1月22日。

(74) 『教海一瀾』504号、1911(明治45)年12月15日。

(75) 同上書。

【『教海一瀾』に見る辛亥革命関連記事】本願寺関係を中心に採録した。

年月日(号)	項目
1911(明治44)年11月1日(501号)	清国革命軍の蜂起
	支那革命宣言
	武漢における同胞慰問
	布教使の派遣
	清国動乱と本派婦人会
11月15日(502)号	【社説】特設臨時部の開設
	【清国変乱と本派本願寺】
	臨時部の活動
	別院予定地の交戦
	畑瀬キク子の葬儀
	銃丸本派本願寺を貫く
	開教使の引き揚げ付き添い
	上海出張所の避難同胞
	慰問袋募集と救護隊編制
12月1日(503号)	【社説】戦乱死者の弔葬
	【清国変乱と本派本願寺】
	本山駐在支部の活動
	猊下の盛旨
	慰問袋の寄贈
	医師の渡清
	留学生慰問
12月15日(504号)	【清国変乱と本派本願寺】
	本派の対清教策
	派遣軍隊の慰問
	宇品港の迎送
	漢口総領事館の謝状
	慰問袋に対する謝状
	清国留学生の感謝状

	徐総督の感謝
	仁丹と清快丸
	御本尊還御
	清人信徒の寄附
	清国司令官の感謝
	第七総班長の献金
	徐総司令官の護照
	死屍収容の開始
	南京慰問
	本派救護団の活動
	慰問講演
1912 (明治 45) 年 1 月 1 日 (505 号)	清国慰問布教使
	【清国変乱と本派本願寺】
	叡聞に達す
	本派救護所の優待
	営口保健所
	両軍の死屍収容
	布教伝道開始
	鈴木中尉を慰問す
	救護班一行の出発
	掩埋隊成立事情
	本願寺救護所の活動
	医師看護婦の増員
	救護所役員
	緊急動員と活動
1 月 15 日 (506 号)	【清国変乱と本派本願寺】
	慰問袋の寄贈
	派遣軍隊の慰問
	掠奪を受けんとす
	僧侶隊の編成

	慰問袋の好評
	我派の保護を請ふ
	湖南省全部断髮
2月1日(507号)	【清国変乱と本派本願寺】
	特設臨時部長の渡清
	龍谷救護団
	武昌の追悼会
	慰問袋の発送
	橘瑞超氏の居所
	慰問部開設
	湖南僧教育会
	慰問部開設
	中清派遣軍隊の講話
	軍艦龍田の追悼会
	清語研究所の近況
2月15日(508号)	【清国変乱と本派本願寺】
	尾野司令官の礼状
	黎元洪の感謝状
	官軍の感謝状
	岡次官の礼状
	慰問袋の到着
	北京郵便局講話
	故端方の追悼会
	日清僧侶の談話会
	横田賛事々務代理帰朝
	大隊長の感謝
	精神講話と大隊長
3月1日(509号)	【清国変乱と本派本願寺】
	猊下の御返書
	特設臨時部長の出発

	孫大總統と会見
	大元帥の晩餐会
	黎副總統と会見
	本願寺救護病院
	仏教協進会
3月15日(510号)	【清国変乱と本派本願寺】
	大谷部長の着漢
	黎副總統と会見
	記念撮影
	歓迎宴会
	三井の招待会
	司令官の招待会
	臨時部長の出発
	部長の来臨
4月1日(511号)	【清国変乱と本派本願寺】
	大谷臨時部長出発
	菊池少佐の感謝状
	中等仏教会
	中僧の義挙
	大谷部長の帰朝
4月15日(512号)	【社説】特設臨時部の閉鎖
	特設臨時部の閉鎖

【『中外日報』に見る辛亥革命関係記事】本願寺関係を中心に採録した。

年月日	項目
1911(明治44)年	
10月16日	清国革命軍と回教徒
10月17日	革命軍の将来と回教徒の活動
10月20日	清国における西本願寺の活動
10月23日	西本願寺南清に活動せんとす

10月24日	支那変乱と宗教（1）
10月25日	支那変乱と宗教（2）
10月26日	支那変乱と宗教（3）
10月28日	中清の風雲
10月31日	支那変乱と文明の趨勢（上）
11月1日	支那変乱と文明の趨勢（中）
11月2日	支那変乱と文明の趨勢（下）
11月11日	清国の動乱と西本願寺
11月13日	清国時変と西派本願寺
11月14日	清朝の将来
11月15日	西派光瑞法主の清国時変談
11月16日	革命首領と仏教
11月16日	清国赤十字隊と西本願寺
11月17日	清国変乱観
11月18日	清国赤十字隊と西本願寺の好意
11月19日	西本願寺法主の義挙
11月19日	慰問品の発送
11月21日	清国留学生と西派
11月21日	清国変乱と曹洞宗
11月30日	長沙より
11月30日	清人信徒の寄附
12月1日	清国動乱に就きて日本仏教者の奮起を促す
12月1日	漢口総領事館の謝状
12月1日	慰問袋に対する謝状
12月1日	達頼帰蔵如何
12月2日	宣教師の引揚げ
12月2日	西本願寺対清教策議定
12月3日	清語研究生の募集
12月12日	北京駐屯隊慰問講演
12月12日	宣教師の避難

12月14日	清国革命と我が教界の新思潮家（1）
12月17日	宣教師の避難
12月17日	清国革命と我が教界の新思潮家（2）
12月17日	清国慰問布教使
12月19日	漢口より
12月20日	清国革命と我が教界の新思潮家（3）
12月22日	革命乱余瀝
12月22日	革命乱余瀝
12月24日	清国動乱と救世軍
12月26日	上海の大追悼会
1912（明治45）年	
1月1日	支那革命と宗教
1月1日	支那変乱の我が思潮界に及ぼす影響（1）
1月1日	我が国体と支那の革命
1月1日	支那変乱は我思想界と全然没交渉なり
1月1日	支那変乱の我が思潮界に及ぼす影響
1月1日	支那革命と与論
1月1日	支那変乱の我が思潮界に及ぼす影響
1月1日	支那今後の政体と日本（上）
1月3日	支那今後の政体と日本（下）
1月3日	支那変乱と仏耶両教
1月3日	支那革命と基督教の発展（上）
1月5日	支那革命と基督教の発展（下）
1月5日	支那変乱の我が思潮界に及ぼす影響
1月5日	南清の近状
1月5日	長沙だより
1月6日	南清慰問僧の復命
1月7日	支那革命の影響と基督教
1月8日	支那変乱の我が思潮界に及ぼす影響
1月12日	慰問袋の発送

1月12日	橘瑞超師の行衛略分明す
1月12日	革命乱余瀝
1月13日	動乱と日本僧侶の行動
1月15日	革命争乱中の上海
1月18日	長沙より
1月19日	上海だより
1月21日	西本願寺清国伝道の向後
1月21日	本願寺と紅十字
1月21日	長沙より
1月21日	革命乱余歴
1月26日	西本願寺の支那布教
2月2日	武漢便り
2月2日	黎元洪と語る
2月2日	黎元洪の風采
2月2日	我法主に対する感嘆
2月2日	本派本願寺の官軍慰問
2月2日	革命党と清快丸
3月3日	武漢便り
3月8日	湖南通信

【『大阪毎日新聞』に見る辛亥革命関係記事】本願寺関係を中心に採録した。

年 月 日	項 目
1911 (明治44) 年	
10月20日	本派の動乱地慰問
10月28日	動乱地の邦人慰問
10月31日	本派と革命乱
11月10日	本派法主と産業奨励
11月11日	革命乱と本派の活動
11月13日	本派の特派開教使
11月14日	清国革命乱と西本願寺 大谷光瑞法主の話

11月16日	赤十字会と本願寺
11月19日	本派本願寺の義挙
11月24日	清国革命軍并に官軍へ仁丹六万包、尚ほ外に中国赤十字派に仁丹三万包を寄贈す（全面広告）
12月5日	西本願寺の訪問使
12月6日	大谷尊由師渡清
12月14日	大谷光瑞伯
12月22日	本派救護所の活動
12月24日	本派の清語研究生応募資格
1912（明治45）年	
1月9日	武昌の革命軍振ふ（7日漢口発西本願寺着電）
1月9日	僧侶隊の編成（長沙発西本願寺着電）
1月9日	二楽荘の園芸趣味（上）
1月10日	二楽荘の園芸趣味（下）
1月24日	大谷尊由師の渡清
1月27日	革軍の渡江 漢陽居留地（西本願寺発漢口電報に依れば）
2月1日	武昌の北伐軍 革軍の渡江（西本願寺発漢口電報に依れば）
2月6日	本派本願寺彙報
2月14日	大谷尊由師と孫・黄
2月28日	積徳院（大谷尊由）の土産話
4月1日	本派臨時部廃止

【『朝日新聞』に見る辛亥革命関連記事】本願寺関係を中心に採録した。

年 月 日	項 目
1911（明治44）年	
10月22日	本派と中清動乱
11月7日	背広姿の革命軍 避難者の話
11月17日	本派本願寺と革命乱

11月20日	博愛丸の首途 客は皆慈愛の戦士 翻る中国赤十字旗
12月8日	本願寺の義挙
12月9日	南京雑信
12月19日	南京の救護団
12月21日	南京救護隊の出診
1912（明治45）年	
1月25日	大谷光瑞伯
2月10日	本願寺救護病院

（補注）

これら『教海一瀾』などに見られる「辛亥革命」を伝える記事の中で、辛亥革命の性格が未だ明確になっていない時点で、「動乱」、「変乱」、「革命」、「戦乱」等の言葉で伝えているが、本願寺の機関誌であった『教海一瀾』は、ほぼ一貫して「変乱」という言葉を使っていた。このことは「清国軍」、「革命軍」の双方に対して怨親平等の仏教的立場から分け隔てなく支援したことによるものであろう。

第二章 大谷光瑞と『支那論』の系譜

第一節 明治以降対中国観の変遷

1840年に起こったアヘン戦争は、「中華帝国」の崩壊であり、日本にも少なからず影響を与えた。危機感を持った日本は、西洋列強諸国と「誼」を結ぶことによって、危機を脱することとに成功したのである。

1862年に幕府は、中国上海に貿易船「千歳丸」(1)を派遣した。その目的は、外国貿易の様子を調査するためであった。上海で目睹した中国は崩壊寸前の中国であった。その様子を随行員の一人であった納富介次郎は、「上海市坊通路ノ汚穢ナルコト云フベカラズ。就中小衢間逕ノゴトキ、塵糞堆ク足ヲ踏ム處ナシ。人亦コレヲ掃フコトナシ……或ハ死人ヲ蓆ナドニ包ミテ處々ニ捨テタリ。且炎暑ノ頃、臭氣ヲ穿ツバカリナリトゾ。寔ニ清國ノ亂政コレヲ以テ知ルベシ」(2)と記している。町の汚穢なることと、清国の乱れを同一視しているのである。一般にはまだ中国を軽侮する風潮には至っていないが、太平天国軍の列強による鎮圧、清仏戦争(1860年)や明治維新後の1874(明治7)年、台湾原住民による日本人漂流民虐待の責任追及を理由に日本政府が台湾に出兵した台湾事件などを契機として徐々に日本国内の中国観が変化してきた。1885(明治18)年に福沢諭吉が『時事新報』紙上で発表した『脱亜論』が、中国との決別を決定的なものにしたといえよう。「我日本の国土は亜細亜の東辺に在りと雖ども、其国民の精神は既に亜細亜の固陋を脱して西洋文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは近隣に国あり、一を支那といひ、一を朝鮮と云ふ……我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」(3)と。この福沢の考え方の基盤となったものは、「進んだ西洋、遅れた東洋」に外ならない。

「ざんぎり頭をたたいてみれば、文明開化の音がする」といわれた時代、鹿鳴館に代表される極端な欧化主義は、「脱亜論」を生んだが、又その反面、国粹主義、平民主義をも生むこととなった。『明治政史』は鹿鳴館時代の滑稽さを次のようにあらわしている。「其一意専心只管洋風を慕ひ以て交際を求めんとする所の舞踏会は此時に於て開け、華奢風流の余に出る婦人慈善会は是時に於て起り、其他和を脱して洋に入る羅馬字会あり、風致を捨てて見状を取る演劇改良会あり、古雅を迂として直情に馳する講談歌舞の矯正会あり、書方改良言文一致小説改良音楽改良唱歌改良美術改良衣食住改良の如き、貴賤上下翕然と

して洋風是擬し西人は倣ひ、其甚きに至ては人種改良論を主張し、大和民族に換ふるに高加索人種を以てせんとするに至る」(4)。いかんせん欧化政策の推進者であった井上馨の失脚後、その反動はすぐに現れた。

欧風の風潮を憂い、欧米屈従の態度に反対して、対外独立の国粹主義の立場を堅持した「政教社」は、哲学館の井上圓了、本願寺の島地黙雷、三宅雪嶺、そして東京英語学校の杉浦重剛、志賀重昂たちによって作られた。雑誌『日本人』を発行し、さらに陸羯南の新聞『日本』と提携し国粹主義を唱えた。内藤湖南もまたメンバーの一人であった。

1887年徳富蘇峰の興した「民友社」は、鹿鳴館を「貴族的欧化主義」と批判し、『国民之友』を発行し平民主義を標榜した。「所謂破壊的の時代漸く去りて建設的の現像将来らんとし、東洋的の現像漸く去りて泰西的の現像将来らんとし旧日本の故老は去日の車に乗じて漸く舞台を退き、新日本の青年は来日の馬に駕して漸く舞台に進まんとす」(『国民之友』創刊号)「貴族」と「平民」、「破壊的」と「建設的」、「東洋的」と「泰西的」、「故老」と「青年」、「旧日本」と「新日本」などという歯切れのいい二分法と、それにもとづく、過去に代えての未来の提示は、若い世代を中心に熱狂的な支持を生んだ(5)。

そのほかにも西洋列強諸国のアジア進出に危機感を持ち、日本と中国が手を携えなければならぬという風潮も出てきた。早くも1880(明治13)年には、日本と中国の連携を説く「興亜会」が設立された。「方今欧洲各国の気焰駭々乎として亜洲を圧迫す、恐らく数年中に我が東洋中に一大波瀾を現出すべく……日清の両大邦を聯絡せざれば、大局を維持すべからず」と、発会式において宣言された。この興亜会を受け継ぐ形で、「東亜会」「同文会」が設立されるが、彼らの意図は、時代とともに変わり、やがて「清韓の保全」を第一の目的とするようになった。1898(明治31)年には、「東亜会」「同文会」が合併し、「東亜同文会」が作られた。1901年(明治34)年には上海に「東亜同文書院」を創設した。以上のような諸団体が、互いに協力、対立、牽制をしつつも、その後の対中国世論を形成する大きな柱となっていった(6)。

第二節 『支那論』の系譜

ここでは、著作としての『支那論』を書いた竹越与三郎と山路愛山、そして大谷光瑞を概括していこう。竹越与三郎(1865～1950)は、武蔵の国本庄(現埼玉県本庄市)に生まれ、慶応義塾に学んだ。のち洗礼を受け、廃娼運動などに参加し、1890(明治23)

年徳富蘇峰の「国民新聞」社に入社する。イギリス的自由主義の影響を受けた歴史書『新日本史』や『二千五百年史』はベストセラーとなった。1895年「国民新聞」社を退社。その後、政友会から立候補し代議士となった。

彼が『支那論』を書いたのは、1894（明治 27）年であった。徳富蘇峰の経営にかかる「民友社」からの発行である。あたかも日清戦争の真っ最中で、8月1日の宣戦布告以前、朝鮮半島に出兵した日本は、朝鮮を戦場とし、豊島沖の海戦に勝利（7月25日）し、その後も平壤総攻撃、黄海合戦の勝利などを通して国民を歓喜のるつぽにおとしいれた。『国民新聞』は、7月23日号で「好機失い易くして得がたし、今や我国は清国と開戦するの最高潮に際す」という記事を掲載するなど、好戦的論調であった。『支那論』はこのような状況の中で書かれたものであった。

ここで竹越の『支那論』を見てみよう。「今や我陸軍已に牙山の兵を掃攘して、平壤に迫り、海軍また已に南洋湾に勝ちて、威海衛に迫る。思ふに海陸並び進みて、日章の旗を北京城上に樹つるの日、決して遠きにあらざるべき也」（7）と冒頭に記す。国民の好戦的気分を盛り上げようとする意向は明らかである。『支那論』ではあるが、「大国」日本となるための方策を論じているのである。

「日本は十九世紀文明の賜の為、島国より大陸の仲間入りをなしぬ。大陸文明は海潮よりも一層の速入を以て入り来たりぬ。大陸的勢力は海水の如く我に密接に来たりぬ」（8）。

「東海の小島」としてとどまるのではなくて、大いに大陸に目を向けよということであろう。「政治家飛動の舞台は、欧州よりも漸々、東方に移り来りぬ……誰か是れ此舞台の主人公ぞ。誰か是れ此戦場の形勝を占むるものぞ。我日本国と支那とを除きてそれ誰かある。仏国にして安南より支那を蠶食せんと欲せば、我同盟の力を借らずして、争でか其目的を遂ぐるを得ん耶。英国にして仏国の東方大帝国建設を妨げんとせば、支那の力を借らずして、争でか永久に之を妨たぐることを得ん耶。……世界の勢力が、是非とも依頼せざるべからざる緊要国となりぬ」（9）といい、日本と中国が国際社会の中に入って行く必要性を説いている。さらに、「是れ殆ど亜細亜大陸と、米国大陸と、欧州大陸と一所に接近せしむるもの也。此時に方つて其間に立つの日本にして、其必要と、勢力と、商業とを偉大ならざらしめんと欲するも得ざる也」（10）といい、今後は、アメリカやヨーロッパとの関係をうまく計らなければならないと指摘している。そして、「我国家拡張の前途を遮るものは清国也。苟も大なる日本を建設せんと欲せば、我が外交の深憂大患は欧米にあらずして実に清国の上に存す」（11）。日本の前途を遮るのは、実は欧米ではなくて中国であると断

じる。。そうして「日清同盟の迂謬」を笑うのである。「日清同盟論の大目的何くにある乎。彼等口を開けば即ち東亜の平和と云ふ。知らず吾人は『大なる日本』を犠牲としても、日本国民の光荣と利益とを損辱しても東亜の平和を保たざるべからざる乎……論者が其平和の相手として示す所の清国彼自身、已に東亜の平和を攪乱する戦乱の黒天使なり。山賊然たる侵略根性を有する国民と結託して、以て平和を謀ると云ふ」(12)。このようにいって、日清同盟を批判するのである。全体的な論調としては、前述したとおり、日清戦争を契機として「中国懼れるに足らず」という好戦的な論調である。ただ中国の力を借りる必要があると試みたり、また中国が東アジアの平和を乱すものだといっているなど、論旨の整合性は全くない。

竹越自身は、『支那論』執筆時(1894年8月)は、まだ30歳で、中国を訪問していない。中国に行かなくて、相手の国のことを書くというのは、正しく現状認識を知る上で決していい方法とはいえない。ただ彼は、1907(明治40)年7月と辛亥革命直後の1911(明治44)年に中国を訪れている。

次に山路愛山の『支那論』を見ていくことにしよう。山路愛山は1864年江戸浅草で生まれた。山路家は代々幕府の天文方であり、1872年8歳にして漢学を学び、長じて英語を学んだ。1887(明治20)年、23歳の時、徳富蘇峰の『国民之友』を読み、感動を受け、1892(明治25)年に『国民新聞』に入社した。従って竹越とは一時期同僚であった。1899年に「信濃毎日新聞社」に主筆として迎えられ、1904年に『独立評論』を創刊し、「信濃毎日新聞社」を退社する。その後、『独立評論』を中心として執筆活動を続け、1916(大正5)年『支那論』を刊行する。出版元は、竹越と同様「民友社」であった。翌1917年3月悪性の赤痢にかかり発病し死去した。生前山路は一度も中国を訪れなかった(13)。

山路の『支那論』冒頭部分は「與黎元洪」という序文で、日本と中国の関係を「兄弟之國」「陸海連続」「語言相類」「風俗亦似」「誼同一家」「情如兄弟」「同舟相濟」などといい、貴国の憂いは実は「僕の憂い」などといい、当時の日本の知識人にとって中国に対して好意的な文章に見えるが、本文では、一転して中国に対して厳しい言葉を投げかける。

山路が、『支那論』を書くきっかけとなったのは「袁世凱が死んだ。私は此飛報を或る田舎寺で聞いた。そうして此機会に日本人民として支那の現状を研究する必要を高唱したいと思った。日本には支那通と云ふものが沢山居る。しかし我々は支那に關係する智識が断片的であって全体として徹底した理會の無いことを氣の毒に思ふ」(14)ということであり、中国に対して我々の理解が生半可であり、正しく理解することが肝要であるというこ

とが執筆のきっかけであった。

辛亥革命以降、日本と中国の関係は、決して友好的なものではなく、革命後、臨時大統領となった孫文は、程なくして袁世凱にその地位を譲るが、袁世凱は、1913(大正 2)年の第一回国会選挙で国民党の宋教仁に敗れた。そこで自己の政治資金を確保するため、五国銀行団から借款し、政敵宋教仁を暗殺するなど、政治の私物化を図ったので、革命派を中心として南方派が討袁の兵を挙げた。しかし、革命派の孫文、黄興たちは敗れ、亡命を余儀なくされた(第二革命)。引き続き、袁世凱は独裁制をもくろみ、帝政復活を企てたが、それに反対する勢力は、雲南省での討袁活動に呼応して、10 省が挙兵した(第三革命)。

このような状態の中で、日本は中国に対して、対華 21 か条の要求を突きつけたのである。これらの要求は、日本の中国に対する既得権の強化ばかりか、さらに中国政府の従属をも要求したのである。武力を背景にして、日本政府は袁世凱に、この要求のほとんどを受諾させた。やがて袁世凱の急死により、大統領には副大統領の黎元洪が就任したが、実権は國務総理の段祺瑞が握り、各地では軍閥が割拠するようになった。北洋軍閥は、安徽派の段祺瑞と直隸派の馮国璋とに分裂したが、日本政府は段祺瑞に対して、借款を行ったため(西原借款)、中国民衆からより深い反感をかっただのである。先の 21 か条要求では、中国各界各層の広範な反対運動を引き起こし、日貨排斥運動なども全国的に起こった。このような状況の中で山路は『支那論』を書いたのであった。

山路の『支那論』の特徴は、日本との関わりを中心にして書かれていることである。その意味では一種の外交論ともいえようか。辛亥革命がどうして起こったのか。という議論では、「日本学」の感化を挙げる。中国人は、外国の文明を理解するのは鈍感であるとし、日本人が外国の文明を理解するよりは、はるかに難しいという。漢学に根ざした日本人が外国の文明などを中国に紹介したのである。「康有為は 1895 年(光緒 21 年)に於いて早くも此の事情を覚って日本書を翻訳すべしと論じた」(15)とか、「清国が各種の学術を研究せしむる為に多数の青年子弟を避学させる所は日本である、清国に普通学校、専門学校を起すものは日本人である、清国が教育制度を改革するに就て模範としたものは日本の学制である、改進黨の直隸総督袁世凱が創立した学堂の講師も日本人である、袁の軍制改革に使用したものも日本人である」(16)とあって、「日本学は支那人の心に従来未だ嘗て経験したことのない刺激を与えた。支那が変法自強から一変して革命に赴いた原因の一つは実に此新学即ち日本学であった」(17)といている。しかしながら中国に赴いた日本の教師は、「支那の歴史も知らず、支那の思想にも触れず」といって嘆いている。日本人は

ただ技芸を売るのみである。日本の教師はヨーロッパの歴史を日本で学び、ひとつの国家はひとつの民族から作らなければならないということを鵜呑みして中国人に教えたのである。その教えを受けた中国人は、「漢人たる我々は満人に支配されて満足すべきではない、我々は満人の政府を倒して漢人の国を作らなければならぬ」(18)と考えたのである。このようにして、日本の影響を受けた中国人が、辛亥革命の中心的な勢力となったのである。そうして袁世凱の政府を強い中国の出現のためには必要であると断言するのである。ただ、日本政府が英、露、仏の諸国と共に北京政府に対して「帝政実施は支那の内乱を激成する恐れがある、支那の平和を維持する所以でない」という警告を与えた。果たしてこの警告は日本人民が第二の同胞たる中華の好兄弟に向かってなしえた最良の友誼であろうか。「深くして且つ大いなる疑問である」この言葉を最後に『支那論』は終わっている。

引き続き大谷光瑞の『支那論』を見ていこう。1923(大正12)年に書かれたもので、これもまた民友社の発行である。『大谷光瑞全集』第10巻(大乘社発行、有光社発売・昭和10年)には「支那の真相」と見出しを代えて収められている。『支那論』は全12章からなり、付録として、光瑞の講演録「支那の現在及其の真相」が付されている。『支那論』と対照すれば、支那の現状がよくわかるとして収めたとある。大谷光瑞は、1914(大正3)年本願寺の法主職を辞し、中国に渡った。そこで孫文を始め、革命党の人たちと交流する中で、中国から日本に積極的に情報を発信し、中国の動向に関心を示すようになった。これは、やがて大谷光瑞『支那論』に結集される。

光瑞は、幼い時から漢文を学び、書を能くし、中国の古典に精通していた。当然中国に対する関心は深かったと思われる。1899(明治32)年、光瑞24歳の時に初めて中国を訪問した。そのときの様子は『清国巡遊誌』(第一部第四章参照)などに記録されているので、そちらを参考にさせていただきたいが、その後の光瑞の足跡を追ってみると、中国との関係を抜きに語ることはできない(19)。本願寺を去ってからの光瑞の動きは中国近代史に大きく関わっているといっていだらう。光瑞が宗門を去ったのは1914(大正3)年であるが、それ以来1948(昭和23)年に亡くなるまでの大部分を中国で過ごした。上海を第二の故郷であるといったり、大連、あるいは青島、高雄に永住するつもりであるといい、また亡くなれば骨を中国にばらまいてほしいといったり、光瑞と中国の関係は切っても切れないものであった。竹越や山路とは違い自ら見た中国の姿を『支那論』に反映させている。従って、罵詈雑言、対中強硬論ではあるが、これを以て光瑞の真意とみなしてはならない。なぜならば、同時期に孫文を中心とした革命派に大いに期待しているからである。

大谷光瑞が、中国通の僧侶であった水野梅暁(20)に宛てた書簡を見ることによって光瑞の真意を明らかにしたい。1918(大正7)年4月29日、上海より投函の書簡では「南方統一ノ義ハ貴論ノ如クナレトモ孫氏ノ頑強モ困難ナカラ孫氏以外テハ到底統一シタルソノ後ハ又々前年ノ岑ノ国务院同様ノ結末ノ外ハ無之小生ハ依然孫氏ヲ元首トスルノ考ニテ若シソレカ出来子ハ統一スルモ価値無之モノト信申候」(書簡番号390)、そして1918(大正7)年9月9日、旅順より投函された書簡では、「次ニ承認妥協問題ニツキ少々不審ニ点有之貴養ヲ得度存候元來承認トハ其形式ノ如何ヲ問ハス独立行動ヲ執ルノ義ニシテ北方ヲ屈服セシムルニ非ラサレハ決シテ止マサルノ形ナリ妥協トハ面目ニシテヤ、保チ得レハ北方ト連絡シ自己ニ主張ヲ棄ツルモ可ナリト云フ意ニシテ二者ハ全然反対ノ性質ノ者ナラサルヘカラス然ルニ岑等ノ一派ハ陽ニ承認ヲ問ヒ列国ニ勢ヲ張ルカ如クニテ陰ニハ馮等ト都合カヨケレハ妥協ヲ厭ハサルカ如キ嫌ナキニ非ラス然レハ二者ノ反対セル行為ヲ表裏ニ操縦セルモノト看取セラルソコカ支那人ノ特徴ナリト云ハ、ソレマテナレトモ傍觀的批評的ノ話ナレハソレニテモヨロシケレトモカヲ供ストセハ如此キ首鼠兩端ノ表裡ツカヒワケニ引キカ、リテハ愚ノ極ナリト存候コレカ孫等ノ政府ナラハ安心致候ヘトモ岑陸故一向氣乗り致サス骨折リタ結局ハツマラヌ馬鹿ヲ見ル虞ナキヤト存セラレ候」(書簡番号401)。ここに
あるように「孫氏ヲ元首トスルノ考ニテ若シソレカ出来子ハ統一スルモ価値無之」といったり、「孫等ノ政府ナラハ安心致候」というのは、結局は孫文を信頼しての言葉と考えていいだろう。さらに『支那論』附属の「支那の現在及びその真相」という一文では「此の孫逸仙の勢力は不思議で、有るが如く無きが如く、無きが如く、有るが如く、或者は孫などは無勢力で、あれは理想家であつて、全体支那であんな者を相手にする者はないといひ、又或者は、何と云うても孫である、第一革命以來終始一貫して民国の爲に尽くして居る、どうしてもあの人でなければならぬ。斯う云う風で余り毀譽褒貶が極端でありますから、逆も一方だけを聞いては当てになりませぬ、不思議な所がございます。併し彼が一度言ふと、幾らかの人は跟いて来る、現に広東でも幾らかの人が跟いて居ります」(21)と書いている。ここに私たちは大谷光瑞が、辛亥革命以後の中国の政局、特に孫文を中心とする南方、広東軍政府に関心を持って見ていたことがわかった。

『鏡如上人年譜』1918年3月3日の項に、「孫文政府最高顧問となり広東訪問」(22)という記事があるが、このあたりの関係から見ると全く故なきことではないだろう。孫文以外には、同じく孫文派、広東軍政府の唐紹儀(23)についても応援している。1918(大正7)年4月9日、上海より投函された書簡に「唐紹儀ノ件ハ省澳鉄道(広州、澳門間の鉄道か

一筆者注) タケナリトモナニトカ物ニシタレハヨロシクト存候到底他ノ政談ハ現局カ変セサル限り見込無之候ヘトモ志士ノ間ニ南方統一新政府樹立カ要諦ナル事ヲ御話被下度唐氏モソノ辺ヲ含ミ行動アルヘキ様願上候現局カ変スルトモ新政府カ樹立セサレハ何ノ値モ無之」(書簡番号 387)。その当時、唐紹儀は、孫文広東軍政府の財政総長という要職についていたので、財政的に彼を援助したのではあるまいか。

光瑞はどのような目的をもって『支那論』を書いたかは何も記していないが、恐らくは中国の現状を日本人に認識させるために書いたと見ていいだろう。光瑞がこの『支那論』を書く背景となったのは、「対華 21 か条」の要求後から「五・四運動」の間に起こった日本に対する反日運動の高まりであった。「五・四運動」とは、1919(大正 8)にフランスのパリで開催された講和会議の席で、「対華 21 か条」の撤廃や旧ドイツ権益の返還を国際社会に提訴したが、認められなかったため、北京大学の学生を中心とする数千人が、5 月 4 日に天安門前に集合し、抗議集会を起しデモ行進を行った事件である。彼らのスローガンは「21 か条の破棄」「青島回収」「売国奴の罷免」などであった。学生の愛国運動は、北京から全国各地へと広がり、労働者のストライキや日貨排斥運動などが全国的規模で展開された。

光瑞の『支那論』第 1 章「中華匪國」の冒頭は、「最近の支那の状況は、殆ど言ふに忍びざるものあり。紀綱弛廢し、桀驁威を擅にし、盜賊横行し、政令行はれず、居民一日の安きなし。然れども支那國民自から招ける禍にして、如何ともすべからず」(24)と書かれている。辛亥革命後の共和制を期待したが、その腐敗混乱ぶりは、むしろ以前よりひどい状況にある。共和制となって既に 12 年になるが、1 年として共和となった時期がない。いわゆる匪にはいろいろあるが、とくに官匪、軍匪、政匪、学匪、盜匪の 5 種類に分類している。官匪は職権乱用、恣にし、公然と悪事をなし、軍匪は武器を携えて公然と白日市内に出かけ、物や人を強奪する。政匪は政治家となり、策士となるが、常に財界の大物の間を往来しているだけであるとし、また学匪は学生のことであり、授業を受けずに、ストライキばかりやり、市内に出て、金銭を強奪し、自己の欲情を満たさんとする輩であり、盜匪はこの中でもっとも微力ではあるが、もっとも劣悪な輩であると断罪している。

続く、第 2 章「列国愚を競う」第 3 章「日米愚を競う」第 4 章「支那の外交官」、5 章「中華は中禍」、6 章「臨城の土匪」7 章「群盲象を摩す」と続き、第 8 章から 12 章までは、中国の現状認識ではなくて、具体的とはいえないが、一応大谷光瑞個人が考えた中国救済策である。8 章、9 章の「支那救済策(上)(下)」では、世の論者のいう具体的な救

済策を逐次批判して、①強大なる中央政府を設立し、外国の援助をもって中国を統一する。②聯省自治を行う。③青年に新教育を施し、旧来の勢力を駆逐して、民主的な国家を作る。という救済策であるが、①については匪の勢力を借りて匪を治めるのと同じである。②は、中国人は自分の私権のみで動いていて、離合集散を繰り返すので、この方法は採用できないとし、③についても、中国人が教育を受けるのは、自分の私利私欲のためであるので、これもまたできないといい、すべて否定している。ではどうすればいいのか、10章では、「共同管理は非なり」といい、広大な国家、多くの人口を擁する国を共同で治めることはできないとし、「利少なく、害多き方法」だという。11章「財政と鉄道の管理」では、塩税、関税は管理できるが、地租は管理できないとし、また鉄道の共同管理もできないという。最後の12章において「義勇軍を編成すべし」という結論に達するのである。以上12章にわたって、中国の現況を伝え、それに対して日本国民としてどうすべきかということ論じたが、確かに、辛亥革命以後、この『支那論』が上梓されるまでの間、中国国内の混乱、腐敗はまさに大谷光瑞が指摘したとおりだった(25)。罵詈雑言の連続ではあるが、肯首できるところも少なくない。とくに匪賊が全国を支配し、政府はいうまでもなく、軍閥の支配権さえ喪失していたのである。ただ光瑞によれば、政府も軍閥も匪賊に変わりがないと。

以上、竹越、山路、大谷の『支那論』を概括してきたが、共に「日清戦争」「辛亥革命」「対華21か条」要求「軍閥割拠」「五・四運動」と続く歴史のうねりの中で書かれたのであり、それはとりもなおさず日本の問題としても重要なものであった。さらに共に「民友社」発行という点にも注目しなければならない。ただ、彼らの中国観を一様に論ずることはできない。しかし、「民友社」という大きな集団の中で確かに、ひとつの中国観が形成されていたと考えてもいいだろう。それはすなわち徳富蘇峰を中心とした「民友社」が「収縮的日本から膨張的日本」へと変化を遂げる中で、大きな世論形成のグループであったことを挙げなくてはならない。徳富はいう「東洋の事は、東洋人か之を処理するの主義也。今日に於ては、欧州の問題は、欧州人之を処理し、南北米州の問題は、南北米州人之を処理し、豪州の問題は、豪州人之を処理す。単り東洋の問題に至りては、東洋人概ね手を束ね、唯た欧米人の処理に一任す。意気地なしとや云はむ、無神経とや云はむ、卑屈とや云はむ、不見識とや云はむ。然も東洋人か自治せざるは、自治するの能力を有せざれば也。若し東洋における白人の跋扈を、憤慨するの熱腸あらは寧ろ東洋人士の無氣力を反省するの、剋実なるに如かず。然も何れの東洋人士か、果たして白人と拮衡して、其の自治的能

力を行行使し得る者そ。是れ日本国民の使命の、由りて来る所以に非ずや」(26)。中国の現状を伝え、日本国民の中国理解を助けた「民友社」の姿を見ることができる。

さて内藤湖南の『支那論』が刊行されたのは1914(大正3)年のことであった。第一次世界大戦の勃発した年であり、また日本が青島を占領した年でもあった。内藤湖南は、当時京都帝国大学で中国史を講じており、中国学の泰斗であった。元来ジャーナリストとして殊に中国については一家言持っていた。当然中国にも何回か訪れていた。従って湖南も辛亥革命後の中国の動向には十分注意を払っていた。『支那論』を書くきっかけとなったのも、辛亥革命後の中国がどこに行くのかという、現状認識からである。1912(大正元)年から「中国はどうなるのか」というテーマで構想を練っていたらしく、翌1913年から5回に分けて朝日新聞記者の高島政之助氏が口述筆記したものをまとめて刊行したものが『支那論』である。辛亥革命後、未曾有の混乱に陥った中国の前途を考えたものである。

「変化の急激な支那の時局は、めまぐるしいほど変転」しているが、目前の時局の変化にとらわれないという姿勢を貫いている。そのことについて、内藤は「積極的施設に関する考えが乏しいこと」と「支那人に代わって支那の為に考えた」のであって、辛亥革命後の中国がどちらに向かって進むのかわからないほど混乱しているので、一步退いた形で書いたといっている(27)。ここには竹越や光瑞の『支那論』に見られるような国策としていわば政治的な要請として出された刺激的なものではなくて、中国社会の本質を十分に見据えていなければならないという点から書かれたのである。それ故、目前の時局の変化にとらわれず、積極的施設に関する考えが乏しいことは当然のことであった。現実に辛亥革命を目撃した内藤湖南は、そこに現れている共和制が虚構であることを見抜き批判している。

「我々は今以て失敗したる革命党の人々に同情を表す。革命党の人々は、自ら支那の国民性を了解せなかつたので、その限りなき辛苦の効果を水泡に帰せしめてしまったのである。支那の国民性は何者を犠牲にしても平和を求める。兵乱の際などには桀驁なる棍徒の横行をも見、良民の代表たる父老は屏息して居るが、少し事態が穏かになると、父老の歓心を得ざれば、継続した統治は出来ぬのである。革命党は其の新鋭の意気にまかせて、父老の歓心を得ることを顧慮しなかつた為に、近い将来に於て事を起す地盤を失って居ることは、大なる打撃である……此の父老収攬ということは、其の法制の美悪を問わず、人格の正邪を論ぜず、支那に於ける成功の秘訣である」(28)と。辛亥革命の失敗は、つまり革命党が広く父老層の歓心を得なかつたことにあるという。ただ、官軍が勝とうが、革命軍が負けようが、それは大きな問題ではなくて、自然の流れというものは、革命主義、革

命思想の方に向いているのである。

湖南は『支那論』冒頭部分で「君主制か共和制か」という一章を設けた。そこでは地域社会を構成する郷団、父老層こそ、民主的であり、調和的であり、安定的であり、進歩的であると規定するが、やはり時代の流れとして外国との接触や留学生の役割などを考えてみると共和制への自然な流れというものをくい止めることは出来ないであろうと述べている。具体的な例として、湖南は、清末の改革家馮桂芬を考える。「元来政府を信用しない支那の社会組織は、比較的自治団体が発達して居ることが、一つの長所である。清末の先識者である馮桂芬といふ人は、宗法を復することを以て、自治団体の組織を完成させんとする論で……自治の基礎を立てることが出来るといふことを認めて居る。江蘇、浙江などのやうな商工業の発達した地方は、之とは趣を異にして居るけれども、是も支那に已に発達して居る同業組合の組織、農村の保甲制度などを基礎としたならば、決して自治制の行はれないといふことはない。其の上に郷官制度にして、知縣以上の官吏も地方の利益に同情を有つこととなれば、始めて数千年來の積弊が一掃されて、支那人民の救済が出来るのである」(29)。馮桂芬自身、太平天国軍の蘇州攻撃に対して団練を組織するなど、蘇州における郷紳の実力者として活躍したが、その後、李鴻章の幕僚として彼の政策を支えた。県学、府学、貢院、善堂など郷里の社会文化施設の復旧に努めた。旧体制の合理的再編成と科学技術を主とする西欧文化の移入による富国強兵を主張した(30)。ここでいう父老、紳士層は、単なる知識人というよりも地方でその知識、道徳的力量を利用し、人民や時には地方官を指導するという者を指す。具体的には地方エリート、立憲派と呼ばれた各省の政治エリートを父老、郷紳層として理解したい(31)。馮桂芬自身がまさにこのような地域エリートであった。「近來の支那は大きな国とは云ふけれども、小さい地方自治団体が一つ一つの区画を成して居って、それ丈が生命であり、体統ある団体である」(32)と述べて、その一つ一つの区画を成す団体を郷団であると理解し、それは宗族であり、宗法によって維持されるものであった。湖南は、宗法の復活が地方自治の強固な基礎になると考えていたのである(33)。

では、中国社会の本質とは何か、「国情の惰力、国土人民の自然発動力が、如何に傾いているか、どちらに向かって進んでいるかということを見定めて、それによりて方針を立てるより他に道あるべしとも思われぬ。此の惰力、自然発動力の潜運黙移は、目下の如く眩しいまでに急転変化している際にあっても其の表面の激しい順逆混雑の流水の底の底には、必ず一定の方向にむかって、緩く、重く、鈍く、強く、押し流れているのである。此

の潜流を透見するのが、即ち目下の支那の諸問題を解決すべき鍵である」(34)という。地域社会において郷紳、父老層に導かれた郷団を中心とした宗族単位で、宗法によって結びつけられたものを高く評価するのである。「郷里が安全に、宗族が繁栄して、其日其日を楽しく送ることが出来れば、何国人の統治の下でも、従順に服従する。長髪賊の李忠王を官軍に密告した者は、郷人に打殺された。支那に於て生命あり、体統のある団体は、郷党宗族以上には出でぬ。此の最高団体の代表者は、即ち父老である」(35)。ここには、中国には国民国家という観念は成立しないという前提があるように思われる。「現在熊希齡内閣が執つて居る政策は、一方には省を分割して行政区を小さくして、中央政府の権力を大きくしようと云ふのに、一方では軍隊の数を減らして、経費を節減しようとして居る。是等は今日の窮境から已むを得ざることであって、それより外に袁政府の立場としては致し方がないのであらうけれども、実際其の政策は自ら相矛盾して居るのである。……今日に於て其のどちらかを罷めると云ふのであれば、中央集権主義を抛つて、全然消極政策を以て基礎を立てるより途がないのである」(36)。また、「今日までに地方制度の変遷から生じた状態から考へると、一種の変形した連邦制度のやうなものを国の基礎として、それによって統一をしなければならぬ。尤もかうすれば中央政府の権力も極めて小さい代わりに、中央政府の義務も小さくするのが宜いので、中央政府の財政も非常に縮小すると云ふ処に、国是の根本を立てるより外に途はなからうと思ふ」(37)。湖南は、歴史の流れを十分に見据えなくてはならないとし、宗族、宗法を基本とした郷団組織を重視し、その指導者である父老、郷紳層を地方のリーダーとするのがよいと考えたのである。

内藤湖南は、必然的流れとしてとらえた共和制と、近代政治思想の必然的な流れである立憲制から導き出される国民国家建設をどう考えたのであろうか。「日本とか西洋の諸国とかが国力が盛んなのは、地方自治の精神に富んで居るからである。それが立憲制の根本となるのである」(38)。やはりここでも地方自治の問題を考えている。それは父老とか郷紳層に代表される政治的徳義の問題として示されている。この政治的徳義は「文化」によって支えられているといってもよい。

第三節 中央アジアへの憧憬—大谷光瑞と内藤湖南—

内藤湖南が中央アジアに興味関心を持っていたことはよく知られているが、文化至上主義者の内藤から見れば至極当然のことであった。そのうえ仏教についても早くから関心を

持っていた。早くも明治 23 年には「亜細亜大陸の探検」と題する一文を書いている。その主要な点を列挙すれば、①ヨーロッパ人がアジア人の地たる中央アジア探検に精を出すのは、宜しくないということ。②日本の天職として氣勢を東洋に張らなければならないということ。③日本人としての真骨頂を出すために中央アジア探検に踏み込まなければならない。という三点を挙げている。ここで注目すべきは、「然りといえども彼れ銀色人種をして我が金色人種の墳墓地たる斯の亜細亜洲裡を横行蹂躪せしむるに至りては豈に起て為す所なかるべけんや。抑も東家の家事は東家の家人之れを支配すべく、西隣の家事は西隣の家人之れを処理すべし。之れ真個に正当常理、天人の共に是認するにあらずして何にぞ」(39)といい、アジア主義者としての揺籃が湖南に見られることである。その上で、日本もまた西洋人の踏み込んでいない中央アジア諸地域の探検を行うべきであるという。ただそこには、ただ単に西洋列強諸国と政治、経済、文化、兵力という点において張り合うのではなくて「史学の新材料、山積充溢することを知るべき」であり、「未発の新智識、新理論其の潜光を発することにあらん」ということである。学術面において西洋諸国と張り合い、彼らに優ろうとする考えがここに集約されているのではないだろうか。そうして日本人たるもの、立ち上がるべきだということである。「日本人たる者、何ぞ蹶起せざる」あるいは「日本人の天職、乃ち全く蓋し得て愆る無きを得ん。逡巡の間、是をしも欧人に先ぜらるるが如きあらば、金色人種の再興、萬萬世を経とも些かの希望なけん」(40)と。果たしてこの内藤湖南のゲキに応じたのは、誰あろう大谷光瑞であった。

大谷光瑞もまた、アジア人のことはアジア人の中で考えるべきであるというアジア主義的な考えを持っていた。中国革命に関心を持ち、トルコ革命を援助したり、ビルマの反英闘争を支援したりしていた。とくに仏教徒として仏教の聖地である中央アジアをヨーロッパ人に荒らされてはならぬという意識が光瑞にあったに違いない。従って「仏子にしてアジア人」たる光瑞が仏教東漸の道を探るということは当然のことであった。中国はずでに仏教が廃れてしまっているので、日本の方から過去とは逆に仏教を伝えなくてはならない「仏教西漸」という壮大な意気込みが感じられよう。また仏教徒としての強烈な自負があった。「仏子にしてアジア人」たる大谷光瑞をして中央アジアに行かしたのではなかろうか。大谷探検隊がもたらしたおびただしい文物は、中央アジア学術研究の端緒を開いた。『中外日報』1910（明治 43）年 6 月 14 日の記事によれば、「此等の発掘物が我が東洋学界、殊に仏教研究史上に一大光明を與ふべき価値あるものなるに至りては、両氏（橘瑞超、野村栄三郎—筆者注）の功績を不朽に伝ふべきのみならず、西本願寺が多額の費用をも厭

わず、斯る壮挙を企てて、其効果空しからざりしを喜び、同法主に対し満腔の熱誠を以て敬意を表し、慶賀讃歎の辞を呈するに吝ならざる所以なり」とあり、学术界における貢献は大なるものであった。

ここで大谷光瑞と内藤湖南との接点について考えてみよう。前述したように中央アジアに対する双方の関心とその橋梁になることは間違いないが、いつ頃から交際があったのかは不明である。ただ 1908（明治 41）年、稲葉岩吉宛書簡によると「大谷光瑞伯より那珂博士遺著遺書引受けたしとの申出あり機敏といふべし。これにつきては出京の際白鳥博士と御相談可致つもり也」（41）とある。確かに両者が出会ったのは、本願寺で行われた「史学研究会」第一回総会（1908 年 12 月 6 日）である。湖南は、そこで光瑞の講演を聞いているからである。この模様を「本月六日の史学研究会は本願寺にて開会光瑞法主の講演有之大体の東洋史研究上の意見なりしもとにかくその精博は時として専門家の壘を摩し申候当日陳列の印度新疆の遺物六朝の碑本は随分珍しきもの有之……本願寺へは蒙古より突厥回鶻の碑文送来目下借覧中に御座候これは露人ラドロフの已に研究致候ものながら実物に接するは又一段の喜びに御座候」（42）と稲葉岩吉に書き伝えている。探検隊の発掘品を子どものように待ちこがれている湖南の姿を見ることが出来る。「西本願寺発掘の西域文書は宝物到着以前に已にその年代を考証は出来申候これは羽田学士の発見にて前涼の張駿伝に見えたる西域長史李柏の文書に候多分鄯善王に与えたるものと存候王羲之と同時にて少し早い位故書法の方からも面白かるべく大に待ちこがれ居候」（43）。程なくして待ちこがれていた荷物が到着する。「西本願寺の荷物中文書の大部分は到着、例の西域長史李柏の文書も到着のよしにて来る三十日の土曜にすべて検閲の筈に候」（44）。注目すべきことは、湖南は、光瑞外遊中に中央アジア探検発掘品を整理していることである。「本願寺発掘物の一部分到着西晋の元康六年の跋ある写経あり又前涼の西域長史李柏の文書も到着その他珍しきもの不少目下整理中に付済次第発表のやう取計らひ可申候整理の方針はすべて小生にまかせられ居候」（45）。

大谷光瑞探検隊の将来品の調査については、光瑞は『西域考古図譜』序文で将来品を託した研究者として当時の京都文科大学教授榊亮三郎や内藤湖南、羽田亨、富岡謙蔵などの名前を挙げている。ここで調査している文物は、第二次大谷光瑞探検隊の橋瑞超、野村栄三郎の将来した古文書、古写経、古画、漢字以外の各種文字の経文文書、泥塑の像、古印古銭類、矢の根の類を指す。とくに古文書『李柏文書』については「歴史上極めて重要な証拠になる文字と謂って宜い」（46）という貴重なものであった。文化史学者であった内藤

湖南は、無上の喜びを以て、発掘品調査に当たっているのである。

(注)

- (1) 「千歳丸」については、第一部第三章「大谷光瑞と上海」52頁を参照の事。
- (2) 納富介次郎『上海雑記』（『文久二年上海日記』所収）全国書房、1946年。
- (3) 『時事新報』1885（明治18）年3月16日。ここでは『日本近代思想体系』（12）「対外観」、312頁によった。岩波書店。1996年。
- (4) 指原安三『明治政史』ここでは、吉野作造『明治文化全集』（9）正史編（上）日本評論社、525頁、1968年。指原安三（1850～1903）は、豊後（大分県）臼杵の人。大阪に出て藤沢南岳に学ぶが、やがて東京で三島中洲、中村敬宇に師事する。また鳥尾得庵子爵の知るところとなり、保守党中正派の創立に尽力した。その機関誌『保守新論』は、主として指原氏の編集によるものであった。その後、西村茂樹の日本弘道会に入った。剛直誠実の愛国主義者であった。
- (4) 鹿野政直『近代日本思想案内』、岩波文庫、88頁、1999年。
- (5) 滬友会『東亜同文書院大学史』滬友会発行、2頁、1955年。
- (6) 拙稿「戊戌変法と内藤湖南」『研究論集』第5集、河合文化教育研究所、2008年。
- (7) 竹越与三郎『支那論』、「支那論に題す」、11頁、民友社、1894年。この『支那論』の入手については、帝塚山学院大学の川尻文彦先生（現愛知県立大学）にお世話になった。記して感謝したい。
- (8) 竹越与三郎 前掲書、24～25頁。
- (9) 竹越与三郎 前掲書、28頁。
- (10) 竹越与三郎 前掲書、32頁。
- (11) 竹越与三郎 前掲書、53頁。
- (12) 竹越与三郎 前掲書、92頁。
- (13) 「山路愛山集」『明治文学全集』35、年譜参照、筑摩書房、1965年。
- (14) 山路愛山『支那論』、民友社、1頁、1916年。
- (15) 山路愛山 前掲書、94頁。
- (16) 山路愛山 前掲書、94～95頁。
- (17) 山路愛山 前掲書、95頁。
- (18) 山路愛山 前掲書、95頁。

(19) 拙編『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡—』勉誠出版、2010年。
白須浄眞編『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版、2011年など参照のこと。

(20) 水野梅暁については、本論文中第二部第一章「辛亥革命と大谷光瑞」を参照のこと。また中村義「水野梅暁関係資料調査」『辛亥革命研究』第五号参照。ここで使用した史料は、「水野梅暁関係文書」で現在東京大学法学部附属法政資料センター原資料部に保管されているものである。

(21) 大谷光瑞『支那論』民友社、111頁、1923年。

(22) 鏡如上人7回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』1918年3月3日の項。1954年。

(23) 唐紹儀(1861～1938)広東省香山県の人。1874(明治7)年容闈に従ってアメリカに留学する。アメリカ留学の初めである。因みに日本に最初に留学した唐宝鏐は、唐紹儀の甥に当たる。コロンビア大学に学び、1881年帰国する。外交部に入り、イギリスとチベットの領土、主権について交渉を行うなど活躍する。辛亥革命後、政府の要職を務めるが、1917年護法運動に参加し、孫文広東政府の財政部長を務める。1938年国民党の特務機関に上海で暗殺される。

(24) 大谷光瑞 前掲書、1頁。

(25) 福本勝清『中国革命を駆け抜けたアウトローたち』中公新書、この本は1920年代の中国国内の様子、とくに土匪の動きについてよくわかった。

(26) 徳富猪一郎「大正の青年と帝国の前途」404、405頁。民友社、1917年。

(27) 『支那論』『内藤湖南全集』5巻 筑摩書房、294頁、1996年。以下『全集』と略す。
時代の要請から一歩引いたということは、端的にいえば中国に対して具体的な施策を提示しなかったということだけではなくて、中国社会を形成している潜流と呼ばれる大きな流れを理解しなければ中国社会を領解する事は出来ないと考えていた。だからこそ具体的な施策を提示しなかったのではなかろうか。

(28) 前掲書、『支那論』『全集』5巻、297頁。

(29) 同上書、381～382頁。

(30) 『アジア歴史事典』平凡社、馮桂芬の項目参照。

(31) 高田幸男氏は、「清末江蘇の教育界と地域エリート」(日本上海史研究会編『中国近代の国家と社会—地域社会・地域エリート・地方行政—』1999年)の中で「「紳士」的行動規範を共有する生員以下も含めた過渡期の地域社会指導層を「地域エリート」と呼ぶ」と

いわれている。

(32)前掲書、『全集』5巻 369頁。

(33) J.Aフォーゲル・井上裕正訳『内藤湖南.ポリティクスとシノロジー』平凡社、1989年、195頁。

(34)前掲書、『全集』5巻 306頁。

(35)同上書、297頁。

(36)同上書、382頁～383頁。

(37)同上書、380頁。

(38)同上書、396頁。

(39)前掲書、『全集』1巻 535頁。

(40)同上書、535頁。

(41)前掲書、「稲葉岩吉宛書簡」1908年3月20日、『全集』14巻、444頁。

(42)同上書、456頁。

(43)同上書、468頁。

(44)同上書、470頁。

(45)同上書、472頁。

(46)前掲書、「西本願寺の発掘物」『全集』12巻、212頁～213頁。

終章

本書第一部第一章から第六章においては、大谷光瑞のアジア諸地域における活動と展開について述べ、さらに第二部第一章から第二章では、大谷光瑞の中国認識について述べてきた。本章では、これらの考察について総括を行った上で、結論を述べることにしたい。

第一部第一章「大谷光瑞とロシア」ーウラジオストク本願寺をめぐるーは、ウラジオストク本願寺について、敷地問題と布教場建設を軸にして、論を展開したわけであるが、その過程で、太田覚眠の奮闘と大谷光瑞の外務大臣への「上申書」提出などと言う興味深い問題が明らかとなった。敷地問題や布教場建設という「土地問題」を、「外交問題」としたのは、当時の国際情勢を見極め、交渉を有利に運ぶための方策であったのではなかろうか。大谷光瑞の慧眼には驚くばかりである。当地本願寺の起工式に、光瑞は、かなり無理をして出席している（ウラジオストク滞在は1泊2日であった）。これには太田覚眠への慰労や、協力を惜しまなかった在留邦人への感謝であろうことは想像に難くない。また当地の軍務総督にも、感謝の言を捧げている。光瑞は、このウラジオストク訪問を通じて、日本国民に対し、ロシアに関心を寄せてもらいたいと言っているが、これは「日露親善」だけではなくて、日本の商工業の発展には、ロシアなくしては順風満帆には行かない事を示している。

第二章「大谷光瑞と満州」は、大連本願寺関東別院の創設から活動まで詳細に紹介し、また光瑞の満州観を述べたものである。関東別院の発展については、二つの方向から考える必要がある。一つは、日露戦争期の軍事行動との関係であり、他方、関東別院内に創設した「仏教青年会」、「仏教婦人会」や「幼稚園」などの教育機関が、大連日本人社会の中で欠くことのできない存在として認知されたということである。大阪堺に「大醬」という醤油会社がある。数年前ふとした縁で、社長の家を訪問することとなった。奥から風呂敷に包まれた一体の仏像を持って来られ、見て欲しいと言われた。この仏像は、先代の社長が大連で大谷光瑞から頂いたものということだった。私は仏像のことについては門外漢であるので、真偽のほどはともかく、堺の醤油屋と光瑞が関係があったということに興味を惹かれた。『むらさき 堺の醤油屋河又・大醬 200年のあゆみ』を見ると、確かに光瑞との関係を示す箇所がある。「日露戦争中の明治38年（1905）に、恒治郎は満州と結ぶ動脈だった南満州鉄道のターミナル駅、大連・信濃町に河又出張所の看板を掲げた。

大連がロシア語でダルニーと呼ばれていた頃である。鉄道はハルピンまで通じていたが、当時は中国人ばかりで日本人が少なく、醤油は馴染まれなかった。そこで、中国人には河又清醬「ほうゆう・ちんじゃん」として売り、徐々に地歩を固めていった……………恒治郎は「河又の旦那」と呼ばれ、中国人からも親しまれた。この上なく酒を愛し、趣味に競走馬を持つほどの余力を貯え地域の有力者となった。堺の又三郎の縁者はもとより、内地から河又に縁のある者が渡満する際は紹介を受けて表敬訪問をしたといわれる。仏教文化を究めるため、中央アジアの探検事業で名高い、浄土真宗本願寺派第二十二世門主大谷光瑞師は、しばしば、中国大陸の赴いたが、大連上陸の際は、恒治郎の屋敷に逗留するほど親交があったという」(1)。このように大谷光瑞は大連の中にあつて、当地の支配者層や満鉄との関係は言うに及ばず、市井の人々との交流も本願寺関東別院を通じてあったと考えていいだろう。

第三章「大谷光瑞と上海」は、光瑞は、「上海」を世界有数の都市であり、中国の中心点と考えていた(元々は、漢口を中心と考えていたが、上海が屈指のスピードで発展するにつれて中心点を漢口から上海に移行したのである)。また魔都と呼ばれた上海で「ハウスポート」「無憂園」そして「本願寺上海別院」などで様々な階層の人たちと出会い、交流することによって、本願寺の存在を不動のものにした。また現今の日中問題に対し様々な発言をなし、中国に対しても辛らつな言葉を投げかけていた。ただ、忘れてはならないのは、中国革命の父と称された孫文をはじめ、革命派の人々との交流があったことである。同じアジア人として、共有できる何かがあったのであろう。光瑞は孫文との交流を通じて、中国に深く関与することになり、死ぬまで中国の動向に関心を寄せていたのである。

第四章「大谷光瑞と漢口」は、光瑞にとって漢口は、「国家の前途」を考える場所であり、また「国家の近代化を学ぶ」ところでもあった。時の実力者張之洞に関心を寄せ、製鉄所、教育機関などを視察したのは、そのためであった。随行員の一人であった中島裁之は、『反省雑誌』の中で「凡そ外国に伝道せんと思ふ、宜しく先づ其国語、人情、風俗に精通し、而して徐ろに事に茲に従はざる可らず……」(2)と言っているが、光瑞も中国を自ら巡遊することによって中島と同じような考えに到ったのではなかろうか。いわば現地主義とも言い表せよう。本願寺は「清韓語学研究所」や「清国語研究所」、「開教訓練所」などを創設し、中国通の僧侶を養成したこととは関係がないと言えないだろう。

第五章「大谷光瑞と台湾―「逍遙園」を中心にして―」は、高雄に現存する「逍遙園」

について、大谷光瑞、本願寺の台湾開教などと相関させて論じてきた。

光瑞は、台湾を「如意宝珠」の島と呼び、産業開発を中心にして、政策を開陳したり、また自ら産業を興したりしていた。光瑞の台湾での拠点となったのは、本願寺台湾別院であり、「逍遙園」であった。「逍遙園」は、光瑞と自らの学生が寝食を共にした場所であり、周辺の農園で農業を営んでいたところであった。さらに「逍遙園」の建築意匠が本願寺「飛雲閣」と相似するなど、大谷光瑞の「夢」が「逍遙園」に凝縮されていることを明らかにした。

第六章「大谷光瑞とシンガポール」は、海外開教（とくにアジア開教）は、明治以降、日本の対外膨張政策にともなって積極的に行われ、軍部の海外進出と軌を一にしている場合が多く、また軍部の海外進出の先鞭役を果たしているものも少なくないことを明らかにした。とくにシンガポール本願寺の創設は、日本政府や軍部が推し進めた「南進論」と関係があり、また光瑞にとって、活動の領域をシンガポール、インドネシアという南洋に移してからは、実業家としての一面を持つこととなった。「農園」や「ゴム園」などの開設によって「産業振興」という新しい方向性を見出したところでもあった。

第二部は、大谷光瑞が中国をどのように認識していたかと言うことを論じたものである。

第一章「大谷光瑞と辛亥革命」は、辛亥革命期に遭遇した日本の一仏教教団・本願寺とその法主大谷光瑞は、教団という特異な存在形態を背景として積極的に辛亥革命・官革両勢力と関わったことを明らかにした。それは革命後の中国政局に一定の発言力を持つようになったことは疑いない。こうした本願寺の活動は、辛亥革命の勃発によって突如としてその力を発揮したものではない。近代における本願寺の活動総体そのものに無関心な近代史の現状からすれば信じられないことであろうが、本願寺の眼はすでに世界に向かって開かれていたのであり、日露戦争後の国際社会の大きな変動の中で締結された英露協商や、その過程が一挙にクローズアップされたチベット問題にあっても、光瑞や本願寺の活動は無視できないものであった。こうした背景には本願寺は、当時中国だけでも二十カ所近くの別院、出張所、布教場などを擁し、巨大なネットワークを構築していた。そこには中国通と称される僧侶たちが蓄積されていたのである。光瑞、本願寺教団はこうしたネットワークによって直ちに「特設臨時部」を創設し、辛亥革命に対応した。そして組織だった活動を大規模に展開させたのである。

第二章「大谷光瑞と『支那論』の系譜」は、竹越与三郎、山路愛山の『支那論』から大谷光瑞、内藤湖南の『支那論』を概括したが、ここで明らかになったのは、竹越、山路は中国の地を履むことなく、ある種観念的な物言いで、中国を論じていたが、光瑞は、中国で生活した体験から、現実を注視すべきだと考え、著したのが『支那論』であった。一方、決して中国には住まず、中国に少し「距離」を置いて現実的な中国を見るよりも、長く培われた歴史観に基づいて中国を観察したのが内藤湖南であり、『支那論』であった。両者の『支那論』が上梓された時代は、政府もなく、法律は完全に施行されず、無法状態であり、ただ軍閥・匪賊が横行するだけの時代であった。この状態を救うことができるのは、東洋の盟主たる日本人だけである、と言うのが、多くの日本人の考え方であった。中国に一旦混乱が生ずれば、日本も少なからず影響を被ると言うことで、中国に対して何か策を考えるものである。当時のアジア主義の立場に立てば、このような考え方は当然の帰結であろうが、孫文の有名な言葉、「あなた方日本民族は、欧米の霸道文化を取り入れているのみならず、またアジアの王道文化の本質を持っています。今後世界文化の前途に対して、いったい西洋霸道の走狗となるのか、それとも東洋王道の守護者となるのか、それはあなた方日本国民がよく研究して慎重に選ぶべき事であります」(3)。日本国民の一人として孫文から突きつけられたこの言葉は、光瑞にとって重いものであったに違いない。

大谷光瑞は、明治維新の激動期に本願寺の一連の改革を成し遂げた父大谷光尊(明如上人)の影響を受け、開明にして進取の精神を受け継いだ。1899(明治32)年、初めての清国外遊は光瑞をして「国家の前途」を十分に考えせしめた。独り本願寺だけの資力を以て「大谷探検隊」(アジア広域調査活動)を組織したのも「国家の前途」を考え、「日本の天職」を明らかにするためであった。「仏子にして、アジア人」であった時代は、精力的に中国に関わり、「大谷探検隊」は言うに及ばず、孫文たちへの支援運動を軸にして活動を行っていたが、対華二十一ヶ条要求、それに五・四運動を経て中国の政治状況は、軍閥・匪賊が支配するようになり、安心して生活できる場所ではなくなった。そこで南洋にひとまず退散する形をとり、中国から距離を置くようになる。南洋では、「ゴム園」、「コーヒー農園」、「香料の栽培」など「産業振興」に力を注ぎ、「実業家」としての一面を持つことになる。その後、「内閣参議」や「大東亜審議会」委員、「内閣顧問」等を歴任する中で「帝国の相談役」となった。海外生活に終止符を打ち、日本(東京築地本願寺)で生活するようになった。ただ戦局が激しさを増した1945(昭和20)年6月には、大連に渡っ

た。当地で日本の敗戦を迎えたのである。「骨は中国大陸に撒いてほしい」と語った時期である。

本研究では、大谷光瑞が常に「国家の前途」について考えていたことを具体的に明らかにした。それはまた「アジア主義者」としての一面でもある。仏教を紐帯としてアジア各地を一つにしようとしたのではあるまいか。このことは今後の検証に委ねたい。

(注)

(1)河又株式会社『むらさき 堺の醤油屋河又・大醬 200 年の歩み』中央製版印刷、69 頁、2000 年。

(2)中島裁之「支那伝道に就いて」『反省雑誌』第 7 年第 6 号、1892 年。

(3)孫文「大アジア主義演説」1924 (大正 13) 年、於神戸高等女学校。ここでは小島晋次、伊東昭夫、光岡玄『中国人の日本人観 100 年史』自由国民社、165 頁、1974 年によった。

大谷光瑞年譜

凡例

1. 本年譜は、『鏡如上人年譜』（鏡如上人七回忌法要事務所編 1954年）を底本とした。底本そのものにかかなりの不備を感じたが、筆者の能力及び時間的制約があり、不備な点を補うことができなかつた。今後増補を加えてより完全な年譜を作りたい。とくにアジアとの関係を示すものについては可能な限り取り入れた。

2. 事項の出典は、可能な限り示し、年譜中には次の略称で附した。但し、特に出典を記していない事項は『鏡如上人年譜』による。なお下記に出典のない場合は出典を本文に書き加えた。

本願 ... 『本願寺年表』（本願寺史料研究所編、1981年）

大谷 ... 『近代大谷派年表』第2版（真宗大谷派数学研究所編、2004年）

明如 ... 『明如上人年畧年表』（上原芳太郎著、1935年）

総合 ... 『近代日本総合年表』第2版（岩波書店編集部編、1984年）

福井 ... 『龍谷年表』福井瑞華編（法盛寺蔵）

西暦	和暦	大谷光瑞・浄土真宗本願寺派関係	他宗派・一般事項
1875	明治 8		2月 真宗各派大教院より離脱する〔大谷〕 9.20 江華島事件 11.29 新島襄ら同志社英学校を設立する〔総合〕
1876	明治 9	5月 西本願寺『本山日報』創刊〔本願〕 12.27 大谷光瑞誕生。父大谷光尊（西本願寺第21世明如宗主）長男、生母円明院藤子	2.26 日鮮修好条規に調印〔総合〕 8.5 金禄公債証書発行〔総合〕 9.15 興正寺西本願寺から独立興正派と称する〔大谷〕 10.24 神風連の乱 27 秋月の乱 28 萩の乱〔総合〕
1877	明治 10	1.3 峻麿と命名（幼名） 4.4 明如本願寺派管長となる 12.16 妹文子（光尊長女、後に常磐井堯猷夫人）誕生〔明如〕	1.30 西南戦争始まる〔総合〕 4.12 開成学校、医学校を合併し東京大学となる〔総合〕 11月 東本願寺派奥村円心らが釜山で布教開始する〔大谷〕
1878	明治 11	5.4 酬恩社設立〔明如〕 6.20 父光尊、正五位に叙される〔明如〕	5.14 大久保利通暗殺される〔総合〕
1879	明治 12	5.4 大教校（現龍谷大学）開校	1.25 『朝日新聞』創刊 6月 東京招魂社を靖国神社と改称し別格官弊社に昇格〔明如〕
1880	明治 13		
1881	明治 14	2.2 手習いを始める 4.11 弟嶺麿（光尊次男、後の木辺孝慈）誕生〔明如〕 6.25 西本願寺派を本願寺派と改称〔本願〕	6.25 東本願寺派を真宗大谷派と改称する〔大谷〕 10.11 明治14年の政変
1882	明治 15	8月 藤枝澤通・藤島了穩・菅了法に渡欧を命ず〔本願〕 12.25 信楽哲乗・田室友令が教育係を命じら	1.4 軍人勅諭が下される

		れる	
1883	明治 16	5.24 山科別院内の学問所に移る	7.7 鹿鳴館落成
1884	明治 17		12.4 甲申事変
1885	明治 18	4.26 弟惇麿（光尊三男、後の大谷光明）誕生〔明如〕 9.24 峻麿得度を一般に布告 11.7 光瑞、枝子（宗主裏方）の嫡子となる 12.3 得度習礼 12.5 得度式、鏡如光瑞と称す	12.22 内閣制度始まる（伊藤博文内閣成立）
1886	明治 19	5.19 東京遊学に出発 4.6 普通教校（現龍谷大学）に反省会創立〔本願〕 6.3 築地に到着 6.9（6.14とも）学習院に入学 7月多聞速明ウラジオストクで開教を始める〔明如〕 8.15 弟徳麿（光尊四男、後の大谷尊由）誕生〔明如〕	2.10 古義真言宗大学林（後の高野山大学）設立〔大谷〕 3.1 帝国大学令公布（東京大学を帝国大学と改称）
1887	明治 20	4月 弟惇麿が大谷昭然の養子となる〔明如〕 7～9月 父光尊の北海道を巡化に見学同行 7.5『反省会雑誌』創刊〔本願〕 10.20 妹武子（光尊次女、後に九条良致夫人）誕生〔明如〕	2.15 徳富蘇峰民友社を設立『国民之友』創刊 12.25 保安条例公布
1888	明治 21		4.3 三宅雪嶺・杉浦重剛ら政教社を設立『日本人』を創刊 11.20『大阪毎日新聞』創刊〔総合〕
1889	明治 22	6.27 海外宣教会より海外仏教事情を進納〔明如〕	2.11 日本帝国憲法発布〔明如〕 11.3 嘉仁親王立太子〔明如〕 10.7 真宗大谷派門主大谷光勝（厳如）隠居、大谷光瑩（現如）が第 212 代門主に就任〔明如〕

1890	明治 23	1.17 学習院を退学、是月共立学校に入学 3月 曜日蒼龍ホノルルに渡航し、布教を始める〔本願〕	2.1 徳富蘇峰『国民新聞』発行 10.30 教育勅語発布
1891	明治 24	5.22 前田慧雲鏡如の侍講となる〔本願〕	5.11 大津事件 10.28 濃尾地震〔明如〕
1892	明治 25	1.4 光瑞の改名届を宮内大臣に提出、7日認可 4.23 弟大谷尊行が得度（景勝院・幼名嶺麿、後に木辺孝慈）〔明如〕 4.26 西本願寺文学寮（現龍谷大学）落成〔本願〕 9.29 九条道孝公爵三女籌子（貞明皇后姉）入輿 10.3 披露宴	11.1 黒岩涙香『萬朝報』創刊
1893	明治 26	6.23 加藤恵證をウラジオストクに派遣〔明如〕	1月 東本願寺負債整理を発表し臨時整理局を置く〔明如〕 2月 千島移住者郡司成忠に1500円下賜〔明如〕
1894	明治 27	4.7 相愛女学校落成〔明如〕 8～10月 西日本各地で帰敬式などを行う軍隊及び出征者家族等を慰問（大津、大阪、伏見、熊本、福岡、佐世保、長崎、馬関、松山、丸亀） 9.21 弟尊行の木辺家の縁約が成る〔明如〕 12.1 大本營の許可を得て従軍僧木山定生を戦地に派遣（従軍布教の始まり）〔明如〕	1.15 大谷光勝（前真宗大谷派法主）遷化〔明如〕 4月 大日本仏教青年会発会〔明如〕 8.1 日清戦争
1895	明治 28	3～12月 各地で戦没者追弔法要並びに慰問（広島、大阪、金沢、福井、伏見） 5.16 海外布教の準備として「清韓語学研究所」を設置〔本願〕 12.24 弟惇麿、大谷昭然より復籍〔明如〕 12.27 弟大谷尊重が得度（淳浄院・幼名惇麿）〔明如〕	4.17 日清講和条約 23 三国干涉 6月 台湾総督府設置 9月 浄土宗専門学院を京都鹿ヶ谷に設置〔明如〕

1896	明治 29	1.23 台湾開教を開始〔明如〕 6.9 父大谷光尊（明如宗主）が伯爵拝受 9月 光瑞の補助により佐々木千重が豪州木曜島で布教〔明如〕 12.8 開教事務局と真宗教会本部を廃して布教局を設置〔明如〕 12.21 従5位に叙せられる〔明如〕	6.5 真宗大学（現大谷大学）設立〔大谷〕 9月 松方内閣成立 拓務省設置
1897	明治 30	1.14 英照皇太后崩御のため上京 3.9 妹義子（光尊三女）誕生〔明如〕 7.21 籌子と内婚の式を挙げる 7.25 『教海一瀾』創刊〔本願〕 12.8 弟大谷尊由（積徳院・幼名徳麿）、同大谷昭道（欣笑院・幼名勲）得度 11・29 上原芳太郎・阿部一毛・龍江義信、英領ニューギニア・豪州に赴く〔明如〕	1.11 英照皇太后（孝明天皇女御）崩御〔明如〕
1898	明治 31	1.31 籌子と婚儀を挙げる 4月 開教視察のため土岐寂静・朝倉明宣をインド・豪州へ、宮本恵順・本多恵隆を米国に派遣〔明如〕 4.7 父光尊（明如）が従二位に叙せられる〔明如〕 7.13 土岐寂静コロンボで客死〔明如〕	1月 伊藤内閣成立 4月 大谷光瑩が従二位に叙される〔明如〕 5月 日露協商 6月 大隈内閣成立 11月 山県内閣成立 11.11 能海寛西藏探検へ上海を出発〔大谷〕
1899	明治 32	1.10 清国巡遊を発表 1.19 清国巡遊に出発。武田篤初・香川嘿識（杭州駐在）・朝倉明宣・本多恵隆・市川達讓・池永三章・中島裁之、上海より上原芳太郎、北京より高須治輔が随行。上海、香港、杭州、蘇州、漢口、武昌、北京を巡る。北京では清廷を訪問し慶親王・李鴻章などと会見した〔明如〕 5.3 帰山 1月 『反省雑誌』を『中央公論』と改める 8月 シンガポール布教所設立 10.23 インド仏蹟を巡拝し、欧州へ渡航することを発表（第一次大谷探検隊） 11.29 外遊	3月 中国山東省で義和団蜂起〔総合〕 5.15 大谷派奥村円心千島開教に赴く〔大谷〕

		<p>中の職務を弟大谷尊重（淳浄院・光明）に代理委任 12.4 神戸を出発。日野尊宝・武田篤初・渡辺哲信・本多恵隆・桜井義肇らが随行 12.6 長崎着 12.8 上海着 12.12 香港着 12.17 シンガポール着 12.23 セイロン島コロombo着</p>	
1900	明治 33	<p>1.1 セイロン島で迎春 1.17 ボンベイ（現ムンバイ）に到着 1.18 ボンベイからエレファントケープ巡遊、大印度半島鉄道で仏蹟に向かう 1.20 ベナレス到着 1.21 仏陀伽耶に到着 1.22 仏陀伽耶を出発、カルカッタ（現コルカタ）に到着 1.24 ダージリンへ出発 1.25 ダージリン到着 1.29 カルカッタに戻る 1.30 亜細亜協会、大菩提会等を行う 2.1 ボンベイに到着 2.5 マドラスに到着 2.8 セイロン島・コロomboに到着、欧州行きの便を逃しボンベイに戻る 2.13 妹文子（光尊長女）が常磐井堯猷と結婚〔明如〕 2.17 ボンベイ出発 途中カイロ、ナポリ、ミラノ、ジェノバ、パリ等を経てロンドンに到着 7月ノルウェーから極北のスピッツベルゲンに至る、1ヶ月北極探遊 9.21 日野連枝と共にロンドンからパリへ行き、在パリの藤島了穂の案内でパリ万国博覧会・ベルサイユ宮殿・ルーブル博物館などを巡見 またレヴー博士・シャバンヌ一等の東洋学者等と会見 9.18 ラヘーを経てロンドンに帰る、継いでフランス・オランダ・スイス等に至る</p>	<p>5月 義和団事件 7月 第5師団を清国に派遣 8月 連合軍北京入城 9月立憲政友会結成 10月 伊藤内閣成立</p>
1901	明治 34	<p>1.1 英国より新年の賀儀を送る 1月下旬 ベルリンの博物館・孤児院・感化院等を巡覧 7月 オースト</p>	<p>1月 内田良平「黒龍会」を設立</p>

		<p>リア・ハンガリーを経てトルコに行き、帰途ベルリン・スイス・ノルウェー各地を見学</p> <p>4.4 台北別院設立〔本願〕</p>	
1902	明治 35	<p>8.15 英国より帰国する途上に西域を探検するため、渡辺哲信・堀賢雄・本多恵隆・井上弘円を伴いロンドンを出発し、ベルリンへ向かう 8.18 ペテルブルグに到着</p> <p>8.24 ペテルブルグ出発 8.25 モスコー到着 8.26 モスコー出発</p> <p>8.31 バクウーよりカスピ海を渡る</p> <p>9.1 クラスノボトスクに上陸 9.4 アンジシアン到着 9.8 オシュ（露領トルキスタン）でキャラバンを編成、出発 9.21 カシュガル到着</p> <p>9.27 カシュガル出発、ヤールカンドへ向かう 10.5 ヤールカンド出発</p> <p>10.12 パミールのタシュクルカン到着、13 日間滞在。冬期が近づいたため、隊を二分し光瑞・本多・井上の三名はインドに向かい仏蹟を調査し、渡辺・堀の兩名は西域に留まり調査することを決定 10.14 フンザ道を通りインドに向かう</p> <p>10.17 ミンタカ嶺（葱嶺）を越す</p> <p>10.25 フンザを出発 10.27 カシミール北部ギルギッドに到着 10.29 ギルギッド出発 11.9 スリナガル（カシミール首都）到着、2 週間静養 11 月下旬 インド・ラワルビンディを経てペシャワルに到着、天親菩薩の廟を調査 12.1 日本から渡印していた上原芳太郎・島地大等がペシャワルに到着し合流する 12.5 シヤパツガリに赴き阿育王碑の調査や古寺の発掘をしながら漸次南下する 12.13 ベナレスに到着、鹿野苑の古塔を詣す 12.15 伽耶に向か</p>	<p>1.25 八甲田山雪中行軍遭難事件〔総合〕 3.28 広島高等師範学校（後の広島大学）設立〔総合〕</p>

1903	明治 36	<p>う 12.16 伽耶山に登る 12.19 仏陀伽耶に詣す 12.27 光瑞誕生日、象に乗り摩揭陀の廢都王舎城に到着。阿難証果の遺跡などを探査</p> <p>1.6 王舎旧城内に幕舎を張る 1.14 靈鷲山に上り全山を精査 1.15 幕舎を撤去 1.16 バンガローに行き、120 人の現地民とハイバル北麓一帯を探査、大迦葉石室の地点を推定 1.17 大迦葉石室に至り、後の調査を残留する島地に委嘱し、日野を従えてカルカッタに向かう 1.18 カルカッタの旅館に到着、ムンバイから転送の電報により父光尊（明如宗主）の発病と重患を知り、程なく遷化の報に接する。第 21 世の伝燈を継承 父光尊（明如宗主）の危篤遷化により京都本山では嗣法について次の処置がとられた。15 本願寺住職 1.17 真宗本願寺派管長 1.18 家督相続 2.4 襲爵を仰せつけられる 2.19 ペナン出発、帰国の途につく 3.12 長崎に到着 3.13 帰山。菊花御紋章五条袈裟襲用を勅許される 3.15 御影堂晨朝に出仕 3.17 前宗主の忌日法要 3.25 継職後初めて直諭を発する 3.30 上京、正五位に叙せられる 4.1 参内、天機奉伺 4.2 青山御所に参候 4.3 築地別院で高輪仏教大学・第一仏教中学の教職員等に旅行地の地理と歴史について講演 4.6 帰山 5.1 ～ 2 伝燈奉告会法要 5.3 王舎城靈鷲山廢趾の古瓦を延暦寺に寄進 5.5 鴻の間前庭舞台において能、白書院においてインド仏教美術百余点・インド風景写真等の展覧 5.7 能を催し、宗族・近隣府県官民七百余名を招く 大阪第四師団追弔法要</p>	<p>7 月 日本基督教青年会同盟（YMCA）成立 11.15 幸徳秋水・堺利彦ら平民社を設立し『平民新聞』創刊</p>
------	-------	--	--

		<p>5.10 洛東内山廟所にて兼実公七百年法要 5.16 この日を親教の日と定める 6.15 安居開繙式 10.14 山科別院報恩講 11.10 洛東内山廟所で二尊会法要 11.15 ~ 16 大阪津村別院報恩講並びに二尊会法要 11.16 集会を解散 11.17 相愛女学校に臨む 11.24 集会規則総代会衆選挙規定を許可発布 11.25 総代会衆選挙規定施行細則の更改を許可、発布 12.5 インド王族マハラジャー・カプールターラ夫妻来山</p>	
1904	明治 37	<p>1.7 日露戦争に備え本山に臨時部を設置 1.12 井上弘円を北京に派遣 1.16 大谷尊由を広島師団と呉に派遣 1.20 大谷尊重を名古屋師団に派遣 2.6 弟大谷尊重を金沢師団に派遣 4.16 仏教専門大学・高輪仏教大学を廃して仏教大学を設置 5.3 ~ 5 姫路で師団・連隊慰問 5.29 大谷尊由、戦地での布教と法務を委任され大連に出張 8.22 大谷尊重を満州軍布教使総監督に任命</p>	<p>2.6 日露戦争開戦 3.12 曹洞宗大学林（後の駒澤大学）認可される〔大谷〕 4.1 井上円了哲学堂（後の東洋大学）落成〔大谷〕 4.1 日蓮宗大学林（後の立正大学）開校式を大崎で行う〔日蓮〕</p>
1905	明治 38	<p>6・28 東本願寺門主来山、時局の推移に鑑み両山の提携を約す 7.12 傷病兵慰問布教を開始 8 樺太に臨時部支部を設置し伝道布教開始 10.12 戦費献納により賞勲局総裁より銀杯並びに木盃各一個を授けられる 12.24 臨時部を閉鎖</p>	<p>9.5 日露講和条約（ポーツマス条約）調印 9.5 日比谷焼き討ち事件</p>
1906	明治 39	<p>1.6 九条道孝公薨去につき上京する（裏方は3日に上京） 19 阿弥陀堂で道孝公追悼法要を修す 2.7 布教練習生規則を許可発布する 22 大阪練兵場において第四師団忠死者追悼法要親修のため下向する</p>	<p>5.26 万国郵便条約に調印 6.1 樺太北緯五十一度以南を領有する 6.7 南満州鉄道会社設立の勅令出る</p>

23 大谷尊由明如の分骨を台北別院に奉安する〔本願〕3.21 本願寺鴻の間において宗祖親鸞聖人 650 回大遠忌御待受の消息を發 24 広島西練兵場における第 5 師団忠死者追悼法要親修のため下向する 4.1 大阪・和歌山・奈良県下の巡教に向かう 18 金沢第 9 師団忠死者追悼法要親修のため下向する 19 富山・福井別院に巡教する 24 米国震災につき、罹災民の見舞いとして金千円を大統領に送る 5.11 油小路花屋町に開教訓練所を開く 6.8 親鸞聖人 650 回大遠忌準備事務所を開設する（委員長大谷尊重連枝）7.11 京都駅發東上、北海道・樺太巡化の途につく（裏方同行、随行长大谷尊重連枝）14 東京發 16 函館着 19 函館發 23 樺太可薩港（コルサロフ）本願寺出張所に入る 29 可薩港にて信徒に親教、帰敬式を行う 是日当地を出発、諸地を巡化する 8.14 真岡（マフカ）より再び可薩港本願寺出張所に帰る 25 樺太巡化を終わり、可薩港を出帆 26 小樽港着 28～30 岩内光照寺、余市乗念寺を回り、小樽に帰る 9.1 小樽より札幌別院に入る以後 10 日まで札幌、旭川を巡教する。17 帰山する 9.26 戦役後の国運の進展に鑑み、教線拡張の必要を痛感し、清国視察のため裏方同行し京都駅を出発する 27 汽船オセアニア号にて神戸出航 30 上海着 10.2 上海より杭州に向かう 以後蘇州、九江などを巡り 24 日に漢口に着く清国開教の拠点とす 11 月 漢口より陸路鄭州に行く、ここで裏方と別れ西安に向かう 11.21 西安より蜀の栈道を経て成

1907	明治 40	<p>都に向かう 12.31 成都に到着 (福井)</p> <p>1.2 成都を発ち重慶を経て長江を下り 29 日漢口に着く 30 須磨別邸宮内省に買い上げられる六甲山に二楽荘を建設する (福井) 2 月 朝鮮別院を京城に創設 [本願] 2.2 漢口より水路上海に着く香港・広東・上海を経て 3.30 漢口に再び戻る 4.11 大谷尊由連枝などを従えて北京本願寺に入る 17 光緒帝・西太后などに謁見する 22 北京を発ち、山海関・営口を経て 25 奉天着 26 大連着 関東別院 (本願寺別院) に参拝後、中村是公満鉄副総裁宅に一泊する 27 旅順に行き、白玉山麓の戦死者仮納骨堂を訪問 30 大連発 5.4 神戸着 京都に帰山 13 明治天皇より勅語を賜う 6.3 本末共保財団認可される 7.30 仏教大学 (現龍谷大学) に宗祖 650 年遠忌記念として仏教大辞彙の編纂を命ず 8.29 宗主直弟淳淨院尊重連枝を大谷宗家の後継と定める (30 尊重従五位に叙せられる 福井) 12.10 宗祖 650 年大遠忌記念の企画について親示を下す</p>	4.1 南満州鉄道開業
1908	明治 41	<p>4.11 ~ 16 宗祖 650 年大遠忌を修す (大谷本廟) 5.6 大阪城東練兵場において第四師団忠死者追弔法要を親修する 6 月 建築中の六甲大谷邸別邸を二楽荘と公表する 10.3 広島別院慶賛法要、次いで第五師団義和団事件忠死者追弔法要を行う 12.2 スウェン・ヘディン博士来山</p>	
1909	明治 42	4.11 明如 7 回忌法要を修す 20 脳	10.26 伊藤博文ハルビンで暗殺

		<p>神経衰弱のため二楽荘で静養する</p> <p>5.6 深草練兵場で第16師団管下忠死者追弔法要を親修する 9.15 大谷武子九条良致と結婚〔本願〕 24 オリエンタル号にて神戸出航インド旅行の途につく 裏方同行する 26 上海上陸 27 蘇州に行く 28 上海出航 10.1 香港着 8 シンガポール着 10 ペナン着 13 コロンボ着 18 ボンベイ着 (以後翌年1月末までインド各地の仏跡を巡拜旅行する)</p>	<p>される</p>
1910	明治43	<p>1月末ボンベイより欧州に向かう (エルサレム・エジプト・ギリシャ・イタリアなどを回り4月上旬ロンドンに到着する 8.20 ロンドン発日本に向かう 10.5 神戸着 (翌日京都に帰山) 11.15 二楽荘内に中学を併設する</p>	<p>5.25 大逆事件</p> <p>8.22 韓国併合に関する日韓条約に調印</p>
1911	明治44	<p>1.27 籌子裏方往生する (31歳、光顔院と称す) 3.16 宗祖650回大遠忌法要 (第1期) 4.8 宗祖650回大遠忌法要 (第2期) 5.6 伏見第十六師団練兵場で忠死者追弔法要を親修する 5月初旬武庫中学を開設する 11.10 清国の動乱に当たり清国開教総監部 (上海) に臨時部を開設し、これを漢口の本願寺出張所に置く (移住民保護・慰問をはじめ両軍の死体収容・葬儀などの活動を行う) 11月中旬より、1ヶ月をかけ中四国九州各地を巡教する 11.28 鎮西別院の起工式に臨む 12.15 巡教より帰山する</p>	<p>2.21 関税自主権の回復</p> <p>6.1 平塚雷鳥ら青鞥社を結成『青鞥』を創刊</p> <p>10.10 武昌蜂起 (辛亥革命始まる)</p>
1912	大正元	<p>1月 中国南京に本願寺救護病院を開設〔本願〕 2.28 東京華族会館で</p>	

		<p>衆参両院法話会を開催する 3.30 清国動乱の鎮定により特設臨時部 を閉鎖する 2.15 武庫中学内に清 語研究所を開設する 9.11 御大葬 参列のため東上す 18 大谷家負債 問題について親諭を下す 19 大谷 家負債問題喧伝せれるにつき内局 を更迭する 11.10 負債整理につき 信徒協議会を開く 11 朝鮮京城永 樂町の京城出張所を京城別院にす る 18 鳥取・島根・山口三県を巡 教する 11.10 大連関東別院斧初式 是月大谷家財産管理事務所協議会 12.13 宮崎・鹿児島両県に巡教 30 帰山</p>	
1913	大正 2	<p>1.24 定期集会において教学費補充 並びに負債整理財源を確保するた め寺債（二百万円）募集を決議 2.10 寺債発行する 3.5 二楽荘内の 清国語研究所を閉鎖する 9 孫文来 山（『孫中山年譜長編』）22 自動車 で滋賀・岐阜・三重・愛知四県を 巡教する 28 帰山 4.1 負債整理の ため大谷家所蔵品六百七十五点入 札売却二十五 大谷家所蔵品第二回 入札売却三十 深草練兵場で第十六 師団管下忠死者追弔法要を親修す る 8 月 多田等観チベット入国 8.2 李王世子（李垠）の来山（福井）9.24 臨時集会を開き、寺債の運営、負 債整理などを議す 10.1 新潟・長 野両県を巡教する 15 帰山 11.7 大 谷家所蔵品第 4 回入札売却</p>	
1914	大正 3	<p>2.13 疑獄問題で大洲鉄然・朝倉明 宣・上原芳太郎・芳瀧智導が収監 される 17 疑獄事件の責任を取り 内局交代する 3.18 時局に際して 宗運を刷新すべく門末の切望を容</p>	<p>7.28 第一次世界大戦始まる 8.23 対独宣戦布告する 9.2 日本 軍山東半島に上陸 11.7 日本軍 青島を占領</p>

		<p>れ本山常住を決意、錦華殿に常住す 4月 正四位に叙される 武庫中学を閉鎖 5月 大泊別院を樺太別院に改称〔本願〕 5.14 疑獄事件につき本願寺住職・本願寺派管長を辞任する 6.2 継嗣大谷照襲爵仰せつけられる 8.24 日独戦に鑑み臨時部を置く（福井） 11.27 神戸出航阿波丸にて外遊の途につく 29 釜山着 30 釜山発慶州、仁川を経て 12.3 京城（ソウル）着 5 京城発 7 奉天着（大連・旅順などを回る） 10 大連発上海に向かう 12 上海着（漢口・南京・鎮江・杭州などを回る） 25 上海発（インドに向かう） 28 香港着 30 香港発</p>	
1915	大正 4	<p>1.4 シンガポール着 13 コロンボ入港（ヌアラエリア、ハクガラ植物園などを見学） 17 コロンボ発（インドに渡り、南インドを回る） 25 ボンベイ着 31 ボンベイ発（アグラ・デリー・ラホール・カルカッタ・ダージリンを回る） 2.13 タゴール家を訪問） 2.21 カルカッタ着 3.6 カルカッタ発 3.17 ペナン着 秘書柱本瑞俊と会う 18 柱本を伴い列車にてシンガポールに向かう 20 シンガポール着 21 シンガポール発 27 香港着 4.3 香港本願寺起工式〔本願〕 5 香港発 8 上海着（杭州西湖などを回る） 5.11 上海発 13 大連着（北上し、哈爾浜経由） 16 ウラジオストク着 18 浦潮本願寺起工式に前田徳水清国開教総長とともに臨場する 同日ウラジオストク発（哈爾浜・長春・鉄嶺・撫順・遼陽・営口を経て大連に向かう） 25 大連着（関東別院に移遷された明如上人の遺骨を拝す） 29 大連発</p>	<p>1.18 対華二十一ヶ条要求 2.11 在日中国留学生対華二十一ヶ条要求反対大会を開く</p>

		30 青島入港 31 上海着 6.4 揚州から鎮江に向かう 9 上海に帰る 23 上海発（寧波・普陀山に7月末まで遊ぶ）8.5 大連着（旅順大谷邸にて1月中旬まで避暑）9月二楽荘の蔵書数万巻を大連満鉄図書館に委託する〔本願〕11.25 漢口より上海へ向かう 12.21 シンガポール発、ボンベイを経てインド仏跡巡拝の途に上がる	
1916	大正 5	1.1 カルカッタ正金銀行社宅で新年を迎える 8月までシムラに滞在（梵語を研究する）8月中旬シムラで心臓を病み、治療のため大連に行こうとする 9月上海フランス租界アルバート路に借家して居住 近隣孫文邸と来往する	
1917	大正 6	2月中旬 南洋に渡航する 8月 旅順滞在 9.10 大連着 10.1 満鉄本社で仏教講演会 22 大連関東別院で満鉄読書会・満州仏教青年会のために講演する 11.11 大連発 13 門司着直ちに台湾に向かう 16 基隆着（台北・阿里山登山・台南・打狗などを視察）	1.20 西原借款開始する 11.2 石井・ランシング協定 この年ロシア革命
1918	大正 7	1.3 門司着 5 門司発別府に向かい鉄輪貝島別邸で使用する 10 別府から長崎を経て香港に向かう 15 香港本願寺着 発熱し熱帯アメーバ赤痢と診断される 3月孫文政府最高顧問となり、広東に赴く 4月 香港から上海経由で旅順に行く セレベス島メナド付近でイギリス人よりコーヒー園を購入（大正9年まで経営する）5月 大連星ヶ浦満鉄別荘で静養する 満州仏教青年会のために毎日曜日関東別院で「大	8.2 シベリア出兵 8.3 米騒動 9.29 原敬内閣成立

		無量寿経」を講ず 7.17 所有の「光洋丸」台湾からセレベスに行く途中沈没する 8.12 シベリア出兵に際し臨時部を設置〔本願〕	
1919	大正 8	4.6 青島着 下旬青島からセレベスに向かう 5.2 下関上陸（山陽ホテル宿泊）7.6 「光寿会」結成される 10.10 南洋より上海経由で神戸に入港 31 大阪中央公会堂で毎日新聞社主催「西および南に於ける日本人の発展策」という講演を行う 11.6 青島に向けて出発	3.1 三・一万歳事件 5.4 五・四運動 6.28 ベルサイユ条約調印
1920	大正 9	2.21 青島発 23 上海着 17 弟の尊由とともに漢口に向かう 3.2 漢口着（宜昌に遊ぶ）14 漢口本願寺本堂新築起工式に臨む（『漢口本願寺創建顛末』18 上海に帰着 4.4 上海発 8 神戸入港 5.11 上海出航蘭領セレベスに向かう 7 月ジャワ島ソラバイヤ付近でシトロネラ園を購入（ジュランゼロ農園）次いでジャワ西部でスカハジ農園（シトロネラ栽培）〈環翠山荘〉パノラマ農園（養蚕）〈大観荘〉を経営する 8 月中旬メナドより青島に向かう 9.3 シンガポール着 13 上海着 10.8 大連より下関着 21 大阪相愛高女で信仰座談会を開く 11.3 神戸発 7 上海着（蘇州・杭州を遊覧する）この頃ハウスボート呉淞丸を購入する	3.12 尼港事件
1921	大正 10	2.15 第二回大谷学生を全国より募集する 20 上海発 23 神戸着 3.6 東京華族会館で国民新聞社主催「時局講演会」を開く 4.3 神戸発 7 上海着（蘇州・杭州旅行 16 上海発 22 長崎、神戸、大阪を経て伏見三	10.14 皇道大本、大本教と改称〔大谷〕

		夜荘に入る 27 横浜発 6.9 バンクーバー着 (カナダ横断) 30 ロンドン到着 (ヨーロッパ各国の社会状態および宗教事情などを視察する) 9.23 シンガポール着 10.2 上海に帰着 年末頃上海日本人倶楽部において「上海獅子吼」会員のために仏教講演会を開催する	
1922	大正 11	1.9『大乘』を上海で創刊する 是月上海の別邸「無憂園」が完成する 3.11「無憂園」落成披露宴 25 上海発 28 神戸着 4.19 門司発 22 上海「無憂園」に帰る 5.20 仏教 大学文部省大学令により龍谷大学と改称〔本願〕 6.5 上海発 (シンガポール経由ジャワ、セレベス耕運山荘に行く) 9.5 上海発大連に向かう 是月中旬北京に行く 29 九江着廬山に登る 10.7 上海着 11 上海発 13 神戸着 14 漢口本願寺新本堂竣工〔本願〕	2.6 ワシントン軍縮会議 3.3 全国水平社創立 4.2 サンデー毎日・週刊朝日創刊〔総合〕 7.15 日本共産党設立大会
1923	大正 12	1.21 神戸発上海に向かう 3 月生母円明院・九条良致、武子夫妻一ヶ月の予定で上海に滞在 6.16 上海からジャワに向かう 9.15 ジャワからシンガポール、サイゴン、香港経由上海着 10.12 上海発大連に向かう 23 大連関東別院で「光寿会」会員のために「正信偈」を講ず 20 関東別院に南満各地から本願寺布教使を招集して特別講習会を開く 11.4 大連発上海に向かう	9.1 関東大震災おこる 9.16 甘粕事件起こり、大杉栄ら殺される 12.27 虎ノ門事件
1924	大正 13	1.13「光寿会」会員のために正金銀行で「仏教の原理」を講ず 2.6 上海発長崎に向かう 13 京都発東上 14 清浦奎吾首相を訪問 帝国ホ	6.11 加藤高明内閣成立 (護憲三派内閣) 11.24 孫文神戸で大アジア主義を演説する

		<p>テルで国民新聞社主催講演会に臨む 講題「海外投資」16 伏見三夜荘に帰る 17 大阪相愛高女で「大谷学生」採用試験を行う 27 神戸商業会議所において「光寿会」神戸支部主催講演会 3.2 長崎発 3 上海着「無憂園」に入る 6.3 大連関東別院で「光寿会」会員のために「一切衆生悉有仏性」を講演する 9 上海に帰る 14 シンガポール・セレベス・ジャワに向かう 8.27 南洋より上海「無憂園」に帰る 30 大連に向かう 11.9 上海日本人倶楽部で「光寿会」会員のため「無量光如来安楽荘厳経」を講義する 18 上海発 20 神戸入港 24 京都発 東上 25 加藤高明首相を訪問 東京華族会館で国民新聞社主催「支那時局問題より対支四大方針について」講演する 27 伏見三夜荘に帰る 12.4 神戸発上海に向かう</p>	
1925	大正 14	<p>1.17 上海日本人倶楽部で「光寿会」会員のため「龍樹菩薩讚礼阿弥陀仏偈」を講義する 4.25 上海発神戸着 26 東京青山会館で「光寿会」東京支部発会式に臨む「仏教の原理」を講演する 28 帰洛三夜荘に入る 5.1 大阪実業会館で「光寿会」大阪支部講演に臨む「仏教の原理」を講演する 10 奈良遊覧 13 神戸発上海に向かう 6.18 上海発南洋ジャワに向かう 9.23 上海「無憂園」に帰る 10.3 上海日本人倶楽部で「生死即涅槃」を講ず 10 上海策進書院学生募集のため、神戸に帰朝 18 大阪相愛高女で策進学院応募生を選考する 10.31 門司発上海に向かう この年の秋上海郊外越界路に「新無憂園」を新築す</p>	<p>2.17 天理外国語学校（後の天理大学）設立 4.22 治安維持法公布 5.5 普通選挙法公布 5.30 五・三〇事件</p>

		<p>12.1 「光寿会」本部を上海「無憂園」より大連市佐渡町 20 番地に移す</p> <p>1.9 上海日本人倶楽部で「光寿会」会員に「観無量寿経」を講ず 18 神戸港着 2.8 神戸港発ヨーロッパに向かう 19 サイゴン着 3.8 サイゴン発 27 スエズ運河に入る(カイロ・エルサレム・ナザレを経て) 4.6 メジナ着 11 コンスタンチノーブル着(トルコ遊覧 農学校や蚕業学校などを視察する) 5.16 ローマ着 21 ミラノを経てベルン着 22 モントルーからパリに出て 25 リオン着 6.1 パリ発(ベルギー・オランダを遊覧)9 パリ着 9.15 パリ発 ドーバー経由ロンドン着 23 ロンドン発 26 飛行機の調査のためベルリンに赴く 29 ベルリン発 30 パリ着 (自動車・農業用トラクターなどを調査する) 10.14 パリ発 18 マルセイユ着 19 マルセイユ発 21 ローマ着 27 ナポリ着 29 トルコに向かう 11.3 コンスタンチノーブル着 8 ブルサに向かう (トルコで起業す、ブルサで絹織物と染織、アンカラでバラを栽培する) 24 コンスタンチノーブル発帰途につく</p>	
1926	昭和元		
1927	昭和2	<p>1.4 神戸入港 伏見三夜荘に入る 6 東上天機奉向 13 三夜荘で大谷学生選抜試験 2.5 御大喪儀参列のため柱本室内部長を随え東上する 8 帰洛 3.13 「光寿会」京阪神代表者野村徳七以下 29 名を三夜荘に招き、懇談会を開催する 5.1 明如上人 25 回忌法要 28 門司発上海に向かう 6.1 上海発シンガポール経由ジャワに向かう 10.11 神戸入港</p>	<p>4.20 田中義一内閣成立 4.22 モラトリウム実施</p>

1928	昭和 3	<p>三夜荘に入る 11.6 神戸発大店に向かう 9 大連着 16 北京に向かう 12.3 大連 6 神戸入港 三夜荘に帰る</p> <p>1.4 京都高等女学で「光寿会」京都支部員のために「往生論註」を講ず 13 長崎発香港に向かう 25 香港発上海経由で 2.1 神戸着 三夜荘に帰る 7 九条武子没 (42 歳 厳浄院と称す) 3.19 神戸発上海に向かう 4.1 神戸入港 6.9 門司発 (上海・香港経由シンガポール着 その後バタビアに行く) 9.8 バタビア発 (シンガポール・ペナン・コロンボ・スエズ運河を経て) 10.5 ナポリ着 (パリ・ロンドン・ベルギー・オランダ・スイスなどを遊覧する) 12.11 マルセイユ発 18 コンスタンチノーブル着 (体調不良で病院に入院する)</p>	<p>2.20 第一回普通選挙施行</p> <p>5.3 済南事件 6.4 張作霖爆殺事件起こる</p>
1929	昭和 4	<p>2.8 帰途につく 3.11 神戸入港 三夜荘に帰る 4.4 台北別院を台湾別院と改称する [本願] 6.1 孫文の国葬に当たり国賓として招待される (代理として小笠原彰信参向) 7.3 神戸発 6 大連着 9 月中旬帰朝する 10.18 神戸発上海に向かう 11.20 神戸着 三夜荘に帰る</p>	
1930	昭和 5	<p>1.30 神戸発香港に向かう 6.8 「光瑞会」を設立する 27 京都偕行社で第十六師団の要請により現役幹部、在郷将校、学校配属将校約 200 名に講演する 7.2 神戸発上海経由南洋に行く 20 ジャワ着(ジャワ島各地農園を巡視する) 9.18 神戸入港 三夜荘に帰る 12.17 神戸発香港に向かう 23 台湾基隆に入港 台</p>	<p>1.11 金本位制に復帰 1.21 ロンドン海軍軍縮会議(4.22 調印する) 11.14 浜口雄幸首相東京駅で狙撃される</p>

		湾別院に立ち寄る	
1931	昭和 6	3.9 糖尿病の治療に励む 5.11 上海本願寺別院完成する 6.15 神戸発 上海に向かう 17 上海着 7.1 上海発香港経由ジャワに向かう 9.4 ジャワより上海経由 9.21 神戸帰港 11.11 大谷派法主夫妻及び同派関係者を三夜荘に招待する	9.18 柳条湖で日中の兵士衝突する（満州事変の始まり） 12.13 犬養毅内閣成立
1932	昭和 7	1.28 上海事変勃発 上海別院からアスターホテルに移る 3 上海別院砲弾数発落下する 2 月上海別院内に軍隊慰問本部を置く〔本願〕2.15 上海出航 19 三夜荘に帰る 26 大阪の知事、市長、商工会議所会頭などに「上海の現状」を講ず 3.6 京都明倫小学校にて「光瑞会」会員のために「支那の将来」を講ず 4.16 三夜荘において「観桜会」を開く 25 神戸発上海に向かう 29 上海新公園天長節戦勝観兵式に参加（爆弾騒ぎに遭遇するが、光瑞は間一髪のところまで避難する）5.9 上海より帰朝 14 「光瑞会」創立二周年大会および園遊会を百華園に開く 6・30 神戸港発ジャワに向かう 10.3 神戸着帰朝 18 二楽荘全焼〔『二楽荘と大谷探検隊』〕21 新満州国視察のため大連に向かう 11.17 帰朝 27 京都二条高女で「満州国の現在と将来」について講演する	1.28 上海事変勃発 2.9 井上準之助血盟団員に射殺される 1.1 満州国建国宣言 5.15 五・一五事件 9.15 「日満議定書」に調印（満州国承認）
1933	昭和 8	1.21 九条道実公薨去につき東上する 2.9 神戸発上海経由香港に向かう（広東・香港遊覧する）27 神戸入港帰朝 4.29 満州に移民する「光瑞会」会員五百名を三夜荘に招待し、大園遊会を開く 5.1 学生を伴	3.27 日本国際連盟を脱退する 4.22 京大滝川事件起こる 7.20 満州移民計画大綱を発表

		い1年の予定で大連に行く 6.4 満蒙において活動する少年団三十一 余名大連に発途する 7.26 内蒙古 茂林廟阿旺図巴丹活仏大連関東別 院に來訪する 10.1 より当分の間 大連別院駐在布教使のために「宗 教要義」を講ず 8 大連幼稚園にお いて大連「光瑞会」発会す	
1934	昭和 9	2.28 大連より上海に向かう 5.1 大 連別院にて「光寿会」本部講演会 を開催する 27 大連発 30 神戸入 港 6.8 大阪「光瑞会」主催相愛高 女で「満州の現状」について講ず(9 日京都 12 日神戸で同題で講演す る)7.19 神戸発大連に向かう 是年 大連・ジャワ・台湾等に赴く	
1935	昭和 10	1.27 上海本願寺において「光寿会」 会員のために「仏説不増不減経」 を講ず 2.21 台北発（台湾全島を 視察）3.1 台北に帰着 12 神戸入港 三夜荘に帰る 4.12 本山に社会事業 協会設立〔大谷〕6.20 大連高等女 学校開校式 9.22 大連発 25 神戸入 港 三夜荘に帰る 11.2 高雄州内海 知事と共に、屏東野路試験場や台 湾製糖等を視察（『内海忠司日記』） 18 台湾より帰朝 三夜荘に帰る 12.3 大阪津村別院で「台湾の現状」 を講演する 28 東上 29 横浜発南 洋諸島視察のため出航する 是年『大谷光瑞全集』全十三巻 大 乗社刊を發行する	1.22 貴族院で美濃部達吉の「天 皇機関説」が問題となる
1936	昭和 11	2.23 南洋諸島視察を終え横浜に入 港 24 台湾に出航する 29 高雄で 居住地選定に関して打合せをする （『内海忠司日記』）3.20 台湾から 神戸入港 三夜荘に帰る 4.29 三夜	2.26 二・二六事件

		<p>荘で園遊会 5.3 富山で「光瑞会」 発会式 17 鹿児島で発会式「鹿児 島の産業の現状と将来について」 講演する 24 京都高女で「光瑞会」 主催「現下の時局について」講ず 8 月中旬北海道・樺太旅行 29 渡満 する 10.1 朝鮮經由大連より帰国 し、三夜荘に入る 11.26 神戸発台 湾に赴く 11.29 高雄市公会堂に於 いて「高雄の将来について」講演 会（『内海忠司日記』）12 月初旬台 湾より帰国</p>	
1937	昭和 12	<p>1.17 神戸発台湾に赴く 2.21 台湾 より神戸入港 三夜荘に入る 3.17 三夜荘で大阪「光瑞会」発会式を 挙行 22 神戸発上海に向かう 4.5 神戸帰着 5.6 台湾へ赴く 19 帰朝 する 6.3 大谷尊由拓務大臣に就任 〔大谷〕7 神戸発大連に向かう 7.3 神戸帰着 12 横浜出航南洋に向か う 8.6 南洋より横浜に帰着する 11.12 神戸発台湾に向かう 12.1 台 湾から神戸に帰着 大阪「光瑞会」 倶楽部例会で「支那事変経済的意 義について」を講ず 26 上海に行 く</p>	<p>6.4 第一次近衛内閣成立 7.7 盧溝橋事件（日中戦争）起 ころ 11.6 日独伊三国防共協定 を締結 12.13 日本軍南京を占領 （南京大虐殺事件）12.13 大谷 派岐阜明泉寺住職竹中彰元反戦 的言辞で有罪判決〔大谷〕</p>
1938	昭和 13	<p>2.2 上海発台湾に向かう 17 神戸帰 着三夜荘に入る 3.14 大阪麵業会 館で大阪「光瑞会」主催「中支に おける今後の経済的活動」を講演 する 5.12 神戸発上海に向かう 6.15 上海から台湾に向かう 21 日 中戦争一周年を記念して、全国末 寺門徒総動員で古銭・仏具金属な どの廃品を献納するよう指令を出 す〔大谷〕7.3 神戸帰着 19 横浜発 海路北海道・樺太に向かう 9.11 北支視察の途に上る 30 神戸帰着 10.18 神戸発台湾に向かう 12.18 台</p>	<p>1.16 第一次近衛声明（国民政府 を相手せず） 4.1 国家総動員法公布 7.14 張鼓峰事件（日ソ両軍の衝 突） 7.15 政府東京オリンピックの開 催延期を決める 11.3 近衛首相東亜新秩序建設を 声明する 12.16 興亜院設立</p>

1939	昭和 14	<p>湾発上海に向かう</p> <p>1.17 上海発神戸帰着 2.11 神戸発台湾に向かう 27「中支宗教大同聯盟」副総裁に就任する 3.13 基隆発上海に向かう 4.1「興亜学院」名誉院長に就任する 22 神戸帰着 5.12 神戸発上海に向かう 6 月 文部省龍谷大学の教科書『真宗要義』の中にある聖典（『教行信証』の一部削除を命ずる〔大谷〕 6.16 神戸帰着 17 東上する 26 横浜発南洋に向かう(三ヶ月インドネシアに滞在する) 9.29 横浜に帰着 10.14 台湾に向かう (一ヶ月滞在する) 11.20 基隆発 23 神戸帰着 即日東上する (興亜委員会に参加) 12.7 伏見三夜荘に帰る 11・神戸発台湾に向かう</p>	5.11 ノモンハン事件
1940	昭和 15	<p>2.16 台湾より神戸入港 18 大阪相愛高女において「大谷学生」(南洋発展の人材の養成を目的とする)の選考に当たる 22 神戸発上海に向かう 3.18 上海より神戸帰着 10 九州視察の途に上る 20 門司より神戸帰着 27 神戸より上海に向かう 5.15 神戸帰着 23 台湾に向かう (台北・高雄などを視察) 6.5 台湾より神戸に帰着 7.1 神戸発インドネシアジャワ島に向かう (8 月末までスラバヤ、パラオなどを回る)31 パラオから帰国の途につく 9.21 横浜帰着 10.3 内閣参議となる 17 神戸発台湾に向かう 11.1 高雄「逍遙園」開園式を挙げる〔台湾日日新聞〕 23 基隆発 12.7 神戸帰着 8 神戸発高雄に向かう</p>	9.23 日本軍北部仏印進駐を開始する 9.27 日独伊三国同盟成立 10.12 大政翼賛会発会
1941	昭和 16	1.1 高雄「逍遙園」で新年を迎え	4.13 日ソ中立条約成立

		<p>る 2.27 基隆発 3.2 神戸帰着 「大谷学生」の選考を行う 4 東上する 築地本願寺滞在 4.2 神戸発高雄に向かう 20 基隆発 23 神戸帰着 26 上海に向かう 28 上海到着 5.9 上海発 11 神戸帰着 翌日東上する 17 発病する 24 日本教学研究所を開設する〔大谷〕26 東京アソカ病院に入院する 6.29 退院（築地本願寺に入る）7.7 神戸帰着（9月まで当地で療養する）9.23 東上する 20 大阪帰着 22 内閣参議を辞す 神戸発高雄に向かう(台北で「台湾総督府経済審議会」に出席する) 11.4 神戸帰着 12.8 東京で日米開戦を聞く 20 台湾に向かう(高雄「逍遙園」に滞在する 越年)</p>	<p>7.18 日本軍南部仏印進駐を開始する 10.15 ゴルゲ事件 12.8 日本軍マレー半島上陸・真珠湾攻撃 米英に宣戦布告</p>
1942	昭和 17	<p>2月大東亜建設審議会委員に就任する 3.8 東上する 築地本願寺に滞在 「大東亜建設審議会」委員として活動 4.9 京都着 都ホテルに滞在 17 東上する 6.4 発病する(東大病院で膀胱乳嘴腫と診断される 25 手術) 27 退院(築地本願寺で療養する) 10.30 神戸発 31 釜山着 11.10 京城・奉天・大連・北京を経て上海に入る</p>	<p>2.15 日本軍シンガポールを占領する 2.21 「大東亜建設審議会」を設置 6.5 ミッドウェイ海戦で日本軍惨敗する</p>
1943	昭和 18	<p>1.1 杭州で新年を迎える 3月 欧亜連絡鉄道の敷設計画に専念する 4.11 上海から北上北京・大連に向かう(下旬上海に帰る) 6月頃「大東亜仏教総会」名誉総裁に就任する 9月 寧波・奉化地方を視察する 10月 「大東亜仏教総会」主催 「日華大追悼会」を上海玉仏寺で挙げる 12月 『大乘』終刊する</p>	<p>5.30 アッツ島日本守備隊全滅する 10.2 学徒出陣 11.5 大東亜会議</p>
1944	昭和 19	<p>1.1 上海で新年を迎える 6月上海</p>	<p>1.19 女子挺身隊を結成</p>

		本願寺別院より英国元大使カー邸に移る 11.17 上海より空路羽田に向かう (内閣の招きによるもの) 12.20 「内閣顧問」となる(築地本願寺に滞在)	2.8 朝鮮に徴兵制実施 6.19 マリアナ沖海戦 10.25 神風特攻隊初出撃する
1945	昭和 20	1.1 築地本願寺で新年を迎える 4.5 「内閣顧問」を辞す 17 朝鮮・奉天經由北京に向かう 29 北京着 6.21 旅順指令部長官邸に入る 8.9 大連に向かう 8.15 大連本願寺別院 (関東別院)に移る 11 月膀胱腫病にて満鉄大連病院に入院する	3.9 東京大空襲 3.14 大阪大空襲 8.6 広島に原爆投下 9 長崎に投 8.8 ソビエト対日宣戦を布告する 8.15 戦争終結の詔勅發布 10.11 GHQ 民主化指令を出す
1946	昭和 21	古稀により天盃をいただく	1.1 天皇神格化を否定する 11.3 日本国憲法公布 (翌年 5.3 施行)
1947	昭和 22	2.28 引き揚げ船「遠州丸」にて大連発 3.7 佐世保着 佐賀嬉野国立病院に入院する その後別府亀川に赴く 24 別府より船で神戸に向かい、京都大学病院に入院する 5.5 築地本願寺で全日本宗教平和会議が開かれる [大谷] 12 退院する 13 別府に向かう 亀川国立病院に入院する 11 月 九州各県を巡回し、知事らに産業復興に助言を与える 大谷光照門主戦争中翼賛壮年団京都市団長であったため公職追放される [大谷] 12 下旬別府鉄輪別邸に戻る	1.31GHQ 二・一ゼネスト中止を命ずる
1948	昭和 23	1.24 大谷光明見舞いに来る 4 月公職追放令により追放 10.5 午後 5 時 45 分別府鉄輪別邸で遷化 8 遺骨帰山 11.8 大谷本廟にて葬儀、遺骨を大谷の祖、「籠」に葬る 信英院と諡する	4 月ガンディー暗殺される [総合] 10.7 芦田内閣総辞職 [総合]